
バカと白黒と召喚獣

ailia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと白黒と召喚獣

【NZコード】

N3452X

【作者名】

a_i_l_i_a

【あらすじ】

試験召喚システムを導入した試験校である文月学園。

そのFクラスに一人の少年が転入する。

少年は天然だつたり、影が薄かつたり、ちょっとぴり不幸だつたり。そんな少年にはある秘密が。

笑いあり、涙はないけど時々シリアルズ？

少年とFクラスの愉快な仲間たちが繰り広げる学園物語開始します！

プロローグ

プロローグ

つい数日前まで短い命を精一杯燃やすように咲き誇っていた桜が、葉桜に変わるころ。僕は皆より三日遅い新年度を迎えた。

転入生の振り分け試験当日に今まで住んでいたアパートが火事になつたんだ。

おかげで振り分け試験は受けひれぬし、
引起し作業のせして新学期に間に合わなかつた。

五
二
〇

そして今日が僕の新学期初の登校日なんだけど……

現在時刻 8：55

初日から完全に遅刻……

僕は朝食を食べる暇もなく学校へ走る。

転入先の文月学園へ……。

主人公設定

名前 鮎川 蓮 16歳

容姿 黒髪にちょっと茶色っぽい瞳。髪は男としては長めで、肩に着く位。

顔は中性的。どちらかというと女性に近い顔立ちをしている。身長は明久よりも少し低いくらい。華奢。

成績 学年主席クラス。

得意教科は数学と英語（600点近い）。

苦手教科は保健体育（30点行かない）

他の教科は古典と現国が300点台前半。地理、政治経済が

400点前後。

他は400点台。（英語Wは500点台）
総合科目は1-2教科で5000点くらい。

召喚獣 上半身は黒のジャケット。

下半身は黒田のジーンズ

右手に両刃の剣。

左手は指が刃物のように変形している。（関節はある）
その為両手で剣をもてない。

腕輪能力 「衝撃波」

左手から竜巻状の衝撃波を放つ。反動で自身の召喚獣はすごい勢いで後退

するため、コントロールが難しい。召喚フィールドの端

で放ち、

反動を抑えきれずにつィールドの外へ出てしまつと、敵前逃亡になる。

備考

一人暮らし。両親は死亡し、親類は姿を見せない。

バイトで生計を立てている。

主人公設定（後書き）

この小説では文月学園の教科は数学、英語、英語W、物理、化学、世界史、日本史、政治経済（現代社会）、地理、古典、現代国語、保健体育の12教科とします。本来なら、生物が入ってないのはありえないのですが、生物も入れて13教科にしてしまうと、姫路さんの平均点が340点前後になってしまい、作中での姫路さんが単教科の点数から「それはありえないだろ」ということから作中で一度も使われた描写のない（野球でも出てこなかつた）生物を除外することにしました。

第一問 人は見かけによらないのかも・・・・・

バカテスト化学

『調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。』この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」ではダメだという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

鮎川蓮の答え

『問題点……マグネシウムは熱すると化学反応を起こして非常に脆くなる点。

合金の例……アルミ鑄物合金』

教師のコメント

おおむね正解です。問題点は脆くなる前に発火して危険なので出来ればそちらを書いてほしかったです。

合金の例で上げているアルミ鑄物合金は実際のフライパンなどで使用されている合金です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じやありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

第一問 人は見かけによらないのかも……

「鮎川、転校初日から遅刻していくとはい度胸だ。歯あ食いしばれ」

今の状況を説明するね。文月学園に転入した僕は初日から寝坊してしまったんだ。

自分でも信じられないくらいにハイペースで走ってきたんだけど、後一步で学校、というところで立っていた筋肉隆々の大男に絡まってしまうているんだ。

「あの……僕はお金なんか持つてないですよ。他の人にしたほうが

……」

「誰が喝上げなどするかー！」

すごい勢いで怒鳴られた上に拳骨を落とされてしまった……

この人何者なんだ？

「もうじき一時間目が終わる。授業が終わったらすぐにお前を紹介するからここで俺と一緒に待つておけ」

振り分け試験を受けられなかつた僕は、自動的にFクラスになつた。

授業が終わるまで時間があるし、文月学園のことを説明するね。

文月学園は、科学とオカルトと偶然で出来た「試験召喚システム」

という、世界初のシステムを導入している試験校なんだ。

この学校では、一年生から試験召喚戦争という試験召喚システムで呼び出せる、

「試験召喚獣」を用いたクラス間戦争が出来る。この戦争はクラスの設備をかけているらしい。年の終わりに次年度のクラス振り分け試験を受け、その結果を受けて、

A～Fまでの六つのクラスに振り分けられるんだ。最も成績がいい生徒が集められているのがAクラス。B～Eと続いて、最も成績が悪い生徒が集められているのがFクラスなんだ。

そして、クラスごとに教室の設備も分かれている。基本的に上位クラスのほうが設備が良いらしい。Fクラスは成績も設備も最低ってことか。大変そうだな。

いろいろと考えているうちに一時間目のチャイムが鳴った。

教室の中から出てきた先生とすれ違うように、筋肉隆々の大男もとい補習担当の西村先生がFクラスに入っていく。まさかあの人教師だつたなんて……。

明久Side

まったく、須川の奴！　かわいい女子の転校生が来る、何て言っておいてもう三日たつじやないか。Fクラスじゃなくて他のクラスへ転入したんだろうか。

どうでもいいや、とにかく今は糠喜びさせてくれた須川を肅清しなければ……

「お前ら席に着けー」

なにつ！ 鉄人だと！ なぜ授業が終わつたばかりなのに鉄人が入つて来るんだ？

まさか誰かが悪さをしたんだな！ 誰だ！

「今日、転入生を紹介する」

転入生だつて。新学期が始まつてもう三日たつのに。須川の情報では怪我でも病氣でもないらしいから普通に一日目に居ると思つたのに。でも、かわいい女子らしいからな。

男ばかりのこの空間に四人目の女子が来るなら大歓迎だ。

「先生！ 転入生は女子ですか？」

「男子だ」

すゞが、わ……女子じゃないじゃないか！ 嘘つき！

須川のほうを見るともう仲間たちにボコボコにされていた。

「お前ら静かにせんか！」

鉄人の一声で静まり返る教室。この人の声は良くわからない力があるよ。

「おい、鮎川、入つて来い」

鉄人が呼ぶと、転入生が入つてきた。

男子の制服を着た女子だつた……

Side Out

先生に呼ばれて教室の中に入つた。
ボロい……。想像以上だ。所々窓は割れているし、壁には隙間があ
る。

机は壊れかけの卓袱台だし、椅子の代わりに綿の抜けた座布団が置いてある。

それに何より、教室全体がかび臭い。畳腐つてるんじゃないかな。
それに、クラスメイトの9割は男子だね。別に良いけど。
あつ、こんなこと考へている場合じやなつた。自己紹介しないと。
「えつと、始めてまして。鮎川 蓮です。気軽に蓮つて呼んで下さい。
趣味は読書と、
体を動かすことです。これからよろしくお願ひします」
こんな感じでよかつたのかな。

自己紹介を終えて、席に着いた。まさか自由席だとは思わなかつたよ……。

これから一年このボロい教室で勉強するんだ。それなりに平和そつだから良いか。

そんなことを思つていた僕だけれど、まさかその数分後に僕の思つていた平和が覆されることになるなんて……。

第一問 自己紹介は大事だよね！

バカテスト国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

「（1）得意なことでも失敗してしまつ」と

「（2）悪いことがあつた上に更に悪い」とが起きる喻え

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも、（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

鮎川蓮の答え

- 『（1）猿を木から落とす』

吉井明久の答え

- 『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

第一問 自己紹介は大事だよね！

蓮Side

席について西村先生が出て行くとすぐに、僕の周りにクラスメイトが集まってきた。

転入生なんだから当たり前か。さあ何を言われてもきちんと答えること。

「何で男子の制服を着ているんですか？」

「男だからです」

なにを当たり前のことを聞いて来るんだ。僕は男なんだから女子の制服なんて着られるわけないじゃないか。

「おい、お前ら、まずは名乗りやがれ」

声のしたほうを見ると180cmはあるつかという大男が立っていた。

髪の毛はライオンみたいだ……

「俺は坂本雄一。このFクラスの代表をしている。俺のことは好きに呼んでくれ」

クラス代表か。各クラスの代表はそのクラスで最も振り分け試験の成績が良かつた人となるはずだから、坂本君はFクラスで一番成績が良いってことになる。

「僕は鮎川蓮です。これから宜しく。坂本君。あと、僕は男だからね」

「分かつてる」

おおっ！ 坂本君はちゃんと僕のことを男って思ってくれていいみたいだ。

「そこにお前みたいな奴の先輩が居るからな
先輩？ 誰のことだらう。

そう思つて坂本君が指さした方向を見ると、かわいい顔をして、男子の制服に身を包んだ生徒がいた。

「ワシは木下秀吉じゃ。よく間違われるのじやがワシは男じや
なるほど。木下君も僕と同じで常日頃から女の子に間違えられるらしい。

「え～？ 秀吉は『秀吉』でいつ性別じゃないか。男子でも女子でもないよ」

誰だ！ そんなとんでもないことを言つた奴は！

「あつ、僕は吉井明久。こ『』の学園を代表するバカ』だよ。つて秀吉！ 僕の声真似して変な台詞つながないでよ！ 誤解されるじやないか！」

「何が誤解じや。これでお主の立場が間違いなく伝わつたじやる」木下君つて声真似できたんだね。あと、僕らの敵は吉井君つて言つらしい。

よし、ここは一言注意してあげよつ。

「吉井君。僕も木下君もちゃんとした男なんだよ。そんな頭の悪いこと言わないでよ」

あれ？ 言葉のチョイス間違つたかな？ 吉井君がものすごい勢いで落ち込んでる。

「え、え～つと……」

「気にするな鮎川。明久のバカは昔からだ」

そりなんだ。じゃあ気にしない。別に女の子つて思われたから、見捨てるわけじやないよ。

「次はウチね。ウチは島田美波。海外育ちで日本語の読み書きが苦手です。趣味は……」

珍しい。女子だ。かわいいし、趣味も女の子っぽいんだろうな……

「吉井明久を殴ることです」

前言撤回。この女の子ものすごい危険人物だ。なんだよその物騒この上ない趣味は！

吉井君のほうを見ると、彼は青ざめて震えている。どうやら本当にいい……。

吉井君がかわいそうに思えてきたよ。

「えっと、私は姫路瑞希です。趣味は……」

今度は桃色の髪をした女の子だ。桃色が、珍しいね。この子もかわいいけど油断は禁物だ。

こんな瘴気漂う空間に居るんだ。きっと島田さんのようになにか常識では測れない趣味を持っているぞ……

「料理です。よろしくお願ひします」

「ゴメン……。こんないい子を疑つてしまつた自分が恥ずかしいよ。そういえば、姫路さんが自己紹介しているときに後ろで吉井君たちが身震いしていたけれど何かあつたんだろうか？」

「……土屋康太」

物静かな男子が名乗った。身長も低めだしきつと、気の弱い人なんだろうな。

「「コイツのあだ名は寡黙なる性識者だ^{ムツツリーニ}」

「……。（ブンブン）」

坂本君の言葉をすごい勢いで否定しているんだけど……。それにもしてもムツツリーニってどういう意味だらう？

「そのあだ名はムツツリストスケベという意味じゃ」

木下君が説明してくれた。声真似だけじゃなくて読心術まで使えるんじやないだらうか。

ムツツリーニのほうを見るけど、やつぱりすげい勢いで否定している。

なるほど確かにムツツリといわれればムツツリの氣も……

ハッ！ そうか、ポケットから顔を覗かせているカメラはそういう意味だつたのか！

……それ、犯罪だよね……。

自己紹介も終わり、休み時間もなくなつたので皆自分の席に着いた。

なぜか坂本君が教壇に立つているんだけど代表として何か話すのかな?

「一昨日ロクラスに勝利した。明日で回復期間もあける。それで、次はBクラスを相手に宣戦布告をする」

宣戦布告って試召戦争のことだよね? じゃあこのクラスはロクラスに勝つたってこと?

ならどうして、こんなボロ教室のままなんだろう。

そしてこの日の昼休み。僕はこのクラスの恐るべき野望を知るのだった……。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す・・・・・

バカテスト英語

以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

『

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『 * ×』

』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す……

蓮Side

昼休み。僕は屋上でTクラスの面々と昼食を食べるーになつた。
「鮎川は、昼飯はどうするんだ?」

坂本君が聞いてきた。僕はいつも自分で弁当を作ってきてるんだけど。

「僕は弁当を作ってきたけど、坂本君はどうなの?」

「いや、購買でなんか買ってくるわ」

「じゃあ、僕も贅沢にソルトウォーターを……」

吉井君? ソルトウォーターって要するに塩水だよね?

それは食べるって言わないんじゃ……。

「明久よ、何度も言いつがそれは食べるとは言わんぞ
木下君も同じこと思つてたか。何度も、つてことは吉井君はいつも
こんな感じなんだね……。

パンとかおにぎりとか買ってくれば良いの!。

「そう思うなら、なんか奢つてよ」

ちょっと待つて、僕の予想しなかつた台詞が飛び出したんだけど。

「吉井君は学校にお金持つてこないの?」

「鮎川、気にするな。明久は自業自得だ
どゆこと?」

「趣味に食費まで使い込む明久が悪い
なるほど!」

「あの……私、今日はみんなの分のお弁当を作ってきたんですけど
……」

吉井君の救世主になつたのは姫路さんだ。

趣味が料理つて言つてたもんね。でも、全員分か。やさしい女の子も居るんだね。

Fクラスに居るのがもつたいないくらいだよ。

「あ、いや、僕は今から雄一と一緒に購買でパンを買つてこようと思つてるんだけど……」

「吉井君、せつかく姫路さんが作つてくれたんだから皆で食べよう。そのほうが吉井君も食費の節約になるんじゃないの？」

「鮎川！ お主なんということを……」

「…………自殺行為」

僕間違つたこと言つたかな？ ものすごい勢いで咎められたんだけど……。

場所は変わつて屋上。

何故だろ？ 僕以外の男子はまるで処刑される前の囚人みたいだ。

「鮎川君、恨むからね」

何で！ 僕は吉井君に恨まれるようなことしてないよ！ むしろ姫路さんの弁当が食べられるんだから恨むんじゃなくて喜ぶところでしょう！

「明久、諦める。鮎川は姫路の料理を食つたことがないんだ……」

坂本君まで……。姫路さんの料理がなんだつて言つんだよ。

「はい、皆さん召し上がれ」

「それじゃあ、遠慮なくいときま～す」

僕は卵焼きを口に入れた。木下君とムツツリーが合図しているのが気になるけど……。

Side Out

明久Side

今日の前で鮎川君が姫路さんの弁当を口にしてしまった。

「うわっ！ やっぱり倒れちゃったよ。とにかく無事を確認しないと。

「鮎川君、大丈夫？」

「吉井君？ 大丈夫だよ」

良かつた……今日の弁当は威力が弱めのようだ……。

「川の向こうで母さんが手招きしてるんだ……」

「鮎川君！ ダメだ！ その川を渡つてはいけない！」

急いで蘇生しないと！ 鮎川君は姫路さんの料理は初めてのはずだから助かるかは三分と七分つてところか……。

「母さん、そんな格好で川に入つたら風引くよ……ハツ！」

良かつた……何とか戻つてきてくれた。これでまた一つ尊い命が救われたのです。

Side Out

蓮Side

危うく渡つてはいけない川を渡るといひだつたよ……。

「ゴメン、皆……」

姫路さんの料理があんな危険物だとは思わなかつたよ。

「いいんだ……。残りは明久が食うから」

「雄一！ 何てこと言つてくれるんだ！ 僕は内臓が退化してるんだからあんなの食べたら死んじゃうよ……」

吉井君、今なら君の気持ちが良く分かるよ。

結局お弁当は吉井君がおいしくいただきました。

「そういうえば、Dクラスに勝利した、とかBクラスに宣戦布告つてどういう意味？」

僕はさつき感じた疑問を坂本君に聞いている。もし試召戦争でDクラスに買っているんだつたら、今Fクラスの設備があんなボロいはずがないからね。

「そのまんまの意味だ。俺たちは新学期初日にDクラスと試召戦争をして勝利した。

「俺たちの最終目標はAクラスだからDクラスの設備は交換しないでいるだけだ」

ふうん。Dクラスじゃ満足しないってことだね……って、Aクラスが目標？

「そ、それって無謀な挑戦って言うんじゃないかな？」

成績最悪のFクラスと、成績最高のAクラスの点数は文字通り桁が違う、って西村先生が言つてた。そんなところと勝負して勝てるものなのかな？

「お前が言いたいことはわかつてゐる。安心しろ。このクラスは……最強だ」

そういうつて笑う坂本君の顔は獲物を虎視眈々と狙つているようで、それでいて、見ているものに安心感を与えるような、そんな自信たつぱりの顔だつた。

第四問 作戦は大事。でも友達も大事・・・・・

バカテスト数学

「(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、? ? ? 中から選びなさい。

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A$$

$$\sin B$$

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『(1) $X = /6$

(2) ?』

教師のコメント

そうですね。角度を「。」ではなく「」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X = \text{およそ} 3^\circ$ 』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近づいても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『（2）およそ?』

教師のコメント

先生は今までたくさんの中学生を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

第四問 作戦は大事。でも友達も大事……。

蓮Side

昼休みに、坂本君から聞いた話によると、明日FクラスはBクラスに宣戦布告をするらしい。そして、「必殺料理人」の姫路さんは本来ならばAクラス入り確定の学力を持つ才女らしい。振り分け試験のときに高熱を出してしまって途中退席。

途中退席は全科目〇点になってしまいうらしい。そのせいでFクラスなんていふ最低の環境で勉強しなければいけなくなつたつてわけか。で、「大好きな」姫路さんのために吉井君が試召戦争を提案した、てことらしい。

やっぱり、吉井君は優しいよね。さつきの弁当の件は置いておくとして。

「鮎川、お前は明日対Bクラス戦が始まつたらすぐに回復試験を受けてくれ」

回復試験つてのは試召戦争が始まつたら基本的にいつでも受けられるらしい。

召喚獣の戦闘で消費した点数を、テストを受けて回復させることができることが出来るんだって。

「あれ？ 鮎川君は戦闘に参加しないの？」

「いや、僕は「バカもいい加減にしろよ明久」そこまで思つてないからつ！」

僕は振り分け試験を受けられなかつたから、新学期の姫路さんと同じで全科目〇点なんだ。

「そこまでつてことは、僕のことバカだつて思つてはいるんだね……」

しまつた、吉井君へのフォローを忘れてた。吉井君が教室の隅つこでいじけている！

「バカはほつといて話を進めるぞ」

吉井君と坂本君は本当に友達なんだろうか？

「気にするな、明久と雄一はちょっと変わつておるのじや」

「分かつた」

「分からぬいでえ、そこは気にして！」

吉井君がなんかいってるけど知らない！ だつて気にするなつて言われたもん

「そついいえばなんでBクラスなのぞ？ 勢いは付いたんだから、Aクラスを攻めるんぢやないの？」

吉井君はようやく喋れたようだ。

「BクラスにもDクラス同様、俺たちがAクラスに勝つための要素がある。

この際だからはつきりと言ひ。俺たちじや、どんな作戦を使つても

Aクラスには勝てない」

「えつ？ それじゃあ、目標はBクラスに変更つてこと？」

吉井君が坂本君に疑問をぶつける。

Aクラスが目標つて言つておきながらAクラスには勝てないつて言うし。

僕には坂本君が勝てない勝負をするような人には見えないんだけれど。

「いや、目標はあくまでAクラスだ」

「雄一（坂本君）さつきと言つてることが矛盾してるよ」

「まあ聞け。クラス単位では勝てないから、Bクラスと試召戦争のシステムを使ってAクラスとは一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ち？ どうやつて？」

吉井君は納得していない様子。僕も、よく分かつてないけど。

「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合どうなるか知つてるよな」

吉井君はこの学園に一年いるんだからもちろん知つてるよね。

「ええっと……」

知らないんだね……。姫路さんが小声で教えてあげている。
料理の腕はともかく優しいな

「設備を1ランク落とされるんだよ」

「まあ良い。じゃあ明久上位クラスが負けた場合は？」

確かに、負けた相手と設備を入れ替えなきやいけないんだよね。

「悔しい」

僕の予想をはるかに上回る回答が返ってきた。

「ムツツリーー、ペンチ」

「ややつ、僕を爪切り要らずの体にする動きがつ

生爪か！ 生爪なのか坂本君！

それは拷問だぞ！

「相手のクラスと設備を入れ替えられちゃうんですよ

姫路さんのフォローが、吉井君、命拾いしたね。

「そうだ、このシステムを利用してBクラスをAクラスに攻め込ませる。Fクラスに負けると最低の設備だが、Aクラスに負けてもCクラス相当の設備で済む。交渉はまず上手くいくだろ?」

「Aクラスには、Bクラスとの試召戦争の後に攻め込むぞって言って一騎討ちに持ち込むんだね」

「そうだ。鮎川が理解できるんだから、明久以外は分かつただろ?」

さりげなく吉井君への罵倒を混ぜる坂本君。

この二人の間柄が本当に気になる。

「というわけで明久、今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告に行つて來い」

あれ? 下位勢力の宣戦布告の使者つて大体ひどい目にあつよね……。

「断る! 雄一が行けばいいじゃないか!」

「やれやれ、それじゃあジャンケン決めよう」

「よし、望むところだ!」

どうしてだろう、吉井君が坂本君に乗せられているような感覚を覚える。

「ただのジャンケンじゃ面白いない。心理戦ありで行こ!」「心理戦っていうと、自分はパーを出す、とかいつて本当にそういうのかの駆け引きのことだね。

「じゃあ僕はグーを出す」

「それじゃあ俺は……明久がグーを出さなかつたら打ち殺すえつ……。今、ジャンケンの心理戦で聞いたことない単語が出てきたよ……

「いぐそ、 ジャンケン……」

問答無用か……

「ポンー！」

坂本 v s 吉井
パー v s グー

吉井君、 後出しだつたのに負けたよ……

「よし、 逝つてこい明久」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスのときみたいに殴られるのを心配していいのか？」

「それもある！」

やつぱり、 宣戦布告の使者は殴られるんだ……

「それなら今度こそ大丈夫だ。 保障する」

すごい自信だ。 Bクラスに知り合いでいるのだろうか。

「Bクラスには美少年好きは多いらしい」

「そつか、 それなら大丈夫だね」

待つて！ 色々とおかしい点があると思うんだ。

吉井君もそれで納得しないで！ 確かに美少年といえなくもないけど！

「でも、 お前不細工だしな……」

「失礼な！ 365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度だな」

「微妙な少年だね……」

「皆大嫌いだ！！！」

吉井君は泣きながら去つていった……

「……言い訳を聞こうか」

ボロボロになつた吉井君が帰つてきた。
坂本君、ここはちゃんとフォローを……

「予想通りだ」

「ちょつ！ 坂本君、そんな事言つたら
「くきいー！ 殺す！ 殺し切るー！」」

「吉井君おちて「落ち着け」」

「ぐふあつ！」

「あんまりだよ坂本君！ 吉井君がつ
鳩尾に拳がめり込んでる……

「先に言つてるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝

てるんじゃないぞ」

坂本君が行つちゃつたよ。

坂本君、君は鬼だ……

第五問 やる気？ 殺る気！

バカテスト物理

問 以下の文の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

鮎川蓮の答え

『アクションレス

『魔王の殺意』

教師のコメント

先生もあるシーラーズは好きですがあれは光とはまた違つと思ひます。

鮎川蓮の「メント

まさか眞面目に返されるとは思わなかつた。

第五問 やる氣？ 殺る氣！

「さて皆、総合科田」テスト」苦勞だつた

Bクラスとの試召戦争当口を迎えた。坂本君は教壇に立つて、クラスメイト相手に演説をしている。

「午後はBクラスとの試召戦争に入する予定だが、殺る氣は十分か？」

字が違う氣がする……

『おおーっ！』

このクラスのやる氣は十分みたい。

テスト漬けだつたはずなのにすごいやる氣だ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開始直後の渡り廊下線は絶対に負けるわけには行かない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取つてもいい。野郎共、き

つちり死んで来い！」

いや、死んじやだめだから。

「が、頑張ります」

姫路さん、若干引き気味だ。僕もだけど。

『うおおーっ！』

すごい。さすが姫路さんだ。たつた一言で、前線部隊の士気を最大にまで引き上げている。

Fクラスの作戦を説明すると、まず試召戦争開戦直後の廊下での戦闘に勝ちに行くらしい。

戦力もFクラス五十人中四十人をつぎ込む。前線部隊の士気はFクラス一の才女姫路さんが取る。

廊下では勝てるだろうけど、代表の坂本君の守りが薄くなる。僕も、まだ回復試験が終わってないから参加できないし。

キーングーランカーンゴーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

Side Out

明久 Side

昼休み終了のチャイムが鳴り響き、僕たちは一斉に教室を飛び出す。

僕たちは数学を主力に、戦線を拡大して一気に渡り廊下を取る作戦だ！

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からゅつくりとした足取りでBクラスメンバー十人程度が歩いてくる。

「生かして帰すなー！」

誰かの叫びが皮切りになり、Bクラス戦が始まった。

『 Bクラス	野中長男	VS	Fクラス	近藤吉宗
総合	1943点	VS	764点	』

『 Bクラス	金田一裕子	VS	Fクラス	武藤啓太
数学	159点	VS	69点	』

『 Bクラス	里井真由子	VS	Fクラス	君島博
物理	152点	VS	77点	』

「ダメだ！ 压倒的過ぎる！」

第一陣は話にならない。早くフォローしないと！

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

姫路さんがやつてきた。男子の全力疾走には付いてこれなかつたんだろう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが声を上げる。やつぱり姫路さんを警戒していたようだ。

「姫路さん、来たばっかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行つて、きます」

そのまま、戦場へ紛れ込む姫路さん。

あ、早速勝負を挑まれる姫路さん。

Bクラス一人掛けだ。

『Fクラス	姫路瑞希	VS	Bクラス	岩下律子&菊入真由美
数学	412点	VS	189点	& 151点

姫路さんの召喚獣は、左手首にきれいな腕輪をしていました。姫路さんの召喚獣が左手を相手に向けた、と思つたら相手の一人の召喚獣が消し炭になつた。あれを、僕が喰らつたらと思うと……

「岩下と菊入が戦死したぞ！」

Bクラス二人を戦死させると、Bクラスに驚愕の表情が浮かぶ。

「姫路さん、とりあえず下がつて」

「あ、はい」

相手の士気は挫いたし、腕輪を使って消耗した姫路さんにはいったん下がつてもらひ。

クラスの皆もやる氣になつてゐるし、これなら、今日の戦闘は田標どおり、

Bクラスを教室に釘付けにする「こと終つてするだろ」。

「明久、ワシらはいつたん教室に戻るぞ」

「ん？ なんで？」

戦況を眺めていた僕のところに秀吉がやつてきた。

「Bクラスの代表じやが、あの根本らしいのじや」

「根本つてあの根本恭二？」

「うむ」

根本恭二とは、とにかく評判が悪い。

噂ではカンニングの常連だとか。目的のためには手段を選ばないらしく、曰く

『球技大会で相手チームに一服持つた』とか、『喧嘩に刃物は当然装備』とか。

さすがにそこまで卑怯とは思わないけど、用心に越したことはない。

「なるほど。戻つておいたほうがよさそうだね」「雄一に何かあるとは思えんが、念のために」

姫路さんに一言報告して、僕と秀吉は何人かを連れて教室へと引き返した。

Side Out

蓮Side

僕が、一折の試験を受け終えて、Fクラスに戻つてみると、そこにはボロボロになつた卓袱台、荒らされた教室、怪我をしている吉井君と、少しほなれたところで血をぬぐつている島田さんが、……つてちょっと待つた！

「島田さん、いくら吉井君が気に入らないからつて、ここまで暴れなくても……」

「違うわよ！ 教室はウチが帰つてきたときからこんな感じよ！」

島田さんが吉井君を折檻している巻き添えでこいつなつたんじゃないんだ。

「鮎川、試験は終わつたのか？」

坂本君が聞いてきた。

「うん。さすがに一日で全教科受けるのは疲れたよ」

最初は、試験戦争で使う教科だけを受けるつもりだったんだけど、Bクラスが総合科目も使ってきましたから、急遽全科目受けることになつたんだ。

「島田さんじやないとしたら、この教室は誰がやつたの？」
今、一番の疑問だ。

「俺がBクラスの連中に協定を持ちかけられてな。協定調印のために教室を空けている間にBクラスの奴らが教室を荒らしやがったんだ」

「どんな協定だつたの?」

「午後4時を過ぎたら、その日の戦闘を終了し、翌日の9時に同じ状況から再開する。」

その間は試召戦争に係わる一切の行為を禁止するつて奴だ

「姫路さんのため?」

姫路さんが万全の状況で試召戦争に臨めるから、その協定はFクラスに有利になる。

「そうだ。やつぱり明久とは頭の出来が違うな

「なんだと! バカ雄二!」

「吉井君は置いといて……」

「鮎川君! 君まで僕をそんな風に扱うの?」

話が進まない……

「ハプニング(と言つていいのか?)はあつたけど、今のところは順調に進んでるつてことだね?」

姫路さんが万全の状態で戦える以上、Fクラスは有利だ。さつき吉井君から聞いたけれど、

Bクラスを教室に押し込む作戦も成功しているらしい。

「……Cクラスの様子が怪しい」

ムツツリーニか。

確か、Fクラスの情報参謀だつたよね。

「漁夫の利を狙うつもりか、いやらしい連中だな」

FクラスがBクラスに勝つても、消耗は激しい。

もともとの点数が少ないFクラスが消耗していれば、他のクラスからは格好の的だろう。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、
とでも言え、おとなしくなるだろ？」

「それに、僕たちが勝つなんて思つてもないだろ？」

「それに、僕たちが勝つなんて思つてもないだろ？」

「よし、今から行つてくるか」

「そうじゃの」

「いや、秀吉は残つてくれ。お前の顔を見られると、万が一のとき
にやううと思つて、いる作戦に支障がでる」

作戦？ 坂本君にはまだ作戦があるのか。

「よく分からんが、雄二がそういうのならば従おう」

「じゃあ行こうか。ちょっと人数が少なくて不安だけど

坂本君、吉井君、姫路さん、島田さん、ムツツリー、僕は協定
を結ぶためにCクラスに向かった。

第六問 眼と逃走と初戦闘！

バカテスト化学

問 ベンゼンの化学式を書きなさい

姫路瑞希の答え

『C₆H₆』

教師のコメント
簡単でしたね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師の答え

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-N-E-Z』

教師のコメント

後で土屋君と職員室へ来るよ!』。

鮎川蓮の答え

『Benzene』

教師のコメント

それはドイツ語ですし、化学式ではありません。

第六問 犀と逃走と初戦闘！

蓮Side

僕たちFクラスの面々は、Cクラスと停戦協定を結ぶためにCクラスを訪れていた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。Cクラス代表はいるか？」

「私だけだ。何の用？」

坂本君の呼ばれて出てきたのはいかにもきつそうな女子だった。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た」

「クラス間交渉？　ふうん……」

なんだろ？　笑顔がいやらしいとかそんな問題じゃなくて、何か大事なことを見落としている気がするんだけど……

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……どうする？　根本クン」

分かった！　これはBクラスの罠だ！　なるほど、BとCクラスの代表にはつながりがあったと言つことか。

CクラスをおとりにしてFクラスが協定を結びに来るよう仕向ける。

Fクラスはこの時点では協定に違反している。本当はBクラスのほうが先に協定を破っているけれど、敵クラスにあんな妨害をしてきた

根本君のことだ、先生にも嘘八百で自分たちに都合のいいように説明しているだろ？

敵ながら天晴れと言わざるを得ないな。うん。いや、噂の出所を調査してから来るべきだったよ。

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

僕が思案にふけっていると根本君の怒号が聞こえた。
Fクラスの皆は……つてもういない！

「ちよつ、皆何で置いていくのさ！」

幸い僕にBクラスの人の注意は向いていない。

Cクラスの後ろの扉から脱出する……。

Side Out

明久 Side

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

今の状況はかなりマズイ。僕たちではBクラス相手に勝負にならない。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

姫路さんが遅れ始めた。この全力疾走は姫路さんにはつらいだろう。けれど急がなければBクラスに追いつかれてしまう。

「雄一！」 ここは僕が残つて食い止めるから、姫路さんを連れて早く！

まさか僕がこんなことを言う日が来るなんて。

「……分かった。ここはお前に任せる」

「……（ぴたつ）」

ムツツリーも残るつもりのようだ。だけど、ムツツリーにも大

事な役割があるはずだ。

ここで失うわけには行かない。

「ムツツリーも一緒に逃げて。明日の戦争の鍵は多分ムツツリー二が握るから」

「んじゃ、ウチは残つてもいいのかしら。隊長どの？」

僕の隣には一緒に立ちはだまつた島田さんがいた。

「……頼めるかな？」

「はーいはーい。お任せあれ」と

「……（グツ）」

ムツツリーは僕たちに親指を立てて走り去つた。

これで、雄一、姫路さん、ムツツリーを逃がすことが出来た。

あれ？ 誰か忘れてる気がする。

「島田さん。鮎川君は何処にいるのかな？」

「あつ……じクラスに忘れてきたわ……」

「ゴメン！ 鮎川君！ 君の事は多分……忘れない！」

「……わて。どうするの？ 隊長どの？」

「うん。僕に考えがあるんだ」

「え？ アンタに？」

島田さんの表情が物語つている。僕は信用されていない！

「僕だつて補習室なんかには行きたくない。任せといて「ふーん。ま、アンタがそこまで言つなら信用しまじょうか」

『いたぞっ！ Fクラスの吉井と島田だ！』

『ぶち殺せ！』

正面から追つ手がやつてくる。長谷川先生も一緒に。

「Bクラス！ そこで止まるんだ！」

僕の手腕を見せてやる…！

Side Out

蓮Side

『こいつ馬鹿だあーっ！』

Bクラスの人気に気づかれないよつてひクラスから脱出して、辺りを彷徨つていると、叫び声が聞こえた。

「もしかしたら、Fクラスの皆が戦っているのかもしぬない」行つてみよう。ここからはそれなりに遠いな。

「ウチのことを愛してるって、言つてみて？」

叫び声がしたところに着いた。すると、消火器を持った島田さんが吉井君に告白紛いの事をしていた。一人に何があつたんだろう。

「ウチのことを愛してる…」

「吉井君…… わきのはねうつう意味じゃないと想うけど

吉井君、どうこう思考回路してんだろ？

『何だこいつ…』

『こいつもFクラスだぞ！』

あつ、吉井君に突っ込みを入れていたら見つかってしまった。

Side Out

明久 Side

「鮎川君！ 無事だつたんだね！」

Bクラス三人に囮まれて窮地に陥っていた僕たちの前に戦死したと思っていた鮎川君が現れた。

「吉井君、僕のこと忘れてたよね？」

何でだろ？ 鮎川君の背後に鬼が見える……。

『何だこいつ！』

『こいつもFクラスだぞ！』

鮎川君もBクラスの標的になつてしまつた。

三対三になつたとはいへ、相手はBクラス。まだこちらの分が悪い。

『えつと、試験召喚^{サモン}』

鮎川君が、戸惑いながらも召喚獣を召喚する。

『数学 鮎川蓮 v S Bクラス三人

516点 v S 合計381点』

勝負はあつといつ間についた。

Side Out

初めて試験召喚獣を呼び出した。思っていたよりも動かす感覚が自分の体と違う。でも、誤差の範囲内かな。

僕の召喚獣は、上はジャケット、下はジーンズ。共に色は黒だ。服装はその辺にいるチョイ悪親父みたいな感じなんだけど、手に持つてる武器が穩やかじやない。

右手には、幅も長さも長い両刃の剣。重そうだ。

そして、左手はなぜか人の形をしていない。指全体が刃物みたいになってる。

しかも右手の指の何倍も長い。関節はちゃんとあるからパツと見ちよつと気持ち悪い。

『何だこの点数は！』

『こんな奴がFクラスにいたのか？』

Bクラスの人の驚いた声が聞こえる。たしか単教科で200点取れば学年でトップクラスだと聞いたから、500点は珍しいのだと思う。

「数学は得意だからね」

一応Bクラスの人には声をかけておく。

僕が言い終わらないうちに一番点数の高い人が突進してきた。召喚獣を左に移動させて、すれ違いざまに右手の剣で攻撃する。その一撃で敵の召喚獣は消滅した。後二人。

『うおおおお！』

叫びながら、一人が攻撃してきた。振り下ろされる剣をこちらも剣

で受け止める。

点数に差があるからなのか、片手でも簡単に受け止められた。

「はあつ

右手を大きく振って、敵の召喚獣を弾き飛ばす。相手が踏み込んできたところに剣の切先を突き出す。相手の召喚獣は自身の勢いを止められずに剣に突き刺さって消滅した。

後一人。

『隙あり!』

いつの間にか僕の召喚獣の後に回っていた敵が剣を振り下ろす。前に突き出している右手の剣は間に合わない。

キンッ

『何つ

なんか硬そうに見えた左手でガードすると、甲高い金属音と共に相手の剣が止まった。

相手は驚いているけど、僕も驚いている。まさか剣を止められるほど硬いとは……。

驚いて隙が出来た相手に右手の剣を振り下ろす。

思ったよりもあっけなく、相手の召喚獣は全滅した。

「戦死者は補習うーーー!!」

Bクラス三人は何処からともなく現れた西村先生によつて連行されていった。

「凄いよ鮎川君！ どうやつたらそんな点数を？

召喚獣での戦闘を終えて、一息ついていると吉井君がすごい勢いで迫ってきた。

「近い！ 吉井君近いよつー！」

「数学は得意だからね」

吉井君を落ち着かせた後、Fクラスに戻りながら吉井君、島田さんと話した。

「ウチも数学は得意だけど、500点なんて絶対取れないわ」

「そうだよ、僕なんて100点すら取れないよ」

「吉井君、そこは威張つて言いつこじるじゃないよ」

「吉井君！ 無事だつたんですね！」

Fクラス前では、姫路さんが待っていた。

「うん。鮎川君のおかげで生き延びれたよ」

「吉井君、あんまり僕の点数は言わないでくれないかな」

吉井君に小声で話す。

「どうして？」

「あんまり期待されたくないのと、僕の点数が広まらないいつも奇襲が出来るからね」

Bクラス戦で出番はなくとも、Aクラス戦では必ず奇襲が必要だろう。

奇襲できる高得点者の情報は出来るだけ隠していたほうが都合がいい。

「鮎川君がどうかしたんですか？」

「いや、なんでもないだあつ！」

姫路さんと吉井君が話していると、なぜか島田さんが吉井君の足を踏みつけた。

「島田さん、一体何を……」

「（キツー）」

「あ。い、いや。美波」

あれ、この二人はいつの間に名前で呼び合いつになつたんだろう。大体想像はつくけど。

「……一人ともずいぶんと仲良くなつたみたいですね？」
何故だろ？、温厚なはずの姫路さんその後に鬼、いや般若が見える。

「さて、お前、」

坂本君が声をかける。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦と言う形になるだろうが、

Bクラス戦の後にCクラスと戦うのはきつい

Bクラスは上位クラス。FクラスにとつてはBクラスだけでも勝てるか分からぬのにその後Cクラスに攻められたらまず間違いなく負けるだろう。

「それならどうじようか？　このままじゃ勝つてもCクラスの餌食だよ？」

「そうだね」

「そうじやな……」

教室の空気が重くなる。

「心配するな」

坂本君が声を上げる。その顔は野性味たっぷりの笑顔を纏っている。

「向こうがそう来るなら、いかにも考えがある

「考え方？」

「そうだ。明日の朝に決行する。田には田を、「だ」

その日はそれで解散になり、続きは翌日へと持ち越しになつた。

第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになつてゐる。

バカテスト英語

問 goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級や最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』、『乳製品』、『おっぱい』

第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになつている。

蓮Side

翌日。

「今から、昨日行つた作戦を決行する。秀吉」
そういうつて坂本君は木下君に女子の制服を……ってええつ！
「待つんだ坂本君！ 木下君が挑発に行くのにどうして女装する必要があるの！ それと木下君もそこは抵抗しようよー。」

『おおおおおおつー』

僕の突つ込みはその場で着替え始めた木下君に何故か興奮したF
クラスの叫びで書き消された……

「どうじゃろうか」

うん。分かつてはいたけれど、木下君は女装が似合つね。
「ばっちりだ。よし、今からFクラスに向かうぞ」

「ねえ、どうして木下君を女装させたの？」

Cクラス前、一人でCクラスに向かっていく木下君を見ながら、僕は坂本君にさつきから感じていた疑問をぶつけた。
「まあ、見てれば分かる」

八重歯を見せながら笑う坂本君。なんだかとても悪役っぽい笑みだ。

小声で話していると、木下君がCクラスに入つていく姿が見えた。

「静かになさい！ この薄汚い豚共！」

いきなり凄い台詞が飛び出した。それに木下君の声がいつもと違つて聞こえる。

『なによ… アンタA……！ ちょっと……』

Cクラスの小山さんが何か言つているけど、ヒステリックな声の所為か良く聞き取れない。

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

自分からたずねておいて話しかけるな、はないんじやないかな。

「私はね、こんなに臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの… 増してブタ臭い貴女たちなんて豚小屋で十分だわ！」
『なつ！ 言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！』

『』

「どうやら、小山さんことつてはブタ小屋=Fクラスらしいね」

「否定は出来ないがな」

「いや、いくらFクラスでも、ブタ小屋よりは文明的な教室だと思うよ。一応置もあるし」
「ブタ小屋には置は敷いてないよ。」

「手が汚れてしまつから本当はこいやだけど、近いうちに貴女達をふさわしい教室へ送つてあげようと思うの。今、試召戦争の準備もしているし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚いブタの

貴女達を始末してあげるからー。」

とてもなくベリーな捨て台詞を残して木下君が教室から出きた。

その顔はどこか誇らしげであり、スッキリした様な顔である。

「どうじゃつたろうか？」

木下君が聞いてくる。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「……（ノクノク）」

坂本君の言葉に、ムツツリーーが頷いている。確かに、挑発としてはこの上ないほどに効果的だったと思つよ。小山さん以外のCクラスの人たちがかわいそうだ。

Side Out

明久 Side

「扉と壁を上手く使うんじや！」

秀吉の挑発の後、僕たちは昨日の試召戦争の続きをしていた。

雄一の作戦は『Bクラスを教室内に閉じ込める』らしい。

そんなわけで、Bクラス入り口付近を主な戦場にして、作戦を遂行させようとしているんだけど、さつきから姫路さんの様子がおかしい。

なんていうか、自分は試召戦争に参加しないよつこしているように見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！　補給も念入りに行え！」
秀吉の檄が飛ぶ。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

左出入り口にいるのは古典の竹中先生だ。

Bクラスは文系が多いので、文系教科で攻められれば分が悪い。

「姫路さん、お願ひ！」

「あ、そ、そのつ……！」

姫路さんは、戦線にも加わらず、泣きそうな顔でオロオロしている。このままじゃ突破される！

僕はBクラス左側の出入り口まで走り、竹中先生に耳打ちした。
「先生、ズラ、ずれてますよ」

「つ！－」

頭を押さえて周りを見回す竹中先生。こんなところで「いざ」と言うときの教師脅迫ネタ「古典教師篇」を使うことになるとは思わなかつた。

「しょ、少々席をはずします！」
これで少しの間ができる。

「古典の点数が残っている人は左側へ回つて！ 消耗した人は補給を受けるんだ！」

この隙にクラスへ指示を出す。「これです！」しは持ちこたえられるだらう。

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに声をかける。姫路さんがこうなっている原因を見つけないと動きが取れない。

「そ、そのつ、なんでもないですつ！」

そういうて大きく頭を振る姫路さん。その動作は不自然なほど大きく、何があるのがバレバレだ。

「そうは見えないよ。何かあつたのなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろ？」

「ほ、本当になんでもないんです！」

そうは言つけど、今日の姫路さんは絶対におかしい。

「右側入り口、教科が現代国語に切り替えられました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致られた模様！」

右側入り口までBクラスが得意とする文系教科に切り替えられるなんて、結構ピンチだ！

「私が行きます！」

そういうて戦場に加わろうと駆け出す姫路さん。

「あつ！」

しかし、何かを見た途端にその動きを止めた。

何があると思つて、姫路さんの視線の先、Bクラスの中をたゞつてみると、腕組みしながらこちらを見ている卑怯者……根本君の姿があつた。その手にはかわいらしい封筒が握られている。

「……なるほどね。そういうことか」

昨日の協定からおかしいとは思つてたんだ。体の弱い姫路さんに有利になる協定をBクラスから持ちかけてくるなんて、まるで姫路さんを無効化する手段を持っていたとしか考えられない。姫路さんさえ無力化できればあの協定はBクラスに有利なものになる。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれだけじゃないんだから、体調管理には気をつけでもらないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……！」

姫路さんは何か言いたげだつたけど、気にせず背を向けて走り出す。大事な用ができたから。

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」思わずそんな台詞が口からこぼれる。

あの野郎、ブチ殺す。

Side Out

蓮Side

Cクラスから帰つてきた後、すぐに始まつたBクラス戦一日目。僕は、本陣に残るようになつて、坂本君と教室に残つていた。

「ねえ坂本君、どうして僕を本隊に入れたの？」

転入生で、召喚獣の扱いにもなれていない新人を代表を護る役目がある本隊に入れるなんて普通は避ける。

「お前が戦力になるからだ」

「どういう意味？ 僕は転入生で試召戦争どころか、召喚獣にもなれてないんだけど」

実際、昨日吉井君たちを助けたあの一回しか召喚したことないし。

「お前が、Cクラスから無事に帰つてきたからだ」

「それはBクラスに人の注意が坂本君たちに向いていたからで……」

「そつちじやない。明久と島田を助けたときだ」

あれ？ 坂本君には話してないはずだけど。

「島田と明久がBクラスの追つ手を食い止めて、尚且つ戦死せずに戻つてくるには正攻法じゃ無理だ。それこそ、消火器で煙幕を張るとかな」

確かに、昨日僕が駆けつけたときには島田さんがピンを抜いた消火器を持っていた。

消火器を煙幕代わりにするつもりだったんだ……

「だが、明久たちが消火器をぶちまけた、と言つ話は入つてきていな」

消火器なんて勝手に撒いたらそれなりに話題にはなるよね。

「つまり、明久と島田は、正攻法でBクラスを食い止めてから戻つてきた事になる……

お前と一緒にな」

坂本君は最後の部分を特に強調した。

「確かに僕はFクラスに戻つてくる途中で吉井君たちと合流したよ。でも、そのときにBクラスの人は三人に減つていたし、三対三なら正攻法でも……」

「無理だな。Bクラス一人が撤退に追い込まれるほどのダメージを与えるまでに、明久はともかく、島田はかなり消耗していたはずだ。教科は数学だつたしな。

つまり、お前がBクラス三人を相手に出来るほどの戦力を持つてい

る事になる

坂本君は何処まで知つていて、何処からが推理なんだらう。とても最下位クラスの人間とは思えない頭の回転だ。

「もし、僕にそんな戦力があつたとして、それなら戦線に出たほうが良かつたんじゃない? Bクラスを閉じ込めるのは難しいと思うよ」「ああ、そこはちゃんと考えてあるし、何よりお前は伏兵だ。Aクラス戦用の……な」

まだBクラスに勝つてもいないので、もうAクラス戦のことを考えて策を立てている。

一流の軍師、策士とは、いつも人のことを言つんだらう。決して他人を蹴落とすだけの卑怯者じゃない。

だけど。

「坂本君は、Bクラスを押さえておけると思つの?」

Aクラス戦も、Bクラスに勝たなきや始まらない。以下の問題はそれだ。

それに気になることもある。

「ああ、Bクラス」ときなら、姫路がいれば何とかなるだらう

姫路さん。学年トップクラスの彼女なら……

「昨日の協定に違和感があるんだ。Bクラスが懲々こちらに有利な条件を提示してくるなんてありえない」

あの協定がFクラスにとって有利なのはある一点だけだ。だけどFクラスはその一点を生命線にしている。もしその生命線を封じる事ができるとしたら……

「じクラスへおびき出すための布石だったんだ。気にする事はない」
違う、それだけじゃない。

「何か姫路さんを動けなくする策が『雄一』」

教室に吉井君が飛び込んできた。

第八問 男には、やらなきゃいけない時がある！

バカテスト保健体育

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎えることで第一次成長期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のこととを月経、

初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達する頃に初潮を見ることが多いため、

その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また体重のほかにも初潮年齢は人種、気候、社会的環境や栄養状況などに影響される』

教師のコメント

詳すぎです。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

鮎川蓮の答え

『ふあ、ファーストキス……』

教師のコメント

回答から何故か恥ずかしさを感じますが外れです。

第八問 男には、やらなきゃいけない時がある！

蓮Side

僕が坂本君に昨日の協定について感じた違和感を話そうとしたとき、吉井君が教室に飛び込んできた。少し息が切れていて、何か緊急事態があつたことを思わせる。

「雄二ーー！」

「何だ明久、脱走か？ チョキでしばくぞ」

「坂本君、たぶんここはシリアスな場所『話しがあるんだ』」

遮られた。吉井君には僕は見えていないのだろうか。

昨日のクラスに行つたときといい、僕はFクラスのメンバーに無視されてる気がする……

でも、取り敢えず、シリアスな空気になつた。

「根本君の着ている制服がほしいんだ」

「……お前（吉井君）に何があつたんだ（あつたの）？」

僕の知る限りでは、吉井君はノーマルだつたはず……はつ！
まさか今朝の木下君の着替えを見てソッチ方面に目覚めてしまった
のか！

「ああ、いや、その。えーっと……」

吉井君は口もってこない。そりや、いきなりカミングアウトしてしまつたんだから。

「まあいいだろ？ 勝利の曉にはそのくらい何とかしてやろう」

「人の好みはそれぞれだよね」

「ちょっと待つて、雄二はいい。いや、雄二の顔もむかつくけどそれよりも鮎川君、

君は何を想像しているんだ！」

「僕は吉井君がノーマルじゃなくとも気にしないよ。あ、でも僕はノーマルだからね」

「違う！ それは大きな誤解だ！ 僕はノーマルだ！」

「別に隠さなくても……」

「だから誤解だつて『話が進まん。それだけか？』」

坂本君に遮られた。今は吉井君がノーマルかどうかなんてビリでもいい。「良くないよ」なんか聞こえた気がするけど無視だ。今は、Bクラスに勝つことだけを考えないと。

「姫路さんを戦闘から外してほしい」

悪い予感が当たつてしまつたようだ。やつぱりBクラスは何かしらの手段で姫路さんを無力化しているのだろう。いつなると昨日の協定はBクラスに圧倒的に有利だ。

「理由は？」

姫路さん抜きでBクラスと戦うのは自殺行為に等しい。

「理由はいえない」

「どうしても外さないとダメか？」

「うん。どうしても」

坂本君も吉井君も引かない。おそらくだけ、姫路さんはBクラス……いや、根本君に何か弱みを握られてる。

制服に入るサイズの弱みとなると……写真、メモリー、手紙といったところか。

メモリーだと、姫路さんに中身を確認してもらつ必要がある。姫路さんは根本君と関わりが薄いはずだから、可能性は低い。姫路さんが良く知らない男子生徒に簡単にしていくとも思えない。

写真は……女子の写真を持っていると根本君は変体扱いじゃないかな……

となると、手紙か。姫路さんが人の悪口を手紙に書くとは思えないから好きな人か？

ラブレター、もしくは島田さんと手紙の交換をしていたか、どちらだな。

「頼む！ 雄二」

僕が姫路さんが握られている弱みに当たりをつけていると、吉井君が坂本君に頭を下げていた。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だつた役わにをお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させるぞ！」

一見根拠のない自信。だけど、吉井君には何とかしてしまいそうに感じる。

「それで、僕は何をしたらしい？」

「タイミングを見計らつて根本に攻撃を仕掛けろ。科目は何でもいい

い」

「みんなのフォローは？」

「ない。しかも教室の入り口は今の状態のままだ

「僕が吉井君のフォローに回るよ」

根本君はBクラスの中にいるだろう。吉井君一人では成功確率は低い。

「いや、ダメだ。お前は本陣に残れ」

「どうして？」

「今の戦力でBクラスを押さえとけるとは限らない。明久が攻撃を仕掛けるまでBクラスの出入口は死守する必要がある。お前はその為の戦力だ」

「……分かった」

坂本君にも一理ある。今出払っている戦力でBクラスを押さえ込めるかと言つと、厳しいだろう。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

「それじゃ、上手くやれよ

思考に耽り始めた吉井君を残して、坂本君はどこかに行くようだ。

「Dクラスに指示を出してくる
分かった」

「明久、お前は点数は低いが、秀吉やムツシリーのようにお前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「僕も、皆と会つてまだ時間はたってないけど、Fクラスの皆が点数じゃ計れない何かを持っている事は分かる。僕は手伝えないけれど、吉井君の事を信じてるから」

「……雄二、鮎川君」

「つまくやれ。計画に変更はない」

僕は、坂本君と一緒に、Dクラスへ向かつた。

Side Out

明久Side

雄二と鮎川君が出て行つた後、僕はBクラスに奇襲を掛ける方法を考えていた。

僕に秀でている部分……。狭い場所での戦闘である以上、操作性や細かい動きは役に立ちそうもないし……

「あつ」

一つだけあつた。秀でている、とはいえないけれど、他の人とは違う、僕だけの特徴が。

「美波！ 武藤君と君島君も、協力してくれ！ 「
補給を受けるために戻ってきた三人に声を掛ける。

「どうしたの」

「何か用か」

「補給テストがあるんだけど」

この三人は既に点数を消費し、補給テストを受ける事が任務にな
つている。

「補給テストは中断。その代わり、僕に協力してほしい。この戦争
の鍵を握る大事な役割なんだ」

「……随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負をしてほしい」

あの下種野郎、目に物見せてやる！－

第九問　Bクラス戦終結！

バカテスト保健体育

問　人が生きていくうえで必要な五大栄養素を全て挙げなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『？たんぱく質　？脂質　？炭水化物　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント

流石です。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満のときは早発月経という。また、十五歳になつても初潮がないときを遅発月経、更に十八歳になつても初潮がないときを原発性無月経といい····』

教師のコメント

保険のテストは一時間前に終わりました。

第九問　Bクラス戦終結！

蓮Side

僕は、坂本君と一緒にDクラスへ指示を出しにあつたあと、Fクラスに戻つてきていた。

「吉井君は、どうやつてBクラスに奇襲を掛けると思つ?」
坂本君に尋ねる。

「DクラスとBクラスの間の壁を召喚獣でぶつ壊して直接Bクラスないに攻め込むつもりだろ?」

予想外の返答が返ってきた。

「そんなことしたら後で酷いことになるよ！ それに召喚獣つて物体に触れられないんじゃなかつたつけ？」

「いや、明久の召喚獣は特別仕様だ。観察処分者は教師の雑用を手伝わされるんでな、召喚獣が物体に干渉できるんだ」

「そりなんだ……便利な召喚獣だね」

「いや、そうでもないぞ。物体に触れられる代わりに召喚獣が受けたダメージの何割かは、召喚者にフィードバックするからな」

「そんな使用の召喚獣で壁を壊したら、吉井君も痛いよね？」

「ああ。だがそれを含めてあいつは覚悟したんだろう。鉄人あたりにこつてり絞られるだろうがな」

凄い。何て男らしいんだ吉井君。自らの身を省みない策を決行するなんて……

『Bクラス出入り口、突破されそうだ！』

伝令が来た。試召戦争が始まつたのが今朝の9時。今は3時半を過ぎているからかなり持つたほうだと思つ。

「坂本君！」

「ああ。今から俺たち本隊も出る！ Bクラスに勝手を許すな！」

『おおーっ！』

坂本君の号令で、教室に残つていた本隊が動き出す。

こちらの戦力を全てかけた、文字通り総力戦の始まりだ！

明久Side

「おおおっー！」

デコンシード

叫び声と共に壁にじぶしを叩きつける。力が強い呪喚獣といつても、一撃で教室を隔てる壁を壊せるわけなく、僕の手に痛みが返つてくる。

「ぐうっ！…」

「怯むな！　己を凌ぎ切れれば勝てるんだ！」

「消耗した人は下がって！ 戦死はしないよ！」

「坂本と本隊だ！」

教室の外から声が聞こえてきた。

姫路さんを戦闘からはずした影響は思ったより大きかったようだ。あらかじめ出ていた戦力だけではBクラスを抑えきれずに、雄二と本隊まで出てきているんだね。まさに総力戦だ。

「雄二たちに讧ませてやるんだ……必ず成功させる…！」

SideOut

蓮Side

僕は、坂本君率いる本隊の一員として、Bクラスに援軍に来た。代表まで出てきた以上、もう隠せる戦力はない。文字通り総力戦だ。Bクラスの面々はFクラス代表の坂本君が出てきたことに驚きながら

らも、その首をしきりに狙つてゐる。」こちらも負けずに、本隊の戦力でBクラスの出入り口を押さえ込む。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の入り口に群がりやがつて、暑苦しいことこの上ないつての」

「なんだ、軟弱なBクラス代表様はそろそろギブアップか？」

ドォン！

根本君が口を開くが、我らが代表坂本君は挑発で返す。

「ハア？ ギブアップするのはソツチだら？ Fクラスはクズの集まりの上に、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜえ？」

ドォン！！

初めて会つたときから感じていたけど、根本君の人を見下した態度は気に入らない。

挑発の意味も含んでいるだらうけれど、あの顔は本氣でFクラス……いや、自分以外の人間を見下している。成績や頭の回転、策だけで人間の全てが決まるわけじゃない。

自分を過信している人は嫌いだし、今から痛い目見るよ。

「お前ら相手じゃもつたいたいからな。今は休ませておくのぞ」

「けつ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組つてのがFクラスのことならお前が今から負け組代表だな」

ドォン！！！！

「ちつ！ やつきからドンドンとつむせえなー てめえらの仕業か

?

「知らねえな。人望のないお前に対する嫌がらせじゃないか？」
「けつ！ 言つてろ」

だんだん、吉井君の召喚獣が壁を叩く音が強くなつてきた。

「坂本君……そろそろ」

「ああ……一田引くぞお前らー！」

「オイ！ 散々吹かしておいて逃げるのか！！」

僕は最後尾についていく。万が一Bクラスの人気が追いついてきたら……

「だああああああしゃああああ！――！」

ドゴオツ！！

吉井君の叫びと共に、DクラスとBクラスを隔てていた壁が崩れ去る。

「根本恭一！ 覚悟おー！」

吉井君を筆頭に、島田さんと数名のクラスメンバーが根本君に襲い掛かるが、

「はつ！　俺が一人でいると思つたか！　お前らの奇襲は失敗だ！」

オイ、お前ら！

さ、さと坂本を仕留めて来い！」

そもそも、根本君の一方的な物言いに我慢できなくなつてきたな……

…やつがやねうか。

「やうはさせない！ Fクラス鮎川蓮が、召喚エリア内にいるBクラス全員に数学勝負を申し込みます！」

「鮎川君！」

『何だアイツ』

『Fクラスの癖に調子乗つてんじゃねえよ』

『さつさと倒して坂本を仕留めに行くぞ！』

吉井君も驚いていいけど、Bクラスの人からも色々な反応が返ってくる。

怒っている人が多いようだけど、そりゃって冷静さを失うと足元をすくわれるよ。

「試験召喚！」

『ぶつ潰してやる！－！ 試験召喚！』

『数学 Fクラス 鮎川蓮 v S Bクラス 12人

516点 v S 平均 147点

やつぱり文系の人が多いBクラス相手ならこの人数でも何とかなる！

『なんて点数だ！』

『あんな奴が何故Fクラスに！』

驚いてるね。だけど、召喚獣が固まっている上に動きが止まるつるよ！

「衝撃波！！」

僕は右手の剣を床に突き刺して体を固定した後、左手をBクラスの集団に向ける。

左手の腕輪が光を発し、召喚獣の左手から圧縮された空気の渦が発生する。

渦は僕の召喚獣との距離が離れていくうちに大きくなり、Bクラスの召喚獣を飲み込んだ。

「数学 Fクラス 鮎川蓮 v S Bクラス 6人
436点 v S 平均 78点」

初見で驚いた上に、皆固まってくれたおかげでクリーンヒットした。

6人も戦死に出来たのは大きい。僕の腕輪の能力は発動する前に準備が必要だから、

同じ相手に何回も当てることが出来ない。その分威力は高いけど。

『何だ今のは！』

『腕輪か！』

「驚いてくれてるのは嬉しいけど、隙だらけだよっ！」

混乱しているBクラスの召喚獣に向かつて走る。

僕の召喚獣が接近してきたことであわてて戦闘態勢を取るけど、もう手遅れ。

一番近い人に接近し右手の剣で一閃。すぐさま隣の召喚獣に横薙ぎの一撃を入れる。

斬りかかってきた一人を左手で受け止め、上段から剣を振り下ろす。後三人。

一人がたてを構えて突進てくる。剣で打ち返すが、矢が飛んでき

て被弾してしまう。

出来た隙に一人係で攻撃してくるのを、一人を剣で受け、もう一人を左手で受けて蹴飛ばす。剣で受けているほうの召喚獣を左手で切り裂く。

「なんなんだお前は！」

この有様を見た根本君が何か言つてゐるけど無視。もう十分隙は作つた。

根本君は吉井君と僕が立て続けに奇襲したことで窓際まで下がつてゐる。

根本君の後ろには開け放たれた窓。四月にしては暑い天氣に加え、クーラーの故障。条件は揃つた。

ダンッ！

開け放たれた窓から、ロープを使ってムツツリーーと保健体育の大島先生が飛び込んでくる。

「「ムツツリーーー！」」

僕と吉井君の声が重なる。

「……Fクラス土屋康太。保健体育勝負、試験召喚サモン」

『保健体育 Fクラス 土屋康太 VS Bクラス代表 根本恭一

441点 VS 203点

』

ムツツリーーの召喚獣が根本君の召喚獣を一閃する。

Bクラス戦は幕を閉じた。

第十問 勝利と戦後対談・・・・・のはずだけなんか喜べないものがあった

バカテスト世界史

問 黄金のマスクで知られるエジプトの王を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『ツタンカーメン』

鮎川蓮の答え

『トウト・アンク・アメン』

教師のコメント

二人とも正解です。

鮎川君の回答を繋げて読むとツタンカーメンとなります。

土屋康太の答え

『クレオパトラ』

教師の答え

確かにクレオパトラもエジプトの女王ですが、ツタンカーメンからは

かなり後の時代の人物です。

木下秀吉の答え

『マルセル・シュオップ』

教師のコメント

誰ですかそれは。

鮎川蓮のコメント

フランスの作家で、『黄金仮面の王』という作品を残した人物です。

この作品は後に江戸川乱歩が「黄金仮面」という作品の参考にしたと語っています。

第十問 勝利と戦後対談・・・・・のはずだけなんか喜べないものがあつたりする。

ムツツリー」と大島先生の奇襲で、意外とあっけなくBクラス戦は終結した。

今、戦後対談に向けてそれぞれのクラスから代表者が集合している途中なんだけど……

「ううう……痛いよお、痛いよお……」

吉井君が手を押されて呻いている。召喚獣を介してとはいえ、壁を殴つて壊したんだから

痛みもあるし、怪我もするでしょ。

「明久も、思い切った行動に出たの?」

「ま、お前らしい作戦だな」

「でしょ、もつと褒めてもいいと思つよ」

多分木下君と坂本君が言いたいのはやうじやないけど……

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男氣あふれるおぬしらしい作戦じやな」

吉井君を落としたのは意外にも木下君だった。

「……遠まわしにバカって言つてない?」

「いや、結構ストレートに言つてると思ひナビ

「……(ガクッ)」

しまつた、つい言つてしまつた一言で吉井君に止めをさしてしまつた!

「ま、それが明久の強みだからな」

バカが強みつて言われる人は世界中探しても吉井君くらいだらう。

「さて、それじゃ嬉し恥し戦後対談といくか？ 負け組代表？」
「そうだね。散々汚い手まで使って負けたんだから言い訳できないね？」

「なんか鮎川君が黒い気がするんだけど……」
「奇遇じやな、ワシもそう思つていたところじや……」

なんか一人が言つてるけど、こつちは根本君への怒りを抑えるのに結構必死なんだよね。

戦争つて言つても、利用していいものと悪いものはあるよ。他人の気持ちを利用するなんて最低だしね。

「本来なら設備を明け渡してもいい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところなんだが、特別に免除してやらん」ともない」

坂本君の言葉にB、Fクラス両方がざわつく。

「落ち着け、皆。俺たちの目標はAクラスだ。Bクラスが『ゴールじゃない』

坂本君はFクラスを制すと、根本君……もといBクラス代表の外道に向き合つ。

「……条件は何だ」

「口が悪いね？ そつちは敗者なんだよ？ それにせつかくペナルティを免除してあげるつて言つてるのに上から目線はないんじやない？ 散々汚い手使つて負けておいてまだ自分が上だと思ってるの？ 救えない程バカだね？ もう頭腐つてんじゃない？」

「……お、落ち着け鮎川。こいつへの制裁は後回しだ」

しまつた！つい我慢できなくて。ああー BクラスだけじゃなくFクラスの皆も引いていらっしゃるー！」

「気を取り直して……条件はお前だよ、負け組代表さん？」

「俺……だと？」

待つんだ坂本君、その発言はいたさか危ない方面に取られるぞ。現にBクラスの女子の何人かが妄想の世界に飛び立つては顔をしかめている！

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から曰障りだつたんだよな」

坂本君の言葉にばつが悪そうに下を向く外道。そりやあんだけやつてるんだ、否定できるわけがない。

それにBクラスの人も誰一人フォローしようとしてしない。

「ああ。そこで取引だ。Aクラスに行つて試合戦争の準備が出来ていると伝えて來い。

ただし宣戦布告はするな。そしたら戦争が避けられなくなる。あくまで戦争の意思とその準備が出来ていることだけ伝えるんだ」

「それだけでいいのか？」

「訝しむ外道。そうだね、自分のやつてきたことから考えてこのくらいで許されるわけないと思つてゐるらしく。その通りだよ。

「だけど、そこの外道はいろいろとやつつけないことをやつてくれたからね。

本来ならFクラス全員と吉井君の召喚獣でミンチにするといふだけど……今回はこれで勘弁してあげるよ」

僕は女子の制服（Dクラスの人人が僕に着せようとしてきた物）を取り出す。

「お前がこれを着て、さつき言つたとおりの行動をしてくれたら設備は見逃そう」

坂本君のどひめの一撃。

「ば、バカなことをいうなー！」の俺がそんなふざけたことを…」

「Bクラス全員で、必ず実行させようー！」

「任せて！ 必ずやらせるからー！」

「これくらいで教室を守れるなら、やらない手はないなー！」

Bクラスが外道を取り押さえる。フワッ、やつぱり人望はなかつたね。

「やつぱり随分と評判が悪いな、お前は」「じゃあ、早く着替えよつか（一二〇シ）」「く、来るな変態ぐふうつ」

ああつ、僕が殴ろうとしたのにBクラスの人人が先にやつちやつた。

「とりあえず、黙らせました」「お、おひ……ありがとう」「吉井君、時間がもつたいたいから早く着せちゃおひ」「う、うん」

僕が制服に手を書けたときに外道が「めき声を上げた。てか、目開いてるし。

「丁度良いや、どうしても気が済まなかつたんだよね」

外道の胸倉を掴んで無理やり立たせると、左足を軸にして回転。外道の右あごを後ろ回し蹴りの踵で蹴り抜いた。

『……』

なんか、皆が僕を見て固まつてゐるけど、どうしたんだろ？

「鮎川、お前かわいい顔して案外えげつないな……」

「心外だな坂本君。これでもちゃんと手加減してるんだよ？」

本気ならハイキックの後に首投げのコンボだ。

「き、気を取り直して着替えさせようか。根本君は用覚めないようだし」

吉井君と根本君の制服を剥ぎ取り、女子の制服をあてがおうとするけど、やり方がわからない。

「これ、どうするんだろう？」

「えっ？ 鮎川君は着たことないの？」

ないよ！ 僕は男だし女装癖もないからね！

結局、Bクラスの女子が着付けを担当してくれることになった。Bクラスを後にし、外道の制服を探す。ポケットの中にかわいらしい封筒が入っていた。

やつぱり手紙だった。それもラブレターのまつか……もう一発殴ろうかな。

「あ。鮎川君、それは……」

「あ、はい。吉井君から返しておいて。」

「どうして？ 鮎川君が見つけたんだし、別に僕じゃなくても」

「いいから。吉井君は痛い思いをして突破口を開いてくれたんだし、このくらいの得はしてもいいんじゃない？」

昨日、吉井君と島田さんの様子を見て姫路さんは嫉妬してたみたいだし。多分……

「そういうことならもらつておくよ。ありがとう」「

「気にしないで。あと、外道の制服は僕が処分しておくから燃やした後に灰は撒いておこう。雑草がみるみる枯れるはずだ。

吉井君を見送った後でBクラスに戻ると……

「ほり、キリキリ歩け！」

「な、何だこの服、スカートがやけに短いぞー！」

おぞましい物体がそこにはあった……

「坂本君」

「ああ。自分で言つておきながら吐き氣がする……」

「き、貴様！ よくも俺にこんなことを！」「

外道が突つかかってきた。まだ名前は知られてないみたいだね。

「あー盛り上がっているところ悪いが、このあと撮影会があるんだ。早くしてくれ」

「撮影会？ そつ、そんなの聞いてないぞ！」

言つてないもん。

「これ以上あれを見てたら精神が汚染されそつだし、戻ろつか

「そうじゅの」

「……（口ク口ク）」

「つしてBクラス戦は本当に幕を閉じた。

後日、根本に「女装癖で変態な最低外道」という噂が立つが、本當なので気にする必要もないだろう。

第十一問 危険は意外と身近に潜んでこむつて良く聞くけど自分が体験する』

バカテスト地理

問 バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい。

姫路瑞希の答え

『エストニア ラトビア ハスティニア』

教師のコメント
その通りです。

鮎川蓮の答え

『バルトーン ルーマニア トルコ』

教師のコメント

バル、トで始まる国ではありません。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『高知 愛媛 徳島 香川』

教師のコメント

正解不正解の前に数があつていなることに違和感を覚えましょう。

第十一問 危険は意外と身近に潜んでいるって良く聞くけど自分が体験することは少ない……

蓮Side

Bクラス戦から数日。

消費した点数の補充も終え、僕たちはAクラス戦の作戦会議をしていた。

壇上に立っているのはもちろん坂本君だ。

「まずは、皆に礼を言いたい。不可能とまで言われた試召戦争をここまで勝ちあがれたのは皆のおかげだ。本当にありがとうございます」

坂本君からこんな言葉が出るなんて思わなかつたよ。

「どうしたのさ雄一、らしくもないよ」

吉井君も同じことを思つていたらしい。ちなみにあの後本人に聞いてみたところ姫路さんとは何の進展もなかつたらしい。と、いうからブレターの相手は坂本君だと思つてゐるようだ。結構分かりやすい好意なのに気づかないなんて、かなり鈍感だね……

「ああ、自分でもそう思つ。だがこれは偽らざる俺の本心だ」「感謝するのはまだ早いんじゃない?」

「ああ。ここまで來た以上、Aクラスにも絶対に勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強だけじゃないと大人共に見せ付けるんだ!」

『おおーっ!!』

D・Bクラスに勝利して、Fクラスの皆が自信を持つていた。きっと全ては坂本君のシナリオどおりなんだろう。

「さて、そのAクラス戦だが……一騎討ちで勝負をつけたい」「誰が勝負するのさ?」

Aクラス、特に上位10人の成績は他の2年生とは桁が違うと聞いたし、Fクラスで太刀打ちできるとは思わないんだけど。それは皆も同じようで顔には困惑の色が見える。

「勝負するのは当然俺と翔子だ」

「バカの雄一が勝てるわけあつ!」

ヒュンッ!（坂本君がカツターを投げる音）

トスッ!（カツターが吉井君の頭の横に刺さる音）

冗談だと思う。本気で友人の頭めがけてカツターを投げるような人

はいないと思いたい。

「次は耳だ」

「冗談だと信じたいつ！」

「じゃが、明久の言い分ももつともじやぞ。雄一と霧島が勝負して勝てるとは思えん」

友達の命が間一髪助かつたといつ状況なのに何故か落ち着いている木下君……

いや、木下君の意見には賛成だよ。Fクラスで一番成績がいいといつても所詮はFクラス。

Aクラス代表、つまり学年主席の霧島さんとの差は天地ほども離れているだろう。

「まあ、その通りだ。まともにやつて勝てるとは思っていないが、それはDクラスBクラスのときも同じだつたらう？　だが俺たちはその戦いに勝つた。今回も同じだ。

俺は翔子に勝ち、Aクラスを手に入れる。俺たちの勝ちは揺るがない……皆俺を信じてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやるー！」

『おおーつー』

坂本君の一言で皆の指揮が更に上がった。

やはり上位クラス2クラスに策略で勝つってきたことが大きいらしい。

「で？　まともにやつ合つて勝ち目がないって自覚してるらしくけど、具体的にはどうするの？」

「ああ。具体的には……フィールドを限定する。内容は日本史の限定テスト勝負。

小学生レベルの問題で100点満点の上限ありだ！－」

「それなら両方100点でしょ？」

「そうだよ雄一。同点だったら延長戦になるし、問題のレベルも上げられちゃうよ？」

「おーおー。お前らあんまり俺をなめるなよ？　幾らなんでもそこまで運に頼りきつた勝負をするつもりはない」

坂本君がこう言つてことは、何かしらの秘策があると考えてい。一番確実なのは霧島さんの集中力を乱すとか、かな。

「雄一は霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるの？」

「いや、翔子にとつて小学生レベルの問題なんて集中してなくとも余裕で100点だらう」

「じゃあどうするのよ？」

「集中してなくても100点つて、要するに勝ち田がないってことだからね？」

集中しなくても満点が取れる相手なんて勝ち田がないにも程がある。

「いや、一問だけアイツが間違える問題がある」

「そんな問題があるの？」

「ああ。その問題とは……大化の改新！」

「大化の改新なんて小学校で習つたつけ？」

「そうじやの。内容までは習つておらんかった氣がするが」

「いや、内容を答えるほど掘り下げる問題じゃない。もっと簡単な問題だ」

「簡単……といつと何年に起つた、とかかの？」

「ああ。そうだ」

大化の改新は「無事故の改新」だつたから645年だ。

「大化の改新といつと、645年かの？」

「ああ。こんな問題は明久でも間違えない」

坂本君が言つた瞬間に吉井君が顔を背けたのを僕は見逃していない。吉井君が小学生レベルの問題も答えられないとは思わなかつたけど。

「だが翔子はこれを必ず聞違える」

「あの……坂本君は霧島さんと仲がいいんですか?」

今まで口を開かなかつた姫路さんが坂本君に聞く。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙えつ……」

吉井君の号令でFクラス男子全員（僕と木下君を除く）が上靴を坂本君に向けて構える。

「い、いきなりどうしたの皆?」

「鮎川君、止めないでくれ! 僕はこの男の敵を始末しないといけないんだ!」

「鮎川よ、止めるだけ無駄じや。いやつらはいつなるとなかなか止まらんからな!」

僕か？ 僕がおかしいのか？ というかFクラスに本来いないはずの姫路さんはどうしてこの空氣になじんじゃつてるの？ 君に何があつたんだ！

「お、お前ら俺と翔子には何も」

「黙れ男の敵！ 須川君、靴下はまだ早い。それは押さえ込んだ後に口に押し込むものだ」

「はい！ 隊長！」

「吉井君。吉井君は霧島さんみたいな人が好きなんですか？」
姫路さん、やつぱり好きな人の好みは気になるよね。

ただ、微妙に殺氣がにじみ出てるのが気になるけど……

吉井君、ここには彼女の気持ちに気づいて……

「うん。 美人だし」

アウトオ！ 吉井君、その答えは引き金を引くことになるぞ！

「ちよっと、姫路さん？ どうして僕に向かつて戦闘態勢をとるの？ 美波もどうして

僕に向かつて教卓なんて危ないものを投げようとしてるのさ？」

やばい。吉井君の一言で恋する乙女一人が臨戦態勢だ。

「と、とにかく。俺はアイツに昔間違つて嘘の年号を教えたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。あいつが今学年主席にいるのもその影響が大きい。だから俺たちはそれを利用して翔子に勝つ。そうすれば俺たちの机は……」「システムデスクだ！」 「」「

吉井君の危機の傍らでは皆のテンションが最高潮を迎えていた。

「今から宣戦布告に行くぞ。明久とマッソリーーも付いて来い」「あ、ウチも行くわ」「私も行きます」「じゃあ僕も行こうかな。Aクラスにも興味があるし」「分かった。取り敢えず早く行くぞ」

所変わつてAクラス

僕たちは試合戦争の交渉のためにAクラスに赴いた。
「ナニコレ？ ここは外国のホテルかなんかの？」
Aクラスに付いた僕の第一声がこれだった。照明はシャンデリア。

机はシステムデスクだし、

リクライニングシートと個人エアコンまで付いている。

日本の学校でこれ以上に設備を持つ学校はないだろう……。

「あら、何の用？」

目の前には木下君女装ver.が立っていた。

「あれ？ 木下君いつの間にAクラスに？ それに女装なんてして
るから男として見られないんだよ？」

どうしてだらう、目の前の木下君がうつむいて震えてるんだけど……

「鮎川よ、ワシはここじゃ」

あれ？ ジゃあ、僕の目の前の人は……

「私はそいつの姉よ！」

「うわああ！ 『』『』めんなさい！」

「どいつもこいつも秀吉ばっかり……許さないわ！」

「ちょ、き、木下さん？ 人間の身体構造上その関節はソツチの
方向には曲がらなあああああああああああああああああああ
あああつ……！」

意図せずに木下さんの逆鱗に触れてしまった僕はAクラスとの交渉
を終えた皆が助けてくれるまで木下さんのサブミッションを驗ら
続けたんだ……

Side Out

No Side

蓮が優子に関節技による説教（拷問）を受けている。雄一たち

Fクラスの面々は

Aクラスとの交渉のテーブルについていた。

「で？ 今日は何の用かな？」

Aクラスの交渉役は学年次席（瑞希が振り分け試験を途中退席したため）の久保利光。

「ああ。Fクラス代表として一騎討ちを申し込みに来た」

「その要求を呑むことでの僕らのメリットは？」

「昨日、Bクラスから使者が来たはずだ」

「あの女装した……失礼。確かに来たがBクラスはFクラスとの試召戦争に敗れて

3ヶ月間は宣戦布告が出来なくなつていいはずじゃないかい？」

「いや、あの戦争は公式には和平交渉にて終結、となつていい」

「それは脅迫かい？」

「まさか。お願いをしているだけ」

「だが、一騎討ちを受け入れることは出来ない」

「安心しろ。Fクラスからは俺が出る」

「しかし……『受けてもいい』代表？」

Aクラス代表霧島翔子が交渉の席に加わる。殆ど気配を絶つて近づいたため、Fクラスにメンバーは驚いているようだ。

「雄二の提案を受けてもいい」

「代表がそういうならば良いだろう。ただし、1対1ではなく代表者による5対5にしてもらいたい」

「ああ。それで良い。だが、勝負内容はこっちで決めさせてもらひうぜ？」

「それは……」

「そっちの方が上位クラスなんだ。そのくらいのハンデはあっていいだろ？」

「なら、全5回戦のうち3回Fクラスが、2回Aクラスが教科を決める、ていうのはどうだい？」

「それでいい。じゃあ、10時からで良いな？」

「ああ。構わないよ」

「……待つて。Aクラス代表として提案がある」

代表戦の勝負内容が決まったところで翔子が口を挟んだ。

「なんだ？」

「……負けたほうが勝った方の言う事をなんでも一つ聞く

「ちょっと、代ひょ』『ああ。別にいいぜ』」

「ちょっと雄一！ まだ姫路さんが了承していないじゃないか！」

雄一が提案を受け入れると、翔子が何を言つたのか明久が雄二を止めてかかる。

「大丈夫だ。姫路に迷惑は掛けない」

「もう、良いかな？」

「ああ。それじゃあ、俺たちは帰るぜ」

「雄一、さつきから鮎川が姉上の折檻を受けて折るのじゃが

「あ？ それは自業自得だろ？」

「いや、そうなのじゃが、あれはさすがに拙いといつか……」

秀吉に言われFクラスメンバーが蓮のほうを見ると、蓮は優子にサブミッションを掛けられながら、白目を剥いている。

「ちょ、ちょっと待ってくれ木下さん！ 鮎川は代表戦に出でもらわなきやいけないんだ。だからその辺でやめてくれ！」

雄一が慌てて優子を止め、蓮は一命を取り留めた。

Side Out

蓮 Side

「うう……ありがとう坂本君……死んじゃうかと思ったよ……」
僕は坂本君のおかげで命からがらAクラスを脱出することが出来た。
「いや、鮎川が『蓮でいいよ』、蓮がそこまで感謝するようなことはしていない」

「いや、坂本君が『雄一で良い』、雄一が来てくれなかつたらきつとあのまま殺されたよ」

「ねえ秀吉。秀吉のお姉さんってそんなに凶暴な人なの?」

「いや、普段はそうでもないんじゃが……」

木下君はそう言つてゐるけど、僕は実際に殺されかけたよ。

「じゃあ、結局5対5の代表戦になつたんだね?」

僕は雄一からAクラスとの交渉の結果を聞いていた。

一騎討ちぢやなくとも、5対5の代表者戦に持つていけたのは大きい。

クラス同士の対決じや絶対に勝てないからね。

「ああ。お前にも出てもう予定だから準備しておけよ」

「うん。僕と、明久(名前で呼ぶことにした)、ムツツリーーと姫路さん、雄一の5人だね?」

「え? 僕も出るの?」

名前を出された明久が不思議そうにしている。

「明久は召喚獣の扱いが上手いし、Aクラス相手でも点数によつて

は勝てるかもよ？」

「ああ。俺はお前を信頼している」

「や、そなんだ……」

どうしたんだろう？ 明久は面と向かってほめられたことがないのかな？

打ち合わせをしていりしひに約束の時間が迫ってきた。

「よし、行くぞお前ら！ 最終決戦だ！」

「「「「おおーっ！」「」」」

いよいよAクラス戦の始まりだ！

第十一問 英語と実技と△クラス戦（前書き）

「口あいてしまった」とをお詫びします。

今日、PVが3000を突破したことを確認しました。
ちょっとでもこの歎文を覗いてくださった方全員に感謝しています。

第十一問 英語と実技とAクラス戦

バカテスト化学

問 周期表16族の元素を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『O……酸素 S……硫黄 Se……セレン Te……テルル P
O……ボロニウム』

教師のコメント

正解です。元素記号だけでなく元素の名前まで答えられるとは思いました。

吉井明久の答え

『水兵リーベ僕の船』

教師のコメント

君は周期表の意味を分かっていますか？

土屋康太の答え

『O - S - Se - Te - Po』

教師のコメント

正解です。土屋君、どうしたんですか？

鮎川蓮のコメント

16族の語呂合わせを考えればムツツリーーが覚えてるのは当然。

第十一問 英語と実技とAクラス戦

蓮Side

僕たちは再びAクラスを尋ねた。もちろん今回はFクラス全員だ。

「それでは、試召戦争を開始します」

開戦の合図を出したのはAクラス担任で学年主任でもある高橋洋子先生。

美人で才女……らしい。

「アタシが出るわ」

Aクラスの一人目は木下優子さん。僕はさつき殺されかけたから、

苦手って言つか、

トライアゴンが

「待つて、話が違うよ雄一！」一回戦は明久つて言つたじやないか

「大丈夫だ。
死んで來い」

「それ大丈夫じゃないから！」死刑宣告だよね！」

人を殺されそとはなかの知りでなくせは何てことを語るが

「どうして姉した？」

「ぼ、僕が出来ます……」「

「あ、いや、そんなことはない」

「……」と束湯していく。

「どうして？ 少なくとも僕たちはDクラスとBクラスに勝つてここまで来たんだけど」

「ファン。努力もしないで成績が上がるわけないわ」

完全にDクラスを見下している。木下さんをはじめ、Aクラスの人たちは成績も良いし、

それに見合へたけの努力もしてきただんな

「じゃあ、木下さんが一番努力した教科で勝負しようよ。努力して、良い成績とてるんだよね？ それを証明してよ」

「ハ？ 何言つてるのよ？ そんな条件じゃ勝てるわけないわ
まだ、バカにしている木下さん。だけど僕だって勝算なしにこんな
挑発してるわけじゃない。

「そつか。努力した教科で負けるつてことは努力が意味なかつたつ
て認めることだもんね。

怖いよね？」

ちょっと溜めああとに口角を上げて言い放つ。

結構分かりやすい挑発なんだけど、分かりやすいからこそ効果も高
い。

「何ですつて！ いいわ。そこまで言つなら英語で勝負よ！」

「後悔しないでよ。Fクラス鮎川蓮がAクラス木下優子さんに英語
勝負を申し込みます」

「Fクラスの分際でアタシにけんか売ったこと後悔させてあげるわ
！ 試験召喚！」

木下さんは召喚獣を呼び出す。

西洋風の鎧を纏つてランスを構えている。見るからに強そうだ。

「試験召喚！」

僕も召喚獣を呼び出す。点数表示が終わる前に木下さんが突進して
きた。

「消えなさい！」

スピードそのままランスを突き出してくる。並みの召喚獣ならこ
の一撃で決められる。

だけど、僕にこんな単調な攻撃は通じない！

ガキンッ！

ランスを右手の剣で受け、滑らせるように勢いを逃がす。
そして近づいてきた木下さんの召喚獣の頭を左手で掴む。

「なつ！ 離しなさいよ！」

『離せつて言われて離すと思つ？ 『衝撃波』』

右手の剣を床に突き刺し腕輪を発動する。

反動が強い代わりに、複数の召喚獣を一度に葬れるほどの威力を持つ攻撃を、

木下さんの召喚獣はゼロ距離で、しかも頭に受ける。

そのまま、召喚獣の頭を吹飛ばし、勝負は決まった。100まで10秒足らず。

『英語 Fクラス 鮎川蓮 VS Aクラス 木下優子

545点 VS 392点

』

勝負が付いてから、ようやく一人の点数が表示される。
僕は腕輪を一回使つてるから本来の点数・80点だ。

木下さんも400点近かつた。さすがに一番努力したってだけはあるね。

だけど、英語は僕も負けられない教科なんだよね。

『何だあの点数は』

『500点台だと！』

『なんであんな生徒がFクラスに』

『あのかわいい子が天才だつたなんて』

『蓮ちゃん愛してる！』

僕の点数に、Aクラスだけじゃなく、Fクラスの皆も驚いている。
けど、最後の人には一度お話しする必要がありそうだ。

『何でよ。どうして……』

木下さんは、よほど悔しかったのか涙目になっている。

『木下さんが自分を過信して他人を見下していたからだよ。』

どんなに優秀でも、成績が良くて人を否定して言い訳じゃないんだ

「くつ……」

言いたいことは言った。ここからは木下さんが自分で考えることだ。

「蓮！ 英語もすごかつたんだね！」

「ああ。俺も驚いたぞ。あそこまで高い点数をとっていたとはな」「僕にとって、英語は母国語みたいなものなんだよね。だからその辺の教師によりできる

自信はあるよ」

「じゃあ、運が良かつたってこと？」

「いや。雄一じゃないけど、僕も運任せでんな挑発はしないよ」「勝算があったということかの？」

「そう。英語は積み上げ教科だからね。日々こつこつと勉強しないと出来るようにはならない。僕にとってはそれが日本語だったんだけどね」

一番努力した、つまり最も時間を掛けた教科は何かと聞かれたら大抵の人は英語か数学と答える。それが分かった上で挑発したんだよ。

「しかし、蓮が勝つて来るのは思わなかつたぞ。良くやつた」

「へえ～。やつぱり僕は捨て駒だつたんだ」

試合前の態度で分かつてはいたけど、面と向かって言われると困る。

「秀吉？」

あれ、木下さん？ 何のようだろ？

「なんじゃ姉上？」

「忘れてたんだけど、このクラスの小山さんって知ってる？」

秀吉の命が危ない気がするのは僕だけだろうか？

「はて？ 誰じゃそれは？」

秀吉が言つた途端木下さんから殺氣が！

「ふうん、ちょっと来てくれるかしら」

「なんじゃ姉上。何故ワシの腕を掴むのじや？」

「あんたCクラスで何を言つたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしたことになつてるのかしら？」

「はつはつは、それはワシなりに姉上の本性を推測して……ちが、

姉上！　ワシの関節は

そつちには曲がらな……ギャアアアアアツ！！」

試合に負けて落ち込みながらもしっかりと恨みを晴らしに来るとは

……木下さん恐るべし

「それでは、次鋒戦を始めます」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは我らが観察処分者明久が出る。

教科は物理が選択された。

「明久、やつてこい。大丈夫だ、俺はお前を信じてる」

「フ……それは僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。お前の本気を見せてやれ」
な、なんだつて？ 明久はまだ本気を出していなかつたつてことか？
もし今までの成績がこの一戦のための演技だとしたら……

「まさか貴方は？」

「そう。僕は今まで本気なんて出しちゃいない。僕本当は……」

明久の言葉に両クラスの生徒が息を呑む。
「左利きなんだ」

勝負は一瞬でついた。

点数差は6倍以上か……操作技術で勝てる点差じやないな。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

明久は島田さんに関節技を喰らっている。

「み、美波、ただでさえフィードバックで苦しんでるのに更に殴るのはやめて！」

「島田さん！ それ以上やつたら明久が死んじゃうよー。君は自分の好きなん」コフウ

何故だら？ 明久を助けようとしたはずなのに僕がボロボロにされている……

「それでは三回戦を始めます」

「……（スクツ）」

Fクラスからはムツツーリー。保健体育では負け知らずの猛者。

「じゃあAクラスからはボクが出るよ」

そういうて立ち上がったのは黄緑色のショートヘアの女の子。こうじつては失礼かもしれないけれど、男物の服を着たら男子で通りそうだ。

「教科はなんにしますか？」

「……保健体育」

ムツツーリーが教科を選択する。もちろん保健体育。ここでムツツーリーが保健体育を選ばないなんて天地がひっくり返つてもありえないと思つ。

「ボクは工藤愛子。君、保健体育が得意なんだってね。でも僕も得意なんだよ。君と違つて……実技で、ね」

「意なんだよ。君と違つて……実技で、ね」
実技 ブッシャアアアア

「... 実技」

「ムツシニー」

工藤さんの言葉でムツツリーーが鼻から赤い噴水を出して倒れる。けど、さつきの言葉にそんな要素あつたっけ？

「吉井君だっけ？」勉強苦手そうだし、僕が教えてあげようか？

もちろん実技で、ね

『アラスカの旅』

「吉井君にはそんな機会一生ないから必要ありません！」

明久が死ぬほど悲しい目をしてるんだけど、別に一生スポーツや

「じゃあ、鮎川君……だつけ？ 君はどいつ？」

「特に苦手なスポーツもないのですが」

『詩』

あれ?
僕なんか変なこと言つた?

「ノワーボーレーかナツルーか？」

君、保健体育の点数何点?

何故そんなことを聞いて来るんだ！

。并以此为研究对象。

「そりなんだ
…………
ロマンネ

どうして?
何で僕謝られたの?

蓮お前みたいな奴、嫌いじゃないよ」

本当に酷だったんだろう。

「そつか……じゃあ、ムツツリー二君、二人で鮎川君に保健体育を教えてあげようか？」

「……さ、3……（ブツシャアアア）」

「どうして？ どうしてそこで倒れるのムツツリー二！」

鼻血なのに出血量が半端ないことになつてるんですけどー！

「ムツツリー二！」

僕と明久が倒れたムツツリー二に駆け寄る。

「ムツツリー二しつかりして！」

「あ、明久……」

「しゃべらないで！」

「……後は、頼む（バタッ）」

「ムツツリー二イイイイイイイイ」

命の危機のはずなのに、口メディ臭がする……

「どうしました？ 早く召喚してください」

高橋先生！ ムツツリー二が作っている血溜りが見えないんですか！

「うちの不戦敗でいい」

「分かりました」

坂本君が敗北宣言をする。それを受けて高橋先生がキーボードに何か打ち込む。

『生命活動 Fクラス 土屋康太 v S A クラス 工藤愛子
DEAD vs WIN』

』

突つ込まない。もう突つ込まないからね！

「それでは四回戦を始めます」

「私が行きます」

Fクラスは姫路さんAクラスからは、いかにも知的な雰囲気を纏つている眼鏡の男子が出てきた。

「ここが正念場だぞ」

「雄一がつぶやく。

「どうして？」

「Aクラスから出てきたのは学年次席の久保だ。今までの成績は姫路とたいした差はない」

「どっちが勝つてもおかしくないってこと?」

「そうだ」

「教科はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

「まあいいな。総合科目は点数がそのまま戦闘力になる。分が悪いからどうしてさ。姫路さんだつて元学年次席でしょ? さつき雄一が言つたみたいにたいした差はないよ」

「だといいがな」

姫路さんと久保君が召喚して……そして勝負は一瞬で着いた。

『総合科目 Fクラス 姫路瑞希 VS Aクラス 久保利光

4409点 VS 3998点

』

「何があの点数は?」

「霧島翔子に匹敵するぞ!」

「すごいよ姫路さん!」

「驚いたよ。いつの間にそんなに強くなつたんだい?」

「私、このクラスが好きなんです」

「Fクラスがかい?」

「はい。人のために一生懸命に慣れるこのクラスが。私の好きな人のいるこのクラスが、好きなんです」

姫路さんが勝つて、2対2。全では次の最終戦で決着がつく。

「それでは、最終戦を始めます」

第十二問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていつまれど自分が体

バカテスト地理

問 日本国土で最南端の島の名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『沖ノ鳥島』

教師の「メント

正解です。最東端の『南鳥島』と間違える人が多いのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

木下秀吉の答え
『南鳥島』

教師の「メント

見事に引っかかりましたね。

吉井明久の答え
『与那国島』

教師の「メント

それは最西端です。沖縄県といふことで、南にあるとこつイメージは分かります。

吉井君にしてはまともな間違え方で驚いています。

鮎川蓮の答え
『竹島』

教師のコメント

……君からこんな救いよみのなご答えが出るとは思いませんでした。

「それでは、最終戦を始めます」

第十三問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていうけれど自分が体験すると自分だけ不幸なんじゃないかって思える。

蓮Side

高橋先生の号令で、最終戦の幕が開いた。

Aクラスの代表者は学年主席の霧島翔子さん。
Fクラスからは、もちろん我らが代表坂本雄一だ。

「ついに始まるね」

「うん。あの問題が出るといいけど……」「

確かに、その問題が出なければ勝てぬからのう、「
雄一は運任せの勝負はしない、って言ってたけどこの勝負も案外運
負けさせなかもしれない。

「教科はどうしますか？」

「教科は限定テスト対決。内容は歴史の小学生レベルで100点満
点の上限ありだ」

雄一が勝負内容を伝えるとあらかじめ聞かされていないAクラスは
ざわづく。

小学生レベルならば両方100点を取つて当たり前。集中力の精神
力の勝負になる。

「分かりました。それでは問題を用意しますので付いて来て下さい」
高橋先生について雄一と霧島さんが視聴覚室へと向かう。
視聴覚室の様子と、テストの問題はAクラスのプラズマディスプレー
に表示されるようになつてている。

テストは進み、年号を答える問題が表示される。

関が原、応仁の乱、鎌倉幕府……大化の革新、あつた！

「あつたぞ！」

「うん」

「僕たちの勝ちだ！」

「これで僕たちの机は……」

『…………システムテストだ……』『…………

何度もか分からぬ Fクラスの合唱。
雄一の作戦通りに事は運んだ。
あとは、結果を待つだけだ。

『歴史限定テスト対決 Aクラス代表 霧島翔子
97点』

「やった！ Aクラス代表は100点を逃したぞ！」
「そんな……代表が……」
霧島さんの点数が表示されると、Fクラスは雄一の思惑通りに霧島
さんが満点を逃したので
歓喜に沸く。対するAクラスはあきらかに落ち込んでおり、中には
絶望したかのように
ひざを着く生徒の姿もある。

『Fクラス代表 坂本雄一
53点』

Fクラスの卓袱台がみかん箱になつた……

Aクラス教室

「何かいい訳はある？ 雄一」
「…………雄一、私の勝ち」
「…………殺せ」
「いい覚悟だ！ 殺してやる… 齒を食いしばれ！」
「落ち着いてください吉井君…」

「どうして止めるんだ姫路さん！　マイツには僕らの期待と信頼を裏切った罰が必要なんだ！」

「で、雄一、この点数なんぞ

「一九二〇年の只数が何倍に増加したか？」

いかにも俺の全力だ」

「このアホがあああああ！！！」

明久が怒り狂つてゐる。まあ僕も同じ気持ちだけど。

「アキ、落ち着きなさい。アンタだつたら30点も取れてないでし

九〇六

卷之三

「ニユウゼンノトコロニシテ、ニニハアリ

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନ୍ତିରି ପରିଷଦ୍ୟ

「へ、何であんだ！」

体罰が必要なのによ

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

代表戦で先勝つたから、僕はあのテントでモロなぐとも在りには点数取れるし

雄にお仕置きしてもいいかな？」

そろそろ我慢の限界だ

「八十、画」

「うよか」

雄一？ ちょっと寝てもいいよ？

「アーティストとしての才能」

木下さん？」

「とにかくアタシたゞてわかつた途端しゃな顔するのよ」

僕は再び地獄を見た。

Side Out

No Side

優子による蓮へのお仕置き（折檻）が終わり、Fクラスの騒ぎも一応収集した。

「……雄二、約束」

「ああ。好きにしろ」

「どうしよう！姫路さんの貞操が危ない！」

危ないといいながらカメラを準備するムツツリーとレフ版を持つ明久。

なんとも欲望に忠実な一人である。

「……雄二、私と付き合つて」

「」「え？」

空気が凍つた。

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二が好き」

「その話は何度も断つただろう？他の男と付き合つ氣はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。だから今からデートに行く」

「ぐあ！離せ！やつぱり約束はなかつたこと……」

翔子は雄二の首を掴んで持ち去ってしまった。

皆が呆然としている中、Aクラスの鉄人と西村教諭が入ってきた。

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ。これから我が

Fクラスについての説明を始めようか」

「え？ 我が？」

「おめでとう。お前らの試合戦争敗北のおかげで、Fクラスの担任が福原先生から俺に代わるそうだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ！」

『な、なんだって』

当然のことながら、Fクラスは悲鳴を上げている。

「いいか、お前たちは良くなかった。しかし、「学力が全てではない」といつても、人生をわたつていいく中でそれは大きな武器となる。全てではないからといって蔑ろにしていい理由にはならん」もつともである。

「吉井に坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来の観察処分者と、A級戦犯だからな」

「そりは行きませんよ。なんとしても監視の目をかいぐぐつて今までどおりの楽しい学園生活を送つてやる！」

「……お前らには悔い改めるという発想はないのか？」

あつたら何時までも学園位置の問題児ではいられまい。

「とりあえず、明日から授業と別に補習の時間を一時間設けてやる

う』

Fクラスが悲鳴を上げる。

「さあ、アキ、ウチらもクレープ食べに行きましょ？」

「え？ それは週末のはずじゃ……」

「ダメですよ！ 吉井君は私と映画を見に行くんです！」

「ちょっと待つて！ それは話題にすら上がりていないよー」

「はい。今決めました！」

「いやー！ 僕の食費がー」

その傍から見ればほほえましい光景を見ている蓮に後ろから接近する影が。

「映画か……それもいいわね！」

「待つんだ木下さん。なぜに僕を見ながらそんなことを？」

—そりゃ一緒に……」「

待ってくれ！僕は説教戦争で木下さんには勝った筈だ！

「わい 刀吏はなれ

この労働の結果は関係ない。だが、改善は労働二通りなどビニ

」
「...」
「...」
「...」
「...」

その場でアクリス金剛が思つた。「ああ。一れは復讐だよ。

「そうね……確かに鮎川君はアタシに勝つたから……暇なときの荷

物もちで勘弁してあげるわ」

「それは勘弁したとは言わないよ。」

「さあね？」
じやあ、今度暇なとき」に連絡するから。覚悟しちゃな

さしめ

そんな……」

「ニギヤハ、う尾崎翁公を開始する」

「え? 何?」

「彼三點」の井川（一）

「被告鮎川蓮（このものを甲とする）はAクラス木下優子に対し、
我らが教示に反する行為を行つた可能性がある。

甲はヘルソルジャーに対し、脅迫、およびわいせつ行為をしていた

とじのを目撃

現在に至る

「ええい、御託はいしから縦説を述べたまえ！」

樂しきには詠していた後
元一の経句をしていたのであるや

۱۰۷

「えええ～ちよこ」と待ってる！ 僕は元一郎の約束なんてした覚えはない！

「判決、死刑！」

「ぼ、僕の話を聞いてくれ～」

「に、西村先生、明日からといわば今日やりましちゃう個人でいいですから！」

「思い立つたが仏滅です！」

「吉田だ、バカ。お前がやる気になつたのは嬉しいことだが無理することはない。

「今日だけは存分に遊ぶといい」

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると分かつた上での狼藉だな！

ならば、卒業式、伝説の木下で釘バットを持ってお前を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「さあ、アキ行くわよ」

「吉井君はどの映画が見たいですか？」

「うわあああー僕の食費がー！ 生活費がーー！」

一人の悲痛な叫びがAクラスに木霊した。

ちなみに、襲撃してきたFFF団44名を3分で沈めることとなつた蓮は、

その光景を目撃していたAクラスの面々から恐怖の念を抱かれることになるのだが

これはまた別のお話。

第十四問 その場のノリは結構大切

バカテスト英語

問 「私は何か悪い」とが起きるのを知っている」を和訳しなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『I know that something bad will occur.』

教師のコメント

正解です。君達には簡単でしたかね。

吉井明久の答え

『I don't want to back my sister.』

教師のコメント

君の願望は聞いていません。それにしても、姉や、妹に帰つてきてほしくないとはどういうことだとしましょうか？

坂本雄一の答え

『I know that Shoko come soon.』

教師のコメント

霧島さんがやつてくることが悪いことさせじつうじゆじゅうか？

鮎川蓮のコメント

もう一人の英語が間違つてゐることにはノータッチなんですね……。

Aクラスとの試合戦争が終結して、僕は家路についていた。
だいたい、FFF団つてのはなんなんだうね。あんなに理不尽な
襲撃を受けたのは久しぶりだよ。

「明久君！ これを見ましょー！」

第十四問 その場のノリは結構大切

蓮Side

なんか姫路さん的な声が聞こえる。

「……じゃあ、僕はいいから一人だけで行つて来なよ

明久、食費がピンチなのは分かつてるけど、一人は“君と一緒に”映画を見に来てるんだからその提案は……

「えへ、じゃあアニメにする?」

「いやそういうやなくて……」

覚悟を決める、明久。僕みたいにトラウマのある相手に理不尽な条件突きつけられてないだけまだよ……

「アタシが何時理不尽な条件突きつけたかしら?」
え?

「き、木下さん? まさか僕の心を読んだの?」

「声に出てたわよ」
しまつた。

「で? アタシが何時アンタに理不尽な条件突きつけたのよ

「いや、普通トラウマのある相手からいわれのない荷物もち宣告を受けるのは十分理不尽だとしつけど……」

「ふーん……」

恐い! ちょっと口角が上がっているといひとか正に悪魔だよー

「明久、諦める」

うん? なんか聞きなれた声が。
「男とは、無力だ……」

「男とは、無力だ……」

「雄一?」「…

僕の目の前に、手枷をはめられている雄一と、その手枷から伸びる鎖を握つている霧島さんが現れた。

まるでゴリラとその調教師だ。

「おい明久。今なんか失礼なこと考えなかつたか?」

「き、気のせいだよ」

このゴリラは侮れない。

「で? 雄一は何しに来たの?」

「翔子にデートに連行されてきたんだ……」

「……雄一、何が見たい?」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、地獄の黙示録完全版」

「おい、それ3時間23分もあるぞ!」

「……2回見る」

「一日の授業より長いじゃねえか!」

「……授業の間雄一に合えない分のう・め・あ・わ・せ

「くつ、帰る」

「……今日は、帰さない」

「おい、また翔子それは、あ、ば、ぎやあああああ…」

逃げ出そうとした雄一が霧島さんのスタンガンによつて眠らされた

……

「……学生一枚、二回分」

「はい学生一枚気絶した学生一枚無駄に二回分ですね」

いいの? 気絶した学生はスルーなの?

「仲のいいカップルですね」

「あこがれるよね~」

姫路さん、美波、あのカップルはちょっと違つ氣がする……

「覚悟を決めろ、明久」

僕の後ろからまた聞きなれた声が……

「男とは、搾取されるものだ……」

「蓮、止めてよ！ 今の状況の僕にとどめの一言なんて！」

「いや、明久は別に搾取されてないだろ」

「何処をどう見たらそうなるのさ！ 明らかの僕の財布がピンチじやないか！」

「いや、お前はまだそれなりに自分の意思でここにいるし、なにより前々から約束していたじゃないか！ 僕なんて……ただその場のノリ的な要素でこの悪魔に搾取されようとしているんだぞ！」

「誰が悪魔つて？」

「あ、いやその別に木下さんのことを悪魔つて言つた訳じゃああああああああああ！」

断末魔が響き渡った。

「き、木下さん。どうして蓮と一緒にいるの？」

「ふえ？ い、いやえっと……そろノリよノリ！ 別に一緒に帰ろうとあとをつけたわけじゃ……」

「えつと、後半よく聞こえなかつたんだけど？」

「別に何も言つてないわよ！」

「こ、恐い……」

Aクラスでの蓮の悲劇を田撃してただけあつて恐怖五割増だ。

「木下さんは何の映画を見るんですか？」

「え？ そうね、あんまり考えずにきちゃつたから特に決めてないわ。

せつかくだから姫路さんや、吉井君と同じ映画にしてみしょりか

木下さん。君が同意を求めている相手は既に戦闘不能だよ……

「木下さんさえ良ければ一緒に見ませんか？」

「そうね。大勢で見たほうが楽しいし」

「そう？ それじゃあ一緒に……」

「待つんだ。そもそも僕は映画を見る」とすら承認していない！」

蓮も復活したみたいだ。

「ちょっとアキ、これは約束でしょ？」

「約束は週末だつたはずだろ？」
それにその約束の中に映画なんて

単語は一度も出てきていない！」

エーモンカド

勝手こつれで二つれたんだ!!

「蓮！
今僕を売ろうとしたね！」

「売ろうと何でしていい。僕は事実を言つたまでだ」

ほら。鮎川だつてこりこりてるんだから。行くわよ、アキ。

ほんの食費が!!

「ああ、アタシ達も行くわよ！」

卷之三

卷之三

僕を追いかけるように、二度目の断末魔が響き渡った。

第十五話 フイクションの中の出来事で、リアルでも起じてほしいことは何

バカテスト日本史

問 次の（ ）に正しい年号を入れなさい。

『（ ）年、キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄一の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

鮎川蓮のコメント

『無神論者にどうせはとつもなべどいでもここ』

教師のコメント

君の思想はともかく、テストですので真面目にお願いします。

第十五話 フィクションの中の出来事で、リアルでも起こってほしいことは起こらないくせに現実では起こってほしくないようなことは起つて不思議。

蓮Side

週末。僕は秀吉と買い物に出でいた。

「どうして僕が演劇部の買い物に付き合わされるの？」

「部長殿から頼まれたからかの？」

「どうして？」

「ワシも詳しくは知らんのじゃが“転入してきた男の娘をゲットしないわけには行かない”とか言っておったのを聞いたぞ」

「秀吉。その部長さんの言うことを聞いたやだめだ。なんか取り返しの付かないことになりそうな気がする」

「どうか、そこまで露骨に言われているのこどりこどり秀吉は気づかないんだ？」

「で？ 買い物は終わつたの？」

「いや、最後に駅前で小道具と衣装の下見を……」

「衣装ならさつき買つたし、小道具だつて部室にたくさんあるじゃ
ないか」

一応説明しよう。

僕は今週秀吉に連れられて演劇部の部活見学に行つていたりしたの
である。

「甘い。甘いぞ蓮！」

「何故に怒られる？」

「演劇の小道具や衣装といつものは、それこそ演員の数だけあるも
のなのじや！」

決して似たようなものがあるから、とか、これで代用できるから、
などという理由で

妥協しては人々を感動させる演劇などできぬ。」

なんという情熱……

その情熱を一割でもいいから勉強のまゝに生かせばクラスにはい
ることもなかつたのに。

「そういえばお主、この前姉上とデートしたやうじやな

「デート？ そんなのしてないよ」

「そななの？ 姉上がおぬしと一緒に映画を見たところであつ
たからてつきりデートをしたものじやと……」

「確かに映画は見たけど……」

「なんじや。やっぱりデートしておるではないか！」

「あれを『デート』と呼ぶ人がいたらその人には今すぐ精神科へ行くこ
とをお勧めするよ」

「いや、一緒に映画を見るのは十分に『デート』じゃと思つんじやが……

…

「あればテートじゃない。僕が君の姉から一方的に搾取されただけだ」

「随分な言われようじゃの……何があったのじゃ？」

「中に明久たちがいて、面白そつだから眺めてたら雄一たちも来て、おまけに木下さんが僕の後ろにいて、それでよく理由も分からぬまま無理やり奢らされた」

「後ろに姉上が、のう。今のようにか？」

「そうそう。今みたいに僕の後ろに立つていてええええええええええええ！」

「冗談じゃ」

「冗談かよ！ 本当にビビるからマジで……」

一応辺りを見回して、木下さんの気配がないことを確認していると、前方から土煙が近づいて来るのが見えた。

「秀吉ー。」

「なんじや明久！」

「アキ、来るわよー。」

「くつ、秀吉こっちに来て！ 蓮もー。」

明久たちにつれこまれた茂みの中

「どうこう」とじや明久

「えつと、これには深いわけが……」

「豚野郎

「！！」

「……明久、一つ聞いてもいいかな

「な、なに？」

「どうして僕たちまでこんなやばそつなことに巻き込んだの？」

明久に質問する。もちろん笑顔で。

「れ、蓮？ なんか笑顔が恐いんだけど……」

「大丈夫。納得できるように説明してくれればへし折つたりしないから」

「それってムグウ」

「アキ、 静かにしなさい！」

島田さんに取り押さえられて、 明久には事情を聞けないし、 しうがない。

逃げる準備だけしておこつか。

「尾根い様に家畜のにおいを付けでもしたら火あぶりにしてやります」

……どひょひょひ。 今すぐ逃げ出したい。 逃げないと拙い気がする。

「なにやらよう分からんが、 明久たちは追つ手に追われているということかの？」

「そりなんだよ秀吉」

「なら、 変装するとこひのはどひょじゅるひ？」

「変装？」

「ここに一度演劇部の衣装があるのじゃが、 これを着て変装すれば

「ナイスだよ秀吉ー！」

着替え中……

「秀吉…… これ女物だよ？」

「おかしいのう…… 部員がワシ用にと渡したんじゃが」

「秀吉用のが男物のはずないじゃないか！」

「明久、 その突つ込みはおかしい！ そして何で秀吉まで着替えてるのー！」

「…… それはそれでいい（パシャパシャ）」

ムツツリー二？ 何故ここに。

「……自主トレ」

「心を読まれた」

「あ、明久君……」

「えつと……」

だめだ！姫路さんと島田さんは使えない！

「とつても似合つてます……」

「困っちゃうんだけど~」

「あ、明久そんな大きな声出したらりー。」

「見つけました！」

ほら見つかった！

「美春とお姉さまの愛を冒涜する豚……め？」

よし、敵は戸惑っている。今のうちに脱出を！

「ふ、不潔です！女の格好をすればお姉さまが好きになってくれると思ったら大間違いですー！」

「いや、君が大間違い！」

しまったあ！つい突っ込んでしまった！

「神聖な美春とお姉さまの愛を冒涜する豚共め、許しません！」

豚共？

「いつの間にか僕までターゲットに入ってるー！」

僕と明久の逃走劇が始まった。

「どうしよう~。」

「こうなつたら4方に分かれで逃げましょ~」

「それって、僕が明久に生贊になれってこと?」

「私にいい考えがあります！文月学園に逃げましょ~」

「そうか！学園ならー。」

「試験召喚獣が使えるー。」

「試験召喚獣が使えるー。」

一路学園へ

「いた、竹内先生だ！」

「竹内先生は現国よ！ ウチぜんぜん戦力にならないんだけど」

「今はそんな贅沢言つてられる状況じゃない！」

「竹内先生！ 模擬試召戦争をしたいんですけど」

「はい。承認します」

「「「「試験召喚獣、試験召喚！」」」

召喚フィールドが展開され、僕たちはいつせいに召喚獣を呼び出す。

『現代国語 Fクラス 姫路瑞希&島田美波&吉井明久&鮎川蓮

345点&16点&68点&334点

』

「ひどい！ 美春たちの愛を邪魔する気ですか！」

いや、ひどいのは一緒にいただけで僕まで追い掛け回す君だと思つ。
「試験召喚！」

『現代国語 Dクラス 清水美春

132点』

Dクラスにしては点数が高い。文系、てことか。

「姫路さんと蓮の召喚獣がいれば恐くない！ この勝負もうつた！」

僕と姫路さんの召喚獣が先頭に立つて突撃する。

「「めんなさい！」

姫路さんの召喚獣が大剣を振りかぶる。

「そつは行きません！」

清水さんの召喚獣がジャンプした。

僕と姫路さんの召喚獣を飛び越える。しまった！ 狙いは……

「ウチ？」

島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に倒される。けれど、僕の召喚獣ががら空きの背中に剣を振り下ろし清水さんの召喚獣を消滅させた。

「〇点になつた戦死者は補習四つ——」

何処からともなく現れた西村先生に、清水さんと島田さんが担がれていった。

「補習は嫌」

「美春はお姉さまと一緒に鬼の補習も天国です」

最初からこれが目的で召喚してきたのか……

一人を担いでいた西村先生がふと立ち止まる。

「吉井、目覚めたのか？」

「誤解です！」

「大変だったね……」

「蓮は途中参加だからいいじゃないか。僕は駅前から追いかけられてきたんだよ？」

「まず、僕が追いかけられる理由がなかつた気がするんだけど……」

「まあ、終わったことだし気にしない」

「はあ……まあ、無事に終わつたことだし『無事？』『木下さん？』

「吉井君と姫路さんは外してくれる？ 今から鮎川君に大事な話があるの」

「う、うん。わかつたよ」

吉井君と姫路さんが階段を上がっていく。

「さて、それじゃあ、大事な話をしましようか」

「大事な話つて？」

「さつきね、秀吉と会つたんだけど……」

「ヤバイ……木下さんの背後に鬼が見える。」

「鮎川君には話したわよね？ 秀吉に女装させないよう」って

「いや、今日のは秀吉が演劇の衣装を着ただけというか、不可抗力」というか

「なんでメイド服だつたのよ……」

無事に終わることは出来なかつた。

第十六問 学園祭つて一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね

今日、PV5000突破を確認しました。
こんな駄文に付き合つてくださる方がいることに
感謝の念を禁じえません。

今後も一層精進していく所存ですので
どうか、よろしくお願いします！！

第十六問 学園祭つて一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね

学園祭の出し物を決めるアンケートに「協力ください」。

『あなたが今一番ほしいものはなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師の「メント

成程、お客さんの思い出になるような、そういう出した出し物もいいかもせんね。

写真館なども候補になると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本(訂正) 成人向けの本』

教師の「メント

取り消し線の意味があるのでしうか?

吉井明久の答え

『カロリー』

教師の「メント

IJの回答に君の生命の危機を感じられます。

鮎川蓮の答え

『平穏な日常』

教師の「メント

もつFクラスには慣れましたか？

第十六問 学園祭つて一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

僕が文月学園に転入してから早一ヶ月が経った。
今、文月学園の中は近日に迫った学園祭、「清涼祭」に向けて準備を行っている。

そして、文月学園一の問題児、我らがFクラスはといづと……

「来い、明久！」

「勝負だ吉井！　お前の球なんて場外まで飛ばしてやる！」

「言つたな！　勝負だ、須川君！」

野球をしてるんだよね……。

今、Fクラスの教室にいるのは、僕と秀吉、姫路さんに島田さんの四人だけだ。

当然、清涼祭に向けての話し合ひをするつもりだったんだけど、この四人だけで何かが決まるわけもなく、僕は窓からグラウンドで命知らずな行いをしているクラスメイトを眺めている。

「さあ、ホームルームを始めるぞ！」

教室の扉が開き、西村先生が入ってきた、が、がら空きの教室を見て固まっている。

「他のバカどもは何処だ？」

「グラウンドで野球します」

「何故止めなかつた？」

「止めましたよ。止めて聞くよつならFクラスじゃないでしょ」

「それもそうだ。俺はあのバカどもを引っ張つてくるからお前たちは少し待つておくように」

そういうつて西村先生は教室から出て行つたけど……怒りで声が震えてた。

「な～にをやつとるかバカ共！～」

グラウンドから怒鳴り声が聞こえる。明久、「愁傷様。

「さて、それでは清涼祭での出し物について意見を求める。実行委員の島田、任せた」

帰つて来たはいいけど雄一が完全にやる気なしモードなんだよね。

「ちょっと、ウチだけじゃ無理よ」

「じゃあ、副委員を選出するからそこつと二人でやつてくれ。皆、副委員にふさわしいと思つ奴を推薦してくれ」

『やつぱり坂本がやるべきじゃないか?』

『いや、吉井だろ』

『我らが蓮ちゃんでも……ぎやああああああああ……』

皆口々に意見を述べ始める。最後の人は何度も言つても聞かないから強硬手段に出たけど。

「それなら姫路さんが適任じゃないの?」

「いや、姫路は全員の意見を丁寧に聞いているしぐにタイムオーバーだ」

「どうこ'う」と?..

「要するに、姫路さんは誰かの意見を切り捨てられる人じゃないから、丁寧に話し合ひをしているうちに何も決まらないまま清涼祭が来ちゃうってこと」

ここまで噛み砕いて説明すれば明久でも分かるだろう。

「ここまで噛み砕かないと理解できない明久は本当のバカだな」「なんだとバカ雄一!..」

「落ち着け」

「雄一もいちいち火に油を注がないでほしい。

「と、言つわけだ。島田、さつき上がったやつの中から一人選んで

決選投票をしる。

それで選ばれた奴が副委員だ」

島田さんが黒板に書きは始める。

島田さん個人の気持ちとして、明久は候補に上がるだらうからあと
は須川君あたりを対抗馬にすれば明久が副委員に……

『候補？……吉井

候補？……明久

』

凄い。まさかそう来るとは思つてなかつたよ。

「じゃあこの二人から選んで」

「待つて、美波、その候補の上げ方はおかしい気がする」
明久、気がする、じやなくて本当におかしい。

『うーん、迷うな』

『ここは吉井じゃないか？』

『どちらもクズだからな』

クラスメイトは真剣に悩んでいる。演技だよね？

「こり、君たちも真剣に考へるフリをするな！ それと最後の人！
クラスメイトをクズ呼ばわりする君は人間のクズだ！」

明久、それだと君はクラスメイトと自分の両方からクズのレッテルを
貼られることになるぞ。

「じゃあ、アキに決定ね」

貴女の口論見でしようが！ まあ、島田さんの機嫌がいいと明久の
命の危険が少なくなるからいいか……。

「じゃあ、文化祭の出し物で意見がある人は手を挙げて発表して」

「……（ピッ）」

「じゃあ、土屋」

「……写真館」

ムツツリー、「君の言ひ写真館とは学校の、それも一般人も来る様なところで

展示してもいいようなものなのだろうか……と、言うか危険な香りがふんふんする。

ふと黒板のほうを見ると、書記の明久がムツツリーの意見を板書していた。

『候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」』

明久。僕は今君のネーミングセンスに感動している。ムツツリー＝主催の写真館がどういったものになってしまつか一目で分かるネーミングだ。文化祭には適さないが。文化祭には適さないけど。

大事なことなので一度言わせてもらひた。

「じゃあ、他

「メイド喫茶……は使い古されていると思ひるので、ここは斬新にウエディング喫茶を提案する」

クラスメイトの一人が提案する。なんか下心があるような気がするけれど、斬新さていう面では悪くない意見だと思ひ。「ウエディング喫茶ってどうこうの？」別にやることは普通の喫茶店と変わらないんだが、ウエディングドレスを着て接客するんだ

「明久が？」

「蓮！ どうしてそこで僕の名前が出てくるの！ 着るのはもちろんかわいい姫路さんと秀吉に決まってるじゃないか！」

「アキ？ どうしてうちが入ってないのよっ！」

「蓮！ どうしてそこで僕の名前が出てくるの！ 着るのはもちろんかわいい姫路さんと秀吉に決まってるじゃないか！」

「アキ？ どうしてうちが入ってないのよっ！」

また明久が自爆した。明久だってそれなりにかわいい顔してるんだから似合つと思うけど、

だめだ。明久に着せると僕まで着せられてしまいそうな気がする。

ウエディング喫茶は回避せねば。

『斬新でよさそうだ』

『女子も喜びそうだな』

『でもウエディングドレスつて動きづらいか?』

『それに男は嫌がらないか? 人生の墓場つて言つくらいだしな』

また皆が好き勝手言つてる。眞面目に議論してくれるだけよしとしよつ。

『候補? ウエディング喫茶「人生の墓場」』

明久は眞面目に書いてるよね? ウエディングと結びつかないような単語が入ってるけど。

「じゃあ、須川」

「中華喫茶を提案する」

今度は須川君だ。

「中華喫茶つて、チャイナドレスでも着るの?」

「いや、俺の言つてる中華喫茶はそんなイロモノ的なものじゃない。い。

本格的なウーロン茶と軽い飲茶を出す店だ。

そもそも食の起源は中国にあるという言葉があることからも分かるように、こと『食べる』

という文化に対しても中華ほど奥が深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による

中華料理の淘汰が世間では見られるが本来食といつものは

「

どうしたんだ？あの須川君が熱く語りだした！

言つてることは半分くらいしか分からぬけどとにかく何かしらの信念があることは良く云つたよ。

『候補？……中華喫茶「ヨーロピアン」』

明久は本当は天才なんぢやないだろ？

「皆、清涼祭の出し物は決まつたか？」

ドアから西村先生が入ってきた。西村先生は僕たちを顔を一度見たあと、

島田さんに声を掛けた。

「今のところ黒板に書いてある3つの案が出ています」

西村先生は黒板に目線を移す。当然ながらその黒板には明久の天才的ネーミングセンスの結晶が書かれているわけで

『写真館「秘密の覗き部屋」

ウエディング喫茶「人生の墓場」

中華喫茶「ヨーロピアン」』

「補習の時間を倍にしたほうがいいかも知れんな……」

補習が倍？今が毎日2時間だから4時間？帰るのが8時近くになるじゃないか。

別に僕が遅くて困るような家族はないからいいけど、Fクラスの面々は

補習が増えることを必死で回避しようとする。

「違います、これは吉井が書いたんです」

「バカなのは吉井であつて決して僕たちがバカなわけではありません

ん！』

皆が明久を売る。

ど「うして」のクラスは「いつ」時だけ変な団結力を發揮するんだろう
う……

『見苦しい言い訳をするな！』

おおー、西村先生が明久をかばったよ。やつぱりこの人も教師なんだな。

「先生はバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行為だといつてる
んだ」

こんな人が教師でいいのか！

「まつたくお前たちは……少しは眞面目にやつたらどうだ？

稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか思わないのか？」

Fクラスが色めき立つ。その発想はなかつたけど、この学校でそれは認められるんだろうか？

『西村先生、そんなことしていいんですか？』

「ああ。本来は認められないことだが、今のFクラスの設備はあまりにもひどい。

学力によって差をつけるのがこの学校の教育方針だからといってその所為で体を壊しては

本末転倒！ 今回は俺が特別に学園長に掛け合つてやる

うーん……あのばあさんが一教師の言つことを聞くとは思えないん
だけど……

『出し物どうする？ 利潤の多い喫茶店がいいんじゃないかな？』

『けど初期投資の多い写真館のほうが』

『いや、写真館は文化祭に出せないようなものになるに決まってる

でしょ』

『中華喫茶なら外れはないだろ』

『それだと目新しさに欠けるな。ただでさえ旧校舎は汚いせいで人が来ないんだ。』

特徴のなさは致命的じゃないか?』

『ウエディング喫茶はどうだ?』

『初期投資が大きすぎる。たった一日間の清涼祭じゃ儲けは出ないだろ』

『リスクが大きいからこそリターンも大きいはずだ』

『いや、そもそもうちのクラスは女子が少ない。ウエディング喫茶だと

ドレスの着て接客する人数が少なくて人手不足は避けられない』

西村先生の言葉で一気に活気付いたFクラス。

さまざまな意見が飛び交っている。それに何よりちゃんと議論になつてていることが意外だ。

『はいはい。ちょっと皆静かにして』

島田さんが皆を制止するがお構いなしに議論は続く。

『お化け屋敷とかの方が受けけると思う』

『簡単なカジノを作ろ!』

『焼きトウモロコシを売ろ!』

島田さんが呆れ顔になっている。やっぱり雄一がいないとこのクラスはまとまりに欠けるよ。

『もう一つ！とにかく静かにして。決まりそつにないから店はさつき上がった候補の中から選ぶからね！』

島田さんの一喝でようやくクラスが静かになった。

が、島田さんの発言を聞いて今度はブーリングが飛び交っている。

「ほりー、ブーブー言わないの。」の三つの中から一つだけ選んで手を上げること。

いいわね

有無を言わさない島田さん。彼女は意外と人をまとめる才能があるのかも知れない。

「じゃあ、『写真館』

手は余りあがらない。ムツツリーの『写真館』が文化祭では危険なものになると皆良く理解しているようだ。

「次はウエディング喫茶」

これは阻止しなければ。僕や明久、秀吉は確実に着せられてしまつ！

「最後に中華喫茶」

僕はここに手を上げる。

ところがここしかもともな利益を上げらえらうつな案がない。

島田さんが上がった手の数を数えている。結果、

「Fクラスの出し物は中華喫茶に決定します！ 全員、協力するよう！」

良かつた。ウエディング喫茶は回避できたようだ。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けれるよ

そういうて須川君が立ち上がる。わざも熱く語っていたし、中華にはこのクラス一

精通しているだろう。

「……（スクツ）」

それと、ムツツリーも立ち上がった。さうと自分も厨房を引取る
ける、いつ意思表示だらうけど、

「「ムツツリー、料理なんて出来るの？」」

僕と明久の声が重なる。

「……紳士の嗜み」

意外と立派な理由だ。てっきりチャイナ服目当てで中華料理屋に通
つていろいろうちに

見よう見まねで覚えた、とかそんな理由だと思つていた。

「まずは厨房班とホール半に分かれてもらうわね。厨房班は須川と
土屋のところに。」

ホール班はアキのところに行つて頂戴」

いつの間にか明久がホール班筆頭に立たされてゐるけどいいのかな。
そして、僕は厨房班に並んだけど、同じ列に姫路さんがいる！

「それじゃあ私は厨房班に

「だめだよ姫路さん。君はホール班じゃないと！」

姫路さんを厨房に入れると、学園祭で使者が出かねない。

『明久よくやつた』

『明久グッジョブじゃ』

『……（口ク口ク）』

僕、秀吉、ムツツリーは冷や汗をかきながら明久のファインプレー
にアイコンタクトをする。

「どうして私はホール班じゃないといけないんですか？」

「それは姫路さんが厨房に立つと死ノムグウ！」

「ほら！ 姫路さんはかわいいからホールでお姫さんと接したほう
が店として利益が痛あ！」

いや、危なかつた。危うく姫路さんに本当のことを伝えてしまつと
ころだつた。

「か、かわいいなんて……吉井君がそういうならホールでも（・・）

頑張りますね

「いや、ただでさえ女子が少ないんだからホールは専任のほうが効率がいい。

姫路さんはホール専門で動いてくれないかな?」

「は、はい。そういうことなら」

これで危機は去った!

「「じゃあ、僕は厨房にしようかな(かの)」」

「だめだよ! 蓮も秀吉もそんなにかわいいんだからもちろんホールに決まってみぎや!」

み、美波様、折れます! 腰の骨が! 命に係わる大事な骨があ!」

「……うちもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

明久が死に掛けている中。僕たちFクラスの人並みの学校生活をかけた

学園祭の出し物は中華喫茶に決まった。

第十七問 人間は些細なことでも勘違いするつて言つけど、その勘違いが命の危機

バカテスト 世界史

問 エジプト第18王朝のファラオで、多神教を廃し、世界初の一神教を始めるなどの『アマルナ改革』で有名な人物を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『アメンホテプ4世』

教師のコメント

正解です。彼が崇拜した唯一神のアトンから、『イクナートン』とも呼ばれます。

吉井明久の答え

『イエス・キリスト』

教師のコメント

違います。キリスト教も一神教ですが、エジプト宗教よりもかなり後のです。

鮎川蓮の答え

『ルイ18世』

教師のコメント

そんな人物はいませんし、そもそもエジプトの人物ではありません。

島田美波の答え

『ハイデルベルク』

教師のコメント

古い人物を答えるべきいいというものではありますんし、

『ハイデルベルク人』は原人です。

第十七問 人は些細なことで勘違いするって言うけど、その勘違いが命の危機をもたらすこともあると覚えておいてほしい……

「アキ、ちょっといい?」

帰りのHRも終わって、明久と帰りうとしていたら島田さんに呼び止められた。

「ん、何か用?」

「用つて言つか、相談なんだけど」

島田さんのことだから学園祭に関することだろう。

「相談? 僕でよければ聞かせてもらひけど」

「うん。ありがと。アキが言うのが一番だと思うんだけど
その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな?」「
確か雄一がいればFクラスもまとまるし、中華喫茶もいい方向に持
つて行つてくれるだろ?」

島田さん本人が無理に言つより、仲が良い明久が行つたほうがいい
と考えるあたり、

島田さんも賢明な人だと思つ。

「うーん。それは難しいかな。雄一は興味のないことには徹底的に
無関心だし」

「それは僕も思つ。前の試召戦争は雄一自身がやりたいと思つてた
からあそこまで

皆を先導して突つ走つたけど、興味のないこととか普段の生活では
ろくな事してないからね」

この一月、明久たちと関わつて分かつたことだ。ちなみに、僕は試
召戦争でのことも

関係あるのか、明久たちと仲が良い。明久の家には良く遊びに行つ
てる。

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね?」
何故島田さんはそんなに確信を持つているんだろう。
明久を期待をこめたまなざしで見ているし。

「え？ 別に僕が頼んだからといってアイツの返事は変わらないと思つけど」

「ううん。そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって」

「確かに良くなっているけど、だからといって別に

「だってあなたたち愛し合つているんでしょう？」

どうしてそうなった！ 島田さんに何があつたんだ！

僕が見る限り明久にも雄二にもBで「な趣味はないはずだ。というか、雄二は霧島さんって言つ彼女がいるんだから明久と、何てことある訳ない。

「もう僕お婿にいけない！」

明久はなんか想像してしまったのか絶望しているし。

「何で雄二なんかと！ だったら僕は断然秀吉や蓮のほうがいいよ！」

「……あ、明久？」

偶然近くにいた秀吉が立ち止まる。さつきの明久の発言を聞いていたんだろう。

何処から聞いていたかは分からないけど、もし明久のさつきの台詞しか聞いていなかつたら、絶対勘違いする。

「そ、その、おぬしの気持ちは嬉しいのじゃが、お主とワシの間には色々と障害があると思うのじゃ……その、年の差とか

だめだ！ 秀吉が壊れている！ 早く何とかしないと……

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ さっきのはただの言葉のアヤで！」

それと、僕たちの間にある障害は決して年の差じゃないと思う！」

「強いて言うなら性別の差だよね……あれ？ それじゃあ僕が上がつたのは何故？」

明久まで僕のこと女の子としてみてるわけじゃないよね。もしそうならちよつと、お、は、な、し、しないと。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと?」

「う、うん。そういうことになるかな」

明久だけじゃなく、秀吉まで頭を振っている。

「何とかできないの?」このままだと、喫茶店が失敗に終わるような……」

今回の清涼祭はFクラスにとつてチャンスもある。利益を上げて設備を買いつぶしが出来れば体の弱い人、主に姫路さんの負担も軽くなる。

出来れば成功させたい。

「ところで、おぬしらは何の話をしておるのじゃ? そこまで思いつめた顔をするところを見ると、深刻な話のようじやが」

まだちょっと顔が赤い秀吉。

「深刻つて程の話じゃないよ」

「うん。ちょっと清涼祭の喫茶店の経営やクラスの設備の話で

「ちがうわ。アキ、鮎川。本当に深刻な話なのよ……」

「え? どういうこと?」

島田さんの台詞はなんか妙に現実味を帯びている。

何か、僕たちにとつて良くない問題が起こっているのか……

「本人には誰にもいわないでほしうつて言われてたんだけど……事情が事情だし……」

いい? これから話すことは絶対誰にも言っちゃだめだからね?」

「う、うん。わかった」

「真剣な話みたいだしね。他言はしないよ」

「実は、瑞希なんだけどね

なるほど。大体分かつた。

「姫路さんがどうかしたの?」

「あの子、転校するかもしないの」

「ほえ？」

明久が首をかしげる。なんか頭から湯気が出でるし、目が虚ろだ。

「いかん！ 明久が処理落ちしておるぞ！」

「もうつ！ 本当に不測の事態に弱いんだからー。」

「落ち着くんだ。まずは頭をはずして熱を逃がさないと！』

「『アンタ（お主）が一番落ち着きなさいよ（落ち着くのじや）』」「僕、なんかおかしいこと言つたつけ？ 機械が熱を持つたらまず熱を逃がさないと……」

「明久、目を覚ますのじや」

明久の肩を持つて揺らす秀吉。そうか！ 明久は人間だから頭が外れる訳ないよね。

「秀吉……モヒカンになつた僕でも好きでいてくれるかい？」

明久から異次元の反応が返ってきた。

「……どういう処理をしたら瑞希の転校からこんな反応が返つてくれるのかしら」

「ある意味稀有な才能かも知れんのう……」

「確かにこのレベルのバカは世界中探してもなかなかいないよね……」

…

「美波！ 姫路さんが転校つて、どういうことやー。」

明久が復活した。急に島田さんを問い合わせるから、島田さん顔が赤いよ。

「ど、どうもこうも、そのままの意味。」のままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの

「このままだと……？」

多分姫路さんはまだ、転校を勧められている段階だと思つ。

原因は多分Fクラスの環境、といったところか。

「島田よ、姫路の転校とさつきの話がぜんぜん繋がらんのじゃが」「そうでもないでしょ。姫路さんが転校する、多分まだ転校を勧められている段階だと思つけどその理由は『Fクラスの環境』なんだから」

「鮎川のこつとおつよ」

「つてことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「純粹に設備の問題になるわ」

「いや、それだけじゃない」

島田さんだけじゃなく、明久と秀吉まで首をかしげている。

「それだけじゃないってどういふこと?」

「姫路さんの両親が転校を勧めている理由は一つじゃない」「だから、それはなんなのよ」

「一つはさつきまで島田さんが言つた『Fクラスの環境』。振り分け試験で体調を崩す娘が最悪の設備で暮らしている。普通の親なら心配する」

「じゃあ、他には?」

「一つ目は『教室自体』」

「教室そのものが問題、ということかのう?」

「そう。老朽化して汚れている教室。隙間風も入るし、衛生的とはいえない」「なるほど」

「最後に『競争相手の不在』」

「競争相手?」

「そう。Fクラスは最低クラスだから、当然姫路さんのクラスメイトはレベルが低い。」

勉強だけじゃなく、何事においても人は競争相手がいてこそ自分を高めることができる生き物なんだ。競争相手不在のこの状況は姫路

さんの成績に悪影響を及ぼしかねない」

「え？ でも、姫路さんの成績は……」

「実際にはFクラスに来てから姫路さんの成績は上がってるけど、

それはFクラスの

影響だと姫路さんの両親は認めてない可能性がある」

「蓮。解決方法はないの？」

「一つ目はともかく、二つ目と三つ目は難しいの……」

「いや、それでもない」

「そうなの？」

「うん。三つ目の『レベルの低いクラスメイト』は島田さんがもう手を打つているでしょ」

「あ、召喚大会……」

「そう。そこで優勝できれば、Fクラスでも上位クラスと渡り合えるクラスメイトがいる、

という証明になる。それと、二つ目の『老朽化した教室』だけど、これは学園長に頼むしかない」

「それって難しくない？」

「いや、ここは教育機関だ。いくら教育方針で設備に差をつけるといつても、

勉学に支障をきたすならば改善する義務があるはず。ていうのが僕の考え方なんだけど、

やっぱり僕だけじゃ一つ目のクリアは難しい

「結局は雄二を連れてこないといけないってことだね」

「そういうこと」

「アキ……瑞希が転校とか、嫌だよね？」

島田さんが聞くけど、なんか他意があるような聞き方だ。

「もちろん嫌に決まってる！ それが美波や秀吉であっても…」

「アキ……」

「明久？ それって僕は転校してもいいってことかな？」

「そ、そういう意味じゃないよ。蓮だつてせつかく友達になれたんだから転校なんていやだ！」

やつぱり明久らしい。ソレソレがもてる理由なんだろ？

「そういうことならなんとしてでも雄二を焚きつけやるさー。」

「ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙つておれん！」

「なら、まずは雄二に連絡を取らないとね」

明久が携帯電話を取り出して電話をかける。

「あ、雄二？　え、ちょっと雄二？」

「どうしたんじゃ明久？」

「なんか『見つかっちゃった』とか、『かばんを頼む』とか言つてた」

霧島さんだね……

「ちょっと美波！　そんな使えないな、見たいな目で見ないで！」

「でもこれじゃ、坂本と連絡を取るのは難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「明久、どう見てもチャンスには見えないんだけど」

「雄二を喫茶店に引っ張り出すにはちょうどいい状況なんだよ。三

人とも、協力してくれる？」

「それは別にいいけど、どうするの？」

「人の考えを読めるのは雄二だけじゃな」

「何か考えがあるようじやの」

「まあね」

「それなら僕も協力するけど、どうしたらいい？」

僕らに作戦を伝えた後、明久はどこかへと去つて行った。

「さてと、この後は明久から電話があるまで待機、でよかつたよね

？

「うむ」

「といつても、何かするのは木下だけだけどね」

今回の作戦は、簡単に言えば雄一を脅すものだ。その為に電話口で秀吉が霧島さんの

声真似をすることになつてゐる。

待機すること十数分。秀吉が持つてゐる携帯電話に着信が入つた。

「……雄一、今何処？」

やつぱり秀吉の声帶模写は完璧だ。面と向かつて言われても気づかないくらいだし。

「人違いです」

すごい勢いで電話が切られた。

雄二に殺されかけてる明久が目に浮かぶ。

「秀吉、島田さん、ちょっと明久が危なそうだから迎えに行つてくれるよ」

明久は確かに体育館に向かつたはずだ。

体育館に向かつてると、一階の空き教室から明久と雄一の気配がした。

「明久、生きてる？」

「ああ、今から明久を殺そうとしていたところだが……

お前も一枚噛んでたのか？」

雄一が鋭い目つきで僕に問いかけてくる。一目で怒つてると分かる。

「雄一、僕がそんなことに……協力しないわけないじゃないか！」

僕個人的には雄一は早く観念して霧島さんと結ばれるべきだと思つ。

「そつか、なら……お前からだあ！」

雄一が殴りかかつてくる。

「甘いよ、雄一！」

雄一の右手を取り、そのまま腰をひねって投げ飛ばす。
雄一が窓際まで吹っ飛び、窓ガラスが大きな音を立ててゆれた。

「ここに誰かいるの？」

空き教室のドアを開けて入ってきたのは我が天敵、木下さんだ。
僕は最近何故か良く木下さんに会うし、絡まれるし心臓に悪い。

「吉井君に坂本君……鮎川君までどうしてここにいるのかな？」

ものすごい笑顔で木下さんが聞いてきた。

何故彼女はこんなに怒っているんだろう。

「れ、蓮！ 賴まれた物は渡したから僕は行くね！」

「ああ。蓮また後でな！」

そういう残してすごい勢いで去つていった明久&雄一。

ものすごく嫌な予感を感じるのは気のせいじゃない。

「『頼まれたもの』？ 鮎川君は何を頼んだのかしら？」

「まず、なぜ木下さんが明久と雄一を追いかけていたのか聞かせて
もらえませんでしょうか？」

「あの二人が女子更衣室に忍び込んでいたんだけど、まさか鮎川君
も一枚噛んでたなんてね……」

「き、木下さん！ 僕はあの二人から何も貰つてないし、そもそも
あの二人が

女子更衣室にいたことすら知らなかつたんですけど？」

「こんな状況でそんな言い訳が通じると思うの？」

ハハッ……今日が僕の命日のようだ。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。

清涼祭アンケート

『喫茶店を経営する場合、どのような服装をするのが良いでしょうか』

姫路瑞希の答え

『可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかかりませんし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいの物を用意し、裏には口巻を入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書かなくても。

鮎川蓮の答え

『迷彩服』

教師のコメント

君は喫茶店で何をするつもりなんですか？

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。

明久＆雄一に売られ、十数分。僕はこままだに木下さんのサブミッション
ヨン地獄にいた。

「ちよ、や、木下さん、し、死ぬ、それ以上やつたら死んでしまう
うううう」

もう限界に近い。早く脱出しなくては命が危ない。

「じゃあ、許してほしいんだ？」

許してもらわないといけないようなことをした覚えはないけど、こ
こは素直に相手に合わせたほうがいい。

「は、はい」

「じゃあ……」

あ、マズイ。この間はマズイ気がする。

そう、何か交換条件を言い渡されるような……

「じゃあ、アタシのこと、名前で呼んで。アタシも蓮つて呼ぶから
「な、なんでえええええ！」

全部言つ前に関節に痛みが！

「何？ 秀吉は名前で呼んでるくせに、アタシのことは名前で呼ん
でくれないの？」

まず、何処にも名前で呼ぶ要素が見当たりません！

「で、でも……女の子を名前で呼ぶのには抵抗があるところが、な
んといつか」

「べ、別に何か特別な意味があるわけじゃないわよ……」

そ、それに、アタシだって結構恥ずかしいんだから……」

木下さんが赤面しながら僕の腕を極めている！

「わ、分かつた！ 分かつたからもう放して！」

よつやく僕の腕が苦痛から開放される。

僕が腕の痛みから立ち直ると、空き教室に僕と木下さんの二人が向かい合って座っているという、少々奇妙といつか、氣恥ずかしい空気がする空間が出来上がっていた。

「じゃ、じゃあ、アタシのこと、これから名前で呼ぶこといいわね。れ、蓮？」

「分かつたよ…… ゆ、優子」

言つたはいいけど絶対顔赤いよ僕！

木下さんも顔赤くて変な雰囲気になつてゐるし。

「じゃ、じゃあ僕はクラスの展示物の打ち合わせがあるから。じゃあね木…… 優子」

「うん。じゃあね蓮」

木下さんもとい優子と別れ僕はFクラスに向かつた。

もちろん明久と雄一にはO H A N A S H Iしないこと。

Fクラス

僕がFクラスに着くと、雄一&明久は島田さん、秀吉と一緒に話しあんでいた。

「……雄一、見つけた」

雄一の死角から気配を消して霧島さんの声で話しかける。

雄一は話しかけられた瞬間にビクウツ！ と大きく反応して、ギギギッとき、

壊れた機械みたいにゆづくりとこちらに顔を向けた。

「な、何だ蓮か。脅かさないでくれ……」

「とりあえず僕に何か言つことは？」

「あ、ああ。せつときは生贊にして悪かつた」

「まわる」

我ながら甘いと思う。さつきの優子とのやり取りでちよつと気分が浮かれてるのかな?

「明久」

「ちょ、僕は雄一がいるところにいただけで元はといえば雄一の責任なんだからね？」

「アキ？」
アンタウチ達が瑞希の心配

たんだあ

「み、美波様、雄二を捕まるために仕方なくやつたんです！」

ああああ！
—

明久への復讐完了。島田さんのことだから生かさず殺さずで仕上げてくれるだろう。

「しかし、蓮の声真似は見事じゃったのう」秀吉が声を掛けてくる。

「うん。人の真似をするのは得意だからね

「どうじや？ 演劇をする気はないかの？」

演劇も楽しそうだとは思うけど、部長さんがね

「お、前も言つたが、学校を周りで覗ねるまでまだ遠慮して置くよ」

実際は生活費を稼ぐためにバイトしないといけないからだつたりす

る。

「で？ 雄一は協力してくれるの？」

「ああ。さつきまで島田から状況の説明を受けていた。

明久が大好き（・・・）な（・）姫路の（・）ため（・・・）、でもあるしな。協力してやろう」

明久は雄一の協力を取り付けられたらしい。これで中華喫茶はなんとか成功するだろう。

「で、坂本？ どうするの？」

「姫路の転校か……それだと設備だけでは不十分だな」

「そ、それ蓮も言つてたよ……」

明久が口を挟んでくるけど、まだ島田さんから受けたダメージが回復してないみたいだ。

さすがに可哀想だからこれでさつきのことは水に流してあげよう。

「さて、本題に戻るが、俺が言つたことを蓮も言つてたってことは、お前らは今の状況を理解していると思って話を進めるぞ」

「うん。それで、教室の設備のために中華喫茶を成功させたいんだ」

「ああ。だが、それだけでは不十分だ。レベルの低いクラスメイト、については

姫路と島田が召喚大会でいい結果を残せば何とかなる

「問題は教室の修繕、だよね？」

「そうだ。こればっかりは学園長に直接掛け合つてみるしかない」

「じゃあ、ウチも行くわ」

「いや、姫路の事情を知っている島田が学園長室へ行つたら俺たちに事情を話したと思われるからな。お前は残つてくれ

僕たちは一路学園長室へ。

「ちょっと待つて」

「蓮、どうしたの？」

学園長室から人の声が聞こえてきた。

『……賞品……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランデパークに……』

二人が言い争っているようだ。

「どうした？」

「いや、学園長室の中から言い争ひやうな声が……」

「なら、学園長はいるんだね」

「ああ。目的が中にいるんだ。さっさと入るぞ」

明久と雄一がさつせと中に入つてしまつた。

「失礼しまーす」

「ちょ、明久つ」

「お主ら……」

僕と秀吉の制止も何処吹く風と、明久と雄一はすかずかと入り込む。

「本当に失礼なガキだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

部屋においてある立派な机に座つていたのは長い白髪に皺の刻まれた顔を持つ

文月学園の学園長、藤堂カヲルだった。

試験召喚システムの開発者でもあり、システムの軍事転用に反対している人物である。

「やれやれ、取り込み中だといつのにとんだ来客ですね。これでは話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか？」

学園長と言い争っていたのは教頭の竹原先生のようだ。

鋭い目つきのクールな態度で一部の生徒からは人気らしいけど僕はあまり好きじゃない。

「やれやれ、取り込み中だといつのにとんだ来客ですね。これでは

話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか?」「

「バカを言わないでくれ。何でアタシがそんなせこい手を使わないといけないのさ。」

負い目があるわけでもないのに

「どうでしょうか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あなたの見当違ひだよ!」

「…………そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそういうことにしておきましょう」「

明らかに教育現場に似つかわしくない会話を終えた教頭が学園長室を出て行く。

最後に教頭が一瞬目を向けた場所を見てなにか引っかかる感覚を感じたけど。

「んで、ガキ共、用件はなんだい?」

「今日は学園長にお話しがあってきました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学校の経営に関することなら教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会のルールってもんだよ。覚えておきな」

「失礼しました。俺は2年Fクラス代表の坂本雄一」

「僕は同じクラスの鮎川蓮です」

「同じくFクラスの木下秀吉じゃ」

「そしてこちらの二人が……2年を代表するバカと、学園を代表するムツツリです」

雄一が、明久とムツツリをちょっと失礼な方法で紹介する。

「そりゃかい。あんたらが吉井に土屋かい」

「ちょっと待つて学園長! 僕らは一度も名乗つてませんよね」

「……心外」

「気が変わったよ。話を聞いてやる「ひじやないかい」

「Fクラスの設備の改善を要求しこにきました」

「そりゃい。それは暇そうで羨ましいね」

「今のFクラスの現状は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるようなひどい状況です」「雄一のメシキがはがれはじめた」

「学園長のように戦国時代から生きているような老いぼれならともかく、現代の学生には

この状況は危険です。健康に害を及ぼす可能性が高いと思われます」「雄一の言動がだんだん通常時に近づいてくる。

「要するに、隙間風が吹き込むような教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるからさつさと直せ、クソババアといつことですか」「雄一が大変なしつムグウ！」

秀吉が謝ろうとしているのを僕が抑える。交渉の途中で相手に謝るのは愚の骨頂だ。

学園長のほつはなにやら考え込んでいるようだ。

「ふむ……一度言いタイミングさね」

「あの、学園長？」

なにやらつぶやいた学園長に、明久が声を掛けた。

「よしよし。あんたらの言いたいことは良くわかったぞな」

「じゃあ、直してもうれるんですねー」

明久が自分たちの要求が通ったと思いつき声を上げる。

「却下だね」

「雄一。このババアをコンクリに詰めて海に捨ててこよつ」

「こには僕も参加しておこつか。」

「明久、それじゃあ証拠が残る。この学園には焼却炉があるんだからそこに突っ込んで燃やしたほうがいいよ」

「お前ら、失礼だぞ！…」

「雄一が言えたことではないのじや」

「まったく、このバカ共が失礼しました。ともかく理由を聞かせてもらえますか？ババア」

「そうですね。教えてくださいババア」

「あんたちは本当に教えてほしいと思ってるのかね！」

学園長の怒りも、それなりにモツとも思う。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針さね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、このなまっちゃういガキ共」

「でも、それじゃ体の弱い生徒が……」

「と、いつもなら言つているんだけどね、かわいい生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら、相談に乗つてやるうじやないか」

学園長はクロ確定だ。教頭がらみで何かしらの問題を抱えているのは確かだ。

となりで雄一も黙り込んでいる。

「その条件つてなんですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知つてるね？」

「ええ。俺と明久で出ようと思つてました」

それは初耳だ。

「じゃ、その優勝賞品は知つてるかい？」

確かに、トロフィーと「白金の腕輪」。副賞に如月グランドパークのプレミアムペアチケット
だつたと思う。
「優勝賞品がどうかしたんですか？」

結局、学園長が僕らに出した条件は優勝賞品の如月グランドパークのプレミアムペアチケットの回収だった。

「間違つても優勝者から強奪、何をするんじやないよ！ 譲つてもらうのもだめさね。

あたしはアンタ等に召喚大会で優勝しろ、と言つてゐんだからね」

「分かりました。雄一、ペア分けはどうする？」

「俺と明久、蓮と秀吉でいいだろ」

「雄一は前回の召喚大会で一回も召喚してないから当然と言えば当然だ。

「あ、言い忘れてたけど鮎川は出場するんじゃないよー。」

「「どうしてですか？」」

僕と明久の声が重なる。

「アンタの召喚獣は刺激が強すぎるからだよ。

さきのAクラス戦でもアンタ、相手の召喚獣の頭を吹飛ばしたらしいじゃないかい。

スponサーも見に来る召喚大会でそんな戦いは見せられないさね」「うん……もつともだ。召喚獣はデフォルメされてはいるけど人間の形をしている。

その頭が消し飛ぶなんてあまり見せられる光景じゃない。

「なら、蓮が戦い方を自重すればいいんだなババア？」

「……ま、まあそれならいいさね」

さつきの眩きといい僕を出場させたがらないこととこい怪しそう。

「よし、それならさつき直つたよウナペアで出るぞ」

「宜しく頼むぞ、蓮」

「うん。こちらこそ」

「用は済んださね？」

「いや、一つ頼みたいことがある」

「……なんさね？」

「「」の召喚大会は一回戦数学、一回戦英語……といったように勝ち進むことに教科を変えてやつしていくと聞いていた」

「それがどうかしたさね？」

「組み合わせが決まつたらその教科の指定を俺たちにやらせてほしい」

い

「ふむ。点数の水増しひとがだつたら一蹴していただけどそれくらいならいいさね」

学園長の発言で雄一の目が細くなる。

多分僕と同じことを考えていると思つ。

「ここまでしてやるんだ。当然優勝できるんだううね？」

「当たり前だ。俺たちを誰だと思ってる」

「絶対に優勝して見せます。そつちに約束を忘れないことうう」

「明久たちには負けぬのじや」

「僕がいることを忘れないでよね？」

全員やる気はある。問題なく勝ち進めるだろう。

「それじゃ、坊主共任せたよ！」

こつして僕たちの召喚大会出場が決まった。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。（後書き）

そろそろ、ストックがなくなってきたので毎日、もしくはそれに近い間隔の更新が出来ない可能性が出てきました。

もちろん出来るだけ毎日更新していくますが、更新できない日が出てきたときは暖かい日で見守つていただけ幸いです。

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ついひとかき ハイハイハゼ駆かぬに内輪もぬ。

更新が遅くなると宣言した途端に2日あにしてしまいました。
すみません。

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとかッコイイけど要するに内輪もむ。

バカテスト 現代社会

問『PKOとは何か説明しなさい』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『Peace Keeping Operation（平和維持活動）の略。

国連の勧告を元に、加盟各国で行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですがUnited Nations Peacekeeping Operationとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしちゃう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tuki Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

鮎川蓮のコメント

どうして中途半端に古い人ばかりなんだ？

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていつとカツコイイけど要するに
内輪もめ。

学園長との交渉を終え、雄一たちが帰った後僕は学園長と話をしていた。

「学園長は何を隠しているんですか？」

まず以下の問題はこれだ。この学園長がペアチケットに企業の陰謀が係わっている程度の問題で僕たちに協力を取り付けるはずがない。

「何の話さね？ あたしは何も隠していないさね」

「ならどうして僕の出場を嫌がつたんですか？」

「別に、アンタの戦い方が外部の人間に見せるに多少適さないだけさね」

やつぱり何か隠している。

僕は紙とペンを取り出し文字を書いてから学園長に見せる。

『この部屋は盗聴されているのでここからは筆談で用件を話します』

『何時気づいたんだい？』

『教頭がこの部屋から出て行くときに植木鉢の付近を見ていました。雄一とあなたが話しているときこちよつと調べてみたら盗聴の気配がありました』

『まったく……あんたは本当に化け物さね』

『そんな化け物を入学させたのはあなたですよ……関係ない話はおいておきましょう。』

『何故“低得点者”に優勝してほしいんですか？』

『雄一、明久、秀吉の三人と僕の決定的な違いは点数。』

『雄一はちょっと予測できないけれど、明久と秀吉は総合1000点行くか行かないかだ。』

それに対して僕は4000点を超えている。

『本当に頭が回るね』

『そりやどうも。まあ、本当の目的は僕が事前に聞くと影響があるかもしだせんから

良いとして……僕が決勝に進んだ場合は使う科目以外を〇点にすれば問題ないですね?』

『……そこまで気づいているなら何故止めないんだい?』

『雄一はもう気づいていますよ。それに……あなたは一応恩人ですから』

『……それで良いわね。くれぐれも他言は無用だよ』

『了解……あと、盗聴器はそのままにしておきましょ』

『何故さね?』

『盗聴器が外されれば教頭は自らの企みがばれたと思い、何かしらの行動を起こすでしょう。その行動がFクラスのメンバーを危険に曝すことになるかもしれません』

『……分かった。盗聴器はそのままにしておくよ。用が済んだら怪しまれないうちに早く出て行くさね』

『分かりましたよ。じゃあ、召喚大会は期待していくください』

僕はそう書き残して部屋を出て行く。

清涼祭初日。僕らの中華喫茶も雄一の指揮の下かなりまともなものになつた。

店内の装飾もそれなりのものになり、あのFクラスの設備で作ったとは考えられない出来になつている。

「このテーブルなんて本物と見分けがつかないよ」
並べられたテーブルはFクラスのみかん箱を並べて、
何処からか持ってきたテーブルクロスをかけただけのもの。

「ま、見掛けはそれなりになつたがの。その分クロスを捲るといの通りじゃ」

秀吉がテーブルクロスを捲る。

当然その下にはFクラスならではのみかん箱が鎮座しているわけで。「これを見られたら、店の評判はがた落ちね」

「大丈夫でしょ。いちいち店のテーブルの下まで確認するお客さんはないだらうじ、

もし見られても心のうちに閉まつておいて貰えるつて」

「そうですね。態々クロスの下をアピールする人はいませんよね」「おござい姫路、たかが文化祭で営業妨害する奴はいなつて」

「雄一の言つとおりだ。

そんなことしても何一つメリットはない。

思いのほかきれいにまとまった店内を、姫路さんは成功するかも、とこう希望で一杯の顔で見渡す。

「……飲茶も完璧」

いつの間にかムツツリーーが加わっていた。

「ムツツリーー、厨房はどう?」

「……味見用」

そういうてムツツリーーが差し出したのは小皿に盛り付けられた胡麻団子。

「おございしあうね。土屋、これ、貰つていーの?」

「……(口ク)」

「では、遠慮なくいただこうかの」

言つが早いか秀吉がその中の一つを口へ運ぶ。

それに続くように姫路さんと島田さんも胡麻団子を頬張つた。

「お、おございです!」

「本当! 表面はカリカリで中はモチモチで食感もいーし

「甘すぎないところも良いのう」「よほどおいしいのか、三人とも皿を細めて幸せそうな表情をしている。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「僕も」

明久に続いて僕も皿に残った胡麻団子を口に入れる。

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとつても……」

「ゴパッ！！」

胡麻団子にはありえないような味に、僕と明久は天に召されたのだった。

「……それは姫路が作つたもの」

「知つてたなら止めてよ！」

「そうだよ！ 僕も明久も危うく天に召されるところだつたんだけど！」

改めて姫路さんの料理の威力を思い知らされた。

「うーっす。帰ってきたぞ……明久と蓮はどうして震えているんだ？」
そこへ何も知らない雄二が帰ってきた。

「あ、雄一お帰り」

「えっと、これはね」

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ……」

雄二は皿に残つた“明久の食べかけ”を躊躇なく口に運んだ。

「大した男じゃ」

「雄一、君は今最高に輝いているよ」

「人の話は最後まで聞こつね？」

「……合掌」

「？ お前らが何を言つてゐるのか分からんが……ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとつても……ンゴパツ……」

あ、なんか既視感。^{デジャフ}

「雄一、大丈夫？」

明久が雄一を突きながら聞く。

「ああ。何の問題もない」

良かつた。雄一も大丈夫だつたみたいだ。

「……あの川を渡ればいいんだろう？」

「「「だめだ雄一！ その川を渡つたら戻れなくなっちゃう……」」

思わず声が重なる。

明久が雄一に必死に心臓マッサージ。

もちろんちょっと遠くで話している姫路さんたちに怪しまれないように

口では「雄一起きろ～」なんて軽い言葉を吐いている。

「六万だと！ バカを言え！ 普通渡し賃は六文と相場が決まって……ハツ！」

いつもして尊い命がまた一つ救われたのです。

「ところで雄一は今まで何処へ行つておったのじゃ？」

「ああ。ちょっと話し合いにな」

ということは学園長に科目の指定をしてきたところだらう。ちなみに作戦なども雄一任せなので科目も雄一に一任してある。

「「「苦労様。喫茶店はいつでもいけるよ」」

「ぱつちつじや」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

唯一の心配事は姫路さんが本当に厨房に立たないかところ」とある。

僕たちはともかく、お密さんの口に入つたら……考えたくない。

「よし、少しの間喫茶店は秀吉と蓮、ムツシリーーに任せ。明久、俺たちは先に

一回戦済ませるぞ」

「あれ？ 坂本君と吉井君も召喚大会に出るんですか？」

「うん。あと、蓮と秀吉も出るって」

「折角だしね。秀吉と雄一は召喚経験が少ないから僕と明久でそのサポートをするんだって」

僕も経験は少ないけれど、点数がある程度あるから何とかなる。島田さんは姫路さんのために、といふことを知っているので嬉しそうだ。

ちなみに、学園長からは“チケットの裏事情は誰にも話すな”といふ緘口令が敷かれている。

「もしかして、賞品が目的なんですか？」

姫路さんが聞く。賞品が賞品だから気になるよね。

「うへん。そういうことになるかな」

チケットが目的といえば目的だけど、ちよつと意味は違つ。

「……誰と行くつもりなの？」

「え？」

「私も知りたいです！ 吉井君、誰と行くのか教えてください。」

島田さんの目が一気に攻撃色を帯びる。

姫路さんまで明久に詰め寄つた。

「え、ええっと……」

明久は答えにくそうだ。

もともと誰かと行くつもりはないんだから当然といえば当然だね。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

「待て！ 雄一ー！」

突っ込みたい。突っ込みたいが、ここで出て行くと僕にまで雄一の間の手が及びそうだ。

すまない明久！ 君のことは忘れない……多分。

「ちょっとアキ！ ビデオいうことー！」

「吉井君、男の子なんですから女子に興味を持つたほうが……」

明久がすごい勢いで誤解されていく。

「それが出来れば明久だって苦労はしないさ

「雄一、もつともらしくそんなこと言わないで！ ゼンゼンフォロ

ーになつてないから！

それと蓮！ なんか言つてよー！

「僕は男色家じゃないんだ」

「蓮のバカ野郎 ー！」

もうここまできたら巻き込まれないようにするので精一杯だ。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ、明久」

「つぐ、と、とにかく誤解だからね！」

もう既に色々と手遅れになつていてる気がする。

明久と雄一が出て行つた後。

「さて。僕たちも行こうか

「そうじやの」

「あの、鮎川君、木下君」

僕たちも召喚大会に行こうと思つていたところで、姫路さんに声を掛けられた。

「どうしたの、姫路さん？」

「鮎川君と木下君はチケットはどうするつもりなんですか？」

「特に使い道もないから売るか、誰かに譲るつもりだけど、まずは召喚大会に勝たないとね。姫路さん達も」

「そ、そうですね。頑張りましょう！」

危なかつた。

「見事じゃつたのう」

「秀吉も見てるだけじゃなくて何かフォローしてくれれば良かつたのに」

「お主ほど上手くあしらえる自身はなかつたのでな。

それにして、姫路もだいぶFクラスに染まってきたのう」

僕らには召喚大会の勝敗よりも姫路さんたちの壊れ具合のほうが心配だつたりする。

召喚大会一回戦。召喚大会はスポンサーへのアピールの目的もあるが、

それだけに良い試合を見せなくてはいけない。

そのため二回戦までは校内の人間だけの後悔に限られている。

僕と秀吉の一回戦の相手は、Eクラス代表の中林宏美さんと、同じく三上美子さんだ。

「あら。私達の相手はFクラスコンビみたいね」

中林さんが対戦表を見ながら囁つ。次になんていうかは予想できるけど……

「楽勝ね」

「秀吉、召喚獣の練習にはちょっとびいに相手だから、頑張つてね」

実際ちよつどいい。

「何よ！ Fクラスの分際で生意氣だわ！」

「はいはい」

中林さんは独りでにヒートアップしておいた。

「では、始めてください」

「サモン「試験召喚」」「」

先生の合図で一斉に召喚する。

僕の召喚獣はいつも通りの剣とよく分からぬ左手。秀吉の召喚獣は着物に長刀を装備している。

僕達に相対する召喚獣は、

中林さんが野球のプロテクターにバットとグローブ。

三上さんが白いロープに分厚い本を装備した出で立ちだ。どうして本で戦えるんだろう。

『数学 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉 vs Eクラス 中林宏美&三上美子』

603点&69点 vs 94点&88点

181

「なつ！ 何よその点数は！」

「僕と数学で当たつたのが運のつきだつたね」

別に数学以外でも負けないけど（保健体育以外）。

「じゃあ、秀吉、そつちの三上さんの召喚獣の相手をしていて危なくなつたら手伝うから」

僕は中林さんの召喚獣の前に立つ。秀吉が三上さんと戦っている間、邪魔されないようにしないと。

「点数だけじゃ勝負は決まらないのよ！」

「さつきはFクラスの点数をバカにしたのに今度は点数だけじゃ決まらない、ねえ？」

「つるさいつ！」

中林さんの召喚獣が突っ込んでくる。

「取り敢えず黙つて」

倒してしまわないように注意しながら、バットだけを斬る。

大いに驚いている中林さんから目を離し、秀吉のほうを見てみると、

「ハツ、ホツ、ハアツ！！」

三上さんの召喚獣と一緒に一進一退の攻防を繰り広げていた。

点数は三上さんのほうが有利だけれど、秀吉は前回の試召戦争の経験から

三上さんと互角に渡り合つことが出来ている。

「無視すんな！！」

中林さんの召喚獣が、殴りかかってくる。

「ちゃんと注意してるよ。それに不意打ちしたいなら声は出しゃせめだよ」

殴りかかってきた腕を取つて壁に向かつて投げ飛ばす。

僕の点数の召喚獣は思いのほか力が強く、中林さんの召喚獣は壁にすごい勢いで衝突した後、消えてしまった。

「セイヤアツ！」

秀吉も三上さんの召喚獣を切り伏せて、僕らの勝ちに終わった。

「勝者、Fクラス鮎川、木下ペア」

先生の勝ち名乗りも受け、僕達は空けてしまった喫茶店へと戻った。

第一十問 クレームと逃走と召喚大会「回戦！」（前書き）

自分の筆の壯絶な遅さが恨めしい作者です。

話は変わりますが、初めて感想をいただきました。
自分の予想以上に嬉しいものです。ありがとうございました。
今後も、より楽しんでいただけるようなお話を考えて行きたいと思
います。

第一十問 クレームと逃走と召喚大会一回戦！

清涼祭アンケート

問　『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーなどによつに選ぶべきですか？

「？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（ ）」
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『？可愛らしさ　候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといつたところでしょうかね。

鮎川蓮の答え

『？統率力　候補……島田美波』

教師のコメント

クラスでの話合いではリーダーシップを發揮したそうですね。

吉井明久の答え

『？可愛らしさ　候補……姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄一の答え

『？可愛らしさ　候補……姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、島田美波』

『？その他（結婚相手） 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

第二十問 クレームと逃走と召喚大会一回戦！

僕と秀吉は、召喚大会一回戦を終わらせると、すぐに喫茶店に戻つてきついた。

「こんなテーブルで人に物食わせてんのかよ！－！」

喫茶店から叫ぶ声が聞こえる。

「どしたの？」

「あつ！ 鮎川、あいつ等を何とかしてくれない？ 営業妨害よ！－！」

僕が思わず声を上げると、島田さんが近づいてくる。

「何があつたの？」

「知らないけど、いきなりあの二人がテーブルのクロスはがして中にいるお客様に聞こえるように大声で話し始めたのよ！－」

姫路さんの転校阻止がかかつている分、島田さんの怒りは平常時の5割増しになつていてる。

「取り敢えず、雄二が帰つたらすぐに連れてきて。あと、秀吉は……」

秀吉に耳打ちをする。

「用意できんこともないが、あつても二つ程度じゃぞ」

「構わないよ。それじゃあ宜しく。僕はあの二人と話していくから」

「まったく、責任者はいないのか！」このクラスの代表は！

「代表はただ今召喚大会で不在ですので、代わりに私が承ります

「なんだてめえ？」

「この2・Fの代表代理、とでもお考えください」

「そつか、ならこの机はどういうことだ！ 汚ねえ机に食い物はまづいし、

どうなつてんだこの店は！

目の前の坊主が大声でまくし立てる、店の中からそれに同調する声が上がる。

「この机に関しては、こちらの手違いにより急遽使っているものです。

本来の机が届き次第、そちらに入れ替えて営業いたします。料理の味のほうですが、私どもは味見と衛生管理をした上で自信を持つてお客様にお出ししております。こちらと致しましても、まずい、などといわれるのは心外なのですが？」

机に関しては嘘だ。この場合はこうするしか切り抜ける方法はないし、

雄一が来たらまた調達に行けばいい。

「そんなことで納得できるか！ とにかくこんな汚い店を学園祭で出されると迷惑だつて言つてんだよ！」

「お客様の迷惑を考えずに、大声で怒鳴り散らすあなた方も相当に迷惑だと思つのですが？」

「なんだとつ！」

坊主頭が僕に殴りかかってくる。

僕はその拳をあえて避けずに、打点をずらしながら殴り飛ばされる。僕が殴り飛ばされたのを見て、お客さんは坊主とモヒカンを非難するような目で見る。

一部、僕にさも「自業自得だ」的な視線を向ける奴がいるので、後で個人的にお話しよう。

「お客様、」このような公の場で暴力行為とはどういふことでしょうか？」「

「こんな大勢の前でやつたんだ。言い逃れは出来ねえよな？」
いつの間にか雄一も近くに来ていて、威圧するような声を一人に向ける。

「」、「これはそのウエイトレスの態度がむかついただけだ！　だいたい店員の教育も出来ねえのかよ！」

「ウエイトレス？」

坊主が苦しい言い訳を並べてくるが僕にとっては最初の言葉が大問題だ。

だけど、僕は女の子つて思われるとなったら…：

「それではあなた達はムカついたから、といつ理由で女性を殴るような方なのですね？」

それを利用させてもらおうか。

僕の言葉に店内からは一層冷たい視線が坊主とモヒカンに突き刺さる。

「うちの店員に手を出しておいて、無事で帰れるなんて思ひなよー。」

この隙に雄一が迷惑コンビを齎す。

「う、うるせえ！　俺達は客だぞ！」

「そうですか『グヘ』」

雄一がモヒカンを殴り飛ばす。そうですか、解禁ですか。

「あなたはどうしますか？『ブベラッ』」

僕も坊主を殴り飛ばす。

「お、お前ら、何の真似だ！」

「それは私どもの『パンチから始まる交渉術』に対する潮流ですか？」

すごい台詞だ。

「パンチから始まる交渉術」なんて言葉も聴いたことないけれど、それ以上に、これだけやつてまだ交渉しているつもりなんて。

「ふ、ふざけるなよ手前ら……グフオツ」

坊主がまたしゃべったので、僕がアッパー・カットを入れておいた。ちなみに坊主は宙に舞つた後床に倒れて悶えている。

「次に『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で閉める交渉術』

が待っていますので」

「わ、分かった。もう十分だ退散をさせてもらひつ」

「そりゃ、ならこれでおしまいだつ……」

そういうて雄一がモヒカンの腰に手を回す。

「ちょっと待て、もう帰ろうとしているのにそんな大技を……『ゴフ
アア！』

「じゃあ、僕も……」

「ま、待ってくれ！ 反省しているからもうグフアッ……」

皆まで言わせずに坊主の首に足を掛け、体重移動の勢いで投げ飛ばした。

いわゆる首投げ、という奴だ。

「な、夏川！」

雄二にバックドロップを掛けられて悶絶していたモヒカンのほうが、
僕に投げ飛ばされた坊主を見て叫ぶ。あの坊主は夏川とか言つらし
い。

「クソツ！ てめえら覚えてろよ！」

モヒカンが氣絶した坊主を背負つて店から出て行く。

最後の覚えてろ、て言つ台詞は忘れていいって相場が決まつて
から忘れよう。

こうして常夏コンビ（雄一命名）による営業妨害は幕を閉じたわけ
だが、

それでも迷惑コンビが店に及ぼした影響は大きく、既にお客さんの
何人かは席を立つて移動しようとしている。

「あつお客さん！」

明久が必死で客を呼び止めようとしている。座っていた客の中で一
番最初に席を立つたのは紛れもない教頭だつたりする。

あの教頭が常夏コンビに一枚噛んでいると見てよさそうだ。

『雄一』

『なんだ』

お客様さんに聞かれないように雄一とアイコンタクトで意思の疎通を

図る。

「お客様、失礼しました。此方の手違いでテーブルの到着が遅れていたために暫定的にこの様なものを使ってしまいました。ですが、たつた今本来のテーブルが到着しましたので」「安心ください」雄二が声を上げるとほぼ同時に、秀吉とFクラス数名がきれいなテーブルを運び入れた。

新しいきれいなテーブルに入れ替えることでの場は何とか収まつた。

「いや、助かった。あらかじめテーブルを用意していってくれるとな」

「常夏コンビだっけ？ そいつらが汚いとか言ってたのは聞こえたからね。

少なくともきれいなテーブルを用意しておいたほうがいいと思って」「でもどうするの？ 秀吉が持ってきてくれた演劇部のテーブルだけじゃ

喫茶店には足りないと思うんだけど

明久が聞いてくるがそれは心配無用。

「それについては考えがある」

「そうなの？」

「蓮、お前達次の試合は何時からだ？」

「大体11時過ぎくらいの予定だから小一時間あるかな」

「よし、ならお前も手伝え。明久行くぞ」

「何処に行くの？」

「もちろん、テーブル調達だ」

「それってまさか！」

「こら、坂本君に吉井君、鮎川君まで、待ちなさい！」

僕と雄一、明久はまだ今教師に追い掛け回されている途中である。もちろん清涼祭が始まっているので、まともな方法でテーブルが調達できるわけなく、

応接室からテーブルをパクツて、現在運んでいるところなのだ。

「明久、もつとスピードを出せ！ つかまつたら生活指導室行きだぞ！」

「鉄人の根城！？ 冗談じゃない！！」

「現在の状況が分かつたら全力で走る！ 先生はそんなに早くないから！」

追ってきている化学の布施先生は運動不足なのかそこまでのスピードはない。

「どうして机を背負つてそんなに早く走れるんですか……」

「こうなつたら西村先生に応援を！」

布施先生はそうやつて携帯電話を取り出す。マズイな。

机を背負つて鉄人こと西村先生から逃げ切るのは至難の業だ。

「明久！..」

「おうよっ 雄一！」

鉄人乱入を阻止する手段を考えていると、明久と雄一が何かを示し合わせたようだ。

明久が自分の上履きを脱ぐと、そのまま雄一に向かつて蹴り上げる。雄一がそれを空中で蹴り、蹴った明久の上靴はそのまま布施先生の右手、

正しくは手に持った携帯を寸分違わずに弾いた。

「流石雄一！」

「雄一！ 連絡は！」

「この先の空き教室に机を置いていくぞ！ そこからは回収部隊が教室に運んでくれる手はずになつていい」

Fクラスの別働隊、回収部隊が僕達がかつぱらつた机を喫茶店まで運んでもくれるらしい。

「よし、次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！」

「ハア、蓮はともかく僕と雄一はいつか停学になる気がするよ」「仕方ないでしょ。机を手に入れるにはこれしか方法がないんだから」

「うう

こうして、僕達の必死のダッシュのおかげか、Fクラスの悪評の元、汚れたテーブルは新しいテーブルへと全て入れ替えることができた。

そして次は召喚大会一回戦。

「雄一、次の教科は英語でよかつたよね？」

「ああ。お前の点数なら誰が相手でも何とかなるだろ？」「

「英語ならね。それより、雄一と明久は大丈夫なの？」

「ああ。問題ない。次の対戦相手はあのカップルだからな」

あのカップルといえばおなじみ卑怯者ヒステリックさんです。

あの一人、特に根本もとい外道はFクラス（特に雄一と僕）に弱みを握られている。

汚い手も容赦なく使う雄一のことだ、外道は悲惨な末路をたどるだろう。

そして二回戦

僕と秀吉の相手は3年Bクラスのペア。
ここでもBクラスと当たるなんて。

「なんだ？ 相手は2年でしかもFクラスかよ？ 楽勝だな」「当たり前だろ。俺達のコンビの前に敵はいないつての」
なんだろう。一回戦の中林さんも結構イラつとしたけれど、この二人は更にムカつく。3年はテストが難しいから2年と条件は変わらないのに。

「それでは、始めてください」

「――「試験召喚」」

先生の合図で四人全員が召喚獣を呼び出す。

僕と秀吉の召喚獣はいつもどおり。

敵さんの召喚獣は、最初に2年Fクラスをバカにした短髪が特攻服にハンマー。

相方の髪にウエーブがかかったセミロング男が西洋風の鎧に剣だ。

「ハツ！ 流石最低クラス、召喚獣の装備も貧弱だなあ！」

僕も秀吉も召喚獣が防具をつけていないことからこんな台詞が出てくるんだろう。

てか、アンタの召喚獣も防具つけてないでしょ。

「そうやって舐めてると足元すくわれますよ、セ、ン、パ、イ」
続いて彼我の点数が表示される。

『英語 2年Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

633点 & 79点

V/S

3年Bクラス 鯖島健&石田爽一

167点 & 201点

』

『なにつ！』

僕の点数を見て会場全体がざわめく。

600点なんて教師並みの点数らしいからFクラスの生徒が取れるなんて夢にも思ってないだろうから。

「て、てめえみたいな奴がなんでFクラスに！」

「その台詞はもう聞き飽きました。じゃあ、さよなら先輩」
召喚獣を鯖島とかいう先輩の下に走らせ、動搖と点数差からまともに反応できていなかった。

先輩の召喚獣を一閃する。

『英語 鮎川蓮 v s 鯖島健

633点 v s 22点』

悪運が強いのか、両断される寸でのところで防御されてしまった。
だが、もう点数は無きに等しい。

もう一人のほうは、

「くつ、意外としぶといな」

秀吉が粘ってくれている。

秀吉の点数ならすぐに方が着くと思っていたのだろう。

だけど、相手も三年生。点数はあるか召喚獣の扱いでも石田先輩のほうが上だ。

『英語 木下秀吉 v s 石田歟一

18点 v s 188点』

「くつ、蓮！」

「りょーかーい」

やられそうになつてゐる秀吉のもとへ走る。

石田先輩は僕が援軍に來ることも想定していたようで、短髪よりも反応が早い。

だが、彼我の点数差は3倍以上。

突き出される相手の剣をいなし、左手で切り裂く。

体勢が崩れたといひに右手の剣を突き出し、セリロンモの召喚獣は消滅した。

ようやく此方に追いついた短髪の召喚獣もあつといひ間に沈めて僕達の勝利となつた。

第一十一問 物語に出でてへる悪役つて、色々策をめぐらせてたりするナニは物語題

最近、何かを続けるのはとても難しいと身をもって実感しています。
更新も急激に間が空きだしましたね。

努力します……

第一十一問 物語に出でて来る悪役つて、色々策をめぐらせてたりするやうに結局頑

バカテス

問『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーハー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

鮎川蓮の答え

『ハーバー法とは、400度～600度の高温下で、窒素と水素を直接反応させてアンモニアを生成する手法である』

教師の「メント

どうやら、問題の記述に誤りがあつたようですね。
ですが、できれば塩化アンモニウムと反応する物質も書いてほしか
つたです。

土屋康太の答え

『塩化吸收剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。」

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々な策をめぐらせていました
りするけど結局頭悪い人ばかりだよね。

「しかし、蓮の英語は流石の点数じゃの。それ点数に勝てるものは教師くらいじやろ」

「その辺の教師には負けたくないけどね。それに僕にも苦手な教科はあるし」

「あれかの？」

「あれです」

あれ、というのはもちろん保健体育のこと。

ただ苦手なんじやなくて僕はある理由で保健体育の内容を覚えられないんだけどね。

その理由は万が一機会があれば。

「鮎川蓮君だね？」

秀吉とFクラスに戻る途中で、後ろから声を掛けられた。

「はい。僕が鮎川蓮ですが、何か用ですか、教頭先生？」

僕に声を掛けたのは今回の清涼祭での第一級要注意人物、というか僕の見立てでは黒幕の竹原教頭だった。

「召喚大会の件で少し話しがある。時間は大丈夫かね？」

「秀吉、僕は教頭先生と話してから戻るから、先に喫茶店に帰つておいて」

「分かったのじや。お主も遅くならんよつにの」

秀吉に先に戻らせる。これで僕と教頭の2人だけがここにいる。

「……付いてきなさい」

教頭は短く僕にそういうと一人で歩き始めた。

終始無言に見えるけれど、「これが学園長の……」とか、

「捨て駒にはちょうどいい」とかぶつぶつ独り言を言つてゐる。

特に一番目は気にくわない。僕を捨て駒扱いか。

「入りましたえ」

通されたのは教頭室。

教頭は僕を無視してわざわざソファーに座つてしまつた。

「話つてなんですか?」

「まずは座りましたえ」

そういわれて、僕もソファーに腰掛ける。

「それで話というのは?」

「まあ、そう急かさないでくれないか」

「僕はクラスの出し物があるので、出来れば手短にお願いしたいのですが」

「ふむ……ならば单刀直入に言おう。君、私の下に付きなさい」

「单刀直入ですね」

「君にはもう察しが着いているのだろう?」

「隠す気はない、ということですね?」

「まあ、そういうことにしておいてくれ」

「それで? 下に付け、とは?」

「ああ。簡単なことだよ。この清涼祭期間中、私の命令に従つて動いてくれればいい」

教頭は僕が一般性とのカタゴリに入つてることを知らないのだろうか。

一般生徒とこんな取引のようなことをするなんて教育者として失格だ。

「まさか、ただでこんな危険性のあることを生徒にやりせよつてしませんよね？」

「もちろんだよ。君が私の下についてくれるならば、学校生活を送る上で

あらゆる君への高待遇を約束しよう。君の本来の振り分け先であるAクラスにも

入れるように手配しよう』
鎌をかけただけのつもりだったのだが、教頭はまったく気づかずにべらべらと話していく。

「教頭先生の目的はなんですか？　じつは取引は表沙汰になればあなたにも都合が悪いはずですが？」

「ふふ、聞いたとおり聰明だな。私の目的か、そうだな、『駒を最適なところに置く』かな

なるほど。

こいつは試験召喚システムが目的か。
それも、誰かに雇われているのだね。

「成る程。大体の条件は分かりました。確かに僕にとってはいい条件のようだ」

「そうか、ならば」

「お断りします」

「つ！　な、何故だね！」

「僕は自分ひとりのためにその他大勢、今回はこの文月学園全体を危険に曝すことはしたくないんですよ。それに……」

「それに、何かね？」

「僕はそれなりにFクラスが気に入っていますし

「だが、私の計画が成功すれば」

「『文月学園は乗っ取られる』もしくは『文月学園はつぶれる』ですか？」

そんな大それた事あなたに出来るわけないでしょ？

それに、人を捨て駒扱いするような人間に付いていけるほど甘い環境で育つたわけではないので

捨て駒発言。教頭はこれを聞かれているとは思わなかつたのか大層驚いている。

「何故それを聞いている！ 君は私から10m以上離れていたはずだ！」

普通の学生ならあの距離の独り言など聞き取れるわけがない！」

「まあ、 “普通の学生なら” 聞き取れないでしょうね」

「な、なら君は」

「はい、今日はそこまでにしましようか。僕もクラスに戻らないといけないので」

「くつ……まあいいだろ？ だが、私の誘いを断つこと、後悔するよ」

教頭が言い終わる前に部屋を出て行く。

そのときの僕はきっとこづいていただろ？

「やうひいつ台詞は死亡フラグだぜ、三下」

教頭との腹の探りあい（というか僕が一方的に探つただけだが）を

終え、

僕はFクラスの喫茶店に戻つてきた。

「あ、お帰り蓮」

明久が声を掛けてくる。

「ただいま。つて、皆どうしたの？」

僕が入つてこなかつたほうの入り口近くでFクラスの皆が人垣を作つている。

「うん。なんか小さな女の子が来て、皆そつちにかかりきりになつちやつて」

なんともFクラスらしい理由である。

と、いうかあいつらは女なら年は関係ないのか？

「で？ 探してゐる人はどんな人なんだ？」

「はい。バカなお兄ちゃんでした」

とんでもない会話が聞こえてくる。

雄一が皆を見回す。“バカなお兄ちゃん”という特徴に当たる人を探してゐるんだろう。

「そうか……沢山いるんだが

否定できない。

「他に何かないか？」

「えつと……とつてもバカなお兄ちゃんでした」

「――「吉井だな」」

クラスの声が一致する。明久を見ると、哀れだ。ちょっと涙目になつてる。

「雄一、僕に小学生の知り合いなんていないよ? きっと人違い

「あつ！ バカなお兄ちゃんだ！」

「――人違い……ねえ？」

「人違いだと……いいなあ」

明久、そろそろ腹を括らう。

君の特徴は良くも悪くもその頭から来ている。

「で？ その子は誰なの？」

「う～ん……僕に君みたいな知り合いはないよ？ 人違いじゃないかな？」

明久はこの期に及んでまだ思い出していないらしい。

「知らないってひどい！ 葉月一生懸命『バカなお兄ちゃんは何処ですか』って

いろんな人に聞いて来たのに！」

「こ、この子何者だ！ 明久の急所を無意識ながら的確に攻撃している！」

「そうか……バカなお兄ちゃんがバカで悪かつたな」「バカなお兄ちゃんはバカなんじや。許してやつてくれんかのう」「でもでも、葉月はおにいちゃんと結婚の約束もしたのに……」爆弾を投下した。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ……」

「ごぶわあ……」

流れるような、端から見れば美しいような動きで

姫路さんと島田さんは明久の首を絞めていた。

「姫路に島田、どうやら勝つたようだな」

「雄一、今心配するのはそこじゃないでしょ」

「瑞希、首をそのまま捻つて！ ウチはひざを逆方向に曲げるから

！」

「はい！ えつと、こいつですか？」

イカン。このままだと近いうちに死人が出かねない。

「ちょっと待つて！ 僕は結婚の約束なんて全然」

「ふええええん！ 酷いです！ ファーストキスまであげたのに

！」

これは……明久の自業自得だな。

「坂本！ 包丁持つてきて！ 5本あれば足りると思うからー」

「吉井君！ こんな悪いことするのはこの口ですかー！」

「ほへはいへふ！ ははひほひへふははいー（お願いです！ 話を聞いてくださいー）」

二人はヒートアップしちゃってるし。

「仕方ないわね、2本刺したら聞いてあげるわよ」

島田さん、包丁は1本刺さるだけで十分に致命傷だと思つんだ。

「ちょ、美波！ 包丁は一本刺さるだけでも致命傷なんだよ！ お願い助けて！ 雄二ー！ 蓮ー！」

仕方がない。明久が殺される前に止めるか。

「一人とも、それ以上やつたら本当に洒落にならないからー

明久を拷問するのは清涼祭が終わってからでもいいでしょー！」

「待つて蓮！ それだと根本的に僕の危機が回避されたわけじゃないよー！」

一日でも寿命が延びたんだから後は自分で何とかしてよ。

「止めないで！ ウチはこいつを殺さないといけないのよー！」

「……ゴメン明久」

「諦めるのー？ もうちょっと粘つてよー！」

「ここまで僕の話を聞いてくれないとちょっと困る……

「あつ、お姉ちゃん！遊びに来たよー！」

「あれ？葉月？え？葉月とアキツて知り合いなの？」

「つ～ん……あつ、思い出した！」

「何？結局、明久と葉月ちゃんは前に会つていたってことでいいの？」

「うん。去年ちょっとね。それより、美波は何で葉月ちゃんを知っているの？」

「何でつて、ウチの妹だもの」

ほう……それはつまり

「島田さんは自分の妹の声も分からず、明久を殺しかけたつてことだね」

「うつ……クラスの人ごみで声が良く聞こえなかつたのよー。」

まあ、そういうことにしてもおこひ。

「吉井君はすうこです、どうして美波ちゃんとは家族ぐみの付き合いなんですか？」

もしかしてもう『お義兄ちゃん』になつてたりして……

「姫路さん、取り敢えず戻つてきて……」

本当、事態の收拾が迫つつかなくなつてきました。

「といふるで、この落の少なむはさうつてことだ？」

雄一の言葉で、躊躇辺りを見回した。

僕が帰つてきたときにはもう、店は閑古鳥が鳴いていた。

「そつじえは葉月、ここに来る途中でいろんな話を聞いたよ

「ん？ どんな話？」

葉月ちゃんの言葉に一番早く反応したのは明久だった。

「えつとね、『中華喫茶は汚いから行かないほうがいい』って

店内は掃除もいきわたっているし、装飾もしつかりしている。

唯一“汚い”のは、テーブルだつたけど、そのテーブルは新しいものに替えたから

そんな噂が立つ原因がない。

「ふむ……例の連中の妨害がまだ続いているんだろうな。探し出してシバキ倒すか」

「常夏コンビつてそこまで暇なの？」

「まあ、後輩の店を営業妨害するような人間だから、十中八九自分のクラスでもお荷物扱いでしょ」

もしかしたらそれ以外の理由があるかもしれないけど。

「まず、様子を見に行く必要があるな。チビッ子、その話は何処で聞いたんだ？」

「チビッ子じゃないです、葉月です！」

「じゃあ、葉月ちゃん、その噂は何処で聞いたか教えてくれない？」

「はい。えっと、短いスカートの女の人がいっぱいいるお店でした！」

多分何かのコスプレをしているお店なんだろうけど、そんなことを言つたら真つ先に反応するのが……

「何だつて！ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 店のために（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

そんなことを口走りながら、明久と雄二は走り去ってしまった。そんな中、残されたメンバーは、

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

「取り敢えず、明久たちだけに任せておくのも不安だし、僕達もお昼の休憩をかねて行ってみようか？」

「……そうじやの」

僕達も明久と雄一の後を追つ。

厨房からムツツリーーーの氣配が消えているのが気になるけど。

第一十一問 物語で出ていく蓮役って、色々策をめぐらせてたりするかといふ

なんだか蓮の性格変わッてね？と思われる方もいるかと思いますが、

蓮の素は案外黒かつたりします。

次回も出来るだけ早くこ……

第一十一問 女装が似合つ男つて女性から見ひどいなんだね。……（前書き）

PV10'000アクセス突破を確認しました！

ものすごい速度で更新が滞り始めた気がしますが、これを糧にまた
どんどん書いていけたら、と思っています。

第一十一問 女装が似合つ男つて女性から見ひどいなんだね？

バカテスト 日本史

問『冠位十一階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

鮎川蓮の答え

『603』

教師の「メント
正解です。

坂本雄一の答え

『603』

教師のコメント

いつたいどうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

「明久、君は止めよう」
「雄二、君まで来て何言つてるの？」

第一十一問 女装が似合つ男つて女性から見てどうなんだろ？……

「明久、僕は雄一に同感だ。ここだけは止めよ!……」

僕達が葉月ちゃんの案内のだどり着いたのは

2・Aクラスのメイド喫茶『じ主人様とお呼び!』だつた。

もづ、どう突っ込んで良いか分からぬネーミングだよ。

「そつか、ここは雄一の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」「ダメですよ坂本君、女の子から逃げ回つたりしちゃあ

「でも、どうして蓮まで嫌がつてるのさ?」

「……優子と一緒にいると何時関節技をかけられるか分からない恐怖で

まともに座つていられないんだ……」

「……蓮、お前も苦労してるんだな」

「……雄一」

なんか、雄一に女性関係でこんなにも癒される日が来るなんて。

「……(パシャパシャパシャパシャ)」

ものすゞしく連續したシャッター音が聞こえる。

「……ムツツリーー?」

「……人違い」

「どう見てもムツツリーーだろ! 廉房責任者が何してやがる!」

「……敵情視察」

「喫茶店から出でてくるときにもづムツツリーーの気配を感じなかつたからまさかとは思つたけど、本当に付いてきたんだね」

「ムツツリーー、盗撮はだめじゃないか。そんな事したら

撮られている女の子が可哀想だと……」

「……一枚100円」

「2ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

明久、普通に注文してるし、説得力皆無だぞ。

「アキ、普通に注文してるわよ」

「はっ、何時の間に！」

「明久がムツツリーーから写真を賣るのはもう条件反射になつてゐるんだね……」

「……そろそろ帰る」

「全く、ムツツリーーにも困ったものだね」

「少なくとも、さつきムツツリーーの写真を買つていた明久にはその台詞いえないと思つ」

「明久君、その写真どうするんですか？」

「いやだなあ、姫路さん。もちろん捨てるに決まってるじゃないか。そろそろお店に入らうよ。僕もうおなか減っちゃつたよ。見事に話題をそらせたな。

「それもそうね。ほら、坂本、鮎川、覚悟決めなさい」

「「くそつ」」

仕方がない。多分優子も衆人環視の中で関節技はかけてこないだろう……多分。

「あつ！ 映つてるの男の足ばかりじゃないか畜生！」

「「しつかり見てるじゃないか（見てるじゃないですか）ー」」

「「ごめんなひやい。くひをひふあふあいで」

明久は姫路さんに口を引っ張られながらの入店となつた。

「じゃあ、入るわよ

島田さんが一番手となつて、店の中に入つていく。
出迎えるのは、学年主席美人メイド霧島翔子さん。

「わあ、きれい……」

僕はこういふのに慣れていないけれど、それでも霧島さんがきれい
だつてことは分かる。

「それじゃ僕らも」

「流石△クラスじゃの。店内の装飾も桁違いじゃわい」

「失礼します」

「お姉さん、きれいですっ」

続いて明久たちが入つていく。

「……お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」

霧島さんは模範的な礼儀（ver・メイド喫茶）で出迎えた。

僕と雄一は乗り気じゃない為最後尾で入つていく。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

霧島さんはかなりアレンジを加えた台詞で雄一を出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ。今日はへし折らせていただきます」

……ナンティイツタ？ ヘシオル？ ナニヲ？

ボクノウデヲ。

ダツ！（僕が全力で走り出す音）

ガシッ！（優子が僕の腕をとる音）

ボキュメキュ（僕の腕が粉々になる音）

「~~~~~（声にならない悲鳴）」

「……全く、同じ服を着ているのにどうして代表ばかり見ていたのかしら？」

「……優子、居たの？」

「…………へえ、アタシは眼中になかったってことねーーー！」

地獄を見た。

「……姉上も大変そうじゃのう？」

秀吉、この状況で大変なのは天に召される危険もある僕だ。確かに優子も殺人犯になる危険はあるけど。

「それで？ 常夏コンビはいた？」

「雄二に尋ねる。Aクラスまで来た目的は、僕らへの営業妨害を止める 것이다。」

「ああ。今注文したところだが……あの中央の奴らがそうだな」
雄二の視線の先をたどると、見覚えのある汚物が二つ目に入った。

「それにしても、この喫茶店はきれいでいいなあ！」

「そうだな。さつき行つた2・Fの喫茶店は酷かつたからな！」
「テーブルは腐つてたし、虫もわいてたもんな！」

わざとらしい。こんなわざとらしい営業妨害なのに誰一人として注意しないのか。

「おい、明久と蓮。とりあえず落ち着け」

「雄二、どうして止めるのさ！？ あの連中を早く止めないと！」
「落ち着け、こんなところで騒ぎを起こしたら更に悪評が広まるだけだ」

言われてみるとそうだ。

「あの店、出しているものもやばいんじゃないかな？」

「言ってるな。食中毒でも起こらなきゃいいけどなー」
「2・Fには気をつけろってことだなー」

「…………雄二、僕もう限界なんだけど
「まあ、ちょっと待て。翔子！」
「…………何？」

雄一が霧島さんを呼ぶと、すぐに現れた。

彼女は雄一センサーでも付いているんじゃないだろうか。

「メイド服がほしいんだが

「……分かった」

その場で自分が着ているメイド服のボタンを外し始める霧島さんって

「うわあああああ！ な、何してるので霧島さん！」

明久は隣で鼻血を出している。

「……雄一が私をほبيって言つたから」

「違ひ！ 余つてる予備のメイド服があれば貸してほびって意味

だ！」

「……そひ。今持つてくる

「露骨にがつかりするな！」

雄一も苦労してゐるな……

「雄一？ メイド服なんて何に使うの？」

「着るに決まつてるだろ！」

「そうか、姫路さんが着るんだね

「いや、それはないです」

「どうして？」

「姫路さんが着たとして、常夏コンビを撃退なんて出来ないだろ？」

し

「それもそうか、じゃあ誰が着るの？ 秀吉？」

「ああ、着るのは明久、お前だ」

「いいやああああああ！」

雄一から事実上の死刑宣告。

僕も女装はいやだからね。明久の気持ち本当に良くわかるよ。

「雄一が着ればいいじゃないか！ 無理をしたら着られるはずだよ

！」

いや、雄一のメイド服姿は出来れば田にしたくない。
「やれやれ、わがままを言う奴だな。なりあつち向いてホイで決め
ないか？」

雄一が提案する。

おそらくは試召戦争の宣戦布告のときみたいにまともじゃない戦法
を思いついたんだろう。

「よし、その提案受けれるよ」

……わよなら。明久。

結局、雄一が明久の目に指を突き入れ、明久が悶えているうちに
明久の顔が向いている方向を指すといつとてつもなく卑怯な方法で
雄一が勝利を手にした。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

姫路さんが心配している。霧島さん並の目の潰し方だったからね。
明久が感じている痛みは普段の比じられないだろう、うん。

「ありがとう。まったく、雄一の卑劣さには驚かされるよ」

「あ、あはは……でも、きっと大丈夫ですよ」

「そうだよね。きっとこんな勝負は無効」

「吉井君ならきっと可愛いと思いますー！」

そういう問題じゃない。

「くつ、」の上ない屈辱だ……」

秀吉のメイク技術によって明久はそこらへんのメイドに負けないくらいの見栄えに仕上がった。

「明久、存外似合つておるだ？」

「うん。僕もそう思うよ」

「ああ、そうだ」

秀吉と共に、明久の女装姿にそれなりの驚きを示していると、雄一が声を掛けてきた。どうやら彼には明久を無理やり女装させた罪悪感は全くないらしい。

「メイド服は後一着余つてゐるらしいから蓮、お前も着れ」

「何でええええええええ！」

「……いや、明久のバックアップというか、明久が失敗したときの保険のつもりだったんだが……」

「雄一！ それ良いよ！ 蓮なら絶対似合つよー！」

雄二の爆弾発言。

それに加えて明久まで雄一に乗つかつてきやがつた……

「僕は女装は遠慮したいんだけど……」

「そうか、別に明久だけでも事足りるしいいか」

「そう？ 蓮なら似合うと思うんだけど」

明久、女装とは似合えばいいというわけではない。

「あんた達、何の話をしてるの？」

廊下で騒いでいたためか優子がひょこつと顔を出した。

「いや、明久の女装が似合っていたからそれについて話していた

だけだよ

「ねえ、木下さん。蓮のメイド服姿、見てみたくない?」

何故明久は優子にそんなことを言つんだよ?

優子は僕に何の興味もないんだからそんなこと言つても無駄
「それは是非見てみたいわね!—」

何でええええええええ!—（本田）（四回）

「ホラ、木下さんもそういうてる」とだし、蓮、着替えてよ
「いやいや、別に優子がなんと言おうが僕は着替えない
「着替えなさい」

「へ?」

「蓮、メイド服に着替えなさい。あたしも見てみたいわ
「ちよ、それは理不尽』じゃあ行こうか『理不尽だあ——」

蓮、強制連行＆着替え

「……明久よりも似合つておるではないか」
「……ああ。俺も勧めては見たがまさかここまでとは」「
「……もう、蓮が常夏を懲らしめればいいんじゃないかな?」
「……見たいって言つたけど、これは女として自信をなくすわ……」
強制的に着替えさせられたわけだけど、僕以外の四人が固まってる。

「……。（パシャパシャ）」

いつの間にかムツツリーーまで来てるし。

「ハア、結局着るはめになつたよ……」

「似合つてあるからいいのではないかの？」

「そんなわけないだろ！ これかなり恥ずかしいんだよ！」

「……一人とも、盛り上がつてるとこ悪いがそろそろ戻るぞ。

あんまり遅くなると常夏がAクラスを出て行つちまつかもしれないからな」

雄二にせかされて、Aクラスに戻る。

一応、僕は明久が失敗した時用のサポートらしい。

『とにかく汚い教室だつたな！』

『ま、教室のある旧校舎 자체も汚いし、当然だよな！』

常夏はまだそんな会話を続けていた。

僕らの営業妨害が目的なのだろうけど、そんな会話をしたら旧校舎に教室があるクラス全部に影響がある。

「お客様」

常夏と明久が接触した。

案の定、常夏は今近づいてきたメイドが明久だと気づいていない。

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」

「掃除？ もうさと済ませてくれよ？」

その足元を汚した張本人であるお前らにそんなこと言う権利はない。

「ありがとうございます。それでは――」

「ん？ 何で俺の腰に抱きつくんだ？ まさか俺にほれて」

天地がひっくり返つてこむら返りを起こして七つに分かれたとしてもお前に惚れる女はいないから安心しろ。

「くたばれええ！！」

「いばああつ！！」

明久が坊主 確か夏川だったと思つ にバツクドロップを決めた。
奴には首投げのダメージが残つてゐるはずだ。

「き、貴様、Fクラスの吉井……まさか女装趣味が
生きてやがったか。どじのGなみのしふとさだ。

「い、この人今私の胸を触りました！」

「ちょっと待て！ バツクドロップをするために当ってきたのはお

前だし、そもそもお前は男だと

「ぐぶあつ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」
そついつて坊主を殴り飛ばしたのは我らが代表の雄二だ。

倒れている坊主に代わつてモヒカンが雄一に抗議している。
その間に明久が坊主の頭にブラジャーを接着剤でくつつけていたか
らもう手遅れの氣がするけど。

「さて、痴漢行為の取調べのため、ちょっと来てもらおうつか？」

「くつ！ 行くぞ夏川！」

流石にこの状況を不利と感じたのか逃げ出すモヒカン。

「こ、これ、外れねえじやねえか！ 奮生！ 覚えてろ変態め！」

坊主にいたつては頭にブラジャーつけたまま逃走を図つている。

「逃がすか！ 追うぞアキちゃん！」

「その必要はありませんよ、お密様」

「何だ貴様！ どけ！」

「あら、田の前の痴漢犯を見逃すほど私達は甘くないわよ？」

口調が変わつてゐるから分かりづら」と思つたが、常夏の前に立ちはだかつてゐるのは僕だ。

「くそつ！　いいから退け！！」

痺れを切らしたモヒカンが僕に掴みかかってくる。

「現行犯ですね」

掴みかかつてきた手を捻り、モヒカンの顎に拳を叩き込む。まだ意識があつたようなので、眉間、顎、鳩尾に追撃をねじ込んで意識を刈り取った。

「つ、常村あ！」

「お連れのことよりも、まずは」自身の身の心配をされたほうがよろしいのでは？」

完全に隙だらけな坊主の手を取つて一本背負いを決める。叩きつけられた坊主の眉間に掌底を叩き込む。

「ぐぼらあつ！」

明久と雄二によるダメージもあつてか、坊主も沈黙した。

「……お前容赦ないな」

「そう思つならまず逃がさないようにしてよ」

常夏の首根っこを掴み、Aクラスの奥に連行する。

「常夏コンビはどうするのさ？」

「特に考えてはなかつたがな。捕まえた以上何かしらしないとな」雄二も、常夏をどうするかまでは考えてなかつたらしい。

「……考へてないなら、あたし達が証言するから西村先生にでも引き渡せば？」

「「「それだつ！」」」

優子の案に皆が賛同する。

他クラスへの営業妨害ならきっと鉄人が連行してくれるだろう。

「そうか、ならこの一人は俺が預かつておく」

思いのほかあっさりと、鉄人は常夏を扱いでいった。

AクラスとFクラスの証言ではここまで対応が変わるのが……

第一十三回 翳い犬せむ良く吠へぬつて言葉は的を射てこぬと騒ぐ。（前書き）

また遅くなつてしましました……。

週末のはつがゆじに触れなこつてどりのこりとよ（汗）

第一二三問 弱い犬ほど良く吠えていて言葉は的を射ていると思へ。

バカテスト 英語

～と～に当てはまる語を答えなさい。

『マザー（母）から「？」を取つたら「？」（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザーから「M」を取つたら「other」（他人）です』

教師のコメント

その通りです。MotherからMを取るとother（他人）という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知つておぐと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザーから「M」を取つたら「S」です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『M』でも『S』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザーから「お金」を取つたら「親子の縁を切られるの」（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないぢやないですか。

鮎川蓮の答え

『マザーは「故人」です』

教師のコメント

……済みません。

第一十三問 弱い犬ほど良く吠えるって言葉は的を射ていると思う。

「で？ 三回戦は不戦勝だつたのね？」

「うん。対戦相手が食中毒で棄権したんだ」

「僕と秀吉の対戦相手もそうだつたよ」

Aクラスで時間を喰つたため、急いで召喚大会の三回戦に向かつたのだけど、

待つていたのは不戦勝の勝ち名乗りだった。

『ムツツリー二、姫路さんは厨房に立つてないんだよね？』

『……問題ない』

小声でムツツリー二に確認を取る。

姫路さんが厨房に立つてしまつたら十中八九瀕死の重傷者が出る。

「時間が出来たようじゃから、喫茶店の立ちなおしもせねばならぬの」

常夏の所為で喫茶店は閑古鳥が鳴いている。

「そうだな。一度失つた客を取り戻すため、何かインパクトのあるものをやる必要があるだろうな」

「流れちゃつた噂はもうどうにもならないだろうからね」

人の口には戸は立てられぬ、って言つけど、ここまで噂の広がりが早いとは思わなかつた。

「ふむ。それで何をするかじゃが……」

秀吉と明久が教室内を見回す。

狭い上にボロい教室だから出来そうなことは特に何もない。

「特に出来そうなの」とはないね
「雄一、何かアイデアはある?」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎるだろ?が効果は絶大なはずだ」

そう言つて雄一が取り出したのは、白と水色のチャイナドレス。
「確かに、それならインパクトはあるね」

「ああ。コレを 明久が着る」

すげいインパクトだ。

「やめて雄一。メイド服の次にチャイナドレスまで着たら、きっと僕は本物だつて認識されちゃうよ!」

「もう、僕も明久も手遅れ気味だと思つけど……」「まさか僕までメイド服を着るはめになるとは思わなかつた。

「冗談だ。コレを秀吉と姫路と島田と蓮にきいてもらひ

「そつかよかつた~」

「僕^{ワシ}が着るのは冗談ではないのか(う)~」

僕にまでチャイナドレスが回ってきた。

「何言つてゐの? 秀吉も蓮もそんなに可愛いんだから着なきゃだめだよ」

「秀吉はともかく、明久が着ないなら僕も着ないからね

「ちよつと待ちなさいよ! なんでウチたちが!」

島田さんも便乗してくる。

確かに須川君はチャイナドレスを着たりはしないって言つてたけど、

まだ島田さんたちは性別があつてる分いんじやないかな?

「店の宣伝のためと、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

雄一は明久を利用するつもりらしい。ここで明久が嘘をついてくれれば

「大好 愛してる」

明久に期待した僕がバカだつたよ。

「お前は本当に嘘がつけない奴だな」

「し、仕方ないわね。お店の売り上げのために、仕方なく着てあげるわ！」

「そ、そりですね！ お店のためですしね！」

姫路さんと島田さん陥落。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い？ あ、うん。お手伝いするから葉月にもその洋服頂戴！」

……チャанс！

「なら、僕が押し付けられた分を上げるよ

「本當ですか！ ありがとうございます！」

僕が持っていた分のチャイナドレスを葉月ちゃんに手渡す。本人も喜んでいるようだしコレで一件落着だ。

「ちょっとー 蓮も着なきゃいけないのにー！」

「……明久は葉月ちゃんのお願いを聞いてあげないのかー」

「うつ！ 分かったよ……」

どうしてそんなに残念がるんだろう？

ガシッ！

ついでに、いつの間にかやつてきて裁縫をしていたムツツリーーーを止める。

「……何故つ」

「僕が着たら全力でムツツリーーーの撮影を妨害することになるナゾ、良いの？」

「……仕方がない」

「どうやら諦めてくれたようだ。」

「それじゃあ、三回戦が終わったら着ますね？」

姫路さんが時計を確認しながら話す。

でも、多分雄一は

「いや、今着替えてもらいたい」

「え？」

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ

「で、でも、この格好では恥ずかしいというか……」

三回戦からは一般公開が始まる。

そこにチヤイナドレスを着た美少女が出れば嫌でも注目を集めると、雄一は考えるだろうから僕は意地でも回避したのだけれど。

「二人とも、お願ひだ」

明久が一人に頭を下げる。

姫路さんの転校を防ぐために喫茶店を成功させないといけない、というのもあるだろうけど、今の明久からはなんか邪な目的がある気がする。

「明久、お前は本当に チャイナが好きなんだな」

雄二がフォローすべきはそこじゃないと思つ。

「もしかして吉井君、私の事情を知つて 」

「仕方ないわね。クラスの設備のためだし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

明久のいつもと違う態度に、何かを感じたのか姫路さんが何かを言おうとするけど、それを島田さんがフォローする。

「あ、はい。これ位お安い御用です！」

どうやら姫路さんも快諾してくれたよう。

「それなら、すぐに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

全校の生徒+外部の人間も見に来る召喚大会でのPR効果は計り知れないものがある。

まさかお客さんもPRに出てきた一人がクラスでただ一人の女子だとは思わないだろうし。

「オッケー、任せといて。行くわよ、瑞希」

「はいっ」

チャイナ服を片手に教室を出て行く一人。

あの二人はよっぽどのことがないと負けないだろ？ し大丈夫だと思う。

「しょうがない。着替えるとするかの」

「ちょ、秀吉、ここで着替えるの？ ちゃんと女子更衣室で着替えなきやだめだよ」

チャイナ服に着替えようとした秀吉を明久が必死で止めていた。

「……最近、明久がワシのことを女として見ておる気がするのじゃが」

僕には最初から女扱いに見える。

「気のせいだ。秀吉は秀吉だらう」

「うん。雄二の言つとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』でいいと思う。男とか女とかじゃないわ」

「……俺が言つたのはそういうことじゃない」

「…………明久？ 性別の問題は結構大きいつて口をすっぱくしていつてきたよね？」

「ちょっと待つて、蓮？ いや、じょ、冗談だつて……『あやあああああ！』」

明久には、男が女と間違われるつらさを教えてあげないといけない。

「だんだんお密さんも増えてきたね」

「ああ。流石雄二だよ」

姫路さん達が召喚大会に出向いてからしばらしくして、お密さんが増え始めた。

もうだいぶ席が埋まっている。

「たつだいまー」

「ただいま戻りました～」

噂をすれば姫路さんと島田さんが戻ってきた。

「丁度良かつたよ。一人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

「厨房班はムツツリーーーが何とかしてくれてるけど、ホール班はち

よつと人手が足りないんだ

女性客に声を掛けるウエイター（変態）を増やすわけにもいかないし。

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

僕と明久はハズレを引いたから良くなかったけど、お客様の反応を見ている限り、飲茶の味は相当なものらしい。

女性客が増えた所為でウエイターを選ばなくちゃいけなくなつた。

「じゃあ一人とも、ウエイトレスをやってくれる?」

「はいっ」

「オッケー」

噂の元になつてゐる二人が加われば、更にお客さんも増えていくだろつ。

「君い、注文いいかな」

「はい。かしこまりました」

一人の後姿を見ていると、後ろから声がかかつた。

「ねえ君」

「はい」

「君はチャイナドレス着ないの?」

「……は?」

「だって、君も可愛いじゃないか。早くチャイナドレス着てご奉仕してくれよお~」

.....何を言つてゐんだコイツ?

「お客様。ここは中華喫茶であつて、お客様が想像されていぬよつたないかがわしい店ではありません」

「でも、あつちの三人はチャイナドレスを着てるじゃないか」「ないがなれに店にはゐません」

「あれは『女子』の制服です」

約一名性別があつてないのもいるが。

「なら君だつてチャイナドレス着なきやだめだろおー」

シケイ

「はあ……つたく何処にいても」「ううう馬鹿はいるんだな」
「…………え？」
「自覚がないのがバカの証拠なんだよこの変態野郎！…」
「ぎやああああああああああああああああああああ…………」
中年小太りのいかにもな感じの変態を処理し、お密さんに向かつて
呼びかける。

「当店は喫茶店であり、」Jのよじな迷惑行為及びそれに類する行為をされたお客様につきましてはこの変態と同様の末路を歩んでいただきますのでお気をつけ下せ。」

店内の息が荒い奴らが静まり返った。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなつたから持つてきて欲しい、だつて」

ふと島田さんの声が聞こえたのでそちらを見てみると、島田さんが明久に伝言を伝えているところだった。

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行つてきてもいいですか？」

「構わんよ。特に用事があつたわけではないのでね」

「？ そうだつたんですか？」

明久と話しているのは……教頭？

あの狐また何か企んでるのか？

とにかく用心するに越したことはない。明久を追つて空き教室へと向かおひ。

「ちよつと良いかね？」

「……はい」

教頭から声を掛けられた。僕を明久のところに向かわせない気だな。

「君、さつきはどうこいつもりなのかね？」

「さつきとは？」

「君は先ほど外部のお客さんに暴力を働いただりつ。とても許される行為ではない」

「それでは、教頭先生はちよつと露出の多い服を見ただけで盛るような変態に生徒が襲われてもいいとおっしゃるのですか？」

「……いや、そういうわけではないが」

「口頭で注意しても全くといつてお聞きにならなかつたのでやむを得ず『退席（処刑）』いただいたでです。逆恨みされて根も葉もない噂を流されても困りますので」

「……。」

結局インテリ気取つても所詮は期を誤りつかつな行動を取る二下

ところなどだな。

「では、お客様を待たせておつますので、
急いで喫茶店から離れる。
急げばまだ間に合つはずだ。」

「逃げんなこら！ 大人しくしてやー。」

「いや、そんな事言われても」

倉庫代わりの空き教室へ着てみると案の定明久と柄の悪い声が聞こえた。

時間を掛けるのもつたいないのでさつさと済ましてしまおう。

「明久、早くしないと料理が滯るよ。あと、そろそろ餡子も切れるころだからもつて行つてあげて」

「え？ あ、蓮！ えつと……」

「後は任せておいて大丈夫だから」

「分かった！ ジャあ宜しくね！」

明久と入れ違いになるようにして教室の中へと入る。

「何だテメエは！ 僕は吉井つて奴に用がアソんだよ！」

「彼はまた別の仕事がありますので僕がお話を聞きします」

「んだとー！ さつさと退けよ！ お前に話す事なんかねえよー！」

「……話しがあるのはこっちだバカ」

掴みかかってきたピアスを蹴り飛ばす。

少々荒つぽこけど、力づくで黒幕（おやじく教頭）の名前を吐いて
もらおう。

しばらへお待ちください

「つ、」

「クソオ、」

「。」

ヤンキー氣取つてゐる割には根性もないやつらだ。

一分かからずボロボロのヤンキーモードキが三つできた。

「さて、誰に頼まれてこんなことしたのか吐いてもらひよ

一番元氣そうな奴の胸倉を掴んで問いかける。

「し、知らない！」

「本当の事言わないとへし折らなきやいけなくなるんだけど」

「ほ、本当に知らないんだ！」

男に嘘をついている様子は見られない。

「ふん」

「ヒイツ」

僕が何か言葉を発するたびに情けない声を上げておびえている。

「ま、いいや。せつと帰れ。次に校内でお前らを見つけたら何や
つてゐかに關らず問答無用で半殺しだから。OK？」

「は、はいっ」

これ以上尋問しても無駄つぽいので三人を解放する。

「改めて思うけど、蓮つて強いよね」

後ろから明久の声があるので振り向いたら、明久が立っていた。

「いや、三人相手するのは難しいんだよ」

「え？ でも特に攻撃喰らつてなかつたし……」

「……口が聞けるように手加減するのも難しいんだ」

「……」

明久が半笑いの顔で固まっている。

「とにかく、あんまりお店をあけるわけには行かないから戻ろう」

「う、うん」

僕と明久は茶葉と餡子を抱えて教室に戻った。

第一十四問 恋する人の思考回路はどこか狂つたると思つ……

バカテスト 物理

問『原子核において、プラスの電荷を持つ陽子を結びつける働きを担つている電荷がゼロの粒子の名前を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『中性子』

教師のコメント

正解です。ちなみに、原子核に陽子を一つしか持たない水素の原子核には中性子はありません。

吉井明久の答え

『重力子』

教師のコメント

物体を結びつける 重力と、吉井君にしてはまともな答えですね。ですが重力子は、重力の伝達を担うとされている素粒子で、現在でもまだ見つかっていない理論上の素粒子です。

鮎川蓮の答え

『反陽子』

教師の答え

そんなものが原子核の中に存在していたら、地球は大変なことになります。

土屋康太の答え

『故障したコピー機』

教師のコメント

最近土屋君の考えが読めるようになってきたと思っていた先生が
甘かったようです。

鮎川蓮のコメント

陽子 用紙、電荷 電化（製品）

第二十四問 恋する人の思考回路はどうか狂つてると思つ……

明久を襲っていたチンピラをボロボロにしてから一時間がたつた。

「明久、そろそろ四回戦だ」

「え？ もうそんな時間なの？」

もう時刻は午後二時を回っている。

喫茶店での仕事が忙しくて、あつといつ間に時間は過ぎていた。

「あれ？ アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？ 実は私達もそろそろ出番なんですよ」

島田さんの姫路さんがこんなことを言つてゐるけど、僕の記憶が確かに明久と裕一の次の対戦相手は島田さんと姫路さんペアだつたはずだけど……。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこにかいっちゃつの？」

葉月ちゃんが明久のズボンの裾を握つてゐる。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんはこれから大事な用事があるんだ。だから大人しく待つていないとダメだ」

雄一が葉月ちゃんを説得している。前から思つてゐたけど、雄一は意外と子供の扱いに慣れているところがある。

「う～でも～」

葉月ちゃんはそれでも頬を膨らませている。

「その代わり、いい子にしていたり」

「雄一は何か交換条件を出すようだ。多分胡麻団子をサービスするとかだと

「バカなお兄ちゃんオトナの『トーク』を教えてくれるからな明久を生贊にしやがった。

「葉月お手伝いしてくるですっ」

「ち、違うんだよ葉月ちゃん！ 僕には君が期待するほどの財力はないんだ！ ねえ、聞いてる？」

明久の静止も聞かずに早速喫茶店の仕事に戻る葉月ちゃん。

「アキ、ちょっと校舎裏まで来て」

島田さんが怖い声を出して明久の肩を掴んでいる。

傍から見れば妹を守る立派な姉に見えるのだろうけど、おやぢくその実態は自分の妹にすら嫉妬をするような恋する乙女（般若？）だ。

「美波ちゃん、ちょっと待つてください」

姫路さんが割り込む。明久は助かったと思つていそうな顔だけれど、おそらくその逆だ。

「次の対戦相手は吉井君たちのようですから、召喚獣でお仕置きたほうが遠慮なく出来ますよ？」

笑顔での死刑宣告。見てているだけでも怖い。

「ちょっと待つて！ 僕の召喚獣はダメージのフィードバック付きなんだよ！？ 姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に

「

「フン、望むところだ」

「雄一！ 勝手に僕の生命を左右しないで！」

「雄一、ここで明久が死んだら喫茶店にも影響が

「明久なしでも店が回るようにシフトは考えてある」

「 なら別にいいか」

「蓮！ そこは僕の味方をしてえ！」

「上等よ。早く会場に向かいましょうか。アキがどんな声で啼くのが楽しみだわ」

島田さん。その発言はぎりぎりだと思つ。いろんな意味で。

「いいだろ？ センまで言つなら、明久に何処まで大きな悲鳴を上げさせられるのか、じっくりと見せてもらおうつか」

「雄二、早々に明久を見捨てた僕が言えることじゃないかもしけないけど、そんなにあると本当に明久が死んじゃうよ…………」

時は流れて

「蓮よ、そろそろワシらも四回戦の時間じゃぞ」

明久たちが出て行つてからおよそ10分。僕と秀吉のペアにも四回戦の時間が来たようだ。

「次の四回戦に勝てば準決勝じゃったの」「

「うん。そうだけど相手も四回戦まで来るような人だから相当成績もいいはずだし、気を引き締めていかないとね。教科も古典だし」

説明すると、僕は数学や英語が得意なんだけど、国語系、つまり現国と古典の点数は余りよくない。せいぜい350点くらいだ。

召喚大会会場

「やあ。君達が勝ちあがつてきたのかい？」

「久保君？」

意外だ。久保君はこんなイベントにあまり興味はなさそうだったのに。

「どうして久保君はこの召喚大会に？　あまり目立ちたがりには見えないけど」

「……賞品がね」

…………明久のためにも勝つてあげないと。

「しかし、久保のペアは誰じゃ？　同じAクラスかの？」

「秀吉、Aクラスの佐藤美穂さんだよ。ほら、Aクラスとの一騎討ちのときに明久を物理でボッコボコにした」

「ああ。そうじゃったの」

どうも佐藤さんは影が薄いようだ。

「でも、確かにいいチームを組んだね」

「？　何故じゃ？　そこまで仲が良いよつこは見えんのじやが」

「久保君は文系の教科が得意だよね」

「ああ、そうだね」

「秀吉、佐藤さんは物理の点数が良かつたよね」

「そうじゃが……まさか！」

「そういうこと。久保君に不足している理系の点数を理系が得意な佐藤さんが補つて、佐藤さんが苦手である文系教科を久保君がフォローする。コレが久保君たちのペアの戦い方だね」

仲のいい人とペアを組んで、チームワークで勝ちあがめうとするペアもいれば、こういう風に自分の穴を埋めてくれる人とペアを組む方法もありだ。

「では、始めてください」
立会いの先生の声がかかる。

「「「試験召喚」」」

四人全員がいっせいに召喚獣を呼び出した。

『古典 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉 311点 & 64点	VS	Aクラス 久保利光&佐藤美穂 396点 & 224点
---------------------------------	----	-------------------------------

僕と秀吉の点数を足しても、久保君一人にすら届いていない。

「「」」まで点数差があるとは思わなかつたよ
「済まないけど、ここは譲つてもうりうよ！」
「そつは行かんのじや！」

二回戦のときみたいに一対一に持ち込むことは出来ない。

それぞれが不利な戦いを強いられる上に秀吉は佐藤さん相手でも勝つことは出来ない。

「秀吉！」
「分かつたのじや！」
「？」

秀吉が相手の召喚獣に突撃する。

まさかここまでバカ正直に突進してくるとは思わなかつたのか、久保君、佐藤さん一人とも反応が遅れた。

「セイヤツ」

「くつ」

秀吉の召喚獣は佐藤さんの召喚獣に切りかかる。

佐藤さんの召喚獣の得物は鎖鎌。距離を詰められると武器の特性が生かし辛い。

「よそ向いている暇はないよ！」

「勝負だ、鮎川君」

僕の召喚獣は、久保君の召喚獣に向かつて走り出す。
久保君も、無理に佐藤さんと対峙している秀吉を狙おうとはせずに、
僕と一対一に持ち込むつもりらしい。点数には開きがあるし当然といえば当然。

「こつちは一対一に持ち込むつもりはないけどね…」「なにこつ…」

久保君の召喚獣に切りかかる、と見せかけて体当たり。
態勢が崩れた久保君を放つて、秀吉の元へ走る。

「秀吉ー ジャンプー！」

僕の声で秀吉の召喚獣が思いつきりジャンプする。

僕の召喚獣は秀吉が跳んだことで出来た隙間に体を入れて、佐藤さんの召喚獣の足を掬う。

「え？ うわっ！」

転倒した佐藤さんに秀吉の召喚獣が大上段から長刀を振り落とす。僕の召喚獣もすぐに立ち上がり、佐藤さんの召喚獣に向かって右手の剣を突き出す。

『古典 Aクラス 佐藤美穂
0点』

何とか佐藤さんの召喚獣を倒すことが出来た。

「くつー。
「なるほど。最初から一対一に持ち込むつもりだったのかい？」
「そういうことじや」
「久保君の召喚獣の体勢さえ崩せれば行けると思ったからね」

『古典 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉
309点&51点

VS

Aクラス 久保利光
378点』

合計点数の差は18点。

さつきの体当たりで久保君の点数を削れたのが良かつた。

「秀吉、無理はしないで。一対一で攻めることに意味があるんだか

ら

「了解じや」

「フツ、そう簡単には負けないよ！」

三人が一斉に走り出す。

もちろん僕の召喚獣が前を走り、秀吉がそれに続く形だ。

「おりやつ！」

「セイツ！」

僕と久保君の召喚獣が切り結ぶ。お互に武器は片手持ち。両者共にダメージもないますれ違つ。

やっぱり、一対一のが利いてる。久保君は両手の武器を両方僕に使うことが出来ない。もしそんなことをしてしまつと、秀吉に致命的な隙を曝すことになるからだ。

後ろから迫る秀吉の一撃は久保君の召喚獣にあっさり片手で受け止められてしまつた。

「秀吉、久保君の片腕を抑えて！」

「分かつたのじゃ！」

秀吉の召喚獣が、久保君の召喚獣の左腕を両腕で押さえ込む。

「くつ、離してもらうよ！」

「させると思つ？」

久保君の召喚獣が振り上げた右手を、僕の召喚獣が剣で押さえる。今動けるのは……僕の召喚獣の左手！

「つおりやあつ！」

渾身の力をこめて、僕の召喚獣が左手を振るつ。

鋭利な刃物のような指先は、久保君の召喚獣を切り裂く。

「それつ！」

「ぐつ！？」

力が弱くなつた久保君の召喚獣を僕の召喚獣が本田一回田の体当たりで弾き飛ばす。

「秀吉い！」

「はああつ！」

転んだ久保君の召喚獣に秀吉が長刀を突き出す。

長刀は久保君の召喚獣の胸に刺さり、久保君の召喚獣はゆっくりと消えていった。

『古典 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

298点&33点

V S

Aクラス 久保利光
0点

』

『勝者、Fクラス、鮎川蓮、木下秀吉ペア』

先生の勝ち名乗りを受け、僕達の準決勝進出が決まった。

Fクラス

四回戦を終え、喫茶店に戻つてみると更に混雑していた。

店の中には明久や姫路さん達の姿もある。

「ただいま」

「あつ、蓮、お帰り。どうだつた？」

「勝つたよ」

「さうか。とりあえず早く着替えて手伝ってくれ」

明久と話していると、雄一が催促する。

店内はお客様でごった返しているので、店側としてはまさに『猫の手も借りたい』状態だ。

「そういえば、明久ペアと姫路さんペアはどうちが勝つたの？」

明久を処刑するとか何とか言っていたので気になる。

「……雄一だね」

「？ 明久は同じペアなのに負けじやつたのかの？」

「坂本の一人勝ちね」

大体分かつた。

「とりあえず、仕事に戻ろうか。さつきから変な視線も感じるし」
おそらくはウエイトレス担当でやってきたお客様の視線なんだ
ろうけど、気持ちが悪い。出来ることなら視線を感じた瞬間に退場
(処刑)させたいところだ。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんね」

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げのためにも頑張りますか！」

「はいっ！ 葉月も頑張りますっ」

「さて、じゃあ秀吉、チャイナドレスに着替えて

「明久よ、ワシは一応男なのじゃが……」

ついに秀吉の言葉に『一応』が付くようになった。

喫茶店の売り上げのために、しぶしぶ着替えに行く秀吉。

その後姿を見ている僕に、明久が近づいてきて、

「蓮もチャイナドレスに着替えないと」

ふざけたことを抜かしやがった。

「……どうして僕が着替えないといけないのか三文字以内で説明してくれるかな？」

「短っ！ それもう理由聞く気ないよね！」

「理由を聞く気もないし、チャイナ服を着る気もない。どうしてもつて言うんなら……」

「言つんなら？」

「……明久や雄二、ムツツリー二も道連れにする」

「「「着なくていいです！」」

言つた瞬間に名前が上がつた三人からすゞい速さで返事が来る。
と、いか自分が着たくないのには無理やり着せようとしてた
んだ……

第一十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いって奴クラスに一人は絶対

PCのファイルをいじくって、ディスク容量をあけようとしたら、今まで使つてたChromēが使えなくなりました。

さうして新しくインストールすらできないといつ状況（泣）

仕方が無いので、これからは動きの遅いIEで生きていくます……

第一十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いって奴クラスに一人は絶対

バカテスト 現代社会

問 「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によつて社会のあらゆる部分における活動に参画する機会が確保され、もつて男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を教授することができ、且つ、ともに責任を担うべき社会』のことをなんと言つてか答へなさい。

姫路瑞希の答え

『男女共同参画社会』

教師のコメント

正解です。この社会を実現するために1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定されました。男女が平等な権利を持ち、お互いに助け合える世の中が早く来てほしいのですね。

鮎川蓮の答え

『文月学園において実現できないもの』

教師のコメント

間違いですが否定できません。

吉井明久の答え

『美、美波様！ どうか命だけは』

坂本雄一の答え

『しょ、翔子、俺は何もやつてなギャアアアアアア』

教師のコメント

ますます否定できません。

第二十五問 テストで保健体育の点数だけやたら良いって奴クラス
に一人は絶対いるよね

「それじゃ、準決勝に行って来るね」
「僕と秀吉も時間だから抜けるね」
「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね!」
「わかつてるつて」

大繁盛の喫茶店の中で動き回る」と一時間。いよいよ準決勝の時間になつた。決勝戦は一日の午後に予定されているから次の試合が今日ラストになる。

そして分かつてはいたけど僕への応援はないんだね……

「？ 蓮、どうしてうなだれておるのじや？」

「……いや、人気の格差を思い知らされていたんだ」

「明久、蓮。次の試合は特に負けられないからな」

雄一が発破をかけてくる。

雄一の目は、今までで最上級にマジだ。それもそのはずで次の相手は、

「霧島さんと、木下君のお姉さんが相手なんて、大変そうですね……」

…

一年生の成績上位筆頭コンビ。優勝候補の霧島さん、優子ペアと明久たちが当たる。

「大丈夫だよ。雄一に作戦があるみたいだし」

「まあな。あんなバケモノどもとまともに勝負するほどバカじやない。うまくやつてやるぞ」

雄一の作戦か。

秀吉と優子を入れ替える、とか？

いくらなんでもそんな単純な訳ないよね。前の試合戦争でも姉弟入れ替わりネタは使ってるんだし。

「で、雄二、作戦つてどんなの？」

四人で会場に移動しながら明久が尋ねる。

「今日は俺達だけじゃなくて秀吉や蓮、ムツツリーーにも協力してもらひ」

嫌な予感。

「秀吉とムツツリーー？」

「ああ。あの一人には弱点はないが、付け入る隙はある」

「狙いは秀吉の姉、木下優子だ。奴を利用して一気に戦局を傾ける」

「秀吉のお姉さん（優子）？ そんなことしなくても、雄二が霧島さんとうまくやつてくれればいいと思うんだけど」

「つるさい黙れ」

不機嫌そうな雄二に会話を打ち切られた。

僕や明久のことは嬉々としてからかうくせに。

「で、雄二、僕が協力する内容つてのを教えてくれないかな。まだ聞いてないんだけど」

「……お前には試合直前で話す。お前はバックアップだから本命の作戦が成功してくれれば何もしなくて良い」

その本命の作戦つてのが怪しいというか不安というか。
もひ、優子に秀吉の入れ替え作戦は通用しないと思つんだけど……。

「とにかく気合を入れる。この戦いに負ければ明久は大好きな姫路を失うし、俺は今後の人生を失う。命がかかってると思え！」

「その『大好きな』てのは止めてほしいけど了解！ 絶対に負けるもんか！」

「……先に試合するのは僕と秀吉なんだけど」

「一人して盛り上がるのはいいけど、僕と秀吉のことも忘れないでほしい。」

「そうだったな。お前らの相手は誰なんだ?」

「常夏コンビ」

僕が言い放った瞬間、明久と雄一の表情が固まる。

「どうしたの?」

「……スマン」

何故いきなり謝るの! なんかすゞく不安なんだけど!

「まさか常夏コンビがここまで上がってくるとは思わなかつた。てっきり生活指導室に監禁されているものとばかり……」
いくら鉄人先生でも召喚大会くらいは出してくれると思つけど。

「別に常夏コンビだからどうつてことはないと思つただけど」

「次の教科は保健体育だ」

ゑ?

「ちょっと待つて、準決勝なんだよ? 何で態々僕の苦手教科を持ってきたのさ!」

「いや、翔子に婚約を取り消させるためには優勝しないといけなくてな、準決勝で蓮が負けてくれれば優勝しやすいと思つた」

「バカヤロー!! それじゃあ僕達は最初から決勝に進ませない氣

だつたな！」

「いや、本当にスマン。まさかお前らの相手が常夏になるとは思わなかつた」

「へ、常夏コンビにだけは負けたくないのに！」

「……常夏に、負ける僕ってどうなのよ……」

「蓮よ、そんな戦う前から諦めるでない」

秀吉が励ましてくれるけど、僕の保健体育の点数で常夏をじつじつ出来るとは思えない。仮にも向こうは3年の△クラスなんだし。

「と、とにかくお前らが負けても俺達が決勝で敵を取つてやるからきつちり死んで来い！」

雄一に送り出されてしまった僕達はステージへ。

「秀吉」

「なんじや？」

「とりあえず作戦」

秀吉と、試合開始時刻まで、可能な限り作戦会議をする。ここが正念場だ。

「おい、あいつらFクラスの奴だぜ？」

「おじおじ、Fクラスのクズがどうやって準決勝まで上がってきたんだあ？ 八百長があ？」

僕に一度もボコボコにされたくせに威勢だけは良い常夏コンビ。

僕達がFクラス所属ということで召喚大会では負けることはないと

思つてゐるんだね」。

実際保健体育では勝てないけど。

「八百長なんか出来るわけないでしょ。けやんと実力で上がつてきましたよ、先輩」

「どうだかな。実力でFクラスのゴミ共が勝ちあがつてこれるほどこの召喚大会は甘くないんだよ！」

「やうですね。……アンタ等も教頭のバックアップを受けてるんだううしな」

「「「」」

一応観客や立会いの先生には聞こえないような声量で言い合へ。

「手前、氣づいてやがつたのか」

「まあ、一応。僕自身にも教頭は接触してきましたしね」

「……ちつ

「聞いておきます。教頭先生に協力している理由はなんですか？」
「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そ
うすりや、受験勉強とはおさらばだ」

何の臆面もなく坊主の方（確かに夏川だったと思つ）は言い切つた。

「…………そっちの、常村とか言つのも同じ理由か？」

「まあな

くだらねえ。

こいつらはそんな理由で僕達の清涼祭をぶち壊そうとしていたつて
わけか。

「秀吉

「了解じゃ

「こいつらはなんとしてもここで潰す！！

「では、始めてください」

「「「「試験召喚」」」

常夏の召喚獣はオーソドックスな剣と鎧の装備。
根は腐つても高得点者なのか質はよさそうだ。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

198点&207点

』

200点前後。やはりAクラスに入っているというだけはある。

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

29点&69点

』

「ちりとの戦力差は明らかだ。僕なんてこれでも血口最高点なのに
(保健体育で)。

「「ギヤハハハハ！ 何だその貧弱な点数は…」」

つい。

「こんな奴らに掛ける時間が勿体ねえな。それだと終わらせてやる
ぜー！」

坊主の召喚獣が僕に、モヒカンの召喚獣が秀吉に突っ込んでくる。

僕と秀吉は、その一撃を避け、時に召喚獣を交差させながらやり過ごし続ける。

「おーおいなんなんだよ。わざから逃げてばつかじやねえか！ どうせ負けるんだからさつとやられやがれ！」

狙い通り、常夏は良い感じにヒートアップしてきた。武器での攻撃にこだわり、動きもだんだんと力任せになってしまっている。

その上、僕と秀吉が牽制のために繰り出しているパンチやキックを気にも留めていない。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

151点&166点

』

二人ともだいぶ点数が減ってきた。

それに対して僕と秀吉は基本的に相手の攻撃に当たらないことを最優先に動いているため、召喚獣は殆ど消耗していない。

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

25点&62点

』

そろそろ試合を始めて10分。

「おい、どうして俺達の点数がこんなに減つてやがんだ？」

「常村、何言つて……マジかよー！」

常夏もよつやくこの事態に気づいたらしい。

「秀吉ー！」

「了解じゃ！」

秀吉に声を掛けて、作戦の開始を合図する。

秀吉は基本的に今までと同じ動き。ただ、今までよりもあまり現在位置を動かないようにしてもらひ。

「やつ やと死ねや！」

「つおつと！」

僕は坊主の召喚獣を相手しながら、気づかれないように移動していく。

そして、僕、坊主、モヒカン、秀吉の召喚獣が一直線に並んだ。

「そりゃ あつ！」

「なつ！ くやつ！」

僕は右手の剣を思いつき投げつける。

まさか自分の得物を投げてくるとは思わなかつたのか、坊主は完全には避けきれずに剣に掠つた。

「へつ！ そんなんで倒せると思つてたのかよ！」

「思つてないし、倒さうと思つて投げた剣じやない……アンタには（・・・・・）ね」

「何を言つて『ぐあつー』何つ……！」

坊主の召喚獣の後ろでは、モヒカンの召喚獣の背中に僕が投げた剣が深々と突き刺さっていた。

「秀吉！..」

「！」の好機、逃しはせん！..」

モヒカンの召喚獣の動きが止まり、その頭に秀吉の召喚獣が長刀を

突き出す。そのまま首を飛ばすように横に振るい、モヒカンの召喚獸は消滅した。

「ナイス！ 秀吉！－！」

「くそ、常村！ よそ見していいのか！」

「ちゃんと見て うつ！」

坊主の本体から一瞬目を離した僕の目に何かが飛び込んできた。

これは 砂利？

「お前を倒して、形勢逆転だ！」

坊主が僕の召喚獸に剣を振り下ろす。その剣を左手で横からはじくように受け流す。

その後も続く坊主の猛攻。この際小さな動きで繰り出されるパンチは無視する。

召喚獸の踏み込み、振るわれる剣。その微かな『音』を頼りに回避し続ける。

「くそっ！ 見えてねえはずなのになんて当たらねえんだよー！」

「……僕だけに集中してて良いんですか？ 先輩」

「しまった！」

坊主の召喚獸が振り向いたときには、既に秀吉の召喚獸が長刀を振りかぶっていた。

キンッ！

秀吉と坊主が鍔迫り合いをする。
そのがら空きの背中を、左手（忘れている人もいると思つた）武器

になつてゐる）で切り裂いた。

『保健体育 Aクラス 常村勇作&夏川俊平

0点& 0点』

『保健体育 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

6点& 32点』

『2-F所属。鮎川蓮、木下秀吉ペアの勝利です』

先生の勝ち名乗りが上がる。

「そ、そんな……」

「まさか……」

自分達が負けるなんて微塵も思つてなかつたのだろう。

常夏コンビはその場で崩れ落ちた。

「『戦いは、正を以て合、奇を以て勝つ』、冷静さを欠けば敵の奇法に対抗できませんよ。先輩」

常夏コンビの敗因は、冷静さを欠いて、力任せに攻めてきたことだ。
『戦いは、正を以て合、氣を以て勝つ』。つまり、戦いは正攻法で敵と対峙し、戦況に合わせた奇法で勝利を掴むもの。僕達は防御に徹するといった正攻法で対峙し、武器をペアが戦つている相手に投げる、という奇法で勝つた。

常夏コンビが冷静に攻めてきたら、こちらも作戦を実行にくかつただろう。

「しかし、よく勝てたもんだな」

僕達がステージから降りると、雄一が驚いた表情で近づいてきた。

「そりや僕達だって常夏コンビには負けたくないからね。ちょっと博打になるけど倒せそうな策を考えたんだよ」

「そりや結構なことで。はあ、これで明日の決勝は蓮たちとか『その前に霧島さんと優子に勝つてからね』

「ああ。任せろ。絶対に勝つ!」

いよいよ、明久&雄一の試合が始まる。

第一十六問 ラブコメ的展開つて、よく死人が出ないよね。

バカテスト　日本史

問　『南北朝時代を舞台に、鎌倉幕府の滅亡や、南北朝の分裂、室町幕府2代将軍足利義詮の死と、細川頼之の管領就任などを描いた軍記物語を何と言つでしょつ』

姫路瑞希の答え

『太平記』

教師のコメント

正解です。太平記は、騒乱を描いていますが、名前の「太平」は平和を意味するため戦いで命を落とした人々への怨霊鎮魂的な意味もあるといわれています。

鮎川蓮の答え

『朝鮮戦争』

教師のコメント

南北違いです。

土屋康太の答え

『…………興味が無い』

教師のコメント

興味が無くても、テストですので、しっかり考えて答えを書いてください。

鮎川蓮のコメント

軍記物は女性がほぼ出てこないから。

吉井明久の答え

『枕の源氏』

教師のコメント

……度肝を抜かれました。

第二十六問 ラブコメ的展開って、よく死人が出ないよね。

常夏「ンビとの準決勝（保健体育）に辛勝した僕と秀吉は、雄一と明久の応援に来ている。さつきから秀吉の姿が見えないのだけれど、雄一の言つていた『作戦』に関係あるんだろうか。

『お待たせいたしました！　これより準決勝第一試合を開始します！』

審判兼立会いの先生の声が会場に響く。

『出場選手の入場です』

階段を上がつて、明久と雄一が登場した。

向ひの側には霧島さんと優子の姿も見える。

「…………雄一、邪魔しないで」

「そりはいくか。俺にはまだやりたいことがたくさんあるんだ！」

そこまで霧島さんと行きたくないなら最初にしつかり断つておけばいいのに。

「…………雄一、そんなに私と行くのが嫌？」

き、霧島さんの必殺上目遣いだ！

可憐な少女にここまでされて無下に断れる男はもはや人間じゃないと思う。

「ああ。嫌だ」

人間じゃない。

「…………やっぱり、一緒に暮らして分かり合つ必要がある」

霧島さんもあまり気にしてない様子で、すぐに返す。

それにもしても、この大歓声で聞こえていないとは言つても、こんな

大胆なことをこれだけの人数が見ている前で言ってのける霧島さんは相当な勇者だと思う。それか雄一以外目に入っていないか。

僕的には後者だと思う。

「ハツ！ 残念だつたな。そんな寝言は俺達に勝つてから言つ」とだ！」

雄一がこんな台詞を言つとものすゞく悪役臭がすると思つのは僕だけだろうか。

「……分かつた。そうする」

雄一、霧島さんの痴話喧嘩も終わり、いよいよ試合が始まる。

「雄一、作戦はどう？」

明久が雄一にささやいている声が聞こえる。

なぜ歓声鳴り止まぬこの会場で選手のささやき声まで聞こえるかといふと、僕がいるのはステージ脇の明久たちに一番近い位置だからだ。ボクシングで言うところのセンコドの位置にある。

「任せおけ、抜かりはない。頼むぞ秀吉！」

雄一が優子に向かつて秀吉と呼びかける。

悪い予感が当たつたようだ。

「……ふふつ」

優子が口に手を当てて笑っている。

そりや本人からすれば爆笑物だと思つけど。

「秀吉」もつ木下さんの演技はいいから、早く僕らと

「秀吉？」秀吉つてあの『ゴリ』の「」と？」

優子がステージ脇の一角を指差す。そこにあったのは

「ひ、秀吉ー？ どうしてそんな姿にー？」

ボロボロにされた拳句に手足を縛られた秀吉の姿だった。
優子……仮にも自分の弟を、ゴリ呼ばわりは止めよう。

「バ、バ力な！」

雄一が目を大きく見開いている。

「……雄一の考えていくことくらい、私にはお見通し

霧島さんが笑みを浮かべている。

明久は、まるで『今日は幼馴染という立場が仇になった』みたいなことを考えてしそうだけど、別に幼馴染じゃなくても試合戦争のときの雄一を見てれば気づくと思つ。

「ま、匿名の情報提供もあつたんだけどね

優子が妙なことを言つた。

匿名？ 僕はしてないし、秀吉やムツツリーーがばらすはずもない。
僕ら以外だと、常に雄一と明久をマークしている相手……ああ、教頭か。

『蓮、俺達を売ったな！』

雄一が田で訴えてくる。

『僕じゃないし、秀吉やムツツリーーでもない。おれは常夏口
ンジを操っている黒幕だと思つ

僕も田で返事をする。

「雄一は思々しそうな顔をした後、黙り込んでしまった。

「く……すまぬ、雄一。ドジを踏んだ……」

転がされていた秀吉が起き上がって唇を噛んでいる。別に秀吉がムツツリー並みの隠密行動を取れていたとしても、今回結果は変わらなかつたと思う。

「…………（パシャパシャパシャパシャー）」

「「ムツツリー何時の間に！」」

ムツツリーがカメラを構えて一瞬のうちに現れたかと思つと、縛られている秀吉の姿をカメラに収めていた。

「撮影なんてしないで（その[写真]）、早く（後）秀吉の縛（壳）を（つて）解いて（欲）あげて（しこ）よー」

「明久、本音が混ざつてゐるぞ」

もう、明久は試合前の緊張感といったものがないんじゃないだろうか。

「…………了解」

ムツツリーは明久の言葉に頷くと（おそらく一つの意味で）秀吉に駆け寄つて、その縛をすばやく解いた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

優子の降伏勧告。雄一は顔をゆがめていたと思つていたら、思いのほか涼しげな顔をしている。

「フツ、作戦が一つしかないと思つていたのか？」

こんなことを言つてゐる。

(蓮、お前の出番だ)

雄一がこちらに声を掛けてくる。

(何をすればいいの?)

秀吉が失敗した時用のバックアップといつてたけど、僕は優子にも霧島さんにも化けることは出来ない。

(木下姉を口説け)

「もうお前ら負けちまえ!」

つい大きな声が出てしまう。

うわっ、優子がものすくへ怪しんでこちらを見ている!

(とこかくやつてくれ、頼む!)

(どうして優子なのさー、それに口説けなんて、そんなことしたら殺されるよ!)

(大丈夫だ。口説かれて嫌な気持ちになる女子はない)

(こんな大勢の前で口説かれて良い気分になるのは雄一に口説かれた霧島さんくらいだよ)

(変なことを言うな! とにかく俺達の勝利のために頼む!)

(僕の命が危険なんだよ!)

こんな大勢の前で優子を口説いたりしたら、冗談抜きで殺されかねない。

(俺が口説けば木の下と翔子に殺されるが、お前が口説く分には大丈夫だ!)

「その自信はどうから来るんだ!」

「せつから何を話してこのかじりへ。」

「「うつ……」

優子が話しかけてくる。

(とこかく、こつなつた以上やるしかない。)
(くつ……分かったよ)

一度胸の前で十字を切手から優子に向き合いつ。

「優子」

「……何よ

「……初めて会つたときから、優子のことが好きグオフォッ……」

な、何て素早さだ……見えなかつた……

「成程。惚れた相手に今まで言われば照れ隠しもしたくなるか」

「うや、うやにをつけつ……」

意識がなくなる直前に、雄一と優子の話し声が聞こえた気がした。

「あ、気がついた？」

僕が目を開けると、目の前に優子の顔があった。

えっと、僕は今寝ていて、顔が向いている方向は上のよう…。

それなのに、優子の顔が正面に見えるってことは優子は僕を上から覗き込んでいることだ……って、この体勢は…！

体を起こして確認してみると、さっきまで僕の頭があつた位置に優子の足があるわけで。

所謂『膝枕』という奴だ。

ヤバい。確認してみると、メチャクチャ恥ずかしい。

「えっと……どれくらい？」

「な、何が？」

「え、そ、その……」

「何よ」

「……どのくらい膝枕してたの？」

「ふえ！ え、えっとまだ5分くらいよ

「そう」

（思つたより早く気がついたやうなんだから……）

優子が何か呟いている。

「え？ 何か言った？」

「なんでもないわよ！」

何故僕が怒られるんだろ？

「そういえば、準決勝はどうなった？」

「え？」

「えつと……アタシ達の負けよ」

「えええつ！ なんで？」

真っ向勝負で勝てる相手ではなかつたから、まだ何か作戦でもあつたんだろうか。

「……それは、本人か、クラスの人から聞いて頂戴」
優子の表情が微妙なものになる。
まあ、優子の負けず嫌いも筋金入りだから、負けたことにショックを受けているのかもしれない。

「それじゃあ、雄一と明久を探してくるね

「うん」

優子と別れ、明久たちを探す。

『霧島さん！ 雄一には決勝もあるからクスリは許して！』

僕がステージの上に上がるのと、明久の叫び声が聞けてくるのはほぼ同時だった。

「……えつと、どういう状況？」

「あ、蓮！ 田が覚めたんだね！」

「……僕が気絶したのはそここの田が虚ろになつてゐる奴のせいなんだけど」

まあ、もう既に報いは受けているみたいだから許してあげないこともない。

「とりあえず、秀吉は先に喫茶店に帰つててよ。雄一は僕と明久で

何とかしておくから」

「分かつた。お主達もあまり遅くならんようこの」

秀吉は先に喫茶店に戻つてもう一つ。

秀吉曰当てで喫茶店にやつてくるお密さんもいるから、あまり遅くなると売り上げに影響するかもしねり。

明日当てで来る男つていつのもちよつと、いやかなり違和感があるんだけど。

「明久、雄二はどうして死んだ魚みたいな目をしてるの？」

「えつと、それは力クカクシカジカ」

僕が優子に氣絶させられた後、明久は雄二にプロポーズ（嘘）を無理やりやらせて、霧島さんを懐柔したらしい。

そもそも試合後に霧島さんが雄二を持ち帰りうとした結果がこれか。

文月学園の女子には多少思考回路がおかしい人が多い気がする。いや、FFF団のことを考へると、男子もちよつとおかしい。

「でも、霧島さんに変な薬を盛られたつてことは、雄二は今日中の復帰は難しそうだね」

使われた薬の種類によつては明日もこれないかもしねり。

「いや、大丈夫だよ」

明久はそんなことを言つと、雄二の首根つこを持つて、トイレに入つていった。何をするつもりなんだろう。

「ホラ、雄一、起きろー。」

「ちょ

明久は雄一を洗面台の前に立たせたかと思つと、いきなり雄一の腹を殴つた。

ガードも何も取らずに、男子高校生の一撃をもろに受けた雄一は洗面台に吐いている。

「……明久、いくら普段酷い田にあつてるからって、いきなりそれは酷いんじゃないかな」

「違うよー。これは雄一に薬を吐かせるためにやつたんだよー。」

知つてるよ。

ただ、パンチを繰り出す明久の顔があまりにも嬉々としていたものだから。

「じゃあ、次は日陰に寝かせるかして……」

「起きろつってんだよー。」

「あ、明久あ？」

「あ、明久あ？」

明久は雄一の顔を、水を張つた洗面器に突っ込んだ。

そこは普通日陰や風通しの良い場所に寝かせて、目が覚めるまで待つものだとワタクシは思つわけですが、どうやら文翔学園では違うらしい。

「ゴボゴボゴバア！……ハツ！……」

そんないい加減な処置で復活する雄一も相当常識が通用しないと思う。

「明久、貴様……」

「はいはい、積もる話は教室に戻りながらじょつ

雄一も復活したことだし、早く手伝って戻らなきゃ。

あんまり遅くなると、明久が島田さんや姫路さんに殺されかねない。

教室へ移動中

「明久、今日といつ今日は貴様をコロス」

「あはは。やだなあ雄一、目が怖いよ」

雄一が明久を殺すなら、僕も雄一を殺させてもらひ。

「だいたい、雄一の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないのか。相手はあの霧島さんなんだから、十分考えられた事態のはずだよ? 「ぐつ。それを言わると反論できん……」

何度も言つけど、別に霧島さんじやなくとも考え方くと思つ。実際に雄一の作戦を読んで霧島さんと優子に匿名で情報提供している人もいるんだし。

「ところで、姫路や島田は教室にいるのか?」

「あっ! そうか、忘れてた!」

「? 確認はしてないけど、いるんじゃないの?」

秀吉を帰らせてからだいぶ立つし、喫茶店も繁盛し始めてから、そんなんに多くの人が休憩できるわけじゃなくなつたからクラスの大半は働いているはずだ。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずなんだが……」

「常夏コンビも死んだからな……」

『勝手に殺すなあ!』

はつ! 今何か聞こえた気がしたぞ……気のせいか。

雄一が気にしているのは喫茶店への妨害活動のことだ。今日の午前

中から常夏コンビが店への風評被害をもたらしてくれたけど、その常夏コンビが召喚大会で敗れた今、そして雄二と僕という抑止力が教室から離れている今が仕掛けるには絶好のタイミングのはずだ。

「…………雄二」

教室の前までやつてくると、出入り口の扉の前に立つていたムツツリ一が駆け寄ってきた。

「…………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええ！ 姫路さん達が！？」

「しまった！ やられたか！」

「やはり、俺や明久、蓮と直接やりあつても勝ち目がないと考えたか。当然といえば当然の判断だな」

おそらく教頭が差し向けたであろうチンピラ二人組をボコボコにした時点で、次は僕達の周りを狙つてくると予想できたはずなのに！ 油断した！

「つてそんなことより、姫路さん達は大丈夫なの！？ 何処に連れて行かれたの！？ 相手はどんな連中！？」

「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度僕達に直接ちょつかいをかけてくるか、僕たちが阻止できないタイミングで喫茶店に妨害をかけてくるか。そのどちらかで妨害工作をしてくるとは予想できたからね」

今回は、ウエイトレスを連れ出す方法で来たか。
たしかに僕達の喫茶店の人気が出た最初の理由はウエイトレスのレベルの高さだ。その人気の元のウエイトレスを連れ出されれば、喫

茶店の売り上げにも多少ビルがじやない影響が出るだりつ。

「なんだか、随分と物騒な予想をしてたんだね」

「引っかかることが随所にあつたからな」

学園長室で今回の召喚大会の出場が決まったときから、雄一は何か考へている時間が増えた気がする。おそらく、教頭が黒幕、ということにも気づいてると思つ。

「取りあえず、被害の確認だ。ムツツリーーー、誰がさらわれたの？」

「…………姫路に、島田姉妹。それに木下姉妹」

「ちょっと待つて！ どうして優子が？」

「…………たまたま来ていた」

僕と別れた後、Fクラスに来ていたってことか……。

「…………行き先は分かる」

「本当？ ムツツリーーー」

僕の言葉に無言でムツツリーーーが取り出したのは何かの機械……といつか何かの受信機。

「なにこれ？ ラジオ見だいに見えるんだけど

「…………盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何でもつてるかは聞かないよ

クラスメイトに軽犯罪者がいて助けられるとは思わなかつた。

「さて、場所が分かるなら後は簡単だ。かるべくお姫様を助け出すとしましょうか、王子様？」

「そうだね。僕達のせいだ関係ない人を被害に合わせるわけには行かないよね？ 王子様？」

「その二ヤ付いた目が気に入らないけど、今は雄一に感謝しておく

よ。姫路さんたちに何かあつたら、正直召喚大會ビリの騒ぎじゃ
ないからね」

「……それが向こうの目的だらうがな」

「え？」

「とにかく、今は皆を助け出すことが先決だ。僕と明久、雄一が表
で暴れるから、ムツツリーは隙を見て裏から皆を助けてあげて」

「…………わかった」

「蓮、僕らが暴れるってどうこう」と？

「昔から王子様の役割は一つしかないよね」

「王子様の役割って？」

「お姫様をさらつた悪者を退治すること」

何処の誰かは知らないが、地獄を見せてやる。

第一十六問 ラブコメ的展開つて、よく死人が出ないよね。（後書き）

今回の投稿で、ストックが完全になくなりました。

遅筆ながらも頑張りますので、今後も生暖かく（笑）宜しくお願ひします。

第一十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力つてあります

今回の話は、色々とやってしまった感があります（汗

ありえねーだろ、と思われる方もいらっしゃると思いますが、温かい目で見ていただけると幸いです。

第一十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力つてあります

バカテスト 現代社会

問 「日本国内における、銃は刀剣類の所持を取り締まる法律をなんというでしょ?」

姫路瑞希の答え

『銃刀法』

鮎川蓮の答え

『銃砲刀剣類所持取締法』

教師のコメント

二人とも正解です。鮎川君の答えが、この法律の正式名称になります。

坂本雄一の答え

『翔子とお袋にだけは絶対に持たせてはいけない』

教師のコメント

霧島さんと、坂本君のお母さんに限らず、一般人は持つてはいけません。

吉井明久の答え

『ガンナー以外が銃を装備しても当たらない』

教師のコメント

当たる当たらないの問題ではありませんし、君はいい加減ゲーム

から離れなさい。

第一十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力ってありなんだろ？

前回までのあらすじ

なんだか、僕まで酷い目にあつた召喚大会準決勝が終わり、つかの間の喜びを味わいながら喫茶店の戻つてみると、ウエイトレスがさらわれたって言うじゃないか！

え？ 優子も？

犯人共め……何処の誰かは知らないがただで済むと思うなよ！

あらすじ終

僕たちは、ムツツリー二案内のもと、文月学園から歩いて五分ほどのカラオケボックスにやつてきていた。

「グフウ……」

僕は、カウンターの男性を眠らせたところだ。

「ちょっと蓮！ 何やつてるのさ！」

「え？ この人にも報いを受けてもらつただけだけど？」

「この人は関係ないよね！？」

「何言つてるんだ？」

「え？ そこで雄二まで！？」

どうやら、明久にはどうして僕がカウンターの男を眠らせたのか分かつてないらしい。

「明久……カラオケボックスって、監視カメラあるって知つてた？」

「え？ あるの？」

「うん」

「じゃあどうして店の人は助けてくれないんだよ！ 助けられなくとも、警察を呼ぶとか、学校に連絡するとかしてくれてもいいのに

！」

「そりゃ、ここの店も誘拐犯に協力してるんだろ」

「雄一正解」

そもそも、監視カメラ云々の前に、店に入店した時点で怪しまれるはずなんだけれど。

女の子が抵抗していたり、ましてや氣絶していたりすると、まともな人なら普通に部屋に通したりしないはずだ。さつきからこのカウンターの男は監視カメラで、姫路さんたちの映像を見ている筈なのに何のアクションも起こせなかつた。これは黒。

「てことは、ここでのモニターで姫路さんたちの様子が見れるってことだよね！？」

言つが早いが、明久がカウンターを乗り越えてモニターを覗き込む。

「あれ？ この部屋だけ砂嵐だよ？」

……完全に黒じじゃないか。

監視カメラが壊れているのにその部屋に通すなんてありえない。しかも、他の部屋には誰もいない。

「貸し切つたような」

隣で監視カメラの様子を見ていた雄一が呟く。

そう。いま、このカラオケボックスは犯人達の貸しきり状態だ。つまり

「「思いつきり暴れられそうだ」」

取りあえず、姫路さん達が捕らえられている部屋も分かつたので、その部屋へと急ぐ。

『さてどうする？ 坂本と 吉井に鮎川だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『まで。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな』

『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『ああ。出来れば事を構えたくないんだが……』

『気持ちは分かるがそもそも行かないだろ？ 依頼はその三人を動けなくすることなんだから』

僕たちは、ムツツリーーから貰った受信機で、中の様子を確認している。

犯人たちは、やはり誰かに依頼されたらしい。

「雄一、この連中つて」

「ああ。黒幕に依頼されたチンピラだろうな」

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達！ いい加減葉月を話しなさいよー!』

葉月ちゃんと島田さんの声が聞こえる。

優子と並んで、誘拐されたメンバーの中で最高の攻撃力を誇る島田さんも、葉月ちゃんを人質に取られて、碌な抵抗も出来なかつたってことか。

『お姉ちゃん、だつてさー、かつわいーー！』

『ギャハハハ！』

中から聞こえる外道の声は7、いや8人分つて所か。

とりあえず、今は外道が優子たちに危害を加えないかどうか様子を見たほうが良い。

「待て明久、勝手に行動するな。気持ちは分かるが、まずは人質の

救出が最優先だ。ムツツリーーがつまへやるまで待つていろ

「……わかつたよ」

隣では、明久を雄一がなだめていた。

明久は優しいから、こうこうときは我を忘れるほど怒りてしまつと思つ。

僕も、だいぶ頭にきていろけど。

『…………灰皿をお取替えします』

バイクに扮したムツツリーーの声が聞こえる。

『おひ。で、このオネーチャンたけびつするへヤつちやつといいの？』

『だつたらあればこの田乳ちゃんが良いな！』

『あつ、ズリー！ ジヤあ俺一番田ねー』

『俺はこのそつくりな二人がいいな』

『おいおい、お前一人いっぺんに行くつもりかよ』

……ムツツリーーがうまくやつたら、こいつら全員半殺しにしよう。

僕が新たな決意をしていると、更に声が聞こえてきた。

『あ、あのっ！ 葉用ちゃんを話して私たちを帰らせただぞ！』

『だつてさー。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！ や、触らないで』

『ちよつと、止めなさいよー。』

『こんなことして許されると思つてるのー！？』

『あーもう、うつせえ女共だなー』

『』『あやあつー。』『.ー。』

ドンッ！ という何かを突き飛ばしたような音と優子と島田さんの悲鳴。その後数瞬遅れて、テーブルが何かを巻き込み、倒れたよう

な音が聞こえてきた。

「おい明久！」

ふと横を見ると、雄一が中へ入つていいこうとしている明久を止めている。

だが明久は何かトンだよくな顔をしていて、雄一の言葉に耳を貸していない。

「雄一、もう良い」

「蓮！？」

「……仲の奴全員半殺しにしても優子たちは助けられる

僕も我慢の限界だ。

「おじゃましまーす！」

「ちょっと失礼？」

明久と一緒にドアを開けて中に入る。

「よ、吉井君ー…？」

「アキ……」

「れ、蓮……」

身を縮めている姫路さんと、尻餅をついている島田さん。それに、倒れた体を起こしている優子。

大体予想したとおりの光景が広がっていた。

「ハア？ お前ら誰よ？」

入り口付近に座っていた男が声を掛けてくる。

「それでは失礼して……」

明久がその男の手首を握る。そして

「死に腐れやああつ！」

「ほ」ああつ！」

股間を思いつきり蹴り上げた。

「て、てめえ！ ヤスオに何しゃがる！」

鈍い音と共に明久が殴られる。けれど、

「イッシャアアアアッ！」

「じふああつ！」

明久はお返しのハイキックでそいつを床に沈めた。

「てめえ！」

明久に近づくもう一人の男。僕はその男に近づいて、「お前ら、自分の立場が分かつてないようだな」「ぐぼらあつ！」

「全員半殺しだ、クソ野郎」

膝を叩き込んだ後に裏拳で部屋の反対までふつ飛ばした。

「テメエら、よくも美波に手を上げてくれたな！ 全員ブチ殺してやる！」

明久も吠えている。こうなつた明久は、ちょっとやそつとでは止められない。

「ホイツら、吉井に、鮎川つて野郎だ！」

「どうしてここが！？」

「とにかく来ているのなら丁度良い！ ぶち殺せ！」

テーブルを蹴散らして残り五人が向かってくる。

「たつた二人で調子くれえんじやねえよ！」

「舐めてんのか！」

「お前らバカだろ」

「「「「アア！？」」」

僕の言葉に突つかかってくる外道共。

僕はずんずんと近づいてきた一人に拳を突き刺し、

「「ぐぼああつ！」」

意識を刈り取った。

「　お前ら程度、僕一人でも十分だ」

「舐めてんじゃねえぞ！」

雑魚だと思っていた人間に、仲間が次々と戦闘不能にされていく状況に、外道が足を止める中、一人だけ僕に向かってくる男。

「いい加減学習したらつ！」

「ふんっ！」

「！？」

寝かせるつもりで放った拳を　受け止められた？

「ガハハハハ！、俺はな海の向こうで兵隊やつてたんだよ！　手前みたいな奴にやられるかよ！」

成程、傭兵崩れか。

「オラオラオラ！　さっきの威勢はどうした！」

力任せに拳を放つてくる。力任せではあるが、流石もと傭兵。威力だけなら鉄人に迫るかもしれない。

「蓮！」

優子の心配そうな声が聞こえる。

「大丈夫！」

「何が大丈夫なんだあ？」

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

「なにっ！？」

男の拳を手のひらで受け止める。

「流石元傭兵なだけはある。パンチにもしつかりとインパクトの瞬間があつて、見極めるのに時間がかかつたよ」

インパクトの瞬間に打点をずらせば、勢いをなくした拳は簡単に受け止められる。

「ルーカー！」

横から一人殴りかかるてきた

「解説」

体を捻つて交わし、背中を蹴つて雄一にバス。

卷之三

そんなことを言いつつも、嬉々としていぶしを呑き込んでいた。
さらに、膝が鳩尾に入った。

卷之三

「……さてと。傭兵崩れさん、まだやる?」

! ? - - -

突然激昂した傭兵崩れは懐に手を入れたと思うとその手をこちらに

向
け
た

その手には拳銃が握られている。

「それ、疏刀去塵」又だよ?

「知るか！ お前ら全員ぶつ殺せば口も封じれる！」

「 知るか！ お前ら全員ぶつ殺せ

「……ぎりぎりだね」

「アあ？」

「それトカレフでしょ？ 7・62mm口径の装填数8発。ここにいる君の敵は8人だから一人一発で仕留めたとしてちょうど8発周りを見回すと、明久や雄一だけでなく、チンピラたちも動きを止めている。

それほどに今のこと男は危険だ。傭兵崩れなんだから銃の撃ち方くらいは知っているだろうけど、狙いが外れたら弾は何処に飛ぶか分からぬ。

「そうだなあ、一発で仕留めねえとな……まずはお前からだ！」
そつ言い、銃口を僕に向ける。

「蓮つ！」

優子の声。

僕と男の距離は5メートル。

男の指は引き金にかかっている。

男の指が動いた。

銃声が響いた。

今僕の目の前には、拳銃を向けられている蓮がいる。部屋にいる人、誰もが動かない、いや動けない。

銃声が響いた。

僕は、大きな音と友人の悲惨な姿を想像してしまい、思わず目を閉じた。

僕が目を開けたとき、僕の目の前には蓮が立っていた。

「な、何でだ……俺の狙いは完璧だつたはず！　何で死んでねえ！」

「……拳銃撃てば勝てるでも思つた？」

蓮がゆっくりと口を開く。

後ろからは表情は見えないけど、声はすごく冷たく聞こえる。

「お、お前なにをしたんだ！」

「なにして、銃弾を弾いただけだよ？」

「バカな！　俺が引き金を引いたとき、お前は何ももつていなかつた！」

「うん。だから手で弾いたんだよ？　ホラ」

蓮が皆に見せた右手はわずかに皮膚が割れて、血が出ていた。

「う、嘘をつくな！　拳銃の弾を素手でなんて……」

銃を持つた人が混乱している。

僕も混乱している。銃なんて身近で打つのを見たのは初めてだし、

それを素手で弾いた蓮のことはもつと分からぬ。

「誰も、『撃たれてから反応した』とは言つてないよ？」

「何？」

「トカレフの初速は秒速約420m。僕とアンタの距離は5m。銃弾が放たれて僕のところまで来るのにかかる時間は約0.012秒。対して、普通の人間が刺激を感じてから反応して行動するまでは約0.17秒。どうやつたつて間に合わない」

「な、なら」「

「だけど、『引き金にかかつた指に力が入った瞬間』から動き始めれば何とかなる。まあ、飛んでくる弾に対して横、または斜めに手を出さないといけないから、他にも考えないといけないことはあるんだけど、不可能ではない、とだけ言つておくよ」

……何を言つてゐるんだろう。ちつとも分からぬ。

「……チイツ！」「

「一発目を撃たせると思う?」

また銃がこちらに向けられたかと思つと、蓮があつという間に男に近づいて銃を蹴り飛ばした。そのまま男の顎に左フックをお見舞いし、元傭兵だという男は沈黙した。

「お、お前らー。このお譲ちゃんがどうなつてもいいのかあ?」
ふと気がつくと、向こうの一人が葉月ちゃんを羽交い絞めにしていた。女の子に、それも小学生に何てことしゃがるんだ!

「いいか? おとなくしろよ? さもないと、ヒテH傷を

「負うのはお前だ

「あがあつ!」「

後ろからムツツリーがクリスタル製の灰皿を振り下ろすと、すか

さす蓮が降りてきた頭を蹴り抜いた。

「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃん！」

「葉月つ！　良かった……。怖かったよね……」

解放された葉月ちゃんを美波が抱きしめる。感動の再会だ。

「吉井君つ！」

姫路さんが両手を広げて駆け寄つてくる。これはほもしゃ
スか！？

「姫路さん！」

僕も両手を広げて構える。さあ、ドンと来い！

「吉井い！　ヤスオをよくもー！」

「ぐぶあつー！」

ドンと来たのはチンピラのパンチだった。

明久Side Out

蓮Side

「な、何だコイツ？　血の涙流してるぞ……」

ムツツリーと一緒に葉月ちゃんを助けて、しびれて感覚がなくな
つている右手の確認をしていると、こんな声が聞こえた。見れば、
明久が血の涙を流してチンピラの一人をにらみついている。

ホント、何やつてるんだろう……

「蓮……」

「ん？」

明久を横目に右手の状態確認を進めていくと、優子の声がした。

「手……」

「ああ、大丈夫だよ。折れてはない。鱗位は入ってるかもしないけど、拳銃の弾を弾いてこれくらいで済んだんだから御の字だよ」

実際、自分でも驚くほどのことを行ったわけだし。

「蓮！ 女子達を連れて逃げろ！」

「了解！」

「雄一、貴様まで僕の邪魔をするのか！」

雄一から撤退の指示が出たので従つておく。

明久が何を言つていたのかは気になるけれど、今は優子たちの安全が優先だ。

「皆、取りあえず大通りまで走つて！」

優子たちとカラオケボックスを出る。

後ろから雄一の笑い声とチンピラの悲鳴が聞こえてきたのでおそらく外道共は地獄を見ているだろう。

霧島さんに迫られているタイミングの雄一に喧嘩を売るなんてチンピラたちも運が悪かったね……。

第一十七問 物理法則や、人間の理から外れていなければチート能力つてありな

今回の蓮の銃弾弾きは『緋弾の○リア』見てて、蓮にもやらせてみたものです。

もちろん常人には不可能ですが、蓮には可能な理由がありますので。

それでは次回の更新でお会いしましょう。

第一十八問　一 日田終へ　一　日田も頑張りやー（前書き）

今日は短いです。

切る所を考えながら書かないと、文字数がばらばらになってしまいま
すね（汗）

第一十八問　一田田終ア—　一田田も頑張リフー

バカテスト　現代国語

問　『落ち着いていて、どんなことにも驚かないさま』を表す四字熟語を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『泰然自若』

教師のコメント
正解です。

鮎川蓮の答え

『不動明王』

教師のコメント

確かに驚きませんが、間違いです。

土屋康太の答え

『動かざる』と山の如し

教師のコメント

意味はあつてているようなきもありますが、間違いです。

吉井明久の答え

『返事がない。ただの屁のようだ』

教師のコメント

尻が転がっていても驚かないことはすごいですが、まず熟語にすらなつていなきことに違和感を覚えてください。

第二十八問　一日目終了！　二日目も頑張ろつ！

誘拐騒ぎが無事、とはいえないまでも解決し、一日目も終わつたFクラスの教室は、僕や明久の貸しきり状態になつていた。

教室に残つているのは、僕、明久、雄一、ムツツリーの四人だけだ。

島田さんや、姫路さん。優子も、話を聞きたいといつてきただが、遅くなる前に帰つてもらつた。その為に秀吉まで帰ることになつたのはちょっと誤算だつた。

「明久、そろそろ来る時間だぞ」

「？ 来るつて誰が？」

「学園ちょー」

「え？ 学園長がここにくるの？」

「うん。雄一が呼び出したんだよね？」

「ああ。さつき廊下であつたときに『話を聞かせろ』ってな『話、ねえ……ダメだよ雄一』、相手は一応目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

明久にそういう常識があるなんて……意外だ。

「用事もクソも、この一連の妨害の原因はババアにあるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因が えええつ！」

「いくらなんでも、誘拐事件に、殺人未遂まで行われた事件の原因が生徒にあるわけないでしょ」

今回の事件は一步間違えれば死者が出るくらい危険だつた。裏を返せば、死者を出すような相手が敵のバックにいる、ということだ。

「あ、あのババア！ 僕らに何か隠してたのか！」

明久の憤りももつともだと思つ。

学園長がしつかりと事情を説明していれば、僕らはともかく、優子や姫路さんたちにまで危険が及ぶことはなかつたはずだ。

「……やれやれ、折角来てやつたつて言つのこと、随分とご挨拶だねえ、ガキ共が」

しわがれた声と同時に、教室の扉が音を立てて開かれた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

自分は被害者なんだとアピールせんばかりに、大げさに肩をすくめる学園長。

「黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うがな」

「ふむ…… やれやれ、賢しい奴だとは思つていたが、まさかアタシの考えに気が付くとは思つてなかつたよ」

「フン。俺だけじゃなく、蓮も気づいているぞ」

「そここのジャリは気づいて当然さね。アンタ達とは出来が違つんだよ」

「ハア…… あんなこと（誘拐事件）があつた後でそんなこといわれたら、僕まで雄一に疑われるじゃ ないか。」

「……まあいい。俺としては、最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思つてたんだ。あの話だったら、何も俺達に話すことはない。もつと高得点を叩き出す事の出来る優勝候補を使えばいいんだからな」

「あ、そういうえばそうだよね。優勝者に後で事情を説明して譲つてもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。態々俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる」

明久が『擁立』の意味を考えているような顔をしている。

「話を引き受けてきた教頭の手前、おおっぴらに妨害する」とは出来ない、とか考えなかつたのかい？」

「それなら教室の改修なんか渋つたりしないはずだ。教育方針の前

にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや

学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出させるためにわざと決つたつてこと

？」

「そういうことになるな」

「雄一は、学園長への提案で確信を持ったようだけね」

「あの、教科を決めさせろって奴かい？」

「ああ。めぼしい奴ら全員に同じ話をしている可能性を考慮してな。もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗つてこない」

だけど、学園長は雄一の提案を呑んだ。これはそのまま僕達以外に優勝されると困る、といつ学園長の考えを表している。

「他にも、学園祭程度で商業妨害が出たり、俺達の対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あつたしな。それに何より、誘拐事件が決定的だった。ただの嫌がらせならそこまでしない」

それもただのチンピラの誘拐じゃない。元傭兵の、それも拳銃を持つての奴まで出張つっていた。

「そうかい。相手はそこまで手段を選ばなかつたか……済まなかつたね」

学園長はそいつて僕らに頭を下げた。
隣では明久がすごく驚いた顔をしているけど、別に学園長だつて鬼じゃないんだから、謝るくらいはするよ。

「アンタらの点数だつたら、集中力を乱す程度で潰れてくれると思つてたのが、決勝まで進まれて焦つたんだろうね」

「それ以上に、常夏が僕らに負けたのが決定打だ」

敵方のメンバーが全員敗れたんだ。あれだけの強硬手段に出るしかなかつたのも頷ける。

「さて、」ひいら側の種明かしは終わりだ。次はそっちの番だ
「はあ……あたしの無能をさらす話だから、出来れば伏せておきた
かつたんだけどね……」

「どうせ、白金の腕輪の欠陥でしょ？」

「――!?」

「アンタ、何処でそれを知ったんだね？」

僕の言葉に学園長が問い合わせてくる。

「まず、雄一と明久に優勝してほしい」と。次に、ペアチケットなら、秘密裏に回収しても問題ないこと。そして、優勝しろ、ということは賞品を勝ち取れ、ということで、回収するわけではないこと。この三つで大体分かると思いますけど、一番の理由は、教頭が手段を選ばなかったことですかね」

「さて、教頭だと――？」

雄一が聞いてくる。雄一も学園町室へ行つたときこ、教頭と争つているのを聞いていたはずだけど。

「そう。と、いうか、教頭自身が僕に『手下になれ』って言つてきたんだよね。もちろん断つたけど」

「そうかい。で、何処まで分かつてるのさね？」

「一つ、白金の腕輪のどちらか、もしくは両方は低得点者しか使えない。

二つ、教頭は何らかのルートでこの欠陥のことを知つていて。

三つ、新技術である腕輪は回収できない上に、この腕輪の欠陥が世に知られれば、文月学園にとつてはかなりの痛手になる。以上

「ハア、そこまでわかつてていたとはね。」のジャリのこうとおつさ。

今回の黒幕は、教頭の竹原に間違いないとさね。近くの市立に出入り

していた、という目撃情報があるさね

「それだけじゃないかもしれないけどね」

「おい、蓮。どういふことだ？ うちに生徒を取られている私立以外に、うちの失脚を狙うやつらなんているのか？」

「……召喚システムを軍事利用したい奴らなら、学園長、ひいては文用を潰したいと考えているんじゃないかな？」

「雄一」、学園長が息を飲む。明久は『分かりませ~ん』と顔に出ている。

「明久の召喚獣のよつこ、物理干渉できる召喚獣は、軍事転用も十分可能なレベルになつていて、兵士を数千数万と雇うよりもコストが低くて済む。狙わない理由がないと思つよ？」

「なるほどな……あんな物騒なものが出てきたのはその所為か」

「うん。まあ、そいつらもおおっぴらに事件を起こせない以上直接攻撃は出来ないし、教頭の手下である常夏コンビが敗退した以上、もう暴走の心配はないけどね」

「でも、これって、かなりマズイ問題だつたんだね」

「ああ。文用学園の存亡がかかっている話だな」

「もう、ほぼ解決したけどね」

「そうさね。もう問題は解決しているんだ。これ以上何もなければ丸く収まるんだよ」

「何もなければ、か。今の状況でその言葉は怖いなあ。

「とにかく、これで解決したわけだし、学園長としても教育者としても、アンタ達には礼をさせてもらひつつ」

「ちょーとストップ！！」

「「何だ明久」」

「あのさ、明日、もし蓮たちが優勝したら、腕輪の暴走が起こるんじゃないの?」

「それは問題ないさね。腕輪の暴走が起こるのはあくまでも総合得点が平均点を上回ったときだけさね」

「そういうこと。僕は、決勝戦の日本史以外の点数を〇点にすれば暴走は起らなければいいから、明日は真剣勝負だよ、明久、雄一」

「うん!」

「当たり前だ」

「それじゃ、話もまとまったようだし、アタシは帰るさね」

学園長は、教室から出て行つた。

「それじゃあ、僕も帰るね」

「蓮、ちょっと待て」

教室から出て行こうとする中、雄一が声を掛けてきた。

「……何?」

「教頭のたくらみを知っていたり、学園長のあの信頼。そして、誘拐事件。お前を普通の高校生といつにはおかしい点がいくつもある」

「……そうだね。それで?」

「单刀直入に聞く。お前は 何者なんだ?」

あれだけのことをしたんだ。疑われるのも当たり前、か。

普通ならこんなことを言う雄一を止める明久も黙つてみていたあたり、明久も同じようなことを思つているのかもしれない。

「そうだな」

こう聞かれたとき、僕が言つることは決まつている。

「

僕が聞きたいくらいだよ」

第一十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。

バカテスト　日本史

問『鎌倉時代末期から、南北朝時代にかけての武将で、足利尊氏らとともに活躍した河内国出身とされる人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『楠木正成』

教師のコメント

正解です。生涯の殆どが謎に包まれていることもあり、知らない人も多いのですが、姫路さんは知っていたようですね。

鮎川蓮の答え

『大楠公』

教師のコメント

出来れば、人物名を答えてほしかったのですが、それも楠木正成のことをさしているので今回だけ正解にしておきます。しかし、君のそのマニアックな知識は何処で仕入れているのですか？

鮎川蓮のコメント

禁則事項です

吉井明久の答え

『ワトソン』

教師のコメント

国や時代、行ったこと全て違いますが、まず日本人でないことに気づきましょう。

第二十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。

「アキ、おはよー」
「おはようございます、吉井君」
「あ。二人とも、おはよー」
「僕のこととは無視ですか……」

二人してやつてきた島田さんと姫路さんが明久に挨拶をする。僕を（・）無視して（・・）。

「あ～その、昨日はぐっすり眠れた？」

「え？　はい。ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃあ、朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えつと、それじゃ、変な夢とかは？」

明久、いくらなんでも心配しすぎだと思つ。

「ふふつ。吉井君、心配しすぎですよ」

姫路さんの声はいつもと遜色なく聞こえる。

暴行未遂どころか近くで発砲までされたから、明久の心配も分かるだけだ。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いていますから」

「そうなの？」

「はい。結局全員無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けてくれますから」

姫路さん。ここに決して無事と言えない人がいるのですが。

「アキというよりは、坂本か鮎川かもしれないけどね」

姫路さんの島田さんも、昨日のことを気にしている様子はない。

「元氣そうで良かつたよ。それで、今朝は特に問題は？」

「…………異常なし」

「不信な連中はおらんかったぞ」

「明久はちょっと心配しすぎだよ」

「そつか。ありがとう」「

ちなみに、何故か僕まで優子の迎えに駆り出された。
秀吉と一緒に来ればよかつたのに。

「お、今日は無事だつたんだな二人とも」
雄一はちよつと心配しなさ過ぎかもしない。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君も早いですね～」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふああ……」

ちなみに僕も受けた。

迎えに行くために明久たちよりも早く起きないとけなくなつたのは雄一の策略ではないと信じたい。

「もう、そんな状態で大丈夫なの？ 相手は鮎川なんでしょう！」

「そうだね。準決勝に保健体育を持ってきたのは失敗だったかな」

「大丈夫だよ明久」

「え？」

「僕に……酙る趣味はないから」

「ちょっと、僕が心配してるのはそんなことじゃないんだけど…？」

一撃で仕留めてあげるよ。

「と、言つわけだから、明久の心配をするくらいだつたら、喫茶店の準備でもしてくれ。ふああ……」

「なんだか他人事ねえ……喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ このところあまり寝てなかつた上に、昨日は徹夜だつたから眠くて」

「そういえば、鮎川君と木下君は大丈夫なんですか？」

「僕は大丈夫だよ。2・3日寝なくても大丈夫だから。秀吉は辛そ

「うだけぞ」

さつきから秀吉の手が虚ろになつてきた。

「2・3日つて……アンタいつたいどんな体してんのよ……」

島田さんがあきれたような声を出すけど、実際に寝なくとも大丈夫なんだよね。

「でも、鮎川君も疲れてるはずなので、吉井君たちと一緒に休んできてください」

「え、いいの?」

「はい。右手の怪我も気になりますし……」

「あっ! そういえばどうだつたの?」

姫路さんと明久が包帯が巻かれた僕の右手を見ている。

「ん? 打撲と皮膚がちょっと切れただけで済んだよ?」

雄一を中心、昨日の誘拐事件を知っているメンバーが僕の手を凝視している。

「本当、蓮の手つてどうこいつ構造してんのうね? ……」

「いや、普通の人間の手だよ、多分」

「まあいい。明久、秀吉行くぞ」

僕達は屋上に向かつ。

教室を出るときに、後ろから、

(やつぱり一緒に寝るんでしょうか?)

(間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……)

という会話が聞こえたけれど、忘ることにしよう。

夢見が悪くなるどころか、一緒に眠れなくなりそうだから。

「ねえ、蓮……」

「ふえ？」

教室から出て、階段を上ろうとしたところで、優子に声を掛けられた。

「えっと、その……」

「雄一、明久、秀吉、先に行つて。僕も優子と話してから行くから」

明久たちを先に行かせる。

「で、何かな？」

「うん。右手は大丈夫だったの？」

なんだそんなことか。雄一みたいに答えるくらい質問が来るんじゃないかと思つて身構えてしまつた。

「ああ。打撲と、ちょっと血が出たくらいで済んだけど」

「そう、良かった……」

そういうて、微笑む優子の顔にちょっとドキッとしてしまつたのは内緒だ。

「えつと、もう行つていいいかな？　あまり寝てないから、仮眠を取りたいんだけど」

「え？　うん。いつてらっしゃい」

優子に背を向けて、階段を上る。

「頑張ってね！」

後ろからの声に振り向いたとき先には、誰もいなかつた。

「さてと、行こうか

明久の声がかかる。

結局、僕達は喫茶店の手伝いを30分くらいしかしていない。疲れているだろうから、と気を遣つてくれたらしい。僕も、起きてすぐ手伝いに行つたんだけど、返されてしまった。

「後で私達も応援に行きますね」

「いい試合をしないと許さないからね」

チャイナ服姿の一人。その声援は明久だけに向かっている気がしてちょっと寂しい。

「言つておくけど、手加減するつもりはないからね」

「うむ。いくら明久相手といつても、全力で当たらせてもらひのじや」

「ふん。望むところだ」

「うん。僕も本氣で行くよ」

軽い宣戦布告。どちらが優勝しても目的は果たされるわけだから真剣勝負だ。

「そういえば、決勝戦前に、最後の妨害がくると思つてたけど来なかつたね」

「昨日で懲りたんじゃないのか?」

「確かに、昨日あんなにボッコボコにしたんだから懲りてもらわないと困るよね」

「喫茶店のほうはムツツリーが警備しておったしのう」

ムツツリーは明らかに違法じゃね、といつのようなスタンガンを使つていた。

服の上からでも感電するような代物らしい。

「後はもう何もない。ただ、いい試合をするだけだな」

「そうだね」

それ以降は会話もなく、会場へ向かう。

「流石に決勝戦。観客も多いね」

「そうじやのう」

明久と雄一とは反対側。

ステージの裏から聞こえる歓声を聞く。

全く緊張していない、といったら嘘になるけど、昨日拳銃を向けられたときに比べれば随分と楽な気持ちでいられる。

秀吉も、演劇で観客の前に立つのは慣れているのか顔色も普通で緊張は窺えない。

「鮎川君と木下君。入場が始まりますので急いでください」

係りの先生が手招きをしている。

係りに生徒ではなく先生を配置していると所からも、この決勝戦は今までとは違うと分かる。

『さて皆様、長らくお待たせいたしました！ これより試験召喚システムによる召喚大会決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスの声は、今まで聞いたことのない声だった。もしかしたらプロを雇っているのかもしれない。

社会的に注目されている試験校だから、ありえないはない。

『出場選手の入場です！』

『一年Fクラス所属、坂本雄一君と、同じくFクラス所属吉井明久君です！ 皆様、拍手でお迎えください！』

明久と雄一が入場してくる。

会場に響く拍手は昨日よりも多く、かなりの数の観客が入っていることが分かる。

きっと、この観客の中に姫路さんのお父さんもいるのだろう。

『なんと、最高成績のAクラスを押さえて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスのコンビです！ これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしません！』

「あの司会者、嬉しいことを言つてくれるね」

「うむ。これで姫路の父親にも好印象になるじやろつ

きっと、試験召喚システムの効果をPRする狙いがあるのでうけれど、これは今の僕達の取つてはありがたい。

『対するこちらも一年Fクラス所属鮎川蓮君と同じくFクラス所属木下秀吉君です！ こちらは、三年生のAクラスを押さえて決勝に

進出してきました！ こちらも拍手でお迎えください！」

明久たちと同じように拍手と歓声を受けながら階段を上りステージへと上がる。

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは、テストの点数に比例した』

司会のルール説明を聞き流しながら、雄一、明久と対峙する。

「さてと、ついに直接対決だな」

「そうだね。明久と、雄一相手でも、負ける気はないけどね」

「それはこっちの台詞だよ。絶対に勝つてみせる！」

「手加減はせんぞ。真剣勝負じゃ！」

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

司会の説明も終わり、審判役の先生が、僕らの間に立つ。

「――「試験召喚」――」

四人とも、いつもと変わらない姿の召喚獣が呼び出される。

『日本史 Fクラス 坂本雄一&吉井明久

215点&166点』

「！？ 明久、どうしたのその点数？」

「ここしばらく、明久の勉強につき合わされ続けだつたからな。明久、あそこまでやつてやつたんだから、これで負けたら承知しねえぞ！」

「わかつてゐるよ」

くつ！ 明久がここまで高得点を取つてゐるとは誤算だつた。
せいぜい雄一が200点に明久が100点だと思つていたのに。

『日本史 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

418点 & 83点

』

「ちつ！ 流石に蓮はでたらめな点数だな」

「本當だよね。でも……負ける気はしないよ……」

「こつちも油断はしないよ。Fクラスの力は点数じゃ量れないってのは試召戦争で思い知つたしね」

「こちらも負ける気はないのじや！」

お互にこりみ合つたままの膠着状態が続く。

向こうはうかつに動けば僕の召喚獣の点数が脅威になるし、こちらも下手に動くと一対一に持ち込まれかねない。

「衝撃波」

「なにつー！」

膠着状態を破つたのは僕の召喚獣だった。

左手を後ろに向けての衝撃波の使用。

大きい反動を利用して、一瞬で雄一の召喚獣に肉薄する。

「ツー？」

雄一の召喚獣に横なぎの一撃を浴びせる。
雄一は両手のメリケンサックで、受けきつた。

「雄一！」

「余所見をしている暇はないぞ、明久あ！」

こちらに駆け寄ろうとした明久に、秀吉が切りかかる。

「くつ！」

「雄一、悪いけど先に倒させてもらひよー！」

雄一の召喚獣に、点数、リーチで勝っている僕の召喚獣は終始有利に戦いを進める。

近づいてくれば、左手。離れれば剣の一撃。

「はあああつ！」

「！？ チイツ！」

僕の召喚獣が、雄一の召喚獣を切り倒し雄一の召喚獣は消滅した。

「くつ……済まぬ、蓮」

向こうでも明久が秀吉を倒したところだった。

「勝負だ！ 蓮！」

「望むところだ！」

僕と明久の召喚獣がすれ違う。

『日本史 Fクラス 吉井明久 VS Fクラス 鮎川蓮

132点 VS 308点

まだ腕輪は使えるけれど、明久はそんな隙をとれてはくれないだろ
う。

「ぐつ！ とりやあつ！」
「はあああつ！ ぐつ！」

試合は正に一進一退。

僕の召喚獣の大きい得物では動きの早い明久の召喚獣を捕らえきれ
ない。

明久の召喚獣も、迂闊に攻められない上にリーチで負けている分戦
いにくそつだ。

袈裟切り、突き、足払いに上段からの振り下ろし。

お互に一瞬も止まることのない攻撃の応酬はお互の点数をしつ
かりと削っていた。

「くつ！ 蓮はどうして観察処分者でもないのにそんなに召喚獣の
扱いが上手いのさ！ 転入生なのに！」

「そんなこと教えられるわけないでしょ！」

鎧迫り合いに移行する。

点数では僕が勝っているけれど、僕の召喚獣が剣を片手でしかもて
ないのに対しても明久の召喚獣は木刀をしつかりと両手で持っている。

鎧迫り合いでは僕のほうが不利だ。

「おりやあつ！」
「うわつ！」

鎧迫り合いでは押され気味になっていたところを、左手で明久の召喚

獣をはじくよつとして距離を取る。

「衝撃波」

「！？」

明久との距離ができたところで、右手の剣を地面に突き刺し、左手を明久の召喚獣に向ける。

左手から放たれた空気の奔流はあつといつ間に明久の召喚獣を呑みこんだ。

「はあああああつ！」

「！？」

明久の召喚獣が足元に現れた。

「つ！」

「蓮の腕輪つて、弱点があるよね」

そのとおりだ。

僕の召喚獣の腕輪、『衝撃波』は、一見便利に見えるれどいくつかの弱点がある。

一つは大きい反動。召喚獣をしつかり固定していなければフィールドから弾き出されかねないほど反動がかかる。

二つ目はタイムラグ。姫路さんの『熱線』が発動してからほぼ一瞬で効果を發揮するのに比べて『衝撃波』には発動から放たれるまでに数瞬のタイムラグがある。

三つ目に効果範囲。衝撃波は進んだ距離が長いほど効果範囲を広げる。つまり裏を返せば僕の召喚獣に近ければ近いほど効果範囲が狭くなる。

そして、反動があるために、発動している間は僕の召喚獣は動けうえに剣も使えない。

「これで 終わりだあー！」

明久の召喚獣が木刀を突き出してくる。僕の召喚獣は、回避も防御もできずにまともにその一撃を受けてしまった。

『日本史 Fクラス 吉井明久 VS Fクラス 鮎川蓮
8点 VS 0点』

『坂本、吉井ペアの勝利です！』

召喚大会は、明久、雄一の優勝。僕、秀吉の準優勝で幕を閉じた。

第一十九問 召喚大会決勝戦！ F対Fの頂上決戦。（後書き）

土日にしてストックが出来なかつたOTZ

本当なんで土日のほうがPCに触れないんでしょうか……

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に厄む……（前書き）

PV2万突破を確認しました。

これを糧に、今の更新ペースを維持していきたいと思います。

大分きつくなつてきましたが（汗

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に凶む……

バカテスト 現代社会

問『動物や植物（トーテムと呼ばれる）が、自分達の部族に深く関連していると信仰することをなんというでしょ？』

姫路瑞希の答え

『トーテミズム』

教師のコメント

正解です。人類の宗教的思想の基本的なもので覚えておきましょう。

鮎川蓮の答え

『トーテムポール』

教師のコメント

それはインディアン部族が作成した偶像の一種です。

吉井明久の答え

『13トーテムポール！』

教師のコメント

なぜ13本なんですか？

鮎川蓮のコメント

「コイツ……なんで微妙に古いネタを持ち出してきやがるんだ！」

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に凹む……

「お兄ちゃん！ すっつつごい格好良かつたよ！」

授賞式と、腕輪の簡単なデモンストレーションを終えて、教室に帰る途中なんだけど、待ち構えていた葉月ちゃんの抱きつき攻撃によつて明久がダメージを受けている。

「四人とも、お疲れ様。凄かつたわね」

「あはは。 それでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですぅ～」

「葉月つてば、アキが困ってるわよ?」

身長的に、葉月ちゃんが明久に甘えれば甘えるほど、明久の鳩尾に深刻なダメージが刻まれてしまつ。

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた?」

なんだろつ。バカな明久がここまで自慢げに話していくと殴りたくなつてくる。

「はいっ! とっても素敵でした! 今度土屋にビデオを『ペーしてもらおつかと思つべら』!」

姫路さんの田がきらきらと輝いている。

けれど、おそらくムツツリーのとつているビデオには、明久の活躍はあまり『』つてないと思ひ。

「坂本。アンタ試召戦争のときは散々だつたくせに、今回は随分と点数が良かつたわね」

「試召戦争のときに散々だつたからこそ、だ。あれ以来、日本史は重点的にやつてきたからな」

「それあんなに高得点だつたんだ」

「いくら雄二でもあの点数はちょっとおかしいと思つていたんだけど、こういわれると納得がいった。」

「簡単に言つが大変だつたぞ? 特に先週例の話(姫路さんの転校話)を明久が聞いてからは、殆ど毎晩奴の勉強につき合わされていたからな」

なるほど、どうであの明久が150点オーバーなんていう成績を

残せたわけだ。

それにもしても、そこまでして僕と秀吉を倒したかったんだろうか…

…。

「後夜祭のとき、お話しがあるので駐輪場まで来てくださいー。」

後ろから突然、告白の前フリみたいな台詞が聞こえてきた。
見ると顔をトマト並みに真っ赤にした姫路さんがダッシュで喫茶店
に戻っているところだった。

そんな台詞を言われた明久は

「……あれ？」

「どうやら今の台詞が本当に自分に向けられたものかどうか考えてい
るらしい。」

こんな調子だと、後夜祭のときも約束を忘れるんじゃないだろうか。

今度は表情が変化しだした。

本人は一言も発していないから、そばで見ていると妄想癖の危ない
人に見える。

「明久、雄一、蓮。話し込んでいるといひ悪いのじゃが、喫茶店を
手伝つてもらえぬかの？お主らの優勝と、ワシ等の準優勝のおかげ
で客が増えて大変なんじゃ」

明久の行動にちょっとドン引きしていると、着替え終わった秀吉が

チャイナ服のスカートを翻しながら、こちらに走ってきていた。

「ここの下着はどうなつているんだろ?」何で考へてしまつと、明久の同類になつてしまいそうだから止めよ。」

「あ。そういうえば、そつだつたわね。ほらアキ! もつ大会もないんだから、きつちり手伝つてもらつからね!」

「うん。今まであまり手伝えなかつた分しつかり頑張るよ!」

「やれやれ、かつたるいな」

「ほら坂本も文句言わないの!」

秀吉の言葉に三者三様の反応を示しながら、喫茶店の中に消えていく。

僕を残して。

「えつと……僕ってマジで忘れられてない?」

「大丈夫じゃ。ワシはおぬしのことも呼んだぞ」

決勝戦が終わつてから、本格的にクラスの皆に僕の存在が認識されなくなつたようだ……。

秀吉に慰められながら、ウエイトレス服に着替える僕の背中からはきつと哀愁が漂つていたに違ひない、と、蓮は断言します。

『ただいまの時間を持つて、清涼祭の一般開放を終了しました。各

生徒は速やかに撤収作業を行つてください』

「あ、終わった……」

「流石に疲れたの?」

「最後のほうは皆休憩なしだったからね……」

「…………（コクコク）」

一寸間にわたつた清涼祭の終了を告げる放送を聴いた途端に、足から力が抜けるのを感じた。

まさか、あそこまでお密さんが増えるとは思わなかつた。

なまじFクラスは教室が狭いからお密さんを捌くのが大変なんだよ

……

「せういえば、姫路さんのお父さんはどうしたの?」

明久がふと声を漏らす。忙しくて忘れていたけれど、そもそも今回の清涼祭の一番の目的は姫路さんの転校阻止だ。姫路さんのお父さんは顔も知らないから喫茶店に来てたとしても分からぬけれど。

「ん? 未来のお義父さんが気になるのか?」

「な!? ベ、別にそういうわけじゃなくて!」

「はいはい。明久がせうこうなら今はせうこうとしておいてあげるよ」

「ちよ、蓮まで……」

せつを忘れ去られた」との復讐だつたりする。

「後夜祭のときこ話をじて行くところであつたから、結論はそのときじやな

秀吉が返事を返してくれる。

喫茶店が成功して、教室の設備も改修もどうにかするめどが立つたし、それになによりFクラスから召喚大会の優勝チームと準優勝チームが出たんだ。姫路さんのお父さんもこれでFクラスのことを認めてくれるとは思つけど、人の心 特に親心は僕には分からぬからな。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ

「ええっ！？ どうして！？」

僕には明久のその反応がどうして、なんだけど……

「どうしてって言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょう？」

その反応は至極当然だと思つ。

間違つても葉月ちゃんみたいにあの格好のまま平氣で帰るようになつてはいけない。

「すいません。すぐ戻りますので」

「待つて！ 一人とも考え方直すんだ！ カムバーアーク！」

こうしてみると、姫路さんと島田さんが明久を振つたように見えるから不思議だ。

現実ではありえないけど。

「ふむ。ならばワシも

「させるかっ！ せめて秀吉だけは着替えさせない！」

秀吉の足にしがみつく明久。アホなんじやないだろうか。

「なっ！？ 何をするのじゃ明久！」

「…………（フルフル）」

前言撤回。やつぱり「イシラアホだ。

ムツツリーーも明久と同じように秀吉の足にしがみついている。

ムツツリーーの行動にはあまり驚かなくなってきた。

「追い明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

明久を呼ぶ雄一の声は全くといつていいくほど疲れを感じさせない。常日頃から霧島さんから逃げ回っているだけあって無駄にタフだ。

「そうじゃつたな」

忙しくていけなかつたけど、一応報告はしないと。

「三人とも先に行つておいてくれ。ワシは着替えてから

「そろは行かない！ 秀吉も一緒に行く！」

「…………（クイクイ）」

「あつ、ムツツリーーも来る？」

「…………（「ク」「ク」）」

なんとしても秀吉を着替えさせまいとする明久とムツツリーー。

と、いうかこいつ時だけ無駄な意思疎通の早さだ。

「困ったのう。雄一、何とか言つてやつてくれんか？」

「ん~……、まあいいだろ。秀吉とムツツリーーも行いづぜ。明久を説得するのも面倒だし」

「ならば蓮」

「右に同じ」

この状態の一人を説得するのは面倒とか言いレベルを通り越してい
る。

「やれやれ、雄一に蓮まで……。仕方ないのう。着替えは後回しじ
や」

「「よし。ほら明久にムツツリーー。秀吉の足を離してやれ」」

「うん」

「…………（「ク「ク）」

「やれやれ、ワシのこんな姿を見ても何の足しにもならんじゃねり
に……と、こうか雄一と蓮はワシを売ったような気がするのじゃが」

決してそんな」とはないと思つ。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久と雄一がいつものようにノックと挨拶をして学園長室にびかづ
かと入り込む。

「おぬしい、やはり全く敬意を払っていないように見えるのじゃが
……」

「そう? きちんとノックをして挨拶をしたよ?」

まあ、明久の態度は雄一と比べればこくらかマシではある。

「アタシは前に返事を待つように言ったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告にきました」

「言われなくても分かつているよ。アンタ達に賞状を渡したのは何
処の誰だと思つてるんだい」

遠慮の文字がこの世で一番に会わない、容姿が妖怪じみている老婆。

「ちよいとそーのジャリ、何か言つたかい?」

「こえ、何も

「フン……そうかい」

チツ！ 耳元で叫ばないところにて会話も出来なさそうなのに察しがいいババアだ。

「それで、白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」

明久が貰つたばかりの白金の腕輪を見せながら尋ねる。

「いや、それは後でいこさね。どうせ不具合はすぐには直らないんだ」

「やうなんですか」

「まあ、召喚システムに関連している技術である以上一朝一夕にはどうにもならないよ」

実際、召喚システムは、未だに制御が出来ていない。偶然やオカルトで出来ていてるシステムだけに、簡単にいじることは出来ない、筈なのだが、そこにいるババアは遠慮なくいじくつているらしい。

（そういうえばどうしてあいつらは俺達がババアと繋がっていると思つたんだ？）

雄二がぶつぶつ呟いている。

明久には聞こえなかつたみたいだけど、僕には聞こえていたのでその疑問に答えると、この部屋には盗聴器が

「だから、教室の改修と交換で条件で僕達がこれをゲットするつて言つ取引はこれで」

「待て明久！ その話はマズイ！」

「え？」

「………… 盗聴の気配」

「やられたか！」

そうだった。メンバーの中には思つたことをすぐ口にする明久^{バカ}がい

たことを忘れていた。盗聴器を外してから話すべきだったか……。

「あいつら……！ 追うぞ明久！」

「ちょつ……雄一、どうこうことーー？」

「盗聴だ！ 奴ら、学園長室に盗聴器を仕掛けたがったんだ！」

「なんだってーー？」

「今の一連の会話、特に明久の『学園長との取引』の話も聞かれていたはず。もし、というかおそらく録音してるだろ？ だから大変なことになるー！」

「録音ー？ 兎談じやないー！」

録音が公開されれば、文月学園の信用は地に墮ちる。あの足音と気配からして常夏コンビだったはずだから、さつさと見つけて常夏ー！ と証拠を隠滅しないと！

「急げ！」

「分かつた、秀吉とムツツリーーも協力してー！」

「うむ」

「…………（コクリ）」

「えっと、明久、僕もいるんだけど……」

「あつ！ 蓮もー！」

なんかついでで言わされて気がして、といつかまた忘れてたよね僕のことー！

「雄一！ 向こうは例の常夏コンビでしょー！」

「そうだ！ チラッと例の髪形が見えたから間違いないー！」

「つてことは一人組みだよね！ こっちも一人組みに分かれようー！」

「皆常夏コンビの特徴は覚えてるよねー？」

「坊主とモヒカンじやなー？」

「ああそうだ」

「了解じゃー ワシとムツツリーは外を探すー！
えっと……

「僕は？」
「え……」

「蓮はすまないが一人だ。お前なら一人でもあの常夏を伸すことが
できるだろう？」
まあ、否定はしない。

「明久！ まずは放送室を押さえるぞー！」

「オーケー！」

「僕は潜伏できそうな場所を片つ端から当たつてみるー 携帯電話
はいつでも出られるようにしておいてー！」

「ア解だ！」

波乱煩くめの清涼祭。まだまだ終わらせてはくれないようだ！

第三十問 友情の輪の中に入れないのは想像以上に厄む……（後書き）

次回で清涼祭は終了する予定です。

ほんとは30話で終わらせるつもりだったのに……

第二十一回 清涼祭終了！ 最後の最後まで波乱がへじでした……。（前書き）

なんか過去最高峰に並ぶほどの盛りがする今回の話。
え？ いつもだろ？ ハハハ……否定はしませんが。

取りあえず、今回で清涼祭篇終了です。

第二十一問 清涼祭終了！ 最後の最後まで波乱がくじらした……。

バカテスト 英語

問『今あなたが持っているものを英語で答えてください』

姫路瑞希の答え

『This is a pen.』

教師のコメント

正解です。当たり前ですね。

鮎川蓮の答え

『I have a pencil sharpener now.』

教師のコメント

どうして鉛筆削りだけを持っているのですか？

土屋康太の答え

『This is a camera.』

教師のコメント

後で職員室に来てください。

霧島翔子の答え

『This is Yui.』

教師のコメント

どうして坂本君が霧島さんと一緒にいるのですかー…?

第三十一問 清涼祭終了！ 最後の最後まで波乱尽くしでした……。

前回までのあらすじ

召喚大会も無事に終わり、明久と雄一が優勝を勝ち取った。
学園長との取引も達成し、僕達は意気揚々と学園長室へ。
そこでも飛び出した明久の不用意な一言。

録音された音声が公開されたら大変なことになるぞー（ｂｙ無駄にタフなクラス代表）

僕達は無事に常夏を見つけ処刑することが出来るのだろうか！？緊迫の清涼祭クライマックスが始まる！

あらすじ終

「…………いなか」

四階の教室、トイレを探し、常夏がいないことを確認する。

「常夏が行きそうなところ…………」

常夏は教頭と繋がっているわけだから、教頭室、は可能性としてはあるけど、

教頭室に一般生徒がいたら怪しまれるからこれはバツ。

放送室は明久と雄一が抑えたはずだからバツ。

校外逃亡は、ムツツリーニと秀吉が阻止しているからバツ。

常夏の目的は、僕達の取引の内容を公にして学園長と僕達の信用を失わせること。

ならば、校内放送するのが手っ取り早いはずだけど……。

「放送？」

放送室以外で校内放送が出来るところは、職員室か、清涼祭の……

「屋上か！？」

後夜祭で使うために新校舎屋上にも放送機材を置いているはずだ。

Prrrrrrrrrr

屋上に向かつて走つてゐる中、携帯に着信が入つた。

「もしもし？」

『蓮！ 常夏の居場所が分かつたぞ！』

秀吉か。

「で、何処なの？」

『新校舎の屋上じゃ！』

やつぱりか。

「僕が今向かつてゐる… 明久と雄一に」

『もう伝えてある』

なら大丈夫だろ？

話している間に屋上の扉の前まで来る。
ドアノブに手を掛け、開け

「とにかく伏せろー！」

ドォン！

「…………え？」

ドアの向いから、常夏の慌てた声と、爆発音が聞こえてきた。
この音は……花火？

ドォン！

「発田。

そつきから、ドアからガチャガチャという音が聞こえている。

「つて、よく見たら鍵閉まってんじゃん」

常夏は、「丁寧に鍵まで閉めて放送を企んでいたらしいが、今回は裏田に出たね。

僕の出番はなさそうだし、秀吉たちに合流しようか。

校舎から出る前に、三発目の爆音と、校舎の揺れが伝わってきた。

校舎の一角が無残にも崩れ去っていた。

「」、校舎が「」のようだ……」

早くここから立ち去り。長居すると僕まで厄介」とに巻き込まれそうな気がする。

「何で僕なの！？ 誰か、誰か助けてえつ！ 変態教師に犯されそうですね！」

「貴様よりによつてなんて悲鳴を上げるんだ！」

校庭では雄一＆明久VS鉄人の命を掛けたマラソンが行われていた。

「遅れてごめん〜」

「遅かったの蓮」

「…………もう始めている」

どうして僕に電話するまでは校内にいた一人が既にまつたりと打ち上げモードに入ってるんだろう?

「本当、遅いわよ」

「……優子?」

秀吉の隣にもう一つ同じ顔があった。

「どうして優子がここに?」

「……Aクラスは打ち上げなんてやつてないからね。お邪魔したって訳

何処まで真面目なんだAクラス。

「痛てて……。随分と殴られたよ……」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」「む。明久と雄二も来たようじゃな」

「…………先に始めておいた」

「追いかけっこお疲れ様」

雄二と明久も無事(?)到着したようだ。

ただ、二人とも顔の面積がいつもの2倍近くに膨れ上がっている。

「そういえば、明久と雄二は何處をぶつ壊したの?」

遠くからじや、どの部屋が爆発したのか分からなかつた。

「教頭室だよ」

「ああ。今頃ババアのがさ入れが始まっている」ひだりつな
「なるほど……」「苦勞様」

「それにしても、」うつうつ賑やかなのもいいわね
優子がポツリと漏らした。

「まあ、Fクラスならではだよね
「普段は迷惑なんだけどね」
「……返す言葉もござこません」

「せういえば、お店の売り上げってどうだったの？」
明久の歎き。

そうこえればまだ知らされていない。

「せうね。すうじつて程じゃないけど、一一日間の稼ぎとしては結構
な額になつたんぢやないかしら」
そつこつて島田さんが収支の書かれたノートを見せてくれる。

「ふむ。どれどれ……」

「これば……」

雄二と顔を見合わせる。

「「この額だと、机と椅子は厳しきな。畳と卓袱台がせいぜいだ」「
机と椅子を50セシット買つにはどう見積もつても足りない。」

「うへん……。やっぱり、出だしの営業妨害が痛かったよね
明久の言つとおりだ。」

喫茶店では、どれだけの数お客さんが来ても店の席の数や回転率に
は限界がある。

清涼祭序盤の暇な時間が勿体無かつた。

「すいません。遅くなりました」

ちょっとと考え込んでいると、後ろから姫路さんの声が聞こえてくる。
そういうえば後夜祭のときにお父さんと話をするつて言つてたっけ。

「あ、瑞希。どうだつた？」

「はいっ！ お父さんも分かってくれました！ 美波ちゃんの協力
のおかげです！」

それは良かった。

姫路さんの転校阻止という、今回の最大の目的は達成されたわけだ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

僕はお邪魔みたいだから退散しようかな。

明久たちから離れたところにいた、秀吉と合流する。

「秀吉は姫路さんの転校の話しさ気にならなかつたの？」

「いや、ワシは姫路のお父上も分かってくれると信じておつたから
な。それにあまり大人数で詮索するのも迷惑じやろうて
お、大人だ……。優子とは比べ物にならないほど大人だ。

「何か言つた？ 蓮

「のわあつ！」

秀吉の後ろから、もう一つ同じ顔が現れたつて、この下り前にもや
つた氣がする。

「優子も居たんだ」

「何よ、アタシがいたら迷惑だつて言つの？」

「いや、全然

「そ、そつ。ならいいけど……」

そういうて「カップからジュースを飲む優子の顔は心なしか少し赤い。

「あのわ……蓮」

「ん? どしたの?」

「昨日はありがとう」

「……何の話?」

「ほり、アタシ達が連れて行かれたとき」

「あー、あの誘拐事件?」

「うん。あの時蓮が来てくれなかつたらどうなつてたか……
来ても危なかつたけどね」

拳銃まで出てきたときは本当に死ぬかと思つた。

「あの時は本当心配したんだから……」

「アハハ……自分でも死んだと思つたよ……」

「まだ、お礼言つてなかつたから」

別にそんなこと気にしなくてもいいの!。

もし優子たちがあいつらに傷つけられてたら「冗談抜きで皆殺しにしていた」と思うし、何もなくてよかつた。

「ねえ、右手は本当に大丈夫なの?」

「うん。打撲と裂傷だけで済んだし」

僕はそういうて包帯が巻いてある右手を見せる。

「! ? 血が……」

「へ? あ、本当だ」

いつの間にか傷口が開いていたらしい。包帯が赤くにじんでる。

「本当に大丈夫なの！？」

「心配性だな。」んなの血が出てるだけで別になんともないって

「……ダメ

「何がダメなの？」

「ちゃんと見せなさい」

「優子が僕の右手に手を伸ばす。

「大丈夫だつて」

僕は右手を引っ込める。

「もう～～大人しく見せなさい～」

「うわっ！」

優子が僕を押さえつけるように覆いかぶさってきた。

「にゅ～

しかもあらうことか僕の胸に顔をうずめてくるんだけど～！？

「ん？」

なんか酒臭いぞ。

優子が落としたジュースの缶を見る。

『オトナのオレンジジュース』

ああ……酒か……。

「オイ！ 誰だ優子に酒を渡したのはー いや、そもそも酒を買つ

てきたのは誰だ！」

僕の必死の叫びも、大半がお酒に酔っているクラスメイトには聞こ

えなかつたようだ。

「あ、姉上が蓮を襲つておるー。」

「秀吉！』

良かった。どうやら秀吉は無事なようだ。

早く優子をじけてくれると……

「済まぬ。邪魔をしたの」

「待つて！？ 出来れば優子をどかしてもらいたいんだけどー。」

「いや、蓮が姉上を酔わせて襲わせておるのかと……」

「しかもものすごい勘違いしてるしー。」

秀吉に必死に事情を説明して、何とか納得してもらえた。

「姉上、この体勢はまずこのじや

「うへん……」

「あれ？ 寝ちゃってる？」

いつの間にか寝つてしまつたようだ。

「じゃあ、秀吉、優子をよろしく

ガシッ！

秀吉の優子を任せて帰らうとするとい、優子に制服を掴まれた。

「ちよ、優子！？」

「ひ……蓮……」

「はーこ？」

「…………すう

寝言か。

「どうじよつ秀吉？」

「どうしようも何も……やうじやー」

秀吉が何かひらめいたようだ。

「お主が姉上を家まで運べばよこのじや

「なぜにー?」

「姉上が蓮を離さないのであればそいつあるしかあるまい。それとも、このままおいていくかの?」

「う……」

それはしたくない。

「ハア……分かったよ。じゃあ、秀吉道案内よろしく

「うむ」

優子を抱きかかえた後、掴まれている手を離し、背中に優子を回す。

「お、蓮と秀吉、どうしたんだ?」

優子をおんぶして、公園を出ようとしたところで雄一に声を掛けられた。

「優子が酔っ払って寝ちゃったから送つていいのかと思つて

「さうか」

見つかったのが雄一でよかつた。明久やFFFG団の連中に見つかってたらその場で襲われるところだったよ。

僕と秀吉は、酔っ払い死屍累々の様相を呈していた公園を出た。背後から明久の悲鳴と思わしき声が聞こえてきたのが聞こえて気にはなったけれど、おそらくまた明久を島田さんが痛めつけているんだろうと当たりをつけ、心中だけで冥福を祈つておくことにした。

「しかし、姉上がの「

「ん？ どうしたの秀吉？」

秀吉が何か意味深な台詞を言った。

「いや、姉上がワシ以外の男子がいるといひで寝るとは思わなくての「

「酔っ払ってるからね」

「うむ……姉上ならば酔っ払つておつても男子の前で寝ることはないと思うておつたんじゃが」

「……アルコールの力を舐めないほうがいいよ」

「はあ、姉上も大変じやの……。まあ、良い。あ、蓮その角を右じや」

秀吉と話しながら歩く」と15分。

「いじじや

一軒家の前に来た。

「ここが秀吉の家？」

「つむ」

「そういえば、知らない男が娘を背負つて帰つてきたら、家の人は僕に襲い掛かるんじや……」

「何気に失礼なことを想像しておるの……。大丈夫じや。蓮のことはわしも姉上も話しておるから」

「そなんだ」

「それに、今日は母上も父上もおらぬ」

僕の心配を返してほし。

「ああ、姉上の部屋は一階じや

「おじやましまーす

家の中に入つて、階段を上がる。

「 IJの部屋じゃ」

「え……」

秀吉に案内されたのは、ドア開け放しの下着や本が散乱している部屋だった。

しかも落ちている本が、その、所謂Bでしなもので……。

優子の新たな一面を知つた日だった。

ちなみに、次の日僕が優子を部屋まで送つたことが優子に知られて、秀吉もろとも理不尽な折檻を受けたのは別の話。話。

第三十一問 たつた一枚の紙が多くの人間を動かした。

バカテスト 日本史

問『樂市樂座や閑所の廢止を行い、商工業や經濟の發展を促した歴史上の人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント
正解です。

鮎川蓮の答え

『六角定頼』

教師のコメント
えつと……？

鮎川蓮のコメント

日本の歴史上最初に樂市令を布いた人物です。

島田美波の答え

『ちゃんまげ』

教師のコメント

もう日本には慣れましたか？

この回答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント
ちょっと馴れ馴れしいと思います。

第三十一問　たつた一枚の紙が多くの人間を動かした。

清涼祭が終わつて文月学園は一種の開放感に満ちている。
現在清涼祭の騒動の中心にいた我らがFクラスは朝のホームルーム

の真っ最中だ。

最近気づいたことなんだけれど、鉄人はHRの開始時間ぴったりに寸分の狂いもなくやつてくる。あの先生は時間にも厳しいよつだ。

「鮎川」「はい」「工藤」「はい」「久保」「はい」

いつものことではあるが、HRせりぎりに教室に滑り込んできた明久。

毎日毎日全力疾走しているのだろうか？

「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

淡々と進む出席確認。鉄人の声にクラスメイトは眠そうに返事をしている。

いつもと代わり映えのしない朝。

春先に比べ、幾分か熱を帯びてきた日差しは今日も穏やかに地上を照らしている。

今日もまた平穀で穏やかな日常が

「坂本」「……………明久がラブレターを貰つたようだ
『殺せえつ……』

雄一の一言であつてこいつ間に非日常（騒動）へと変貌した。

「ゆ、雄一！ いきなり何て事を言つ出すのを……！」

いつもよりも小声で話していたところに、教室の誰もがしつかりと聞き取っているあたり、Fクラスの連中には世間一般の常識が通用しないと改めて思い知らされる。

『どうこうことだー？ 吉井がそんなものを貰うなんて！』

『それなら俺達だって貰つてもおかしくないはずだ！ 自分の席の近くを探してみる！』

僕から見て、明久とFFF団の間には越えられない壁がある気がするんだ。

『ダメだ！ 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』
『もつとよく探せ！』
必死で探しているFクラスの男子。
非常に見苦しいが今一度良く考えてほしい。
もしこの搜索でラブレターが出てきた場合、その人もFFF団の殺害対象に入るということを。

『……出てきたっ！ 未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！』

その突っ込みの前に、どうしたら卓袱台と畳しかないこの教室にそれほどどのパンが隠されているのかについて議論すべきだと思つ。

「お前らっ！ 静かにしろ！」

鉄人の一言で、先ほどまで響いていた怒号が嘘のように静まり返る。

「それでは、出席確認を続けるぞ」

静寂の中、鉄人の出席簿をめくる音だけが響く。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」

流石はFクラス。

皆が寸分違わずに明久への呪いの言葉を口にする。

「皆落ち着くんだ！ 何故か返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

明久の必死の叫びを一蹴する鉄人。

なんだかんだ言つても、Fクラスの扱いにおいてこの人に勝る人は

いない。

「先生、ここので注意すべきは僕じゃないでしょー！？　このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしましますよー。」「新田」「吉井ロロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

明久の文字通り命がけの抗議も見事なまでのスルー。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むよう」「待つて先生！ 行かないで！ 可愛い生徒を見殺しにしないで！」「我関せず、とでも言つようになこの殺氣漂う異様な教室から出て行こうとする鉄人。

それを必死に引き止めようとする明久。
もうなりふり構つてられないのは分かるんだけど、明久の台詞、がちよつと気持ち悪い。

「吉井、間違えるな」

ドアの取っ手に手をかけたまま立ち止まり明久に声を掛ける鉄人。
何が言いたいんだろう？ 自分のことは自分で何とかしろ、とかかな。

「お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかつたよバカ！」

たまに鉄人が本当に教師なのか疑問に思う。

「授業は真面目に受けるように」「元気

それって休み時間は何をしててもいいって事だよね？」

「先生待つて！ せんせーー！」

明久の必死の呼びとめもむなしく、鉄人はさつとドアを開けて去ってしまった。

鉄人という強力無比なストッパーを失い、これでこのクラスでこれから起ころるであろう暴動を止めることが出来る存在はなくなつた。

「アキ、ちょっと話を聞かせてもらえる?」

速攻、というべき速さで島田さんが明久の肩を掴む。

明久の顔から冷や汗が出たところを見ると、かなりの握力で掴んでいるのだろう。

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ?」

「手紙を貰ったの? 誰からなの? どんな手紙なの?」

「あーえっと、そのー」

まだ付き合つてもない二人がこうして命のやり取りをしているこの光景も異常だが、この光景に全く驚かないどころか、日常の一部として受け入れてしまつていてあたり僕も普通ではなくなつてきているのかもしねれない。

「いいからおとなしく指の骨を ジヤなくて手紙を見せなさい」

島田さんに一つ言わせて貰うとすれば、明久の手紙一つで必死になります。

自分で告白も出来ないくせに人一倍に嫉妬心だけは働かせるなんて図々しいにも程がある。

「あの、明久君」

「ん、なに?」

明久に声を掛けたのは、Fクラスの紅一点（島田さんはいろんな意味で女性とは言えない）である姫路さんだ。

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せてほしいです……」

「……」
どこの狂戦士とは違いかなり遠慮がちに明久のお願いをする姫路さん。

彼女はこのクラスで数少ない常識人なので、明久が断つても諦めてくれるだろう。

「その……」「めん」

「でも、でも……」

意外と食い下がっている姫路さん。

好きな人にラブレターが来るって事は、女子にとつてはかなり重要な問題なんだろうか。

「いくら姫路さんの頼みでも、こればっかりは聞けないよ」

「でも私は明久君に酷いことをしたくないんです！」

「ちょっと待って！ 姫路さんまで僕に（明久に）暴行を加える

ことが前提なの！？」

前言撤回。彼女も僕と同じかそれ以上にFクラスの異常な色に染まってきたみたいだ。

「皆、ちょっと落ち着け」

パンパン、と手を叩く音と共に聞こえてきたのはこの異常なクラスを統べる代表であり、明久の親友（と僕は認識している）雄二の声だ。

「今重要なのは明久の手紙を見る」とじやない

皆に聞こえるようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

きっと嫉妬に狂うFクラスの面々を落ちさせるようなことを言ってくれるのだろう。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違つてんだよ畜生！」

明久が自分の荷物を掴んで教室から走り出す。
僕は雄一の発言に開いた口がふさがらない。

『逃がすなあつ！ 追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！ 吉井を殺せ！』

『サーチ＆テス！』

『せめてデストロイで！』

『何をデストロイするの？ 明久の存在？』

『やつぱりそれもなし！』

『冗談抜きでFクラスのメンバーなら明久の存在』とデストロイしか
ねない。

「いたぞ吉井だ！ 空き教室に向かつたぞ！」

「了解だ！ 見失わないよ！」に追つてくれ！ こつちは全部隊に連
絡を取る！』

「オーケー！ B部隊は正面から、C部隊は背後から回つて挟み撃
ちにするんだ！」

「応つ！」

教室で授業の準備をしていると、そんな声が聞こえてきた。

なんて無駄な連携力なんだらう……。

「おい蓮。お前は明久を殺しにいかないでいいのか？」

「雄二こそ」

雄二が声を掛けてくる。

明久にFFF団+島田さんをけしかけた張本人の癖にどうしてまだ教室に残っているんだろう。

「俺は明久の行動が読めているからな」

「……屋上でしょ？」

「なんだ知つてたのか」

転入して一ヶ月とちょっとしか立たない僕だけれど、告白スポットとしての屋上の噂は聞いている。

人も来ないため、告白する人が後を絶たないそうだ。
きっと明久のことだから、屋上で下見も兼ねて手紙を読もつとか考
えているに違いない。

「明久相手だと、ムツツリーーーは買収されるだろうし、クラスの連
中も捕まえるのは難しいはず。クラスの連中を振り切つて下見兼ね
て屋上に行くと思う」

「そうだ、だから俺は

「待ち伏せ、か」

「ああ」

明久が雄二に勝てないわけだ。知力、体力、策略全てにおいて雄二
のほうが上だ。

「で？ 僕になんか用？」

「いや、お前は明久の幸せがムカつかないのか？」

「雄二はそんな理由で明久を殺しかけてるのか！？」

まさかそんな理由だとは。

「ちつ、どうやら蓮は俺たちの気持ちがわからないようだな」「分かる分からぬの前に友達の幸福は普通祝福してあげるものだよね？」

「お前は何を言つてるんだ？」

「くつ、まさかここまで常識が捻じ曲がつているとは…」

「でえ？ 本題は？」

「ああ、お前も付いて来い」

「なにゆえ！？」

「バックアップだ」

「だが断る！」

「……木下姉と一緒に帰ったよな」

「！？ しょうがない。行こうか雄一」

「こいつ、他人を脅すのに躊躇がない！」

仕方がないから、事の顛末くらいは見届けてあげよう。

ちよつと面白そうだし。

「やはりここまで来たか、明久」

「明久君、言つ」とを聞いてください。」

「雄一に姫路さん……」

階段を上り、明久が屋上へやつてきた。

「ちなみに僕もいるからね

「つー? 蓮まで……」

最近、僕の存在感について本氣で悩んでる。

「どうして僕がここへ来ると?」

「屋上は僕でも知っている告白スポットだからね。明久ならきっと下見も兼ねてここで手紙を読もうと考へたと思つた

明久が忌々しそうな顔をしている。

「トイレでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな

「あ

やはりバカだ。

「ゴメン雄一。僕、ちょっとおなかが痛いから先にトイレに行つてくれるね」

「明久君、ずっと気づかなかつたんですか……?」

「しようがないよ、明久だもの……」

姫路さんと一緒に明久に哀れみの視線を向ける。

「ゆ、雄一はどうして僕の邪魔をするのさ! そんなことをしても、雄一にとつてのメリットは何もないはずなのに!」

明らかな話題転換。

まあ、あの視線には僕でも耐えられないけど。すると雄一が、急に真剣に語りだした。

「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとって何

のメリットもない。いや、それ以前に俺は彼女がほしーといつ気持ち 자체が全くない」

初耳だ。

雄一だつて彼女くらいにはほしがつてゐると思つていていたのに。霧島さんとか霧島さんとか霧島さんとか。

「だつたら、どうして……？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粹にそつして雄一は真剣な顔のままで言い切つた。

「お前の幸せがムカつくんだよ」

「アンタは最低の友達だ！」

いや、こんなことする奴はそもそも友達かどうかすら怪しい。

「さて明久。ここ『おとなしく手紙を渡せ』なんて野暮なことは言わねえ。本氣でかかつて来い」

雄一は学生服の上を脱ぎ、ネクタイを外した。あまり見たことがなかつたけど雄一の体は、しなやかで無駄のない、理想的な筋肉のつき方をしていた。

「姫路、上着を持つていてくれるか？」

「あ、はい」

雄一は姫路さんに上着を渡し、軽くシャワーをして見せた。

鋭い音のするその拳は雄一が喧嘩慣れしていることを思わせる。

本気で明久を殺るつもりだ……。

「明久君、止めておいたほうが……」

姫路さんが明久に心配そうな声を掛ける。

確かに雄一と明久が戦つて、明久が勝つ確率はかなり低い。

「心配ありがと。けど、僕は止める気なんてないから」

「……ですか……。なら、もう止めません」

「……」めん。心配してくれたのに」

「いえ……なんだか明久君らしいです」

あれ？ これ何処の少年漫画？

「僕らしい？ つと。これ、僕の分も持つていてもらえる？」

「あ、はい」

姫路さんに自分の上着を渡す明久。

「 「…………明久」」

こぶしを握つて構えを取つている明久を見る。

「勝負だ雄一！」

いや、そつじやなくて

「 「…………お前、バカだらう」」

「へ？」

明久が姫路さんに渡した上着。

そのポケットにはピンクの封筒が入つていて。

「あ、あの、手紙がポケットに入つてるみたいなんですが……見
ちゃつてもいいんですか……？」

「だ、ダメだよ！ 戰わないでそれ見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろ？ が！ やれ姫路！ その手紙を始末する
んだ！」

明久と雄一がもみ合つていて。

「…………あれ？ これってまさか……？」

姫路さんの様子がおかしい。

普通に考えれば他人の思いのつまつた手紙を始末することに戸惑っているように見えるのだろうけど、普段の明久を始末する姫路さんの様子を見ていると姫路さんが戸惑いつゝことは見えない。

「姫路さん！」

「え！？ あ、はい。なんですか？」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんには手紙に込められている人の思いを踏みにじることなんて出来ないってこと。だから、おとなしく」

「手紙を細切れにするんだ！」

「違うっ！ そうじゃない！ 今のは蓮だな！ そうやって僕の声を使ってつなぐのは反則だ！」

「はいっ！ 分かりました！」

そういうつて姫路さんは、懇切丁寧に手紙を細切れにして見せた。

「ああっ！？ それもう絶対読めないよね！？」

「まさか姫路が本当に破るとは思わなかつた。……スマン、明久

「うん……」「メン明久」

まさか姫路さんがこんな行動に出るとは思わなかつた。

「せめてもの侘びだ」

そういうつて雄一は手紙の切れ端を集めめた。

「ありがとう、雄一。最後の可能性にかけてこの手紙をつなぎ合わ

せて

「未練を断つてやる」

その手紙に火をつけた。

「つづこう！？ ここまでやつた挙句、容赦なく燃やすの！？ もうこれ100パー読めないよね！？ 僕の幸せな未来は何処に行

つたの！？」

安心しる明久。君に幸せな未来なんて待つてないから。

その後の必死の消火活動（明久のみ）の甲斐なく、手紙が全て灰になっていた。

「坂本君と鮎川君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」
姫路さんが安心したように僕と雄一に尋ねてくる。

「俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もっとも」「

「誰からの手紙だか、日星は着いてるけどね」

「え……っ！？」

「確かに、他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな？」

「そ、それは、その……っ！」

「雄一、その話、もっと詳しく！」

「ああ明久君は聞いちゃダメです！」

「こペつ！？」

「ひ、姫路さん！？ 明久の首が大変なことになってるんだけど！？」

？」

お茶の間には見せられない姿だ。

「『』、ごめんなさい！ 私、大変なことを…」

「まあ気にするな。どうせ生かしていくてもあの連中に殺されるだけだからな」

『ア～キ～～！ アンタよくもやつてくれたわね～～！』

『吉井い！ 絶対殺すう～～！』

『ガンホー！ ガンホー！』

明久に無事明日は来るのだろうか…………。

第三十三問 坂本雄一結婚大作戦！（前編）（前書き）

昨日は更新できませんでした。
すいません。

こ、今週末こそストックを……

第三十三問 坂本雄一結婚大作戦！（前編）

文月新聞

僕が小さな頃、祖父が良く「いつ言つてました。

『明久、泥棒でもなんでもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげよつと思ひます。

爺ちゃん……。

これで、いいかい……？

以上、

『女装が似合いそうな男子ランキング№.1』

『コイツにだけはバカと言われたくない生徒ランキング№.1』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキング№.1』

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

尚、女装が似合いそうな男子ランキングにノミネートされていた木下秀吉さんと鮎川蓮さんはアンフェアであるとの結論に達したため除外されています。

第三十三問 坂本雄一結婚大作戦！（前編）

Fクラス全員（秀吉除く）を巻き込み、若干一命が死に掛け、多くの負傷者を出したあのラブレター騒動も既に一週間前の出来事となつた。

今、僕達の抱えている話題といえば

「明久」

「ん？ なに、雄二」

「そういえば、例のチケットはどうした？」

召喚大会で明久と雄二が勝ち取った如月グランドパークのチケットの行方である。

「例のチケットって　如月グランドパークのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確かに今週末がプレオープンの予定日のはずだが、姫路を誘つて行つてみたりはしないのか？」

「な、何を言つているのさ雄二！　だつて、あのチケット使つて入

場したら、如月グループの力で一緒に行つた人との結婚を強要されちゃうんでしょ？ そんなことになつたら姫路さんが可哀想じゃな
いか」

「そりや向こうも如月グランドパークを訪れたカップルは幸せに
れるとか言つジンクスを作りたいんだろうし、色々とちよつかいは
かけてくるとは思うけど」

「うんうん。そうだよね」

「姫路も満更じやないと思つぞ」

「…………ほえ？」

今日も明久は鈍感なようです。

「いいじやないか。勇気を出して誘つてみたら。意外とすんなり〇
Ｋをもらえるかもしねりいぞ」

今日も雄一は人生の墓場から逃れるために必死なようです。

「あ、あはは。またまた雄一つてば『冗談ばっかり』。僕なんかが姫
路さんと結婚なんて、そんなのあるわけないじやないか」

「ふむ。まあ、お前がそういうならそれはそれで構わないが。けど
それなら、チケットはどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ
「そうか。そんな奴がいるなら都合がいいな。そのまま上手く結婚
になれば、如月グループも喜ぶだろうしな」

「そうなつたら僕が如月グループをぶつ潰す算段を立てるけどね
「そうだね。上手くいけば全員が幸せだもんね」

「その連中、上手くいきそうなのか？」

「うん。後は時間ときつかけの問題だけだと思つんだ」

「そりや。うまくいくといいな」

「大丈夫。きっとうまくいくよ」

今日も僕は忘れ去られているようす……。

雄一Side

時は流れ、週末。

「……俺は……無力だ……」

俺は朝から翔子とお袋の作戦に嵌り、警察のオッサンに『一次元と現実の区別が出来ない妄想野郎』のレッテルを張られた上に、如月グランドパークに来るハメになつっていた。

「……やつとついた」

嬉しそうにグランドパークの入り口を眺めている翔子。そんな姿を見ると、つれてきた甲斐があるかもしれない。

「よし、翔子」

「……うん」

「帰るわ」

ミシッ

「……ダメ。絶対に入る」

「はつはつは。翔子、おれのひじ関節はそっちの方向には曲がらな

いぞ？」「

肘を極めてきた翔子に、脂汗を浮かび上がりせながらも笑いかける。

まづい。指先の感覚がなくなってきた。

「……恋人同士は皆こうしてゐる」

「待て翔子！ お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミニッシヨンを同様に考えてないか！？」

「……？？？」

素で疑問符を浮かべると恐ろしい女だ。

きつとコイツには、世の中の恋人は皆、相手を逃がさないように肘関節を取り合っているように見えるのだろう。

「……とにかく、入る」

左腕を人質に取られたまま入場ゲートへと連行される。

プレオープンという限定的な期間のためか、特に待つこともなく係りの青年の前に進むことが出来た。

「いらっしゃいマセ！ 如月グランドパークへヨウコソ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りのある日本語で応対してきた。

肌の色も顔もアジア系なので、何処の国の奴かは良くわからないが。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちデスカ？」

「……はい」

青年は翔子からチケットを受け取ると、笑顔のまま一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

翔子が不安そうな顔で尋ねる。俺としちゃ、使えないほうがいいんだが。

「イエイ、そんなことはないですヨ? デスが、少々お待ちくだ
サービ」

係員はポケットから無線を取り出し、どこかに連絡を取り始めた。

「 私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める。
確実に仕留める」

「おじカラ。何だその不穏な会話は
こいつ急に眼の色が変わりやがった。まさか例のジンクスを作るための工作員か?」

「……ウエディングシフト?」

翔子が首をかしげている。如月グループの陰謀を知らないコイツには良くわからない単語だろうな。

「気にしないでぐだサービ。コッチの話テース
取り繕つたようににもとの口調に戻る係員。あからさまに怪しい。
「アンタ、さつき無線で流暢に日本語しゃべってなかつたか?」

「Ja pan ese i s t o o d i f f i c u l t f o r
u n d e r s t a n d i n g」

俺が指摘した途端、いきなりやたらと発音のいい英語を喋りやがった。

なんなんだ「イツ?

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場さえさせてくれたら、後は放つておいてくれて構わない」

潔いというか、もう開き直つてるとしか思えないそのネーミングのおかげで向こうが何をやろうとしているかが良くなかった。

だが、そんなものに乗る気はない！ そうしないと、俺の人生が……

……つ！

「そんな事いわズニ、お世話をさせてくだサイ。とつても豪華なおもてなしさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントかお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りテース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐つたザリガニを送りマース」

「やめろっ！ そんなことされたら、我が家は食中毒で大変なことになってしまつ……！」

あの母親は間違いなくザリガニを伊勢海老と勘違いして食卓に上げるだろう。

なんて恐ろしいことをしてくれるんだ、この似非外国人め……！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合ひの一人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄一と、お似合い……（ポツ）」

翔子は似非野郎の言葉に顔を赤らめていた。

「イツは係員の言葉遣いに違和感を感じないのだろうか？

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を曰深にかぶつたスタッフがカメラを片手に現れた。

なんだか見覚えのある奴だな？ 帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「I appreciate your act」

「あ、あぶり……？」

似非外国人が英語で礼を言つてカメラを受け取る。

スタッフのほうは、外国人が言つている意味が分からぬのか、アホな声を出している。

やつぱり妙だ。

スタッフのほうに見覚えがあるのもそうだが、俺の知り合いに二人ほど外国語の発音がやたらいい奴がいる。

ちょっと試してみるか。

雄一Side Out

蓮Side

(チツ！ 雄一の奴が怪しんでいる)

はるー。この小説の主人公（忘れてないよね？）鮎川蓮です。
僕は今、如月グランドパークにいます。

雄一と霧島さんのデートを応援しよう！ と明久が面白半分で提案し、Fクラスのメンバーが集まつたわけですが、目の前で雄一がスタッフに扮した明久に疑いの視線を浴びせていく真つ最中というわけ。

ちなみに僕は、マイク&この前テレビで見た外国人タレントの声帯模写をして係員やつてます。

「悪いが少し電話をさせてくれ」

「……分かりましタ」

雄二が携帯電話を取り出して電話を（おそらく明久の携帯にだらうが）掛ける。

Prrrrrrrrrrrr

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

明久の尻ポケットから携帯の呼び出し音が鳴る。

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃないか……」

「人違いですっ！」

ダツ！

「あつコラ！ 逃げるなテメエ！ ええい、離せこの似非外国人！」

今、雄二を離したら明久が無残な変死体として発見されそうだ。

「彼はここにスタッフのエリザベート・ハナコ（35歳）、通称スティーヴでース。吉井ナントカさんではあります」

「黙れ！ 人種性別年齢氏名全てに堂々と嘘をつくな！ 島もむづく考へてもその名前で通称スティーヴはないだろ！ ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言つてない！」

「しまつたつ！」

「ん？ 貴様その声といい、英語の発音といい、明久より低いその身長といい……お前蓮だな！？」

「何を言つているのデスか？ 私はロータス（英語で蓮）・エイン・スウイートファイツシユ（ドイツ語で鮎）でース」

「完全に当て字じやないか！？」

チツ！ ばれたか……。

僕と明久の存在を確認した以上、ほかのメンバーについても警戒するだろう。

やり辛くなつた。

「翔子、スマンがちょっと我慢してくれ」

「…………？」

雄二はそういうて、あよとんとしている霧島さんのスカートを掴み、軽く捲りあげる。

つて！？ いきなりにゅにゅをつけ！？

「…………（ギラッ）」

雄二の大胆行動に僕がテンパっている間に、近くに潜んでいたムツツリー二が霧島さんのサービスショットに反応してしまつた。

「咄嗟にカメラに手を伸ばすその動き……。やはりムツツリー二も来ていたか」

はい。そうですよ。僕と明久がいてムツツリー二がいないわけないじゃないですか。

「…………雄二、えっち」

霧島さんが少し困ったような顔で雄二に抗議している。

こんな人の多いところでスカートを捲られるという大事をやられたのに、満更でもないあたり、霧島さんの眼中には雄二しか映っていないに違ひない。

「なつ！？ 違うぞ翔子！ 僕はお前の下着なんかには微塵も興味がない！」

「…………それはそれで、困る」

「ぐあああああああ！ 理不尽だあつ！」

霧島さんの握力で、雄二の頭蓋が軋む音がする。

今のが元『真撮影を済ませてしまおう。

「では、[写真を撮ります。はい、チーズ」
フラッシュと共に、電子音が聞こえ撮影が終了する。
カメラをムツツリーに渡し、印刷してもらつ。

「すぐに印刷いたしますので、そのままお待ちください」
「……わかった。このまま待つてる」
雄一にアイアンクローラーをしたまましゃべる霧島さん。
そういう意味じゃないんだけど……。

程なくして、ムツツリーが印刷を終え、写真を持ってきた。

「！？」
「はい、どうぞ」

写真を見たときの動搖を押し殺し、雄一と霧島さんに写真を見せる。

「……雄一、見て。私達の思い出」

「……なんだ、この写真是」

写っているのは霧島さんの後姿とアイアンクローラーに悶絶している雄

一。そして

「さ、サービス加工も入れておきました」

その一人を囲むハートマークと『私達、結婚します』という文字。

写真を撮った張本人が言えるせりふじゃないかも知れないが、この二人に幸せは訪れそうにはない。

「この写真を、パークの写真館に飾つてもいいですか？」
「蓮、正気か！？ これを飾ることでここに何のメリットがあるつて言つんだ！？」

メリットどころかデメリットしかないだつが、明久がそうするよに言つていたから、僕は従わざるを得ない。諦めてくれ、雄一。

「……雄一、照れてる?」

「すまない。この写真で照れる要素が何処にも見当たらない」

なんて、印刷された写真を見ていると、

『ああっ! 記念撮影してる! アタシらも撮つてもりおーよー。』

『オレ達の結婚の記念に、か? そうだな。おい係員。オレたちも

『写つてやんよ』

まあ、なんとも頭の悪そうなカツプルが歩いてきた。
つーか、何でそんなに偉そ娘娘なんだ?

「すいません。こちらは特別企画ですので」「

一応下手に出で謝つておく。

これはパークの許可を取つて、僕たちが雄一と霧島さんだけを対象
にやつてる」とだから、他の客までやる余裕はない。

『ああっ! いいじゃねーか! オレたちやオキヤクサマだぞコル
ア!』

『あやー。リコータ、かっここーーー。』

上から見下ろすように威嚇していく男のまつ。

絵に描いたようなチンピラなんだけど、そのチンピラを見て喜ぶ女
のまつもむづかと思ひ。

あと、一つ言ひすれば、『お密様は神様』ってこのせ、お店の接客の心構えであつて、お密である貴様らが持ち出すよつた言葉ではない。

こんな奴がフレオープンとはいえ園内をはいかにしてこるものパー
クにひとつ迷惑になるだらう。ところとで駆除しておけ!』

「お密様。」の往来ではなんですの、完全なソーシャルを撮
り致します。』ちらへ

頭の悪いカップルを人の少ない場所に連れ込む。具体的に言うとトイレの裏

「貴様ら調子こいてんじやねえぞ「ゴルアツ！」
『さやあああああああああああああああああつー』
駆除完了」。

その後戻つたときには、雄一と霧島さんの姿はなかつた。

第三十四問 坂本雄一結婚大作戦！（中編）（前書き）

今日は短いです。

どうしても2話で収まらなかつた……。

第三十四問 坂本雄一結婚大作戦！（中編）

坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

「……おい翔子。とりあえず俺に分かるように状況を説明しろ」

「……これは、私達夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「ちなみに僕、鮎川蓮と吉井明久がアシスタントです」

「驚いた。このタイトル、『の』の部分以外嘘しか書いていないぞ」

「……では、ハガキの紹介」

「たまには俺の話を聞け」

「……『突然ですが、仲良し夫婦のお一人に相談です』」

「ハガキの差出人よ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度良く考えて欲しい」

「……『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたら良いでしょうか？』

「いや、どうしたらと言われてもな」

「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

「頼むから他人事と思ってくれ」

「……だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」

「翔子よ、それは俺の身に降りかかる不幸予告と考えていいのだろうか？」

「……用意するものは三つ。アシstantさん。お願い」

「「はいはい」」

ガラガラ

「？ 浮氣防止に道具が必要なのか？」

「……一つ田は」

「一つ田は？」

「……『手錠』」

「翔子ストップだ。一つ田からいきなり犯罪臭がある」

「……二つ田は」

「やっぱり聞いていないな。それで、一つ田は？」

「……『エプロン』」

「ちょっと待つてくれ。急にお前の考えが読めなくなつた。といふかその組み合わせで俺に何をするつもりなんだ？」

「……そして三つ田は」

「三つ田は？」

「……『ビデオカメラ』」

「貴様何を撮るつもりだ！？ 手錠とエプロンでドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？」

「……その三つを用意して、夫に浮氣の怖さを教えてあげるといふ」

「俺は今何よりお前が怖い」

「……以上、『バカなお兄ちゃん大好き（一一歳）』ちやんからのおハガキでした」

「差出人小学生かよ！？ 世も末だなー！？」

「どうしてだろう、蓮。僕他人事とは思えないんだ」

「奇遇だな明久。僕もこんなことをやる人間を身近に知っている気がする……」

第三十四問 坂本雄一結婚大作戦！（中編）

雄一Side

「さて。それじゃ、テキトーに回つて帰るか」

「……楽しみ」

チンピラカッフルの相手をしている蓮を尻目に、俺達は園内を回っていた。

前評判どおりの最新アトラクションが沢山ある。

3Dの体験アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているアトラクションはすべて揃っているようだ。

中には、見た目だけでは想像もできないようなものもある。

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「……折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく妙な雰囲気にならなによつたアトラクションを探す。

すると、そんな俺達にヒョコヒョコと着ぐるみが近づいてきた。さつきの狐の着ぐるみに似てゐる。違いは服装だ。さつきの奴と違って大きなリボンをしているところを見ると、こいつはメスなんだろう。

『お兄さん達、フリーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。ボイスチョンジャーなどは搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。……といふか、聞き覚えのある声だ。気のせいか、クラスメイトの優等生の声に聞こえてならない。

こいつも確認しておくか。

「そりいえば、さつき明久がバイトの女子大生に映画に誘われてたな」

『ええっ! 明久君が! ? それは何処で見たんですか! ?』

本当に「コイツらは、揃いも揃つて……。

「おい姫路。アルバイトか?」

『あ……っ! ち、違います! 私 じゃなくてフリーは姫路なんて人じゃないよ? 見てのとおり狐の女の子だよ?』

「じゃあ、フリーとやら。お前のおススメを教えてもらえるか?』

『あ。う、うんっ。フリーのおススメはねつ、向こうに見えるお化け屋敷だよ!』

姫路 ではなくてフイーは噴水を挟んだ向こうにあるお化け屋敷を指さす。ふむ。ハイ病院を改造したとか言つ例のアレか。

「そうか。ありがと!」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中を押して歩き出すると、姫路が慌てたように俺の手を掴んできた。

『ままだま待つてくださいーーー どうしておススメ以外のところに行くんですか！？』

「どうしてもクソもあるか。お前の口ぶりから察するに、お化け屋敷に余計な仕掛けが施されていることは明白だな。態々そんなところに行く気はない」

『や、そんな困りますつーーー お願いですからお化け屋敷に行って下さいーーー』

「断る」

そのお願いとやらのために残りの人生を捧げる気はない！ 断固として拒否し、俺は自由を謳歌するんだ！

雄一Side Out

蓮Side

『お願いですーーー お化け屋敷はきっと楽しいですかーーー』

「い・や・だ！」

チンピラカップルを駆除し、雄一たちをやっと見つけたと思つたら、雄一がフイー、もとい姫路さんに掴まれているところだった。

話している内容から察するに、姫路さんがお化け屋敷に行くようこ勧めて雄一が断っている、といつ構図か。

助けに入ろうかな～なんて考えていると、向こうのほうから何かが近づいてきた。

『そこまでだ雄一　じゃなくって、そこの不細工な男！』

「「その頭の悪そうな仕草……明久かつ！」」

颯爽と登場したのはフィーの色違いの狐の着ぐるみ（たしかノインだつたはず）だった。

『失礼な！　僕　じゃなくてノインの何処が頭が悪いって言うんだ！』

「黙れ！　頭部を前後逆につけている奴をバカといって何が悪い！」本来はマスコットの名の通り可愛らしい外見をしているであろうその狐の着ぐるみは頭部の装備が前後逆になつていていたせいでとてもシユールな生物に変わり果てていた。

「……雄一、ノイちゃんはうつかりさんだから」

「翔子。うつかりで頭部が前後逆になる生物がいたら自然界で即座に淘汰されると思うぞ」

今回は雄一に賛成だ。

うつかりで即死する生物などいたら食物連鎖の底辺もいいところだろ？。もしかしたら植物よりも下かもしれない。

『あ、明久君っ。頭が逆です！　ああっ！　今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！ 通りで前が見えないと思つた！』

『早く直さないと坂本君にばれちゃいますっ！』

今頃気づく明久だが、前が見えないのにどうやってこじまできたんだろう？

意外と侮れないかもしない。

……さて。そろそろ助けに入るか。

「はい。すいません。お待たせいたしました」

雄一と霧島さんに近づいて声を掛ける。

「蓮、貴様ついに似非日本語すら使わなくなつたな！？」

雄一がなんか言つてるけど気にしない。

「坂本雄一さん、というか雄一。お化け屋敷に行つてくれない？」

「だからいやだといつてるだろうが」

「コトワレバ、アナタの実家にプチプチの梱包剤を大量に送りマース

「やめろっ！ そんなことされたら我が家のが家の家事がすべて滞つてしまつ！ そしてお前はどうしてこのときだけ似非日本語を使う！？ さりに何処でその情報を仕入れた！？」

明久から仕入れました。

『ところで明久君。さつき女子大生の人から声を掛けられていたつて聞きましたけど？ まさか、大事な作戦の最中に他の女人と…』

…』

『え？ なんのこと？ 僕は別に何も ってあれ？ デジして携帯電話を取り出すの？ 誰かを呼ぶ気？』

『美波ちゃんが来てくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせてくださいね？』

姫路さんは着ぐるみを着たままどうやって携帯を操作したんだろう？
彼女も侮れないスキルの持ち主なのか……。

『だ、ダメだよ！ オープン初日に刃傷沙汰なんて口の評判に
ひいいつ！ なんだかすごい勢いで誰かが走つてきているんだけど
どー!? 土下座でも何でもするからこうないでくださいっ！』

ファンシーな狐の痴話喧嘩つて、なかなか見れるもんじゃないよね
……。

仕方がない。奥の手を使おう。

霧島さんに近づいて、耳もとで囁く。

「坂本翔子さん、お化け屋敷は抱きつき放題ですよ？」

「…………雄一、お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞ蓮、翔子を使って罠に嵌めようなんて！ それと、翔子を
勝手に入籍させるな！ そいつの苗字は霧島だ！」

「…………大丈夫。すぐに変わるから」

抗議する雄一の肘関節を極める霧島さん。

彼女は結婚相手の意思は関係ないのだろうか……？

「で、では、この誓約書にサインしてください」

「なんだこれは？」

「ただの誓約書です」

「お化け屋敷に誓約書が必要なのか……まあ、面白そつではあるな
雄一が誓約書に手を掛ける。

その誓約書にはこう書かれていた。

【誓約書】

1・ 私、坂本雄一は霧島翔子を妻として障害愛し、苦楽を共にす
ることを誓います。

2・ 婚礼の際には、如月グランドパークを利用することを誓いま
す。

3・ どのような事態にならうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄一。実印」

「……朱肉はこひらです」

「俺だけか!? 俺だけがこの状況をおかしいと思つて
いるのか!?

安心してくれ雄一。僕だつてこの状況も如月グループの考え方おか
しいと思つてている。

とつあえず、冗談とこいつとして、雄一と霧島さんはお化け屋
敷の中に入つてもらう。

「それでは、お邪魔になりそうなその大きな鞄をお預かりいたしま
す」

「……お願い」

霧島さんの鞄を受け取る。

遊園地に来るにしては荷物が大きいと思つていたところだ。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「この鞄ですか? 分かりました。気をつけます」

零れる……か。何が入っているんだろう。

「では、こつてらっしゃいます」

「……雄一、行こう」

「痛だだだだつ! 肘がねじ切れるつ!」

雄一の抵抗むなしく、霧島さんと雄一はお化け屋敷の入り口に立つ。

「いや、どうぞしゃい。出来れば生きてまた会おう……。

あのお化け屋敷には、明久考案の作戦が施されている。
と、いうのも歩いていると、廊下のスピーカーから、『姫路のほう
が、翔子よりも好みだな。胸も大きいし』と、雄一の声真似をした
秀吉の声が流れてくるというものだ。

さうして、処刑道具として釘バットが下りてくるなんて鬼畜にも程が
ある。

そのおかげで、雄一たちがお化け屋敷に入つてから出でるまでの
小一時間、雄一の叫び声が途切れることはなかつた。

明久は「」のびやくとも紛れて、本氣で雄一殺害を田論んでいないだ
ろうか？

「お、お疲れ様でした。どうでしたか。結婚したくなりましたか？」
「あれと結婚を結び付けて考えられるのは、明久だけだと思つてい
たが、お前もなのかな？」
いやだつて、「」の言つよつに台本に書いてあるんだもん。

「「」の作戦は明久考案だから、文句があるなら明久に言つてくれ」

「認めたな！？ ついに明久の存在を認めたな！？」
「だって気づいてるでしょ？ どう見ても」

逆にこじままでして気づかないのは全世界でも明久くらいのものだろう。

でも、明久考案の作戦にしないといけなかつたんだ。
そうじやなかつたら、如月グループ考案の作戦になつてしまつところだつたんだ。

如月グループの作戦。

- 1、詐欺。
- 2、ヤクザを使っての脅迫。
- 3、人質をとつての脅迫。

鬼畜にも程がある。

「……そろそろ、お昼」

大企業の暴挙に頭を悩ませていると、霧島さんの声で現実に戻された。

腕時計を確認してみると、午後の一時を過ぎている。
そろそろ次の作戦の時間だ。

「……あの、私のバック

「では、豪華なランチを用意してありますので、こちらにいらしてください」

さつきの霧島さんの言葉で、バックに何が入っているのかは大体分かつてしまつたが、心を鬼にして歩き出す。

昼食会場に来てくれないと、霧島さんが一番望むものが体験できないんだ。

「翔子、どうした？」

「……なんでも、ない」

「？？？」

寂しそうな霧島さんの声を背後に歩を進める。

あつと満足をせるから、待つてね霧島さん（雄一は除外）！

第三十五問 坂本雄一結婚大作戦！（後編）（前書き）

また一日空いてしまいました。

悩んだ割に結局いつものとおりグダつてゐる気がします……。

第三十五問 坂本雄一結婚大作戦！（後編）

「…………土屋と」
「工藤の」
「性活小嘶りー。」
「はー。このコーナーでは、日々の生活に根ざした
ちょっとエッチな小嘶をボクこと工藤愛子とムッシ
「…………土屋康太」
「ムッシリーー君が紹介していくといつものです」
「…………最近、本名を呼ばれない……」
「では、今回のテーマですが」
「…………本名……」
「…………『シャワーの正しい使い方』です」
「…………つー！（ドバッ）」
「ええっ！？ もう鼻血ー？ ムッシリーー君、想像力豊か過ぎな
い！？」
「…………構わず続ける」
「う、うん。えっと、ちょっとエッチなお話といつことなので、ボ
クの体験談をお話しします。」
実は先日、学校帰りに雨が降ってきて
「…………つー！（ダラダラ）」
「運の悪いことに、その口は部活でふぞけていたらプールに着替え
を落としちゃって、
下着がビショビショになっちゃったんだ」
「…………つー！（ダバダバ）」
「下は流石に我慢して穿いてたんだけど、上は つてムッシリー
二君ー？」
もう一リーツターくらい血が出てるみたいだけど本当に大丈夫なの
！？

「…………構わずに、続けるんだ……っ……！」

「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃつて」

「…………っつーーーーーー（ブシャアアアアア）」

「やつぱじこの企画無理があるよ！ まだシャワーの話に入つてないのに相方がグロッキーになつてゐるんだもん！」

「…………死しても尚、魂で聞き続ける…………っ！」

「そんなの無理に決まつてるでしょ！？ とにかく今回はこれで終わり！」

それではまた次回お会いしましょーっ！ お元氣でーーー！」

「…………続きが気になる」

「それより先に保健室！」

雄一Side

似非外国人もとい蓮につけて歩いていくと、小洒落たレストランが見えてきた。

「いらっしゃランチをお楽しみください」

もう既に似非日本語を使うつもりはないのか、いつもの口調に戻っている蓮に案内されたのは、パーティ会場のような広間だった。

そこらじゅうに丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというよりはTVでよく見るクイズ会場のよつになっていた。

「……クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な食事が用意されてはいるが、TVでよく見るクイズ会場のよつになっていた。

「いらっしゃませ。坂本雄一様、翔子様」
ボーイが現れ、俺たちを席に案内する。……「コイツも見覚えがある面だな。

「秀吉、ボーイの真似事か？」

「秀吉？ 何のことでしょうか？」

あくまでも認めない秀吉。まあいい。明久と同じように、道具を使うまでだ。

携帯電話を取り出し、アドレス帳から、『木下秀吉』を呼び出す。すると、俺が通話ボタンを押すよりも先にボーイが動いた。

「おおっ、手が滑ってしまいました！」

ポケットから携帯を取り出し、噴水のある方向に思いつゝきつ投げつけた秀吉（？）。

遠くから、ポチャンと何かが水没する音が聞こえた。

「そ、そこまでやるか！？ あれは確実に壊れたぞー…？」

「何のことでしょうか？」

いくらあまり使ってないとはいっても、携帯を捨ててくるとなれば……敵ながらたいした役者根性だ。

「それでは、いらっしゃい」

「あ、ああ……」

ボーイに連れられて会場の中を移動する。

「お客様は未成年との事ですのでこちらを用意させていただきました」

席に着くと、秀吉がグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。

ラベルが見えるように持っているあたり、徹底した演技だ。流石は演劇部、といったところだらうか。

「オーデブルでござります」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。豪華な、という前置きは間違いではないようで、慣れない料理に苦笑しながら、ナイフとフォークを手に取ることになった。

もっとも、翔子はいつこうした席には慣れているのかもしれないが。

そして、デザートも食べ終え、「ここ向の仕掛けもないのかと安堵しかけたそのとき。

『皆様。本日は如月グランドパークのプレオープンイベントに参
加いただき、誠にありがとうございます!』

会場にアナウンスの声が大きく響き渡った。

『なんと本日ですが、この会場に結婚を前提としたお付き合いを始
めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです!..』
飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

『そこで、如月グループとしてはそんなお一人を応援するための催
しを企画させていただきました! 題して「如月グランドパークウ
エディング体験」プレゼントクイズ』

出入り口を閉鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは、
おのれ明久。俺の行動パターンは予測済みといふとか……。

『本企画の内容はいたってシンプル。こちらの出題するクイズに答
えていただき、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエデ
イングプランを体験していただけるというものです! もちろん、
ご本人様の希望によつてはそのまま入籍ということでも問題ありま
せんが』

大問題だバカ野郎。

『それでは、坂本雄一さん＆翔子さん! 前方のステージへとお進
みください!』

ご丁寧にも、司会が俺たちのほうをさしててくれたおかげで、会場の
視線が俺たちに集中した。

翔子はどうと

「……ウエディング体験……頑張る」

「落ち着け翔子! そういうつたものはだな、きちんと双方の合意の

下に痛だだだつ！

耳が千切れるつ！ 行く！ 行くから離してくれつ！』

翔子に引っ張られながら、自分にただの体験だと言い聞かせて壇上に上る。

『それでは「如月グランドパークウエーティング体験」プレゼントクイズを始めます！』

俺と翔子の間に、大きなボタンが一つ設置されている。これを押してから解答するといつ、オーソドックスなシステムのようだ。

そうだな……。正解したらプレゼント、ということは間違え続けたら無効になるのだろう。それなら俺が間違え続けるとするか。

『では、第一問！』

ボタンに手を伸ばし、問題を待つ。
さて……どんな問題が来る……？

『お二人の結婚記念日はいつでしょうか？』

おかしい。問題の意味が分からぬ。

ピンポーン！

しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを押してしまつた。

だが、いぐりこいつでも答えの存在しない問題に答える」となんて

『はーつ！ 答えをびりん！』

『……毎日が記念日』

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまこそつだ！」

『お見事。正解です！』

しかも正解！？

司会者を睨みつける。すると、観客に見えない角度で、俺に向かって片目を瞑ってきた。

さては……出来レースかつ！

『第一問！　お二人の結婚式は何処で挙げられるのでしょうか？』

ピンポーン！

素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。

既に問題がただの質問と化しているように感じられるが、そんなことはどうでもいい。

『鯖の味噌煮！』

『正解です！』

「なにいつー？」

馬鹿な！？　場所を聞かれたのに味噌煮が正解なんてありえるのか！？

『お二人の結婚式は、当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名「鯖の味噌煮」で行われる予定です！』

「待ていつ！　絶対その別名は今この場で命名しただらう！　強引にも程があるぞ！」

『第二問！　お二人の出会いは何処でしょうか？』

ダメだ、聞いてねえつ……！　だが向こうのやり口は分かった。今度は確実に間違えてみせる！　翔子が動くより早くボタンを押して間違った解答を

「……させない」

ブスッ！

「ふおおおおつー、目が、目があつー。」

ピンポーンー！

『はい、解答をどうぞ』

「……小学校」

『正解です！　お一人は小学校からの長い付き合いで今田の結婚に至るといつ、なんとも仲睦まじい幼馴染なのです！』

俺が今目を突かれたのは見えていないのか！　何処をどう見たら仲睦まじいなんて単語が出てくる！？

こうなつたら、翔子の妨害が間に合わないタイミングで間違えてやる！

『それでは第四問！』

ピンポーンー！

妨害が来る前にボタンを押す。

どんな問題が来るか分からぬが、『分かりません』と答えれば100%間違いになるだろつ。

「……分かりません」

『正解です！』

な、何、つ！

『ただいまの問題は、宇宙の果てはどくなつているか？　でした』
なるほど、それは確かに答えは誰にも分からない……。

最後の切り札もかわされ、もはや間違えることは不可能だ、と諦め
そうになつたその時、

『ちょっとおかしくない？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんな口一「一セーだけがトクベツ扱いなワケ？』

不愉快な口調の救いの神が現れた。

雄一Side Out

蓮Side

『ちょっとおかしくない？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんな口一「一セーだけがトクベツ扱いなワケ？』雄一を出来レースに上手くはめ、あと一問でウエディング体験、といつところで闖入者が現れた。

あのバカ口調……生きてやがったか……。

スタッフの制止も何処吹く風と、威嚇しながらチンピラカップルが壇上へと上がってくる。

『じゃあ、じゅしょーよ！ アタシらがあの一人に問題を出すから答えられたらあの一人の勝ち、答えられなかつたらアタシらの勝ちってことで…』

この会場で一番問題なのは貴様らの思考回路だ。

だが、ああやつて騒ぎ立てるタイプのバカは企業にとってはタチが悪い。自分達が常識ハズレな行動をしているとは考えずに、要求を呑まなかつた企業が悪いと必要以上に騒ぎ立てる。

雄一のほうを見てみると　　アイツ！　嬉々としてやがる！

『じゃあ、問題だ』

チンピラが周りの意見を完全無視して発言する。
どうにかしてあいつを止めないと！

チンピラカップルのウーハーティング体験なんて見せられたら田が腐つてしまつー。

『ヨーロッパの首都は何处だか答えるつー！』

そう。今まさにこの瞬間。会場の空気が凍つたんだ。

『オラ、答えるよ。わかんねえのか？』

確かに分からぬ。僕の記憶が正しければ、地球上の全史のなかで

『ヨーロッパ』なんていう名前の国が存在したことはない筈だ。

『……坂本雄一さん、翔子さん。おめでとうございます。「如月グランドパークウーハーティング体験」をプレゼントいたします』

『おい待てよー！ こいつら答えられなかつただろ！？ オレたちの勝ちじやねえかコルアー！』

『マジありえなくない！？ この司会バカなんじやないのー！？』

バカなのはお前らだバカ、とは言えず。

居た堪れない雰囲気の中ステージに幕が降りる。

明久以上のバカがいるなんて、世界つてのは広いんだな…………。

『それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！ 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください。』

雄一と霧島さんのウエディング体験が始まった。

あのカッフルのせいで完全に冷めてしまった会場が心配だったが、サクラの人たちの頑張りもあってか、園内全部に聞こえるかというほどの拍手が聞こえてくる。

ステージの端に雄一の姿が見える。

白の燕尾服に身を包み、いつもの雄一の姿は隠すら見えない。

『それでは新郎のプロフィール紹介を
あれ？ そんなの予定にあつたつけ？』

まあ、明久あたりに聞いて、簡単なプロフィールを作っているんだろう。

『 省略します』

思わず口けてしまった。

『ま、紹介なんていらないよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな』

『だよね～』

最前列からこんな声が聞こえてきた。

いわすもがなあのチンピラカップルの声である。

分かつっていたとはいえ、外見に相応しいマナーの持ち主だ。

『……他のお客様の迷惑になりますので、大声での私語は『遠慮いただけるようお願い致します』

『コレ、アタシらのこと言つてんの～？』

『違えだろ。俺らはなんたつてオキヤクサマだぜ？』

『だよね～っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分が良いか悪いかの問題だろ？ な、これ重要じゃない？』

『うんうん！ リコーダ、イイコト言つね！』

ちゅつと用意しておこうか。

ステージの裏に回る。

少し用意をしておいたほうがよさそうだ。

『本イベントの主役、霧島翔子さんです！』

僕が会場に戻ったときには、丁度霧島さんが入場するところだった。

『…………綺麗』

何処からともなく感嘆の声が聞こえる。

霧島さんの黒い髪に白い肌が、純白のウエディングドレスによく映

えてい。

霧島さんは雄一の元に歩み寄り、何かを話していく。

「……雄一のお嫁さんになる」とが夢だつたかい

霧島さんは涙声で雄一に告げる。

田には光るものが。

不覚にももう泣きしてしまった。

きっと雄一はこの状況でも断るだらう。

坂本雄一とは、どんな状況でも自分の正義を貫く男だ。けれど、今日、雄一に自分の夢を告げたことせ、霧島さんにとって必ずプラスになると思ひ。

『あ～あ、つまんな～い』

何かを言いかけた雄一を止めたのは、反吐が出るほど下卑た声だった。

『マジつまんない』のイベントお～。人のノロケなんてどうでもいいからさあ、早く演出とか見せてくんない?』

『だよな～。お前らの事なんてどうでもいいっての』

『つか、お嫁さんが夢です、つて。オマエいくつだよ? バカみてえ、ぶつかやけキモイんだよー。』

『純愛!』つこでもやつてんの?あのオンナ、アタマおかしいんじやない?』

『そつか! ハラつてコントじやねえ? あんなキモイ夢ずっと持つてる奴なんていねえもんな!』

『えへ! ? ハラつてコントなの? だとしたら、超ウケるんだけど~』

口々に文句を言い、霧島さんを指をして笑い始めるクズ共。
誰も止めない。

すると、霧島さんが走り去っていく音が聞こえた。

僕は客席最前列目指して歩き出す。

後ろから聞きなれた声が聞こえた気がしたけど、もうビリードもいーい。

「オイあんたら」

『ああ？ なにか用かよ』

「……まだ」

『ああ？』

「邪魔だ。出て行け」

『はあ？ 何言つてんの？ アタシらはオキヤクサマなんだけど』

『残念だが、僕はアンタ達と同じじこの客だ』

僕はさつきステージ裏で私服に着替えている。
私服なら、クズをつまみ出してもパークの責任にはならない。

「さつきから、アンタらの所為で折角のイベントをゆっくり見れないんだよ。

皆の迷惑になるから出て行つてくれないかな？」

『はあ？ 何言つてんだ？ オレたちがてめえらのために出て行く

ワケないじやん』

『アンタバカじやないの？』

『コイツ等……ッ！

「……なら、力づくで出て行かせるまでだ」

『ああ?』

バキイ!

『ぐふうつ!』

『リュ、リュータ!』

クズ(男)を氣絶させ、首根っこを掴んで出口から放り出す。

『あ、アンタ、なにすんのよ!?』

『……オマエも殴られてHのか?』

『ひいつ!』

完全に萎縮してこるオンナを尻田に会場へ戻る。

『霧島さん? 霧島翔子さん! 皆わんつ! 花嫁さんを探してください!』

やつぱり霧島さんは戻ってきていないか。

『そ、坂本雄一さん! 霧島さんと一緒に探してくださー!』

『悪いが、バスだ』

雄一が不服そうにスタッフに答えている。

「雄一?」

「ああ?」

「……クズは5分くらいで目が覚める。傷もつけてない」

「……分かった。だが、次手を出したらお前もぶん殴るからな」

雄一が会場を出て行く。

「……後はヒーローに任せますか」

僕が出来ることはない。

あいつと霧島さんのヒーローが全て解決してくれる。

「Arbeit... ein... held...」

週明けの学校にて。

「おい明久」

「なに、雄一？」

……來た。

「如月グランのパークでは随分と色々やつてくれたな」

「あははっ。何言ってるのさ。僕は一日家でゲームをやつてたんだよ? 如月グランドパークになんていけるわけないじゃないか」

「……どうか。お前がシラを切るならそれでいい」

「な、何を言つてるのさ。変な奴だなあ~」

「ところで、お前にプレゼントがある」

「え? なになに?」

「今話題の映画のペアチケット（・・・・・）だ。気になる相手がいれば一緒に行くといい」

雄一が大声で告げる。

クラス中に聞こえるよう

「ペアチケット？ うーん、そんなもの貰つても、使い道に困つて

』

「それじゃあな

『ア、アキツ！ そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思つてたんだけど

『あ、明久君つ！ 私も丁度観たい映画があつたんですけど…』

『ほえ？ なになに？ どうして一人ともそんなに殺氣立つてるの！？ このチケットは換金して生活費に痛あ、あ、つ！ もげちゃう！ 人体の大切なパーツが色々ともげちゃつよ！』

明久の悲鳴が響く。

その悲鳴を背景に雄一が僕に近づいてきた。

「どうしたの雄一？ 僕にもペアチケットくれたりするの？」

「いや、お前へのお礼はもう渡してある

「え？」

「卓袱台の裏を見てみる」

雄一に促されて、卓袱台を裏返す。

卓袱台の中央に、可愛い便箋がセロハンテープで止めてあった。

「これって……」

「……ラブレターよね？」

「…？」

後ろから女子の声がする。

「マズイ！ 僕の本能が振り返ってはいけないと警告している…」

ギシギシとゆっくり振り返るとそこには

「つふふふ……」

『とっても良い笑顔』の優子がいた。

「えっと……」

「もう、蓮つたら。アタシに黙つてそんなもの受け取つてるなんて
ね」

「ちよつと待つて、『コレは雄一の策略だあああああああああああ
あああ！…！』

言い終わる前に間接を極められた。

「まったく……余計なことを企むからだ、大バカ野郎共が

意識が沈む前に雄一の声が聞こえた。

第三十五問 坂本雄一結婚大作戦！（後編）（後書き）

チンピラをぶしめるか、本当に悩みました。

社会的に抹殺したり、雄一がボロッた後に蓮が更にグチャグチャにしたりなど、かなり黒いものも考えましたが、結局はこんな感じになりました。

次回はプール編かな、と思っています。

それでは。

第二十六問 每年夏の前にタイトリストをじゆりつと決心するかぎり、結局毎回かわな

今回も一寸空きましたね。済みません。

言い訳、になってしまいますが最近書いている分がグダッている気がします。

筆も、元から遅いのに更に遅くなる始末……。

とにかく頑張るしかないですね。

では今回からプール編です。

かなり悩んだ末に、もうひとところ……

ホント、どうすればいいんでしょ（泣）

第三十六問 每年夏の前にダイエットをしようと決心するなど、結局間に合わない

特別コラム「鉄拳人生相談」

「えへ、今日は、私、鉄拳先生が諸君の悩みに答えよつ」

「ちなみにアシスタントは僕、鮎川蓮です」

「さて、まずは一人目のハガキを読んでくれ」

「了解しました！ エツヒ、三年生の丁村タトウ作さんの相談です」

『鉄拳先生。僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな人がいます。

その人はとても可愛らしく人気が有ります。ですがそのK.T.吉さんは戸籍上では のようなのです。

これは同性愛になつてしまふのでしょうか。

先生、僕はどうしたらいいか教えてください。』

「すまない。いきなりすごい相談が来たので困つている」

「さすが文月学園ですね……」

「君が好きになつた相手にはおそらく双子の姉がいるはずだ。容姿に引かれたのであれば彼女に思いを告げることだ。容姿でなく内面に惹かれたのであれば
冷静に良く考え直すことだ。

一部の生徒の間では”彼は第三の性別『秀吉』である為同性愛ではない”という説があるが、決してその節に惑わされないよつに。君が健全な学園生活を送れるように願つている

「……」

「どうした鮎川」

「……なんか、双子の姉の下りを聞いていると、なんかこう、ムカムカとするんですよね」

「……そうか。お前も冷静に良く考へることだ」

「……はあ……」

「さて、次だ」

「あ、はい。続いては一年生のＫ保Ｔ光さんの相談です」

『最近、寝ても覚めても僕の頭から離れない人がいます。彼　Ｙ井Ａ久君が笑う姿を見ると僕も幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしていると僕も悲しくなります。

相手は同性なのですが……この気持ちは恋愛感情なのでしょうか』

「君はここ最近の間に強く頭を打つてないだろつか。

記憶にないとしても、念のために病院で検査を受ける」とをオススメする。

同性愛[云々]の話はその後だ』

「ず、随分と突き放しましたね……」

「さあ、気を取り直して次の相談だ」

「はい。次は、え……」

「どうした?』

「いえ、何でもありません。一年生のＳ水Ｍ春さんの相談です』

『私には、一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅できるか教えてください』

「貴様らには同性愛以外の悩みはないのか……」

「せ、先生落ち着いて……」

「鮎川、俺は帰る。このパートナーは俺の手には余るようだ』

「ええ……僕もこの人たちに向ける言葉は持つていません……」

「 「 まあ …… 」 」

第三十六問 每年夏の前にダイエットをしようと決心するけど、結局間に合わなくて海に行かない……。

「 ってな事があつて、おかげで散々な週末だったよ
週明けの教室。

朝のHRが始まる前の時間を使って、いつものメンバーで雑談をしていた。

明久が言つには、週末に明久の家で雄一と遊んでいるときに、不毛な戦いがおき、雄一がシャワーを使つたらしい。だが、万年金欠明久君宅はガスを止められていて、お湯が出なかつたらしい。

仕方なく明久と雄一は学校のプールへ。
騒いでいたところを鉄人に見つかって拳骨付きの補習を食らつたらしい。

「そうじやつたのか。それは災難じやつたのう……」
氣遣うように柔らかな表情を浮かべる秀吉。
友人を気遣う優しさは認めるけれど、今回の件は明久と雄一に自業自得だと思つ。

「おまけに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」
……ちよつと可哀想になつてきた。

いくらなんでも、補習に加えて罰掃除まで課すなんて。

「…………重労働」

ムツツリーニが呟く。

学校のプールは巨大だから、家の風呂掃除とはレベルが違う大変さだと思う。

やつたことないけど。

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使つてもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？ そうなの？」

落ち込み始めた明久を励ますよつたタイミングで、雄一が告げる。
意外と鉄人も太つ腹なところもあるんだな。

「ああ。だから、秀吉と蓮、ムツツリーも今週末プールに来ないか？」

誘われたのは嬉しいけど、今週末はバイトのシフトが入ってるから遠慮させてもらひ。

「ただし、ムツツリーには掃除を手伝つてもらひけじな」雄一の一言で頷くとしたムツツリーが動きを止めた。

ここで『秀吉は?』なんて野暮なことは聞かない。

彼らの中では秀吉は「秀吉」という性別であつて、プール掃除を押し付けるには忍びないという考えが働いているからだ。

あれ？ 僕は掃除しなくて良いのか？

「ちなみに、姫路と島田にも声を掛けるつもりだ」

「…………ブラシと洗剤を用意しておけ

即答かよ！

ムツツリーの名に恥じない行動だ。

「うむ、そうじやな。貸切のプールなど、こんなときでなければなかなか体験できんじゃらうし相伴をせてもらひつかの。もちろん、ワシも掃除を手伝うぞ」

「え？ 結構大変だと思つけど、いいの？」

「つむ。お安い御用じや」

プール掃除はお安い御用のcate「ヨリ一には入らないと思つるのは僕だけだろうか。

「で、蓮は？」

明久が期待するような目でこちらを見てくる。

僕に何を期待しているのかは分からぬけれど、バイトを休むわけにはいかないのでここは断つて

「ちなみに、木下姉にも声を掛けようと思つてゐるんだが」「週末はバイトがあるから遠慮するよ」

「何つ！？」

雄一が驚いている。

どうしたんだろ？。別に優子が来ても来なくても僕の返事は変わらないのに。

Pr Pr Pr Pr Pr Pr

「蓮、携帯なつてるぞ」

「あ、本当だ」

携帯を取り出して、画面を開く。

「授業中に鳴つたら即没収だぞ。電源くらい落としつけよ」

「う……」

今までには平日には携帯が鳴ることがなかつたんだよ。
せいぜいバイト先の店長くらいだし。

あ。

「……雄一」

「何だ？」

「やつぱり、僕もプール行くよ」

「は？」

「……バイトがオフになつた」

メールにはこう書かれていた。

『今週末は出会い系を探しに行つてくるので休業

店長』

うちの店長（37歳独身）もかなり天真爛漫といふが、掴みどころがないというか、変人というか……とにかく変な人なのである。

できれば婚活は定休日にやつて欲しいところだが。

「まあ、お前が来るなら別に理由はどうでも良いがな。んじゃ、後は向こうの一人だな。

おーい、姫路、島田！」

何時何処で聞いても良く通る声だ。

「どうしたの坂本？ 何か用？」

まずやつてきたのは島田さん。

ドイツからの帰国子女で明久に恋する女の子だ。

照れ隠しで明久を半殺しにさえしなければ可愛い女の子だと思つよ。

「呼びましたか、坂本君？」

続いてやつてきたのが、我らがFクラスのむさい男の中でも一際異彩を放つ存在。

姫路さん。

温厚な性格に愛らしい外見。成績優秀でスタイル抜群というなんともハイスペックな女の子だ。

最近Fクラスの思考に染まってきた気がして、なんとも不安だ。

「一人とも今週末は暇か？ 学校のプールを貸切で使えるんだが、良かつたらどうだ？」

「え……？」

プールという単語で一人がピクンと反応する。

「あ、さては一人とも予定があつたりする？」

これは我らが觀察処分者。愛すべきバカにして超がつくほどの鈍感男、吉井明久の弁。

「う、なんというか気づきそうで気づかないあたりが見てるこっちとしてはもどかしいといつか。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな？ プールって言つとやつぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよね……。その、えっと……」

島田さんは自らの胸部へ、姫路さんは腹部へそれぞれ視線を送る。

「まあ、お前らにはお前の悩みがあるんだろうが……。一つ言つておくと、秀吉は来るぞ。水着姿を明久に見せに、な」

何つ！ 秀吉は明久に水着姿を見せたかったのか！？

それは知らなかつた。これは秀吉をぜひ応援しなければ……つてあれ？

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからつて！」

「そ、そうですっ！ 木下君はズルイです！」

「？？？ おぬしらは何を言つておるのじゃ？」

突然ものすごい勢いで秀吉を非難する一人。

そうか、さつきの雄一の言葉は起爆剤だったのか。

秀吉がBでしょな趣味に走ったのかと一瞬本氣で思つてしまつたじやないか……。

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロと準備して……」

「そ、そうですね。準備は大切ですよね」

やつぱりFクラスの面々は雄一に思つとおりに転がされてる気がする。

「そういうえば僕も久しくプールなんて行つてないからなあ。丁度良い機会じゃから買いに行つて來ることにしてみつかの」

秀吉は水着を新しく買つようだ。

「そういういえ、僕も久しくプールなんて行つてないからなあ。僕も買つてこよう」

たぶんもう入らないと思つし。

僕と秀吉の発言によほど心惹かれるものがあつたのか、こちりを見る明久の目が心なしか輝いているように見える。

「う、ウチも新しいのを買おうかな…………？」

島田さんが釣られたのか、ポソリと呟く。

女の子は毎年買い換える人もいるらしいから島田さんもそのタイプなんだろうか。

別に嫌いではないけれど、ちょっと勿体無い気がする。

「あれ？ でも美波ちゃん。この前水着の話をしたとき『『去年買つたばかりだから今年は要らない』』って……」

“どうやら、単に明久の田が気になつただけのようだ。

「み、瑞希！ 余計な事言わないの…！」、今回買ひのせ……そつ
！ 勝負用だから別口なのよ！」

「「島田（さん）。焦つて更に墓穴を掘つてこらへるや！」」

「……氣のせいよ」

思いつき田をそらす島田わん。

ここまでわかりやすい反応をしてくるのに明久は氣づかない。不思議だよなあ。

「あ、そうだ雄一、霧島さんにも声を掛けでおいてね
「……言われなくともそつするつもりだ」

あれ？ いつもの雄一と反応が違つ。

てつぱり今回も霧島さんは内密に話を進めるものだと思つていたの。

やつぱり先週のウエーティング体験で覚悟を決めたのだつうか。

「うんうん。雄一も素直になつたね」
「本當だね。やつと霧島さんの想いを受け止める氣になつたんだね
「いや、そういう問題じゃない」
「？？？ それじゃ、どういう問題さ」「
「いいか、想像してみろ明久、蓮。俺の立場で後々このことが翔子
に知られるという状況を」

雄一が何時に泣く真剣な表情で聞いてくるので、真剣に考えてみると、雄一の立場で、週末に女の子と学校のプールを貸切で遊んだ場合。

そのことが霧島さんに知られたら……。

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「永久凍土……いや、溶岩の中……」

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないが、まあそんなどころだ」「

なるほど。流石に雄二も素直にならざるを得ないわけだ。

僕としては、彼女がいると約一 名失血死の可能性が増える奴がいるので心配だけだ。

「そういうえば、蓮は木下姉を誘わなくて良いのか?」

「? どして?」

「想像してみる。『レだけのメンバー』がプールに集合して遊んだのにもかかわらず、自分だけ仲間はずれになつたと知った木下姉の行動を「

また雄二が真剣な顔で促してくる。

えつと、僕の立場で、今回のことが後になつて優子に知られた場合……。

「……バラバラの変死体……いや、樹海の養分……どうやらして死は免れない……」

「ま、そういうこつた。木下姉のことだ。お前が誘えば二つ返事でOKだろう」「

「???? 何で?」

「……………ハア、なんで俺の周りには鈍感野郎が集まるのか……」

その言い方だと僕まで鈍感という括りに入れられているようだ。
失礼な。明久はともかく、僕は鈍感じやないよ。

「とにかく、全員オッケーのようだな。んじゃ、土曜の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

雄二のそんな台詞と同時に、鉄人がドアを開ける音が響いた。

昼休み。僕は雄二と一緒にAクラスにやつて来ていた。
理由は察しがつくだろう。霧島さんと優子を誘うためだ。

コンコン。

扉をノックする。

こうしないとFクラスの人間は中に入りにくい。
前に普通に入ったことがあつたけど、『Fクラスがまた攻めてきた
!』とか勘違いする人がいて大変だった。

まあ、それほど先の試召戦争は大きな衝撃だったんだろうけど。

「はい……！？」

中から出てきた女子生徒……たしか佐藤美穂さんが、僕と雄二の顔
を確認して固まった。

今Fクラスは宣戦布告は出来なくなつてゐんだけど。
それとも、雄二の顔に気圧されたんだろうか。

「……翔子はいるか？」

「？ あ、はい」

「あ、あと優子も」

「呼んだ？」

「！？」

いつの間にか、僕のすぐ後ろに優子が立っていた。
その隣には霧島さんもいる。

本当仲良くなこの一人。

「うん。ちょっとお話が……霧島さんも」

「？ アタシと、代表？」

首を傾げる優子の様子は可愛いんだけど、顔に疑いの表情が出ている。
やっぱり僕らのお話、は警戒するんだろうか？

「えっと……優子、週末プールに行かない？」

「行くわ」

「即答ー？」

理由の一つも聞かれるのが普通だと想つんだけど、優子さまさかの即答だった。

「霧島さんは雄一から言になよ

「ぐつ……」

苦々しそうな顔をする雄一。

別と一緒にプールに行くだけなんだから、そこまで覚悟を決める必要なんてないと思つんだけど。

結局、雄一が霧島さんと優子に事情を説明して、一緒にいくことになった。

いや、雄一と一緒にプール、というだけであそこまで想像できるとは。

霧島さんの思考も少しづれているのかもしれない。

優子はとこりと

「絶対氣づかせるんだからー」

何かを決心しているようだった。

何故か悪寒がするんだけどどうしてだろう……。

第三十七問 思い込みの激しい人は絶じて人の話を聞かない。（前書き）

申し訳ありません！

一週間以上空いてしまいました。
分からぬとは思いますが、私は今画面の向ひで土下座を行つています。

言い訳をさせていただくと、純粹にモチベーションというか、今までの妄想の勢いがなくなってきたというか……。

今回も短い上にバカテストはお休みです（初の事態）。

次回も出来るだけ早く書いて、元のベースと量に戻したいと思つていますので、
暖かく見守つていただければ幸いです（汗）

第三十七問 思い込みの激しい人は総じて人の話を聞かない。

第三十七問 思い込みの激しい人は総じて人の話を聞かない。

土曜日がやつてきた。
僕が校門前にやつてくると、既に秀吉と優子、姫路さんが待っていた。

「おはよう」
「おはよう」
「おはようじゅわ」
「おはようじゅわこまわ」

挨拶を返してくれる三人も、僕も私服。

学校に来るのが制服じゃないって言うのもなんか変な気分だ。

「皆早いね」

「そう? 普通だと思うわよ」

「坂本君と霧島さんはもう職員室に鍵を取りに行ってしまいました

し

あの「一人ももう来ているのか。
霧島さんはともかく雄一は明久と同じくらいの時間に来ると思つて
いた。

「姉上はずつと楽しみにしておつたからね。今朝もワシより早く
起きておつたのじや」

「ちょ、秀吉つ！」

秀吉に優子が抗議している。

そうか、優子もプール楽しみにしてたのか……。

「優子つて泳ぐの好きなんだ？」

「……」「」

あれ？ 言葉の選択を間違えたかな？

姫路さんにいたつては『優子ちゃんも大変ですね』とか呟いてるし。

「おはよー。絶好のプール日和だね」

四人で何のこともない世間話をしていると、明久に声を掛けられた。
空は雲ひとつなく青空が広がっている。

空気はだんだんと夏の熱気を帯びてあり、プールには絶好の天気だ。

「おはようじや明久。良い天気じやな」

「おはようじやいます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「おはよう明久。水着忘れたりはしてないよね？」

「蓮！ いくら僕でもプールに行くのに水着を忘れたりはしないよ
！」

「冗談だから。

今この場にいるのは僕と秀吉、姫路さんと明久。

それにもう一人。

「ムツツリーー、おはー」

「…………ーーー（力チャカチャカチャ）」

鬼気迫る、という言葉がぴたりな様相でカメラの手入れをしてい
るムツツリーーだ。

「あ、あのさ、ムツツリーー」

「…………今、忙しい」

「明久、こうなったムツツリーーは人の話なんて聞かないから無駄
だよ」

シャッターチャンスを狙っているときと、来るべき戦いに備えて力
メラの整備をしているとき 要するに問う札関係のことをしてい
るときのムツツリーーの集中力には目を見張るものがある。

その集中力の一割でも勉強に向ければロクラスくらいには行けただ
ろう。

「ムツツリーー。準備は良いけど、結局無駄になっちゃうんじゃな
いかな」

明久がムツツリーーに問いかける。

「…………なぜ？」

「いや。だって、ムツツリーーはどうせ鼻血で倒れちゃうじゃない

か

まあ、チャイナドレス程度の露出で鼻血の海に沈んだんだ。
水着 それも姫路さんの に耐えられるはずがない。

「…………甘く見てもらっては困る」

そういうながら、持っていた大きなスポーツバックの中を見せてくるムツツリーー。

「…………輸血の準備は万全」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」鞄一杯に入っているのは、何処で手に入れたんだ、と突っ込みたくなるような量の輸血パック。

プールに行くからといって輸血パックを準備する人間は、日本広しといえどもこの男だけだろう。

「準備といえば、秀吉と蓮は新しい水着を買つとか言つてたよね？」
忘れずに買つてきた？

「うむ。無論じゃ

「ああ。忘れてたらこんなに悠長に話してないって少なくとも、水着を売つているところがないか探しているだろ？」

「ちなみに、買つてきた水着じゃが

「…………（くわつ！）」

目を輝かせている明久に、目をむいているムツツリーー。

「…………トランクスタイルپじや」

「「バカなあああああっ！」」

な、何をそこまでショックを受けているんだろう。

「最近、お主らはワシを女として見ているようじやからな。」「」ひで一度ワシが男じやということを再認識させよつと二人とも聞いてあるか？」

「酷いよ秀吉！ 君は僕のことが嫌いなのかい！？」

「…………見損なつた……！」

「な、なんじやー!? なぜワシは責められておるのじやー!?」

「き、気にしていいと思いまますよ。木下君」

「姫路さんの言つとおりだよ。いきこしてたら進まないから」

「ハツーまだだー! まだ蓮がいるじゃないか!」

「…………」

「え、えつと……?」

いきなり明久とマッシュリーに縋るような視線を向けられる。

そんな視線を向けられても困るんだけど……。

「さあ、蓮ー! 君はどんな水着を買つてきたの?」

「えつと……僕が買つてきたのは

「…………(くわつー)」

「秀吉と同じ、トランクスタイルなんだけど」

「バカなあああああつー」

あ。なんか既視感。^{デジャブ}

「あのさ、僕も秀吉も男なんだけど、その辺忘れてないよね?」

「くそ……今からでも……」

「…………」

「ダメだ。聞いちやいねえ。」

タタタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはよつりますー!」

「わわつー?」

「もう葉月つてば。アキがびっくりしてるでしょ？」

明久の後ろから走ってきて、明久の背中に飛びついたのは葉月ちゃん。

清涼祭で、チャイナ服のまま帰宅するといつ伝説を残した小学五年生である。

「やつぱつ葉月ちゃんだ。おはよう」

「えへへー。三週間ぶりですっ」

天真爛漫をそのまま表現したかのような明るい性格。

清涼祭の一回以来だから、確かに三週間ぶりになる。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですかっ？」

「あ、うん。ゴメンネ葉月ちゃん」

今やり取りで氣づいた人もいるだろうけど、葉月ちゃんは明久のことが好きだ。

といふか、既に『婚約者』を名乗つていらっしゃる。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうせしてもついてくるって駄々こねて聞かないものだから……」

島田ちゃんが溜息混じりに呟く。

島田さんの性格からすれば最低でも明久よりは早く来ているものだと思つていたが、遅かったのにはそんな理由があつたらしい。

「あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが最後だと思つたのに」「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を取りに行って あ、一度戻ってきたみたいですよ」

噂をすればなんとやら。

校舎のほうから雄一と霧島さんが歩いてくるのが見えた。

「おはよっ雄一、霧島さん」

「おひ。ちやんと遅れずに来たみたいだな」

「……おはよっ」

偉そうな雄一。その隣で静かに挨拶を返したのは、雄一の幼馴染で、婚約者でもある霧島翔子さんだ。

美人で学年主席の才女、運動神経抜群と欠点の見つからない人なんだけど、恋愛関係は苦手みたいだ。

雄一が喰らっているあの拷問を見るとね……とても恋人には見えないよ。

「これで全員揃つたか？」

雄一が確認を取る。

「うん。葉月ちゃんが飛び入り参加した以外は全員いるよ」

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄一の言葉通りにいつたん男女に別れる。

姫路さんと島田さん、優子は霧島さんに、僕と明久、秀吉にムツツリー一、そして葉月ちゃんは雄一に つて、あれ?

「いひ。葉月ちゃんは女子更衣室に行かないダメでしょ」

「秀吉もだよ」

僕が葉月ちゃんに注意すると、明久もかぶせてきた。
そつそつ。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室に つて

「いや、明久。秀吉はコッチで合ひてゐから」「?
何言つてゐるのさ蓮。女子は女子更衣室に行かない」と
この反応は……秀吉を本氣で女子と思つてゐる反応だ。

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじやが……」

ほら、葉月ちゃんは冗談つて言つてくれたけど、秀吉は納得してないじやないか。

「ほり、遊んでないで行くわよ。葉月、木下」「
し、島田ー? ついにお主までワシをそんな目で見るよ! ー?」
嫌じや! 女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじや!」「
何言つてゐんだ秀吉ー。秀吉が男子更衣室で着替えたらい、ムツツ
リーネが天に召されてしまつじやないか」「
ついに女子にまで女子扱いをされるよ! になつたか……。

島田ちゃんはびしつちかとつと、明久と秀吉が一緒に着替えるのが面
白くなつて感じただけど。

「……皆、秀吉は男よ」

「」
Jijiが助け舟を出したのは秀吉の双子の姉である優子。
「優子ちゃん、その……木下君は男の子には見えませんから……」
姫路さんの意見も否定できない。

黙つていれば、ではなく普通に喋つついても秀吉は女子に見える。

「……蓮」

「……何？」

「Fクラスで秀吉はどんな扱いを受けてるの？」

「……完全に女子、もしくは第三の性別『秀吉』扱いだね」

少なくとも男子としては扱われていない。

「ハア……本当Fクラスって分からないわ」

優子が溜息をつく気持ちも分かる。

もう転入して一ヶ月近く経つから大分慣れたけど、僕も最初のころはFクラスのメンバーの常軌を逸した行動に驚かされっぱなしだった。

「あの……。それなら木下君と鮎川君は別の場所で着替えるのはどうでしょ」「うへ」

「何で僕まで！？」

「」

「」

「あっ！ そうだよ。葉月ちゃんを注意していたから気がつかなかつたけど、蓮も男子更衣室で着替えたらダメだよ！」

「」

「…………」

「い、いかん……。

ジト目で僕を見てくる優子の視線が痛い。

「秀吉はともかく、僕はれつきとした男なんだから、別に場所で着替える必要はないよ」

「待つのじや蓮！ ワシはともかくとはじゅうじう意味じやー！」

だって秀吉の普段の扱いを見ていると、僕が何を言つても聞いてくれなさそうだし。

「ダメよー 鮎川や木下とアキが一緒に着替えるなんて！」

「……雄一の前で脱いだら……」

「怖い……。

「あいを睨んでくる畠田さんと、雪女を思わせるよつた雰囲気を纏つた霧島さん。

「なんじや霧島まで…?」

「別に僕も秀吉もちやんとした男なんだから……」

「男子更衣室で着替えるのは許さない」

「…………はー」

二人の有無を言わざぬ態度に、別室で着替えることを了承させられてしまつた。

着替える前からこれなんて、本当に先が思いやられるよ……。

第三十八問 自分の気持ちを素直に言いつのりのすく恥ずかしい……（前書き）

今回も短いです。

そしてバカテストはお休み……。

早く、早く前みたいに勢いのある妄想が戻つて欲しい！

あれ？ こうやって書くと私がまるで妄想癖みたいじゃないですか

……（汗）

第三十八問 自分の気持ちを素直に言つたものすく恥ずかしい……

第三十八問 自分の気持ちを素直に言つたものすく恥ずかしい……

優子 Side

アタシは今、集合場所のプールサイドにいるのだけれど……。

「……雄一は見ちゃダメ（ブスッ）」

「ぐあああっ！ またか！？ またなのか！？」

「ふわあ……お姉さんのお胸、凄いです……」

「ムツツリー二つ！？」

「…………先に、逝く…………」

「Worauf führte einem Standard hat God jene unterschieden, die haben, und jene, die nicht haben! ? Was war für mich ungeniegenend！」

「な、何なのよ。この空間は……？」

收拾がつかないなんてレベルじゃないわ。
それにアタシFクラスの人たちとあまり親しくないし……。
なんか心細くなってきた……。

蓮、早く来てよ……。

Side Out

蓮 Side

「早く行こう。もう着替えてると思つよ」

「うむ。しかし、やはり納得がいかぬな……」

僕と秀吉は、小走りでプールに向かって移動している。

女子更衣室でも男子更衣室でもない着替え場所なんて、プールのそばにはなかったから、懃々校舎にまで行つて空き教室をつうことになつてしまつた。

更衣室の間を通り過ぎ、プールサイドへと出る。

そこにはなんだか力オスな空間が出来上がつていた。

「う、うう……。俺は未だに眼が見えないんだが……全員揃つたのか？」

目から涙を流しながら雄一が話している。

霧島さんもあせりまで完膚なきまでに田を潰さなくてよかつただ
ろつ」。

田を潰されてちや雄一が泳げないし。

まさか泳がせない気なのか……？

「いや、秀吉と蓮がまだ来てないかな」

「…………秀吉と蓮は、トランクスタイル…………」

ムツツリーにいたっては既に瀕死の重症だ。

「待たせて済まぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、い
かんせん校舎からプールが遠くての」

僕が啞然としていると、秀吉はもう明久たちのところに走っていた。

「（うひ）（ん、そ）（んな）（に待つ）（てな）（い
いよ、）（秀）×（吉）」

「落ち着け明久。ここは地球だぞ」

完全に動搖している明久に雄一の冷静はツツコミが入る。

普通の学校生活ではあまり見ることが出来ないやり取りなんだナゾ、
これにもなれてしまっている自分がいる……。

「（うひ）（ん、そ）（んな）（に待つ）（てな）（い
いよ、）（秀）×（吉）」

「…………？」

恥ずかしそうに秀吉が歩いていくけれど……。

「わっ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

「んむ？ 可愛いじゃと、島田妹よ、何を勘違いしているのか知
らんが、ワシは見てのとおり男じやぞ？」

きっと、その格好では秀吉が男に見える」のではない。

「ふえ？ でも、葉月はその水着、女の子用だと思うです」
そう。秀吉が着てているのは確かにトランクスタイルの水着だが上にはショートタンクトップがついている。下は普通のパンツに、ショートパンツタイプのズボンをボタンを一つ開けた状態で重ねている。
まあ、トランクスタイルといえないこともないけれど、町の人間に聞いたら十人中十人が『女物』と答えるだろう。

「な、なんじゃと！？」

秀吉よ……そこは驚くところではないぞ。
というか、その反応だと、もしや秀吉は今まで上半身に何もない水着を着たことがないのではないか。

「き、木下……！ アンタ何処までウチ等の邪魔したら気が済むの……！」

「木下君は卑怯です……！ トランクスだなんて私達を油断させておいて、最後の最後に裏切るなんて……！」

一人の気持ちも分かるには分かるんだけど、秀吉は男だからね？

「秀吉！ やつぱり秀吉は僕らの気持ちを察してくれたんだね！」
「…………永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

明久とムツツリー二は姫路さん達と対極で、凄く喜んでいる。
だが友情はともかくとして、劣情を誓つのはいただけないかな……。

「ひ～で～よ～し～？ アタシ、前に言つたわよね？ 軽々しく女の格好しないよ～につて？」

鬼だ。鬼がいる！

「ち、違うのじゃー。ワシは本当に男物を買つたはずなのじゃ！
きちんと店員にも『普通のトランクスタイルが欲しい』と言つたの
じやぞー！？」

「多分、その店員さんは勘違いをしたんでしょうね……。何も知ら
ずに木下君に『トランクスタイルが欲しい』なんて言われたら……」
「そうね……。ウチでも間違いなく文物を勧めるわ……」
「そ、そうじゃったのか……。ワシも少しおかしいと思つたのじ
や。なにゆえに男物の水着に上があるのじゃうかと……」

そこで少ししか違和感を感じないとこりが秀吉らしいといつか、そ
こまで文物の衣装になれてしまつている時点で、普通の人生は歩め
ないと思つんだ。

「ま、そういうことだから優子もあんまり秀吉を責めないでやつて
よ」

「「「「「…？」」「「」」

皆に近づきながら優子に声をかける。

もちろん僕の水着はトランクスタイル。
上はついていないのでまじう事なき男物だ。

「れ、蓮……その格好は……」

「何つて、普通のトランクスタイルの水着じゃない。男物の『
…………（ブシャアアアアツ！）』

「ムツツリー二つ！？」

僕の姿を視認した途端、明久とムツツリーの様子がおかしくなつ
た。

ムツツリーにいたつては既に鼻血の海に沈んでいる……って僕が
来る前からそうだったっけ？

「何で鼻血出してるのさー?」

「だつて、蓮! 自分の格好をよく見直してみてよー。」

そういう明久は鼻を押されて上を向いている。

僕の今の格好……普通の男物の水着を着ている。

特に何も羽織っていないから、上半身は裸だけ……ってまさかー?」

「…………明久は、僕の今の格好をどう見てるの?」

「…………女の子が男物の水着を着てこるよつに見えます」

やつぱりか。

僕は秀吉と比べると男に見えたと自負していたんだけどなー。

「優子はそう見える?」

「へ? ……そうね。少なくとも顔は男には見えないわね」

「…………そうですね。でも……」

「…………体のほうは坂本を色白にして、細く小さくした感じね」

顔は男には見えないって……僕の一一番の悩みなんだけど。

体のほうは……まあ、鍛えてはいるからね。

筋肉隆々なんて言葉は似つかわしくないかもしけないけれど、それなりに筋肉もつけたつもりだし。

「…………吉井君。蓮の足元のほうから見てみなさい」

「? えつと……あれ? 男に見える」

「ちょっと待て明久。その発言、僕にとってはスルーできない問題だぞ!」

「…………言われてみると」

ムツツリーーもなんとか立ち上がった。

「うん？ これって……」

「僕が男として認められたってことでいいのかな？」

「そうだね。まだ鼻の奥は熱いけど、出てこないし」

「…………耐えられる」

「…………良かつたわね」

「…………うーん。なんか釈然としないけど、ありがと、優子」

この際、男としてみてもらえるなり、多少の違和感はスルーしちゃ。

「良かつたです……これで鮎川君までと考えると……」

「本当よ……ありがとう、鮎川、木下さん……」

「…………蓮がうちらやましいのじゅ」

「秀吉のは半分自業自得だと想つんだけど……」

姫路さんと島田さんは胸をなでおろしている。

秀吉からは羨望や嫉妬のまなざしを感じるが、そもそも秀吉がきちんと男物と伝えていれば良かつた筈なので自業自得だらつ。うん。

「はあ、本当、Fクラスって分からぬわ……」

「ま、まあ、気にしたら負けだよ……っ！」

優子にフォローを入れよつとして、優子の姿が視界に入る。

あんまりファッショントレンドは分からないから、上手く言えないんだけど、

ビキニタイプの水着に、下半身は腰の位置からパレオを巻いている。色はクリーム色で統一されていて、優子の白い肌に良くあつていてる。

「一言で言つと……可愛い……。」

「どうしたのよ?」

「うえ?」

優子が急に話しかけてきたから、思わず変な声が出てしまった。
見惚れてた、っては言えないし……。

「蓮は姉上の水着姿に見惚れておったのじや」

「秀吉……！」

何を暴露してくれぢやつてんのー? ?

「え? え? と……／＼／＼

「……／＼／＼

「さて、そろそろ泳げりか……つて、蓮と木下をなまざいたの? 」
聞かないでくれ明久。

顔から火が出る。

「えつと、優子……?」

「……／＼／＼

皆が散らばった後、僕は優子と話さうとしているんだけど、優子が
わざわざからどこかに飛び立つてしまつているんだ。

優子の肩を掴んで軽く揺らす。

「ふえ?」

「どうやら戻ってきたくれたみたいだ。」

「えつと、その……」

「…………優子?」

「…………」

「……」

「水着、可愛いよ」

「言つたあ——。言つてしまつた……！」

「いや、ここを……いつん。ありがと、蓮……／＼／＼
そういうて歩いていく優子。

振り返る前に見えた微笑は……とても綺麗だった。

第三十八問 自分の気持ちを素直に書いたものすべく恥ずかしい……（後書き）

えつと……『めんなさい。

私の今の実力では、甘甘シーンは書けないので……。
自分で書いてて恥ずかしくて（汗）

頑張つて甘甘シーンも書けるようになりますー

第三十九問 プール開きついで、心ひして梅雨の寒い時期にやるんだがつ.....？

まだプール編終わらねえ-----！

はい。いきなり取り乱してしまいました。

まさか、プール編が如月グランドパークよりも長くなるとは.....。

そして未だに妄想力は戻らず。

かなりギリギリの状態で更新しました。

それではどうぞ。

第三十九問 プール開きついで、みんなで梅雨の寒い時期にやるんだが……？

バカテスト 国語

問 次のことわざの空欄を埋めなさい。

『少年（ ）易く、学成り難し』

姫路瑞希の答え

『少年老い易く、学成り難し』

教師のコメント

正解です。姫路さんも若こひから勉学に励むよつにじてくださいね。

吉井明久の答え

『少年遊び易く、学成り難し』

教師のコメント

意味としては余っているような氣もしますが、不正解です。
ですが流石吉井君。いつも勉強をせず遊んでいるだけはありますね。

吉井明久のコメント

いやあ、それほどでも。

鮎川蓮の答え

『少年死に易く、学成り難し』

教師のコメント

勝手に殺さないでください。

土屋康太の答え

『少年キレ易く、学成り難し』

教師のコメント

キレる十代！？

鮎川蓮のコメント

先生も気をつけてくださいね……。

第三十九問 プール開きつて、どうして梅雨の寒い時期にやるんだ
るつ……？

「あの、明久君」

軽く準備体操をして、明久と一緒にプールに飛び込むと、梯子をそろそろと降りてきた姫路さんに声を掛けられた。明久が。

「ん？ なに？ 姫路さん？」

「明久君は水泳は得意ですか？」

「あ、うん。まあ、人並みには……」

「？ 明久君、どうして目を逸らすんですか？」

それは、姫路さんがパレオをはずしているからだと思つよ。

「実は私、ぜんぜん泳げないんですよ」

「まあ、僕も姫路さんがものすごく速さで泳ぐところは想像できな
いけど」

「ん？ 瑞希つて水泳苦手なの？」

僕に続くよつに放たれた台詞は、僕達と同じように勢によく水に飛び込んできた島田さん。

姫路さんは対照的で、運動全般が得意だったりする。
走る飛ぶは言つに及ばず、球技水泳なんでもござれだ。

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしか出来なくて
「そういうことなら、いつも勉強を教えてもらつていいお礼に、う
ちが瑞希に泳ぎを教えてあげよつつか？」

そういつて胸を張る島田さん。

いつもは姫路さんに勉強を教えてもらっているので、そのお返しが出来て嬉しいんだろ？。

「よければアタシも手伝つわよ」

「？ あ、優子」

プールの飛び込み台からひょっこり顔を出したのは優子。Aクラスでもトップクラスの成績に、運動神経抜群と彼女もまた欠点が見当たらない。

強いて言つならあの趣味かな……。

「え？ 優子ちゃんもいいんですか？」

「ええ。姫路さんにはお世話になつてゐ」ともあるし

？ 優子と姫路さんひどくんなに仲良かつたつけ？

「は、はい。それなりようしくお願ひします」

「任せてっ！ こう見えて水泳は得意なんだから」

「あら、アタシも結構得意よ」

優子はともかくとして、島田さんと姫路さんのやり取りは、いつもと逆で面白い。

勉強ではAクラスレベルの姫路さんがFクラスの島田さんに教えてあげているけれど

「 こうして見てみると、美波がAで姫路さんがFみたいだよね

「優子は相変わらずAだね」

「寄せて上げればBくらいあるわよつーーー！」

「ぐべあつーーー！」

「「ふああつーーー！」

な、何でいきなり鳩尾を……明久も殴られてるし。

「ど、どうして水泳もAクラスレベルだつていつて怒られるんだ……」

「え？ あ、そういうこと？」

「何のことだと思ったのさ？」

「ふえ？ そ、それは……」

「????」

いつもと違つて優子が「もー」と喋つている。
本当なんで殴られたんだろう……。

『…………雄一。ちなみに私はCクラス』

『？ 何を言つてるんだお前は？』

離れた場所では、雄一と霧島さんも良く分からぬ会話をしていた。
ムツツリーニが異常に目を輝かせているのが謎だ。
あとで、意味を聞いてみようか。

「…………わかつたわ瑞希。アンタが泳げない理由」

「え？ なんですか？」

「そんなに大きな浮き輪をずっとつけてるから何時までたつても泳
げないのよ！ 外しなさい！ そしてウチに寄越しなさい！」

「アタシも欲しいわね」

「み、美波ちゃんと優子ちゃんも落ち着いてください！ 目が怖い
ですよ！？」

「瑞希には分からないのよ！ 水の抵抗が少ないおかげ手早く泳げ
るっていうウチの悲しみが！」

「良い？ 姫路さん。それは脂肪の塊なの。たくさんあっても無駄

なのよ？」

「そ、そんな」と言わわれても……」

なんか、議論が白熱してきたみたいだ。
僕達は邪魔しないほうがいいかな。

「明久、行こうか」

「そうだね。邪魔しかや悪いし」

『み、美波ちゃん！ 優子ちゃん！ あまり良い事ばかりでもない
ですよ？ 肩が凝つて大変ですし……』

『『肩』じくくらい我慢するわ！…』』

離れ際に聞こえてきた優子と島田さんの声は魂がこもっている気が
した。

「お兄ちゃん！」

「わふっ！？」

明久の背中に何かが突然飛びついてきて、明久は耐えられずに水に
沈む。

「な、何！？」

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶです！」

水面に顔を出したのは葉月ちゃん。

「うん、いいよ。何して遊ぼうか？」

「じゃあ、『水中鬼』をするです！」

「水中鬼？ 水の中でやる鬼『ごっこ』の『ご』といいの？」

水中鬼と聞けば、『ごっこ』イメージだ。

やつたことないけど。

「違うのですっ！ 鬼『じ』つ『じ』じゃないですっ。『水中鬼』ですっ」
「？ 鬼『じ』つ『じ』と『じ』つ違うの？」
明久と声が被る。

水中鬼と、鬼『じ』つは同じものだと思つんだけ。

「水中鬼は、鬼になつた人がそつぢゃない人を追いかけるですっ。
それで、鬼が他の人を」

葉月ちゃんが一生懸命説明しているけれど、やっぱり僕がイメージ
している鬼『じ』つのものだ。

鬼が他の人を追いかけて、そしてタッチを

「鬼が他の人を水の中に引きずりこんで、溺れさせたら勝ちですっ」

「鬼だ！ それは確かに鬼だ！」

なるほど。どうりで『じ』つ『じ』の部分がなくなるわけだ。

言つなれば水中版の『リアル鬼『じ』つ』。

命がかかつてゐるぢゃないか。マジド。

最近の小学生は恐ろしい遊びをやつてるんだなあ……。

いや、葉月ちゃんのオリジナルかもしれないけど。

「でも、ダメだよ葉月ちゃん、そんな遊びをやつちや」

本氣で命に關る。

「あう……。ダメですか？」

ダメです。

どんなに不服そうな顔をしてもお兄さんはそんな遊びを認めるわけ

にはいきません。

「いい、葉月ちゃん？ その遊びはとつても危険なんだ。今からそれを教えてあげるね。 おーい。 霧島もーん！」
明久が諭すように葉月ちゃんに言つた後、離れたところにいる霧島さんを呼んだ。

霧島さんを呼んで何をするつもりだろう。

水中鬼の犠牲にするなら雄一が適任だろう。

「……なに？」

いつの間にか霧島さんが近くまでやってきていた。
殆ど音が聞こえなかつた。

やつぱり泳ぎも上手だ。

「雄一と水中鬼っていう遊びをやつて欲しいんだ。ルールは簡単で、雄一を水の中に引きずり込んで溺れさせた後、人口呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

なるほど。

やつぱり明久も雄一を犠牲にするつもりだつたようだ。

「……行ってくる」
そして霧島さんも違和感を持つていない。

ま、まあ、彼女は雄一関連になると、思考がちょっとアレになるから……。

雄一に近づく霧島さんは、音もなく、それでいて速い。
まるで魚雷のようだ。

『お？ なんだ？ いきなり足が……おわああつ！？ だ、誰だ！？ 誰が俺を水中に（ガボガボガボ）』

『…………雄一、早く溺れて』

『ぶはあつ！ しょ、翔子！？ 何をトチ狂つて……！（ガボガボガボ）』

遠くで繰り広げられる水中鬼。

「ね？ 危ないでしょ？」

「はいです……。葉月、水中鬼は諦めるです……」

「命は大事にな？」

葉月ちゃんも分かつてくれたよつだ。

少し残念だが、小さな子供に命の大切さを教えるために、雄一には犠牲になつてもらおう。

「明久つ！ 蓮つ！ 貴様らの差し金だな！？」

「のわあつ！ じつち来たあ！？」

「ダメだよ霧島さん！ きちんと捕まえてくれないと……」

「…………ごめん」

「わつ。お兄ちゃん達、とつても泳ぐの早いですつ」

僕と明久、雄一と霧島さんの水中鬼、スタート。

「あれ？ プールを使つてるのは誰かと思つたら、代表だったの？」

「あつ！ 工藤さん危ない！」

「え？ もあつー？」

制服姿の工藤さんのそばを水の塊が掠めていった。

「な、何！？」

「「めん」「めん。」これ、あんまりコントロール利かなくつたら、わつかの水の塊は僕が撃ちました。」めんさない。

「蓮、それどうやつてるの？」

「まつたぐだ。当てられたる「ひつけ」は痛えんだが？」

明久と雄二も聞いてくる。

「えつと……掌底と寸打の合わせ技で、掌に近いところの水に弱い回転をかけて球状を維持しながら飛ばす……かな？」

「分からん」

うん。僕もやつてみつけた出来たことだから、詳しい原理は良くわかつてない。

「とりあえず、蓮は普通じゃないって事は分かったわ

「あれ？ 優子？」

「どうしたの優子？」

「Aクラスの工藤か。どうしてこんなところにいるんだ？」

「流石雄二。ちゃんとお前覚えてたんだね。明久は覚えてなさそうだけど。

「ボク？ ボクは水泳部だから」

「え？ 今日は水泳部は休みになつてるって聞いたんだけど
「うん。すっかり忘れていて学校に来てやつと思い出したんだけど、
人の声が聞こえるから寄つてみたんだ。良かつたらボクも混ぜても
らつて良い？」

「ああ、別に構わないぞ。俺たちのプールって訳でもないし　」

雄一がそこでいつたん言葉を切る。

そして島田さんのいるほうを指さす。

「既に一人増えてるみたいだしな」

さつきから見知らぬ女子が一人増えてるんだよね。

『お姉さまっ！ どうしてプールに行くのにミハルに声を掛けくれないのでですか！？ ミハルはこんなにもお姉さまを愛していますのに！』

『ミハル！？ アンタどうしてここにいるのよ！ プールで遊ぶなんて誰にも言わなかつたはずなんだけど…』

『ミハルにはお姉さまを害虫から守る特別な情報網がありますから！』

『

なんというか、また暴走系の登場人物が増えてしまった感じが……。

「あのせ、ボクも泳いでいいかな」

もう向こうは放つておこう。收拾がつかない。

「別に遠慮することは無いんじゃない？ これは学校のプールな訳だし」

「ありがと。それじゃ、水着に着替えてくるね

スポーツバックを片手に更衣室のほうへ向かう藤さん。すると、途中で振り向いて

「覗くなら、バレないよ！」

爆弾を落としていった。

「全員集合！」

「おー明久、どうやつって　ぶふおつ！」

「ぶべらつー！」

作戦会議でも始めそうな雰囲気の明久と雄一に水弾が直撃した。

「な、なにするんだ蓮！」

「そうだよつ！ 邪魔するなんて！」

「なんとこうかさ……本当に学習しないよね……」

僕は半ば呆れながら後ろのほうを指差す。

そこには

「アキ？ やつぱり覗く気だつたのね？」

「明久君……おイタはいけませんね？」

「……雄一？」

修羅がいた。

「「心の底から」めんなさい」

「蓮は興味ないの？」

速攻で謝る明久と雄一、そして優子が尋ねてくるんだけど、

「うへん。まつたくない、って言ひたら嘘になるんだけど、覗きよりも優子とプールにいるほうが楽しいかも」

ここにいる女の子たちをおいて覗こうなんて思わないし、それに……

僕には優子の水着姿だけで十分だし……。

「ツー……」

一瞬で赤くなる優子。

ちょっと大胆な発言だつたかも……。

僕まで顔が熱くなつてきたよ……。

「そういえば、ムツツリーは？ いつもなら真つ先に動きそうだけど」

「ムツツリーならば、ほれ。向こうで血液の補充に忙しそうじやぞ」

「……なるほど。道理で静かなわけだよ……」

覗きを止めた身で言えないかもしれないけれど、カメラを構える余裕もなく、必死で血液パックを取り替えていた友人は、酷く哀れに見えた。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ ピリヒヒプールで戦ってるの？

予想以上に長くなってしまったプール編、最終話です。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ? ピリヒトプールで戦ってるの?

バカテスト地理

問 「ヨーラシア大陸北部にある、世界最大の国土を持つ国を正式名称で答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ロシア連邦』

教師のコメント

正解です。ちなみに『ロシア』だけでも正式名称となります。

鮎川蓮の答え

『ソビエト社会主义共和国連邦』

教師のコメント

君達が生まれる前に崩壊しています。

土屋康太の答え

『パンゲア』

教師のコメント

それは大昔に存在した超大陸です。

吉井明久の答え

『ムー大陸』

教師のコメント

それは存在したかどうかもわかりません。

鮎川蓮のコメント

もう国じゃなくて大陸の名前になつてゐる……。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ？ どうしてプールで戦つてるの？ この小説つてバトル物だつたつけ？ という疑問を抱くけれど、やっぱりプールはいろんな意味で戦場。

工藤さんが着替え終わり参加してしばらく。

僕と雄一、明久は休憩のためにプールサイドのベンチに腰掛け、皆の姿をなんとなく眺めていた。

「あのや、雄一、蓮」

「「なんだ？」」

バチッとした水面にボールが叩きつけられる音が響く。

「僕の氣のせいかもしれないんだけど」

「「ああ」」

ズバン、と勢いよくサーブを打つ音が鳴る。

「あの一人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーをやってない？」

「大丈夫だ、俺にも険悪な雰囲気に見える」

「というか、あんな光景を和氣藹々と、なんて捉える人がいたらすぐ眼鏡か神経科に行くことをお勧めするよ」

『美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！』

『上等よ瑞希！ スポーツでウチに勝とうなんて思わないことねー。』

ボールよ割れろ、といふが本当に割れかねないほどに本気で打ち合う島田さんと姫路さん。

最初は仲良くなっていたが、それこそ和氣藹々とやつてたよつて見えたんだけど、いつの間にあんなことになつたんだろう？

「とき明久」

「ん？ なに、雄一？」

「この前お前にやつた映画のペアチケットはどうした？」

映画のペアチケットって言つと、あれか。

明久たちと一緒に雄一と霧島さんの結婚を応援しに如月グランドパークに行つた後に、そのお礼（復讐）としてもらつた奴だ。

明久はどうしたんだ？

「姫路さんと美波が随分と見たがっていたから、それなら一人で見てくるといいよって、あげちゃったよ」

「……間違いない」

「……それが原因だね」

「へ？ 何が？」

『負けたほうが諦めるって約束、忘れてないわよね！』

『もちろんです！ 美波ちゃんのこそ負けても約束を破らないでくださいね！』

『そつちじやー..』

恋する乙女の戦いが勃発しているということか。

ただ、島田さんはともかくとして、姫路さんまで同じまで熱くなるとは思わなかつた。

やつぱりFクラスに毒されてきてるのかな？

「ほう……姫路と島田の勝負とは面白いの。ビカクシガ優勢なのじや？」

疲れたのか、秀吉もプールから上がりつて、僕たちが座つているベンチのほうへやってくる。

「今のところは姫路が優勢だな」

「あら、意外ね。球技なら美波のほうに軍配が上がりそつなものなの」「で

いつのまにか、優子も僕の隣に来ていた。

なんというか、パレオを外している分だけ、露出があくまで田のやつ場に困るというか。

いや、パレオをつけっていても困るけど。

「姫路さんと島田さんの一対一ならやつなるんだろうけどね」
動搖を優子に気取られないように両陣地を指差す。

姫路さん側には霧島さんが、島田さん側には、ミハル（？）とか呼ばれてた女の子がそれぞれボールを追っていた。

「まあ、代表は運動神経もいいからね。美波と互角でも驚かないわ」

姫路さんと島田さんでは力の差は歴然だけど、それだけでは勝負は決まらない。

幸い、姫路さんのペアである霧島さんは、スポーツも優等生なようで、彼女は巧みにボールを島田さんがいないところに落として、得点を挙げていた。

「それにしても、島田の相方は動きが不自然じゃな。故意に手を抜いてあるように見えるのじゃが」

「あ、やっぱ秀吉もそう思つ?」

一方、島田さんのペアはさつきからミスばかりしている。
サーブは全部外しているし、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばしてしまつ。

構えや動きを見ていると、霧島さん並みかそれ以上に上手いように見えるんだけど。

ある意味、徹底した手抜き様だ。

『美春。アンタ、絶対手抜いてるでしょ………』

『そんなことはありませんわお姉さま… 美春はお姉さまのために全力で（手を抜いていま）す！』

『これにはウチの大切なものがかかるんだから本気でやりなさい…』

『はい！ 美春もお姉さまのために本気で（手を抜いていま）す！ あんなのgetDateなんて、お姉さまのためになりませんから…』

あ、ついに本音が出た。

『アンタ、やつぱりウチを負けさせるためにひり側に来たわね…』

…』

『せりお姉さま！ ボールが来ましたよー。』

『あつ！？ もひ、早く言こなさこよつ…』

島田さんたちが言い争つてころがり、姫路さんが打ったサーブがコートの中に落ちた。

「はーい。これで一五点。一セット四は代表&姫路チームの勝ちだよー！」

「一セット四？」「…」

「大方3セットマッチなんだ。5セットもやるとほ思えないからな」

「それもやうだね」

「一セット五までやつてるのか。さすがに本格的にやつてるなあ。

「お姉ちゃん、ファイトです！」

葉月ちゃんは無邪気に島田さんを応援している。

「それじゃ、2セット目行くよー！」

工藤さんの言葉で、第2セットが始まった。

「ああっと、手が滑ってしまいましたー！」

開始と同時に宙に舞つたビーチボールは、どうすればそうなるのか、サーバーの後に飛んでいった。

「パートナーがあのザマジヤ、島田の勝利はないな」

「そうだね、いくら美波が上手くても、一人じや勝てないよね」

「実質3対1だしね」

「もはや勝負は見えたも同然じやな」

あのパートナーの子が変われば話は別だけれど、このままじや島田さんの勝ちは万に一つもない。

『……美春、もう一度言つけど、次のサーブからは本氣を出しなさい』

『ひ、酷いですお姉さま！ 美春はお姉さまのために一生懸命頑張つていいというのに、その頑張りを疑うなんてー。』

『下手な演技はいらないわ。良く聞きなさい美春。これが最後の警告よ』

『お姉さま信じてください！ 美春はお姉さまに嘘なんてつきませんー。』

なるほど。人はいつも嘘に嘘を重ねていくんだな……。

『いい? 』」まで言つてもまだ本氣を出せないといつのない』

『ですから、美春は本氣を出しますと何度も』

『ウチは明日から美春の事を、「清水さん」と呼ぶ』とします

るわ』

『.....』

「ねえ、今のサーブ見た! ? 垂直に変化したよ! ?」

「どうやればビーチボールでそんな芸当が出来るのじゃ! ?」「流石の翔子もアレは取れないな・・・・・!」

「大いに物理法則を無視してるよね....」

「――いや、それはお前(お主)が言つたな」『

うつ.....そりや、僕の水弾も物理法則は多少無視してるかもしだれな
いけど、さっきのサーブほどじゃないよ。

『お姉さま! めんなさい! 美春は嘘をついていました!』

『いいのよ美春! これからも友達でいましょ! うね!』

『一トでは、無駄な寸劇が繰り広げられている。

「でも、これで形勢は一気に逆転だね」

島田さんのパートナーの子はさつきまでは動きに雲泥の差がある。
運動が得意じゃない姫路さんでは、今の島田さんペアに勝つことは
難しいだろう。

「やれやれ。姫路も可哀想だな。折角のデータのチャンスが奪われ
るとは」

隣では雄一が頬杖をつきながら「んなことを呟いている。

パンツ!

大きな破裂音がボールに響き渡った。
どうやらビーチボールが割れたらしい。

「あ……！」「めんなさい。美春、ちょっと力を入れすぎてしましました。代わりを探していくので、お姉さまたちは休憩していくください」

ボールを割ったのは、やはり島田さんのパートナーの子だった。

おかしいな。あのボール、割るためにはかなり強い力をかけないといけないのに。

島田さんのパートナーがボールを捲している間、姫路さん達は休憩することになった。

「お疲れ様。皆凄く気合が入っていて、見えていて凄く楽しいよ」
明久が、ベンチに座った姫路さんに声を掛ける。

「あ、はい。ありがとうございます。私も皆と遊べて嬉しいです」「あはは。それは良かつたよ」
体の弱い姫路のことだ、今まで大人數で、こうやって騒ぐなんて経験が少ないのかもしれない。

姫路さんが楽しめるのは良い事だ。

「あ、そうでしたっ」

姫路さんが突然、何かを思い出したようにポンッと手を叩いた。
この瞬間、僕や明久、雄一、秀吉とマツツリーは、本能的に良くないものを感じ取った。

「ちょっと失敗しちゃって、人数分用意できなかつたんですけど

「マズイ、マズイと僕の本能が警告を鳴らしている。しかし姫路さんは無常にもにこやかに言葉をつむぐ。

「 実は、今朝作つたワッフルが三つ」

「 第一回つ！」（明久の声）

「 最速王者決定戦つ！」（雄一の声）

「 ガチンコつ！」（僕の声）

「 「 水泳対決 つ！？」（僕と明久と雄一の声）

「 「 イエ つ！？」（秀吉とムツヅリーーの声）

姫路さんが言い終わる前にタイトルゴールが入る。

突然の事態についていけないのか、女子は全員目を丸くしていた。

「 明久、ルール説明だ！」

「 オッケー！ ルールはとつても簡単。このプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちと言う、誰にでも分かる普通の水泳勝負です」

そう、本当にただの水泳勝負。

ただし、この勝負は一位と二位とそれ以下の順位には大きな隔たりがある。

姫路さんの殺人ワッフルは三つ。それにたいして僕たちは五人。つまり、生き残ることが出来るのは一人ということになる。

「 バカなお兄ちゃん達、突然どうしたですか？ 急に水泳勝負なんて、葉月びっくりですっ！」

「 葉月ちゃん、男にはね、大切なものをかけて戦わないといけないときがあるんだよ」

「ふえ～。お兄ちゃん、かつこいいですっ。プライドを賭けた勝負つて奴ですね」

明久の言葉に目を輝かせる葉月ちゃん。
けれど、この水泳勝負にかかっているのは、男のプライドなんてかつこいいものではなく、命なんだよ。

「よくわからないけど、五人の中で誰が一番速いかには興味あるわね」

「そうですね。体力では鮎川君か坂本君が一番見えますけど……」

「まあ、蓮は人外バンザイの域に到達してるわね」

「……動きの速さなら、吉井や土屋も引けを取らない」

僕たちの緊迫した状況を知らない女子メンバーからは、そんなのんきな言葉が聞こえてくる。

「てか、人外バンザイって何だ人外バンザイって。
僕か！？ 僕のことなのか！？」

「へえ～面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

工藤さんがスタート兼ゴール位置に立つ。

25メートルプールの往復、50メートル勝負だ。

「はい、行くよ！ 位置について 」

工藤さんの声が響く。

僕は飛び込みの構えを取る。

ムツツリーは強敵だけど、今日は出血で弱っている。
秀吉に体力勝負で負けることはない。

「よーい 」

罰を免れるのは二人だけ。

ムツツリー一は弱っていて、秀吉には負けない。

そうなると、敵はあの二人

「スタートつ！」

「「「くたばれええつ！！」」

すたーとの合図とともに、僕、明久、雄一は、お互に向かつてとび蹴りを放っていた。

「くそつ！ やつぱり一人とも僕と同じ事を考えていたんだね！？」
「てめえらこそ卑怯な真似してくれるじゃないか！ この恥知らずが！」

「雄一と明久にだけは言われたくない台詞だねつ！」

言い争っている二人を放つてプールに飛び込む。

三人とも水着以外は何も来ていないから、投げ技閉め技は役に立たない。

拳で沈めるには時間がかかる。

ここは

「くらえつ！」

「「のわあつ！？」」

ゼロ距離で押し合っている明久と雄一に向かつて水弾を飛ばす。

「くつ！ 蓮！ 卑怯だ へぶつ！？」

「くそつ！ 蓮がいることを忘れていた ぐふおつ！？」

ふははははは！ これだけ離れれば、一人に出来ることは何もない！

この勝負 僕の勝ちだ！！

「あのさ、三人とも。戦うのもいいけど、木下君とムツツリー一君はそろそろ折り返しだよ？」

僕の水弾を避けつつも取つ組み合いをしている明久と雄一。

水泳勝負なんて半分忘れていた僕たちに、工藤さんからあまり嬉しくない情報が舞い込んできた。

「おー明久！ 蓮！ ムツツリーーと秀吉がいつの間にか折り返してきているぞ！？」

「ホントだ！ 雄二と蓮なんかを相手にしている場合じゃない！」

「ちいっ！ 足止めしているつもりが、僕も足止めされていたなんて……！」

ついつい熱くなつて、ＫＯを狙つていたみたいだ。

落ち着いて秀吉とムツツリーーの残りの距離を……ってあと20メートルくらいじゃないか！？

「雄二、蓮！ このままじゃ僕らの負けは確定だよ！？」

「そろは行くか！ 僕と蓮でムツツリーーを殺る！ 明久は秀吉をやれ！」

「オッケー！ 目、即、殺だね！」

雄二と僕はムツツリーーのレーンに、明久は秀吉のレーンに飛び込む。

こうなればムツツリーーを殺してもゴールを阻止してみせる！

「行くぞムツツリーー！」

「…………卑怯なつ……！」

卑怯上等！ 僕はここで死ぬわけにはいかないんだつ！

スピードの落ちたムツツリーーに向かつて水弾を放つ。

頭を振つてよけられたが、ムツツリーーは完全に止まつた！

「雄二！」

「おひよー」

「…………っ！」

ムツツリー一の動きが止まつた瞬間を狙つて、雄一がムツツリー一に飛び掛る。

あとは力で勝る雄一がムツツリー一を沈めれば

『あ、明久君っ！何をしているんですかっ！？』

姫路さんの声がした。

凄く慌てていたようだけど

「あはは。そういうえばこれ、秀吉の水着に似ているね

「んむ？ そういえば胸元が涼しいのっ」

僕の目の前には上半身裸の秀吉と、秀吉の水着の上を片手に立つている明久。

どうこう状況？

「…………死して尚、一片の悔い無し……！」

後ろを振り返ると、水中に沈んでいくムツツリー一の姿が。そしてムツツリー一を始点にどんどん水が朱に染まっていく。

「大丈夫かムツツリー一…？」

「雄一っ！ この出血量はやばくない…？」

「（ジジジジ）めんなさいっ！ 神に誓つて僕は何も見ていないから！」

「や、木下！ 早く胸を隠しなさい！ 土屋の血が止まらないから！」

「いいいやじゃー！ ワシは男なのじゃ！ 胸を隠す必要はないのじゃー！」

「木下君我儘言つちやダメですっ！ 土屋君が死んじゃいます！」

「……愛子。救急車の手配、頼める?」

「はーい。やつぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「……どうやつたらこんな状況になるのかしら」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……」

結局、ムツツリーは僕たちと救急隊員の必死の救命活動で一命を取り留めた。

そして、週明けの朝。

「……吉井、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

鉄人が現れるなり、低い声で明久と雄一を呼び出した。

「断る」

「黙秘します」

いつもの事ながら拒否の構えを取る明久と雄一。

「どうしてプール掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れるんだ!? 鉄拳をくれてやるから生活指導室で詳しい話を聞かせろ!」

「説教なんて冗談じやねえ! むしろ死人を出さなかつたことを褒めてもらいたいくらいだ!」

「そうですよ! 本当に危ないところだつたんですからね!..」

「黙れ！ お前らの日本語はさっぱりわからん！ 拳で語り合つた
ほうが早い！」

「ええい、この暴力教師め！ 逃げるぞ明久！」

「了解つ！」

「貴様ら、今度は反省文とプールの掃除では済まさんぞつつーーー！」

そして始まる二人と鉄人の追いかけっこ。

今日もFクラスは平和です。

第四十問 血まみれプール日和……ってあれ? ピリヒヒプールで戦ってるの?

次回からは強化合宿編に入りたいと思います。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですか？（前書き）

今回から強化合宿編に入ります。この小説のキー・ポイントになると考えてるのでかなり悩んでいます。

つまり何が言いたいかといつと、『更新遅れるかもせん』といつことです。

もちろんできるだけ早く更新したいと思いますが、もし更新がなくとも、

『悩んでいるんだなあ～』と、暖かく見ていただければ幸いです。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですよ？

バカテスト物理

問『密度の異なる大気の中で光が屈折し、通常とは異なった景色の見え方をする現象をなんと言つでしょ？』

姫路瑞希の答え

『蜃氣樓』

教師のコメント
正解です。

鮎川蓮の答え

『砂漠でよく見るもの』

教師のコメント

確かにそのような話は良く聞きますが、そのような回答では不正解です。

吉井明久の答え

『霧』

教師のコメント

不正解です。霧は、空気中の水分が、気温の低下に伴って水として漂い、白く見える現象です。

ですが吉井君にしては、まともな回答だったと思います。

土屋康太の答え

教師のコメント

暗黒星雲は光を遮断します。

第四十一問 盗撮、盗聴、脅迫は立派な犯罪ですよ？

新学年になつてから一ヶ月が経過し、日没の時間にはつれつとした変化を感じ始める今日この頃。

程よい気温の所為でいつもよつと早起きしてしまって、HARUまでのんびりしおつと屋上へ。

いつもより静かな校内。

グラウンドからは部活の朝練の声が。

「最悪じゃあ——つづ……」

屋上に響く明久の絶叫。

「つて、明久！？」

「…………」

明久は見事なまでの〇一二状態だ。
その手には……手紙のようだけど。

「どうしたの明久？」

「……ハツ！ な、なんでもないよつー！」

「？」

僕に気づくと、まるで鉄人から逃げるような速さで屋上から立ち去
ってしまった。

「まあ明久のことだから、また何か厄介」と持ってきたんだろう
な

このときの僕はあまり気にしてなかつた。

このくらいのことはFクラスにいれば日常茶飯事だし、またいつも
のようすに明久が酷い目にあつて終わるのだろうと思つていたんだ
……。

「見ないで！ こんなに汚れた僕の写真を見ないでえ！」
教室に戻ると、明久の絶叫に迎えられた。

「どうしたの？」

「む、蓮か。実はの、明久に脅迫状が送られてきたらしいのじゃ」
脅迫状？ 明久に？

わざと屋上で叫んでたのはこの手紙の所為か。

「それってどんなの？」

「えつと……『あなたのそばにいる異性にこれ以上近づかないこと』
だつて」

「異性か……警告だけ？」

「つうん。『この要求を聞き入れない場合、同封されている写真を
公開します』って」

半分涙目の明久から一枚の写真を手渡される。

そこには「ラを持つて立ちぬくす明久（着替え中メイド服着崩れバ
ージョン）が写っていた。

「……」

開いた口がふさがらない。

「恐ろしい威力でしょ？ これはもう、僕を死に追い詰めるための
卑劣な計略といつても過言ではない……」

「考えすぎではないかの？ メイド服くらい、人間一度は着るも
のじや」

いや、君のやの認識は少し世間一般の常識から離れてこるや。

「明久君、木下君、鮎川君おせよひ『わこます』」

「姫路さん、おはよひ」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かつたんじゃな」

「はい。途中で忘れ物に気づいて、一度取りに帰つたので、ギリギリになつちゃいました」

やつこつてはにかむ姫路さん。

男ばっかりのFクラスには貴重な女子なんだけど、最近ますますFクラスの危険思想に毒されてきてしまつているようだ、僕としては明久の命が心配だ。

「一度良こ。先ほどの写真が騒ぐほどものではないと、姫路に証明してもうひとつじよづかの。姫路、少々良いか?」
いや、やつさんの明久の写真是騒ぐレベルのやばこものだって。
女性ものの下着を持つてメイド服着てる男子の写真なんて世に出回つたら変態の称号を「冠する」とは避けられない。

「姫路に質問なのじやが、もし明久のメイド服の写真があつたらどう思うかのう?」

正直、その切り込み方はどうかと思ひ。

「もしそんな写真があつたら とつあえずはスキヤナーを買います」

秀吉のちよつとおかしな質問に返されたのは、ちよつとおかしい答えた。

「……どうしてスキヤナー?」

いやな予感を感じながら、姫路さんに問い合わせる。

「だつて、そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEB配信できないじゃないですか」

「明久落ち着くのじゃ！ 飛び降りなんて早まつた真似をするでない！」

「離して秀吉！ 僕はもつ生きていける気がしないんだ！」

僕の隣では、窓から飛び降りようとする明久と、それを必死で止めようとしている秀吉が。

「やうだ。ムツツリーに相談してみれば？」

「そうじゃの！ ムツツリーならば、こいつに元にも詳しいじやるから、犯人を見つけ出してくれるやもしれん」

「おおー！ なるほどー。」

認めたくはないけど、盗撮や盗聴ではムツツリーには勝てない。きっと明久の脅迫犯も見つけてくれるだろ？

「助けてムツツリー！ 僕の名誉の危機なんだ！」

「後にして、今は俺が先約だ」

「あれ？ 雄一？」

ムツツリーの席に倒れこむよつに駆け寄る明久を遮つたのは我らが代表の雄一だった。

「ムツツリー、雄一と何の話をしてたの？」

「ムツツリーに問い合わせる。」

「雄一がムツツリーに相談するなんて、よほどの事があるに違いない。」

「…………雄一の結婚が近いらしい」

「雄二」と霧島さんの結婚？ そんな既に決まっていることより、僕が校内の皆さん女装趣味の変態として認識されそうなのほうが重要だよ！」「なんだと？ お前が女装趣味の変態なんて、それこそ今更だらうが！」

「黙れこの妻帯者！ 人生の墓場へ帰れ！」

「つるやこの変態！ とつととメイド喫茶へ出勤しろ…」

「……」

「……」

「「傷つづくらいならお互ひ黙つてればいいのに」」

男子高校生一人が顔を突き合わせて睨みあいながら涙を流している様子はなかなかシユールだ。

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んでよかつたじやないか。僕はてっきり、あのペースだともう子供が出来たことにされているのか」と

「……明久、笑えない冗談はよせ」

「まあ、二人とも落ち着いて。まず雄二のほうから聞こうか。何があつたの？」

「ああ。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ」「MP3プレーヤー？ それくらい別にいいんじゃないの？ 雄二だつて前に学校に持ってきてたし」

明久の言つとおり、校則違反ではあるが、そこまで騒ぐもつなことでもない。

「いや、アイツは結構な機械音痴だからな。そんなものを持つていて、しかも学校に持つてくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは機械音痴なのか。

しかし流石幼馴染。そんなことにまで気がつくなんて。

「そこで怪しく思つて没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」
えつと、プロポーズつていると、この前の召喚大会準決勝で、明久と秀吉が霧島さんと優子に勝つために雄一の声真似をしたっていうアレだよね。

僕は氣絶してたから覚えてないけど。

「さ、霧島さんは可愛いね！ そんな台詞を記念にとつておきた
いなんて」

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのようだ」

「それは……またヘビーな内容だね……」

「MP3プレーヤーは没収したが、中身はお手りで「ペーだり」と、
オリジナルを消さないことに……」

そういうて雄一はポケットからMP3プレーヤーを取り出す。
どうみても再生専用で、録音できるようなタイプじゃない。

「そんなわけで、ムツツリーにはその台詞を録音した犯人を突き
止めてもらいたい。さつきも言ったようにアイツは機械音痴だから
な。密かに盗聴器を仕掛けるなんてことができるわけないから、き
つと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

「…………明久は？」

ムツツリーニが、今度は明久のほうへ向く。

実際僕も明久から詳細を聞いたわけじゃないから、どんな状況かい
まいち分からぬ。

「実は、僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうだんだ」

「……何があったの?」

全く要領を得ない。

「じめん。端折り過ぎた。要するにね

」

事情説明中

「そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きっと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだとおもう」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「…………脅迫の被害者同士」

「いや、脅迫で仲間が出来てもね…………」

そもそも脅迫自体が珍しいことなのに、同じクラスに同じタイミングで二人。

これは同一犯だな。

とりあえず、全員の説明を終えたところで、ガラガラと教室の扉が開く音が聞こえてきた。

鉄人がやってきたようだ。

「遅れてすまないな。強化合宿のしおりの所為で手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

席に着く、といつても自由席だから、開いている近くの席に座るだけだけど。

「…………とにかく、調べておく」

「すまん。今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションを持ってくるよ」

「…………必ず調べ上げておく」

マジッリーは一人の頼みを快諾したようだけじ、なんといつか、そういう本で、つていうのはね……。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配つてある強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくよ。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえあれば問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回っていく。
僕も一冊とつて後ろに回した。

「集合の場所と時間だけはくれぐれも間違えないように」
鉄人の声が響く。

確かに集合場所を間違えたらシャレにならないな。

学力云々は抜きにしても、皆との泊まりのイベントは参加したい。

冊子の中から、集合場所が書いてある部分を探す。

今回の学力強化合宿の行われる場所は、卯月高原という少し洒落た避暑地で、文月学園からは車だと4時間くらい。電車とバスの乗継だと5時間くらいかかるところだ。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラス」とこそそれぞれ違うからな」

「やっぱりAクラスはリムジンバスとかで向かうのかな」

「ああ。そうだろうな」

「するとワシントンクラスはマイクロバスじゃろうか」

「いや、他のクラスのバスの補助席に別れて乗る、という方法もある」

「いいか、他のクラスと違つてワシントンクラスは……現地集合だからな
『案内すらないのかよっ！？』『』

嗚呼格差社会。

あまりの扱いの差に、全旧友が涙した……。

第四十一問 ザ・心理戦へひつして電車の中で命をかけて戦わなければいけないの

間が開いてしまい、申し訳ありません。

今回はバカテストお休みです。

第四十一問 ザ・心理戦へどつして電車の中で命をかけて戦わないと云ひないのだろう

第四十一問 ザ・心理戦へどつして電車の中で命をかけて戦わないと云ひないのだろう

強化合宿初日。

車窓から流れる景色には緑が多く混じり始め、いつもの街から遠く離れたところに来ていると実感できる。電車に乗ってからまだ1時間だが、窓の外には既に田園風景が広がっている。

「あと一時間はこのままでですね」

僕から、明久たちを挟んで向こう側にいる姫路さんが呟く。

「一時間か。眠くもないし、何をしていようかな~」

明久の声は退屈そうだ。実際、狭い車内では特にすることもないし、僕も退屈だ。

読みかけの小説でも持つて来ればよかった。

「雄一、何か面白いものはない?」

「鏡がトイレにあつたぞ。存分に見てくるといい」

「それは僕の顔が面白いといいたいのかな?」

「いや、お前の顔は割りと 笑えない」

「笑えないほど何！？ 笑えないほど酷い状態なの！？」

「面白いといったのはお前の守護霊の！」とだ

「守護霊？ そんなものが見えるの？」

「ああ、見えるぞ。血みどろで髪を振り乱している珍しい守護霊が」

「そいつはどう考えても僕を護っていないよね」

どうかといえば、呪つてること悪い。

「安心しろ。半分[冗談だ]

「あ、なんだ、ビックリしたよ

「本当に茶髪だ」

「そりは一番どいつもこよねー？」

「そして、血みどろの上に右手の包丁を振りかぶつてこる

「ちょっと待つてー？ それって僕を殺そうとしてるよねー？」

「つか雄一ならともかく蓮が言つのはやめてー 怖いから」

びつて雄一ならよくて、僕はダメなんだつ。

僕も靈は見える程度だし、明久に言つた言葉も[冗談だし。

「美波、何を読んでいるの？」

雄一の対面に座つている島田さんは、さつきから何かの本を熱心に
読んでいる。

帰国子女の島田さんは漢字が苦手だから、滅多に本は読まなかつた
はずだけど。

「ん？ これは心理テストの本。100円均一で売つてたから買つ

てみただけど、意外と面白いの」

「へえー。面白そうだね。僕にも問題出してよ」

「うん。こーわよ」

「あ、僕も参加する~」
ちゅうどいに暇つぶしなる玉やつから、僕も参加する」とひつよ
う。

「はいはい。それじゃあいくわよ。『次の色でイメージする異性を
挙げてください』

色のイメージか。

似合つ色? とかかな。

「『? 緑、? オレンジ、? 青』 それぞれ似合つと思つ人の名前を言
つてもらえる?」

「えつと つて美波、 そんなに怖い顔で睨みつけられると答えに
くいんだけど」

明久と熱をこめた視線(?)で見つめる島田さん。
あんなに見られていたらだれだって答えにくい。

「べ、別にそんなわけじゃ……! いいから早く答えなさい!」
「ん~……順番に『緑 美波、オレンジ 秀吉、青 姫路さん』 つ

て感じかな
ビリイツ!

島田さんの手元からものすゞ音がした。

「え、えつと……?」

「……とりあえず、鮎川の答えも聞きましょつか」

僕の答えはとりあえずなんだね……。

「えつと、僕は……『緑 霧島さん、オレンジ バイト先の店長、

青 優子』 かな」

「店長って女性だったんだね」

「うん。未婚のアラサー。最近店放り出して婚活とか行きだすから

困ってるんだよ」

見ていて面白いけれど、閑るのは疲れる、つていうタイプの人だ。

「さて、鮎川の答えも聞いたし、アキ、どうしてウチが縁で瑞希が青なのか説明してもらえる?」

本当に僕の答えはどうでもいいんだね……。

「明久、自分のためにもちゃんと答えたほうが多いよ

「怒らないから正直に言つてみて?」

ほら、もう既に死亡フラグが立つてるし。

「前に下着がライトグリーンだったから」

「坂本、窓開けて」

「はいよ」

「捨てる気ー? 僕を窓から捨てる気ー?」

「島田、『ハ』を窓から捨てるな」

「雄一、止めてくれてありがとう。でも今サラッと僕を『ハ』扱いしたよね?」

「いいのよ。『ハ』じゃなくてクズだから」

最近、島田さんは明久のことが好きなわけじゃなくて、田々殺そうとしているのではないかと思い始めた。

「あっ! ちょっと!」

近々、本当に殺されることになりそうな明久の身を察じていると、雄一が島田さんから、心理テストの本を取り上げているところだった。

「どれどれ? 縁は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はなるほどなあ」

本の内容を読み上げながら、雄一が僕や明久、島田さんを見ながらニヤニヤしている。

「こいつがそんな笑い方をするときは総じてろくなことを考えてはいない。」

ちょっと待て。さつき雄一が読み上げた内容が本当だとすると、僕の元気の源はアラサー女性になるのか！？

「さつきの問題に深い意味はなかつたんだからねー。」

「悪い悪い。面白そうだつたんで、つい借りちまつた」

「そう思うなら、雄一も参加したり？」

「そうだな。俺も参加するか」

「ワシも参加しようかの」

僕たちの後ろの席から、秀吉がヒヨイと顔を出した。

ムツツリーは寝てこむ気配がするし、やつぱり退屈だつたんだろう。

「別にいいけど」

島田さんは不機嫌そつだ。

島田さんが友達で、秀吉が元気の源だったことがそんなに気に食わないのかな？

「そつ思つならまづは事ある」と明久を殺すことをやめないとけないと思つけど。

「それはありがたい」と明久よ、『次の色でイメージする異性を挙げよ』とあつたのじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ？』

「秀吉」

「……少し嬉しいから困る……」

「まさか秀吉つて…？」

Bで…？ もしくは本当に女子？

「ち、違つのじや… ただ、いつも一緒にいる友人としては嬉しいところ意味じや…」

良かった。秀吉がそんなことになつたら、優子は秀吉を殺しかねない。うん。

「あの、私もいいですか？」

姫路さんも参加の意思を表明する。

ただ、島田さんはさつきの明久の答えに立腹みたいだからなあ。

「せうだね。皆でやるわよ」

そんな空気を知つてか知らずか、島田さんの代わりに返事をしたのは明久だった。

「といろで美波ちゃん。さつきの問題の『青で連想する異性』って

」

「あ、僕も気になる」

霧島さんはともかく、優子があの店長よりも僕の中でも小さい存在だとは思わない。

「……教えない、絶対に」

「そ、そんなあ……」

「……第一問行くわよ」

僕らの不満を遮るよう、島田さんが本を開く。

「『1から10までの数字で、今あなたが思いついた順に2つ数字

を挙げてください』『だつて。どつ?』

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」と秀吉。

「僕は1・4かな」と明久。

「僕は8と10だな」と僕。

「私は3・9です」と姫路さん。

それぞれの数字をいい終わり、島田さんが本を見ながら結果を口にする。

「えつと、『最初に思い浮かべた数字は、あなたがいつも見せている顔を表します』だつて。それぞれ」

島田さんは、順番に指を差しながら、

「坂本はクールでシーカル」

「木下は落ち着いた常識人」

「アキは死になさい」

「鮎川は友達思いの人」

「瑞希は温厚で慎重」

と告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかつた?」

「友達思いつてのも嬉しい」

「温厚で慎重ですか」

口々に感想を言い合う。明久が何かぼやいているが、いつもことなので気にしない。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だつて。それぞれ

さつきと同じように、順番に指さして、

「坂本は公平で優しい人」
「木下は色香の強い人」
「アキは惨たらしく死になさい」
「で、鮎川は手のつけられない暴れん坊」
「瑞希は意志の強い人」

と告げた。

「秀吉は色っぽいのか」
「姫路は意志が強いそうじやな」
「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかつた?」
「暴れん坊つてのも、罵倒に近い気がするんだけど」
「坂本君は優しいそうです」

心理テストをネタにわいわいと盛り上がる。
これも家族ではない、仲間での旅の醍醐味だ。

こんな感じで、島田さんの心理テストを何問かやってみる。
そういうふうしていると、

「あ、ムツツリーー、おはよう」

ムツツリーーが明久の肩を叩いていた。

「目が覚めたようじゃな」
「…………空腹で目が覚めた」
「あれ? もうそんな時間?」
「もう1時過ぎだからね」
「確かにもういい頃合じやの。そろそろ昼にせんか?」
「そうだね。あまり遅くなると、夕飯が入らないし」
「あ、お昼ですね。それなら」

と、姫路さんが傍らにおいてある鞄から何かを取り出していく。

嫌な予感、といふか拙いことが起るむと生存本能が警鐘を鳴らす。

「 実は、お弁当を作つてきたんです。良かつたら……」
予感的中。

クラスメイトの分までお弁当を用意してくれるその心遣いはとても稀有で嬉しいことなんだけれど、残念なことに、そのお弁当本体が簡単にこの世から逃れられるほどの力を持っているんだ……。

「 姫路。悪いが俺も自分で作つてきたんだ」

「 すまぬ。ワシも自分で用意してしまつてのう」

「調達済み」

「 ゴメンね姫路さん。僕も張り切つてちょっと多めに作つてしまつたんだ。だから、いつも栄養を取れていない明久に食べさせてあげてよ」

皆が一斉に自分の昼食を見せる。

自分の分は自分で、これは常識だぞ明久！

「ごめん。実は僕もこいつして惣菜パンを」

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「足が滑つた（グシャツ）」

「ああっ！ パン！ 僕のパン！」

明久が惣菜パンを取り出した瞬間に、雄一が叩き落し、ムツツリー二が踏み潰した。

流石の連携。明久は全く反応できていない。

「 あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に」

「 してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらひとこ」

「 「 (ガンのくれあこ) 「 「

「 おひと、ゴメン雄一。僕も手が 「

「 滑らなこよひにわちり掴んでおこてやるからな」

「 「 (メンチの切り合) 「 「

アホな寸隙を繰り広げている場合か。特に明久。

「 あの、明久君。良かつたら.....」

おずおず、といった様子で明久に弁当を差し出す姫路さん。

男としては嬉しいシチューニーションだ。

差し出されているのが薬草でなければ。

「 アキ。良かつたらウチのお弁当も食べてみる?」

戦況はほほ詰んだ! そつ思つていたら、島田さんが戦況をひっく
り返す発言をしてくれた。

「 ありがとう! 美波も分けてくれるんだね! それならこいつその
こと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘もうよ!」

なんてことを言つてくれるんだこの野郎!?

「 わ、ワシとマッソリーは向ひの席じやかい、遠慮せてもうら

おつかの」

「 一 (口ク口ク) 「

秀吉とマッソリーは上手く逃げたか!

「 俺も遠慮しておこう。明久に貰つたパンもあるしな

雄一も逃げ出す算段を立てたようだ。」

「雄一、そんなこと言わずに」

「そつか明久！俺の弁当も食つてみたいか！それなら好きなだけ食べ！」

「もー」あつー

反論しようとした明久の口を雄一がサンドイッチを突っ込むことでふさぐ。

今のうちだ。

「姫路さん。悪いけど僕も遠慮させてもらひつね。僕は自分の分だけで精一杯だし、馬に蹴られたくないしね」最後のほうは明久には聞こえないように話す。

「ふえ？あ、はい。そういうことなら……」

よし！回避成功！

雄一には、僕がなんて言ったか聞こえていたようで、もつきから『上手くやりやがつたな』的な視線が突き刺さっている。

「うまい」

サンドイッチを飲み下した明久の第一声。

「これ雄一の手作り？」

「……悪いか？」

「いや、別に……」

そりや雄一だからね。料理もこなすんじゃないかな。普通に。

「それじゃ、はい。ウチのもどりいそ」

島田さんが明久に自分のお弁当を差し出す。オーソドックスな中身のお弁当だ。

姫路さんとは違つて、島田さんは料理も出来やつだし、普通におこしそうだ。

「それじゃ、早速」

手掴みで弁当の中からシコウマイを取り、口に運ぶ。

「あのね、その……。勇氣を出して呟つけどね……。そのシコウマイなんだけど、実はアキに食べてもらおうと思つてね」

島田さんがもじもじしながら、言葉を紡いでいる。

まさか、ここで告白か？

「 辛子を入れてみたの」

「 君はバカかいっ！？」

処刑宣告だった。

「ああっ！？ 辛あつ！？ これ物凄く辛あつ！ もう口の中が大変なことになつてるよ！？」

のた打ち回つてゐる明久の味覚は、おそれく破壊されているだろ？
「明久、それはある意味ラッキーかもしれないぞ」
雄一の言葉の意味を考えると、味覚が破壊されている今なら、姫路さんのお弁当も食べられるんぢゃないか……。

味覚が破壊されていれば、化学薬品を食べても大丈夫なんだっけ？
人間つて。

「姫路さん、お弁当貰うねつ！」

「あ、はい。一杯食べてくださいね」

「いっただきまーす！」

姫路さんの弁当を口に運んだ明久は、そのまま動かなくなつた。

第四十三問 免罪で罰を受けた人は浮かばれない……。（前書き）

間が開いてしまい、申し訳ありませんでした（土下座）

今回も、バカテストはお休みです

第四十三問 犯罪で罰を受けた人は浮かばれない

「300」!
チャージ!

雄一の声でムツツリー一が機械を操作する。

「離れろ！」

ドン・シ！

ボタンを押した途端、明久の体が大きく跳ねる。

「どうだムツジーハー!!?」

「人間の回り」

「ああー！ 300ー！ チャージ！」

「桂川」

ドンッ！

「戻つたよ！ 雄一！」

「ああ！」

「うう……」

小さな声を上げて、明久が目を覚ました。

「明久、起きたか！ 良かつた……。電気ショックが効いたようだな……」

雄一の言葉を聞いた明久が『嘘だろ！？』という顔をしているが、残念ながら現実だ。

君の体は、それほどイチバチの状況に陥っていたんだよ。

「おお！ 明久、目が覚めたか！ お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めたときは、もうダメじゃと思つたぞ……」

「ああ、確かに一百三高地を攻略できないばかりか、数百の兵と多くの銃器を失つてしまふとは……』だけ？」

「僕の前世つて一体……？」

「一百三高地つて事は明久の前世は人間だつたようだね」「待つて！？ 僕の前世は人間かどうかも危ぶまれてたの！？」

冗談だ。

「一百三高地といふことは、明久の前世は旧日本軍の部隊長、つて所か。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく、贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取つて合宿所に作り変えたらしいぞ」

「流石スポーツセンターつきの私立……やることのスケールが違うね……」

初めてAクラスの設備を見たとき以上の驚きだ。

「そういえば、雄一、秀吉、蓮もこの部屋で一緒になんだね?」

「うむ。ムツツリーーも含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

「あれ? そういえばムツツリーーは何処行つたの? 覗き? 盗撮?」

「友人に對してそんなことが言える明久つて一体……。ムツツリーーは明久を蘇生した後、どこかに行つちやつたけど……」

「…………だたいま」

噂をすれば帰つてきたようだ。

「おかえり、ムツツリーー」

「…………明久も、無事で何より」

「普通は手料理で生死の境を彷徨つたりはしないんだけどね……」

「…………情報も無駄にならずに済んだ」

「情報つて、俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

明久と雄二の脅迫犯の情報か。

たつた一日で情報なんて掴めるものなのかな?

ハック以外で。

「…………昨日、犯人が使つたとおも割れる道具の痕跡を見つけた
流石ムツツリーー」。

「…………手口や使用機器から、犯人は同一人物と思われる」

「まあ、盗撮や脅迫をする人間なんてそんなにいないだろうしね」

沢山いたら、それは問題だろ?」

「それで、犯人は誰だつたの？」
ムツツリーニに問うのは明久。

自分が脅迫されている以上、焦る気持ちも分からぬでもないが、
脅迫犯に気づかれないよう、調査を進めていた以上、ムツツリーニ
でも断定は不可能のはず

「…………犯人はお尻に火傷の跡があることしか分からなかつた」
「君は一体何を調べたんだ？」
名前や人相、カメラの位置からの行動パターンならともかく、お尻
に火傷のあと！？

ムツツリーニの調査方法が凄く気になるところだ。

「…………校内に網を張つた」
そついつてムツツリーニが取り出したのは、小さな機械。
「…………小型録音機」

毎回思うのだが、ムツツリーニの犯罪道具コレクションは何処から
手に入れているのだろう？

僕が軽く引いているうちに、ムツツリーニは録音機のボタンを押し
てしまつていた。

『 ピッ　』　らっしゃい』

録音機から聞こえるのは、ノイズ交じりの人の話し声。
まあ、校内全部を網羅した以上、ムツツリーニでもそこまで精度の
いいものは使えなかつたか。

『……雄一のプロポーズを、もう一つお願ひ
「しょ、翔子……！ アイツ、もう動いていたのか……！」
「よっぽど早く手に入れたいんだね』

『毎度。一回田だから安くするよ』

『……値段はどうでもいいから、早く』

チイツ！ これだからブルジョワは……！

『流石お嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日 と言いたいところ
だけど、明日から強化合宿だから、引渡しは来週の月曜で』
『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが伸びただけだけだけどね』

「犯人のほうは、口調じや誰か判断できないか……」

「……それで、じつちが手がかり

ムツツリー一が録音機を操作する。

『相変わらず凄い写真ですね。こんなものを撮っているとバレ
たら酷い目にあうんじゃないですか？』

『ここだけの話、前に一回母親にばれてね』

『大丈夫だったんですか？』

『文字通り、お尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰な
んだか……』

『それはまた……』

『おかげで未だに火傷の跡が残っているよ。乙女に対しても酷いと思
わないかい？』

そうか。前時代の罰がいいなら僕がのこ引きの刑に処してあげよう。

車裂きでもいいが。

「…………分かったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の跡か」

「今会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかっているから、誰とまでは特定できないけどね」

問題なのは、唯一手に入れた手がかりが

「お尻の火傷か……。仮にスカートを捲つて回ったとしても、分からぬ可能性があるし、ううん……」

「…………赤外線カメラでも、火傷の跡は写らない」

男子高校生が三人集まって、女子のお尻を見る相談か……ものすごく犯罪臭がする。

「そうだ！ もうすぐお風呂だし、秀吉に見てきもらひばいいのか！」

「明久。何故ワシが女子風呂に入る」とが前提となつてあるのじやか？」

？

「…………」

「ど、どうしたんだ蓮？ …… いきなり涙流し始めて……」

「いや、ここで女子風呂で僕の名前が挙がらないことに過去類を見ない喜びを感じていたんだ……」

「そうか……。だが明久、秀吉も無理だ」

「どうして無理なのさ」

「しおりの二ページ目を見てみろ」

雄一に言われたとおりに、しおりの二ページ目を開く。

（合宿での入浴時間について）

- | | |
|-------------------------|--------|
| ・ 男子ABCクラス… 20：00～21：00 | 大浴場（男） |
| ・ 男子DEFクラス… 21：00～22：00 | 大浴場（男） |
| ・ 女子ABCクラス… 20：00～21：00 | 大浴場（女） |
| ・ 女子DEFクラス… 21：00～22：00 | 大浴場（女） |
| ・ Fクラス木下秀吉… 20：00～21：00 | 個室風呂？（ |
| 場合によつては鮎川蓮も同様） | |

「……くそつー！ れじや秀吉に見てきてもうつじが出来ないつ

！」

「そつじつじとだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじや！？」

「……この場合によつてはつてどうじつ意味だらうね」

「さあ？ 多分、野郎共がお前の裸を見てどうもなければ男子風呂に入つて良いつて事じや ないか？」

これは前よりも扱いが進歩したと見ていいんだよね……？

そうやつて五人で（約一名別のことを考へているが）うんうん唸つている時だつた。

ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

ドアが碎けるんじやないかといつ勢いで開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入つてきた。

「な、なに」とじや！？」

「ああ……また厄介」との気配が……」

「木下と鮎川はこつちへ！ そつちのバカ三人は抵抗をやめなさい

！」

先頭に立つ島田さんが、窓からだつしうつしよつとした明久たちの機先を制した。

「何故お主らは咄嗟の行動で窓に迎えるのじゃ……？」

「そこは気にしちゃダメだよ。Ｆクラスなんだし……」

細かいことを気にしていたらＦクラスなんかで生活できなくなる。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

窓を閉めながら離す雄一。

こんなときでも威儀を失わない声は聞いているものを威圧するかのようだ。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなた達が犯人だつて事くらいいすぐに分かるって言うのに」

ま、小山さんが明久たちの前に突きつけたのは

「犯人？ 犯人って何のことさ？」

「コレのことよ」

小山さんが明久たちの前に突きつけたのは

「………… CCDカメラと小型集音マイク」

ああ、盗撮されてたんだ～。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたわ」

「え！？ それって盗撮じゃないか！？ 一体誰がそんなことを「とぼけないで。あなた達以外に誰がそんなことをするって言うの？」

Fクラスの監とか、あと小山さん限定で根本とか。
女子の可能性もあるけどね。

「違う！ ワシはそんなことをしておいらー、覗きや盗撮なんて
そんな真似は」

「やうだよー、僕たちもそんなことまじないー。」

「…………！（口々口々）」

秀吉の反論に合わせて、明久とマッシュローが前に出る。

けどそんなことしても無駄だと思つんだよな～。

「そんな真似は？」

「……否定……出来ん……っ！」

ほひ。

「ええっ！？ 信頼足りなくない！？」

いや、校舎の壁破壊に教頭室爆破。その他Fクラスが起こした事件
は数え切れないんだから……。

「まさか、本当に明久君たちがこんなことをしていたなんて……」

「アキ、信じていたのに、びつしこんなことを……」

びつしだらり。信頼といつ言葉を使う一人の後ろに、明らかに信
頼の欠片もないものが置いてある気がする。疲れてるんだろうか。

「美波、といあえず信じてるなら拷問道具は用意してこないよね？」

どうやら幻覚ではないらしい。

「嘘、まだおつかない？」

「……雄一、浮氣は許さない」

「翔子待て！」路ち着かずあま

「アーヴィングの本は、眞面目な本で、いつまでも読めます。」

「國會。」
「國會。」

卷之三

ああ、

「明久君、まさか、美波ちゃんの胸見たんですか？」

あははう。やだなあ。優しい姫路さんはそんな重そうなものを僕

の上に乗せたりなんてふぬおおおつ！？

「質問にはひやんと答えてくださいね？」

僕の目の前には阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっている。

「ねえ蓮？」

「ん?
なに優子?」

「——心確認しておくけど

「ああ、もちろん需れ衣一

フルコースでいいのよね？」

卷之三

僕だけ逃れることは出来ないらしい。

30分後。僕たちは証拠不十分で解放された。

「なんか、今日はいつもより命の危険が多いよ。……」

「酷い濡れ衣じゅうたのう、……ワシと蓮だけ被害者扱いというのも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だつたよ」

「僕は優子にフルコースを喰らったんだけどね。……」

今回ばかりはマジで死ぬかと思つた。

ちゃんと男扱いしてくれているのは嬉しいんだけど、できればもう一步譲歩して話を聞いて欲しかつた……。

「……まだ覗いてないのに」

「…………見つかるようなくまはしないのに」

「その返答はきつぎりじやと思つたい」

「雄一、大丈夫？ セツセから黙つていてるけど」

「そういえばさつきから雄一の声が聞こえない。」

霧島さんに完膚なきまでに叩きのめされた可能性もあるけれど。

「……上等じゃねえか」

少し怒りを孕んだ……いや、怒りを抑えた声が聞こえる。

「え？ 雄一、どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやつてやるひじやねえか……」

「まさか、それって……」

「ああ。そのまさかだ。流石に覗きはやりすぎかと思つたが、向こうがあんな態度で来るなら容赦はいらねえ！ 本当に覗いてやるひじやねえか！」

やつぱりか……。

まあ、止めないけどね。覗かれても女子の自業自得だし。

「雄一、霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたほうがいいんじゃない？」

「バ、バ力を言つな！ 僕は翔子の裸になんか微塵も興味はねえ！」

「明久は明後日の方向に話を転がす天才だよね……」

「ふむ。もしや例の尻に痕のある犯人探しのか？」

「ああ。流石に覗きはやりすぎかと思ったが、あっちがそんな態度で来るなら容赦はいらねえ。思つ存分覗いて犯人を見つけてやるひじやないか！」

碌に確認もせずに端から僕たちを犯人扱いしてきた女子。

僕たちからすれば堪つたもんじやないよ。

「…………やつきのカメラは盗撮犯が使つていいものと同じだった

ムツツリーーから、僕らに都合のいい情報が。

「つまり、どういふこと？」

流石明久。

「さすがだな、明久。この程度の会話にもついて来れないとは」「ま、要するに、雄一と明久を脅迫している犯人は同じ人間で、さつきの覗き犯の使っていたカメラがその犯人と同じものだった。そして、強迫犯はお尻にやけどの痕があるって話だから」「そつか。そのやけどの痕がある人を探したら全部解決するつて訳だ！」

「これでもう迷う余地はないな」

「そうだね、やってやろう！」

「早く行かねば風呂の時間が終わってしまうぞ！」

「…………（コクコク）」

「先手必勝だね」

「え？ 三人とも協力してくれるの？」

「「「当然（じゃ）」「」」

友人の危機に立ち上がるのがFクラスだ。

「よしー お前ら往くぞー！」

「「「応つ！」」「」」

こうして僕らは女子風呂の覗きに立ち上がった。

第四十四問 虎穴に入らずんば虎児を得ずとは書つけれど、これをひてみたら

強化合宿一日田の日誌を書きなさい

姫路瑞希の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意にめまいのよつたな感覚が訪れました。

風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起るよつたな、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることでいい刺激が得られたよつですね。姫路さんに高校一年生といつ今この時にしか作ることのできない思い出が沢山出来ることを願っています。

鮎川蓮の日誌

『電車の喧騒から開放されて、合宿所の一一日田。

普段と違つ環境で、普段と違つことが起き、改めて文月学園が普通の高校とは違つことを実感した』

教師のコメント

文月学園は注目されている試験校ですからね。

鮎川君も文月学園の一員であるといつ自覚を持ち、折り田正しい生活を送つてもらいたいです。

土屋康太の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚は何だつたのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄一の日誌

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような不思議な香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませんね。

第四十四問 虎穴に入らずんば虎兕を得ずとは言つけれど、いざ入つてみたら龍が待ち構えてましたなんて笑えない……。

「…………後半組の入浴時間、残り三十分」

現在僕たちは全力で階段を駆け下りている。

もちろん音を立てないために靴やスリッパは履かずに靴下で走つてゐる。

「時間がないね、急げ」
「そうだな」

一応人に見られて、警戒されないように周りに注意しながら走つていたのだが、入浴の時間とかぶつてこることもあつてか、幸いにも人通りは皆無だつた。

「…………」Jの階段を降りて、しばらく廊下を進めば女子風呂
口に出すのは『…………女子風呂の場所は確認済み』とのたまう我
らがムツツリーだ。

今度機会があつたらとも当然のよう女子風呂の場所を確認してい
た理由を聞けりと思ひ。

問題なのはムツツリーが立ち止まつた位置。
ここは既に一階。

この先の階段を降りると、そこは地下と云ふことになる。
地下にある以上、外からの覗きは不可能。真正面から挑むことにな
る。

「よし。時間がない。このまま突っ込むぞ」
目的地を前に雄一が告げる

「…………（ノクニ）」「」

もちろんここで止まるという選択肢は最初からない。
僕らは黙つて頷き、一気に階段を駆け下りた。

「君たち、止まりなさい！」
前方から、鋭い静止の声が響く。

「更衣室にカメラが仕掛けられていたと聞いて警戒していたらまさか本当に除き犯がやってくるとは思いませんでした」
あれは……化学の布施先生か。

「雄一、どうする！？」 布施先生だよ…
「構わん！ ブチのめせ！」
「そこは構いなさい坂本君！ 私は一応教師ですよー？」
「了解！ 一撃で蹴りをつける！」
「吉井君もそこは構いなさい！？」

雄一の言葉で明久が先行する。
今は緊急時だ。後で真犯人を突き出せば「くら教師でもちよつと怒るくらいで許してくれるはずだ。

「『』の前の補習の恨みを喰らえッ！」
「『 思い切り私心で行動しているだろ（おるじやろ）！？』
明久の拳が布施先生に向かつて突き出される。
男子高校生の本気の拳だ。中年教師にどうにかできるレベルじゃない。

「ひいいいつ！ も、試験召喚…」

「し、試験召喚獸！？」
明久がその場から飛び退く。

明久の拳は突如現れた小さな身体に阻まれた。

先生の足元に見えるのは、おなじみの魔方陣だ。

ということは先生が召喚したのは僕らも使っている召喚獣ということになる。

Fクラスレベルの点数でも人間の数倍の力を持ち、教師レベルでの力は計り知れない。

ただ、召喚獣は物理干渉 つまり物体に触れること が出来ないはずなんだけど……

「くつ……教師の召喚獣は物体に触れられるのか……！」

忌々しげに雄一が呟く。

そう。今明久の拳が防がれたということは、布施先生が呼び出した召喚獣は物理干渉能力を持つということになる。

「ふう……間に合いましたか。まあ、吉井君が『観察処分者』に認定される前は雑用を自分達でやっていましたからね。物体に触れられるほうが都合がいいのですよ。こうして暴走した若人を止めなくてはいけない時もありますし」

と、言つことは、召喚獣の扱いにも慣れていると見て間違いないだろ？

「けど、卑怯ですよね！ 自分が造つたテストを受けたら、点数が高くなるに決まってるじゃないですか！」

「いや、正式な勝負というわけではないので卑怯もなにもありませんし、さつき自分が一方的に暴力を振るおうとしたことを棚に上げていませんか……？」

正論だ。

「それに教師もちゃんとテストを受けているのですよ？ 他の学年の先生が作った問題で」

「え？ そうなんですか？」

「そうなんですよ。『教える側にも相応の学力が必要だ』というのが学園長の考え方ですので」

意外だ。あのババアがそんな考えを持っていたとは。

「さて、それでは大人しくしてもらいますか？」

布施先生が召喚獣に構えを取らせる。

物理干渉できる召喚獣相手だ。生身じゃまず勝負にならない。

「こうなりや徹底抗戦だ！ 布施センを召喚獣」と叩き潰すぞ！」

「その意気だよ雄一！ ここは任せたからね…」

「待てやコラ」

その場から脱兎の如く逃げ出そつとした明久の肩を雄一が掴む。

「一応聞いておこう。明久、お前化学の点数は？」

「後一点で二桁だった」

「先に行けバカ！」

「教師相手に一人は辛かろう。ワシも手伝おう」

「僕も残ろうか」

秀吉と共に雄一の隣に立つ。

「いや、蓮は先に行ってくれ」

「どうして？」

「この先にも教師が待ち構えてないとも限らない。お前は教科については教師にも勝てる。明久とムツツリーのサポートしてくれ」

「そういうことなら、遠慮なく先に行かせて貰つよ」

雄一と秀吉が召喚する声を背後に布施先生とその召喚獣の脇を通り抜ける。

布施先生も行かせていいものか迷つたが、雄一と秀吉が召喚した以上、二人の対応をしなくてはいけないため、妨害できなかつた。

「そこで止まれ」

先に行つた明久とムツツリーにやつと追いついたと思ったら、行く手に別の先生が立ちふさがつた。

「…………大島先生」

ムツツリーが苦々しげに呻く。

相手はムツツリーの師匠とも呼べる存在で、僕の鬼門である保健体育の教師大島先生だ。

教科が保健体育である以上、僕は戦力にならないが、ムツツリーの保健体育ならば教師にも匹敵する実力のはずだ。

「「ムツツリー」」

「…………（コクリ）」

ムツツリーは真剣な表情で頷き、大島先生の前に歩み出た。

「…………大島先生」

「なんだ？」

「…………これは覗きじゃない」

まさかムツツリーは大島先生を説得するというのか！？

「それなら何だと言つんだ？」

大島先生もこちらの話を聞く姿勢を見せる。
覗きなんて、それ相応の理由がないと試みないはずだ。それも正面突破。

何かしらの理由があると踏んだに違いない。

「…………」
「」

ムツツリーーの言葉を待つ。

「
保健体育の実習
試験召喚だ」

ムツツリーーはアホじやないだろ？

理由に嘘をつくにも、もつといい嘘があつただろ？

「ムツツリーー、ここは任せたよ！」

「ゴメン、僕じや 大島先生は止められない！」

「…………試験召喚」

召喚するムツツリーーの声はどこか不満げだ。まさかセツキの話で
説得できるとか万に一つも思つていたんだろうか？

「ムツツリーー、大島先生を片付けたらまた会おう！」

「片付ける、か。いいかお前たち。教師を……舐めるなよ」

『体育教師 大島武 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 663点 VS 424点』

「…………は？」

走り去る一瞬前に見えた点数に我が目を疑つた。

保健体育で600点……。
僕には不可能だ……。

「まさか、点数操作とか……？」
明久も同じような疑問を持ったようで、口から呟くようにそんな台詞が出る。

「俺たち教師がそんな真似をするか。バカモノが」
明久の独り言に返答があった。

この野太く、力強い声は

「「出たな鉄人！」」
「西村先生と呼べ！」

女子風呂の入り口を背に立つてるのは、筋肉隆々の生活指導。
誰もが恐れる最恐の教師、鉄人こと西村宗一教諭だ。

個人的意見を言うと、僕は西村先生じゃなく、西村教官といったほうがしつくり来る。

「まったく、お前たちは知らないだろうが、教師は教師で勉強をしているんだぞ？ より良い教師になるためにな」

「あ、なんですか。それは大変ですね～」

「ああ。教育者というものは大変なんだ」

しみじみと呟く鉄人もとい西村教官。

苦労ししているみたいだ。いや、Fクラスが原因だろうけど。

「ちなみに、西村先生はどのくらいの点数を？」

「俺はこの前の『ごたごた』の所為で試験を受けそびれてな。今は点数

がないんだ」

「ごたごたと言つと、担任の交代のことだらうか。

「そうですか、無いに等しい点数ですか。流石は筋肉バカの西村先生ですね」

「吉井、念のため血液型を聞いておこう」

明らかに輸血前提だ……。

「ど、とにかくそこは退いてもらいますっ！」
試験召喚サモン
明久が召喚獣を呼び出す。

『補習教師 西村宗一 VS Fクラス 吉井明久
ZONE VS 929点』

「かかってこい」

鉄人は拳を構える。まさか召喚獣と素手でやりあうつもりなのか…？

「先生、僕の召喚獣がものに触れられる特別製だつて事忘れてます？」

「阿呆。我が校で一人だけの問題児のことを忘れるものか」

「でも、だつたら……」

「さつき言つただろうが。点数がないと」

強力な力を持つ召喚獣も、点数が無ければ召喚できない……が、鉄人なら素手でも召喚獣と渡り合えそうな気がする。

「そうと分かれば曰くの恨みもこめて くたばれ鉄人っ！」

明久の召喚獣が鉄人に突っ込む。

突撃すると見せかけ、横つ飛びのフェイントをかける。

そのまま死角から木刀を

「ふんぬつ！」

叩きつけようとしたところを鉄人の拳で叩き落された。

「……はい？」

「……バカな……つ！」

叩き落された木刀は床に転がっている。

「そ、そんなバカな！？ 素手で召喚獣に勝てるはずが……！」
明久は再度、無手となつた召喚獣を鉄人に突っ込ませる。

しかし

「召喚獣なら殴つても体罰にならんからなあ！」
「（ふあつ！）

呼吸を合わせた蹴りで浮かせ、そのまま召喚獣に五度拳が叩き込まれた。

「つ！ 明久つ！」

明久の召喚獣が倒されたのは予想外だが、今鉄人は拳を放つた反動で僕への対応が出来ないはず。なら

「速攻で倒す！」

姿勢を低くして鉄人に突つ込む。

下手なフェイントはなしだ。ただスピードをそのままに力をぶつけ
て

刹那、僕の視界に僕に向かって飛来する物体が写った。

「つー？」

反射的に足を止め両手を交差させて物体を防ぐが

「重つー？」

飛んできたのは……明久の召喚獣の木刀！？

鉄人の足元に転がっていたのを僕めがけて蹴ったのか！

召喚獣は怪力だから、その召喚獣が持つ武器も比例して重くなる。腕がしびれているが、それだけの質量を蹴り飛ばす鉄人はまさに人外！

「フェイントを入れておけば結果は変わったかもしれんな」

「つ！」

腕で視界を遮つた隙に、鉄人が僕の目の前に接近していた。

「歯あ食いしばれえ！」

開いた腹部に拳を叩き込まれ、動きが完全に止まつたところを腕をとられ一本背負いを喰らう。

「がつ！」

まともな受身も取れず、床に叩きつけられ、意識が混濁する。

「俺も鬼ではない。きつちり指導を終えたら開放してやる。 そ

「ちの三人もな」

「へ？」

「あ？」

未だにグラグラする視界で鉄人の目線を追うと、その先には捕縛された雄二、秀吉、ムツツリーーの姿があつた。

「さて、まずは英語で反省文でも書いてもらおうか。文法や単語を間違えていたら何度でもやり直しだ！ 終わったものから部屋のシャワーを浴びて寝てもよし！」

僕は一発で終わらせて部屋に帰ったが、明久が帰ってきたのは日付が変わることだった。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。（前書き）

ああ、三日連続投稿が凄く久しぶりな気がします。
これが当たり前になるように努力しないと。

それでは第四十五問です。どうぞ。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。

バカテスト国語

問『幸福や不幸は予測のしようが無い例えをなんと言つでしょ』

姫路瑞希の答え

『人間万事塞翁が馬』

教師のコメント

正解です。これは『城塞に住む老人の馬がもたらした運命は福から禍へ、また禍から福へと人生に変化をもたらせた。まったく禍福といつものには予測できない』という故事成語です。

吉井明久の答え

『敵モンスターとのエンカウント』

教師のコメント

それは先生も同感ですが、違います。君はいい加減にゲームから離れましょう。

土屋康太の答え

『強い風が吹くタイミング』

教師のコメント

強い風が吹くどどうして幸福に結びつくるのでしょうか？

鮎川蓮の答え

『Fクラスの皆の行動』

教師のコメント

間違いですが否定は出来ませんね……。

第四十五問　あなたが今欲しいものはなんですか？　平穏な日常です。

「……雄一、一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿一日目。今日の予定はAクラスとの合同自習だ。

自習内容は自由で、質問があれば周囲の生徒や教師に聞いてもOK。完全に生徒任せの内容のため、机も生徒同士が向かい合いつような並びになつていてる。

「でも、何で自習なんだろ？ 授業はやらないのでかな？」

「授業？ そんなものやるわけないだろ？ が」

明久の疑問に雄一が即答する。

雄一としては自分の膝を狙つて来る霧島さんから逃げる絶好の口実だつたようだけど。

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を聞いて理解できるのか？」

「むつ。失礼な。雄一にとつてはそうかもしれないけど、僕にとつてはAクラスもFクラスも大差ないよ」

「おお、凄いのう」

明久の発言に秀吉が食いついているが、多分秀吉の想像している内容とは違うことをこの明久は考えているはずだ。

「どつちも理解できないからね」

「……それは、違う意味で凄いのう」

「てか、Fクラスレベルの授業理解できないつて、明久本当に高校生？」

Fクラスでの授業は基礎レベルの簡単なものを丁寧にやっているから、教科書と先生の話で大体分かるものだけだ。

「……この宿題の目的は、モチベーションの向上だから」

雄一を追つて、しつかりと霧島さんも僕らのテーブルにやつてきた。ポジションは雄一の隣。どうやら雄一の膝の上は諦めたらしい。

「翔子、それだけじゃ明久には分からんだる。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういうメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題じやないということだ」

霧島さんに続いて、雄一が補足説明する。
流石婚約者。息ぴつたりだ。

「お、」「今なんか失礼なこと考えなかつたか？」
「何のことかな？」

雄一に読心された。

妙な勘のよせばどりから来るんだね。

「あ、代表ここにいたんだ。じゃあ僕もここにしようかな」
霧島さんの邪魔をしないように席を外そつか、何て考えていたら、
あまり聞きなれない声が聞こえてきた。

「工藤さん、だつけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だつたよね？　久しづり」

声の主はAクラスの工藤愛子さん。

非常にボーカルショウな女の子なんだけど、僕とは対極といつか、か
なり奔放な感じがする。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらひうね。Aクラスの工藤愛子
です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から7・8・56・
79。特技はパンチラで好きなものはシュークリームだよ」

おかしい。普通の自己紹介では混じるとの無い
単語が混じっていた。

「ん？　どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑つていいわけじゃないんだ。ただ、
その……」

明久は本当に学習しない生き物のようだ。

「あ、さては疑つてゐるね？ なんなら、ここにで披露して見せよっか
？」

工藤さんが短いスカートの裾をつまんだ。

「緊急回避つ！」

カオスの気配と身の危険を感じ、その場からバック宙で飛びのく。
そのまま仕切りを飛び越える。

仕切りの向こうにいた人たちが、『空から人が！？』とか驚いてい
るが気にしていられない。

仕切りに耳を当てて、明久たちの様子を窺う。

『目がつ！ 目がああああつ！』

『……浮氣はダメ』

霧島さんの声と雄一の叫び声、ついでに何かがのた打ち回っている
音が聞こえる。

危なかつた……カオスに巻き込まれるとこりだつた……。

『……………明久。工藤愛子にだまされないよつに』

続いて聞こえてきたムツツリー二の声は非常に冷静だった。
おかしい。普段のムツツリー二ならこの状況に冷静でいられるはず
無いのに。

『あれ？ ムツツリー二、随分と冷静だね。僕ですらこんなにどき
どきしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいくと思つてい
たのに』

『……………騙されるな。奴はスペツツを穿いている……』

成程。そういうことなら僕が出て行つても大丈夫そうだ。

仕切りを飛び越えて宙返りしながら明久たちのテーブルに戻ると

「蓮！？ アンタ一体何処から現れたのよ！」

いつの間にか優子がいた。

「あ、ちょっと僕が苦手な話題っぽかったから仕切りの向こうに緊急回避していたんだ」

「だから宙返りしながら出てきたわけね……」

宙返りのところには突っ込みは来ないのだろうか。

「あはは。流石ムツツリーー君。バレちゃったか。まあ、特技って訳じゃないけど、最近凝っているのはコレかな？」

笑いながら工藤さんが取り出したのは

「…………小型録音機」

掌サイズの小型録音機だ。

「うん。コレ、凄く面白いんだ。たとえば」「

力チカチと録音機を操作する。

しばらく間を置いて録音機のスピーカーから声が聞こえてきた。

『ルビー、『工藤さん』『僕』『こんなにドキドキしているんだ』『やらない？』

爆弾だ。恐ろしい威力の爆弾だ……！

「…………ええ、最つつ高に面白いわ」

「…………本当に、面白い台詞ですね」

明久の背後には鬼も裸足で逃げ出しそうなオーラを纏つた姫路さん

と島田さんが。

「瑞希、ちょっとアレを取りに行くのを手伝つてもうらえる?」

「分かりました。アレですね? 喜んでお手伝いします」

不気味な笑顔をたたえながら、学習室を出て行く一人。

その一人と入れ違うように秀吉が入ってきた。

首を傾げながら。

「秀吉、どうかしたの?」

「いや、さっき部屋を出て行く姫路と島田に石畳を運ぶのを手伝つてくれといわれたのじゃが、何があつたのかと思つての」

明久の処刑が迫つてゐる。

「はあ、本当にTクラスつて分からないわ……」

僕の隣で溜息混じりにこんなことを呟く優子だけど昨日は他の女子に混じつて僕を拷問していただはずだ。

「工藤さん。キミが……」
明久が急に真剣な顔をして工藤さんに話しかける。
直前の雄二の顔を見ている限り、工藤さんが盗撮犯かと疑っているんだろう。

ここは慎重な言葉で……

「ん? なに、吉井君?」
「あ~。えつと、その、キミが……」
「ボクが?」
「キミが」
「ふつ……へへ……あ、あはははははははつー。」
「ふつ……へへ……あ、あはははははははつー。」

「ちょっと、蓮！？」

「き、聞いた優子！？ 明久の奴、ストレートに、あ、ヤバイ、

笑いが止まらないつ！」

「まあ、確かに信じられないことを口走ったわね」

「勇者だな明久。録音機を前にそこまで言いつとは、笑いを何とか飲み下し、みんなの会話に混ざり込むと、雄一の声が。

「『』めんね。折角だから録音させでもらつたよ」

そういうながら工藤さんが録音機のボタンを押す。

ピツ！　『僕にお尻を見せてくれると嬉しいつ！』

また笑いがこみ上ってきた。

「コレは恥ずかしいな」

「…………加工なし。ストレート」

「ひああああああつ！　お願い工藤さん！　今のは消して！』

「吉井君って、からかい甲斐があつて面白いなあ。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

ピツ！　『お願い工藤さん！』『僕にお尻を見せて』

「うわあああんつ！　僕がどんどん変態になつてる気がするよ！』

明久が言つた直後。

放たれるものすごい殺氣を感じた。

「……今の、何かしらね？ 瑞希

「……なんでしょう？ 美波ちゃん」

無表情で石畳を設置し始めるその姿は非常に不気味だ。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をするバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいオシオキが必要ですね？」

「一人とも！ コレは誤解なんだ！ 僕は問題を起こす気はないで、ただ純粋に『お尻が好きって』だけなんだ！ 待って！ 今は途中に音を重ねられただけなんだ！ お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！ そつちの皆も笑つてないで助けてよ！ 特に雄一と蓮！」

そんなことを言われても。

「…………工藤愛子。おふざけが過ぎる」

明久の惨状を見て一人だけ立ち上がった男がいた。ムツツリーだ。

「ムツツリーー！？ 助けてくれるの？」

「…………任せておけ。対抗する」

ムツツリーは工藤さんと同じように小型録音機を構えている。成程。その録音機で工藤さんに更に音を重ねるつもりか。

「姫路さん。美波。良く聞いて。さっきのは誤解で、僕は『お尻が好き』って言いたかったんだ。『特に雄一』『の』『が好き』ってムツツリーーイイツ！ 後半は貴様だな！ 対抗するつて、対抗して僕を追い詰めるつて事だつたの！？」

「…………工藤愛子。お前はまだ甘い」

「くつ！ 流石はムツツリー君…………」

どこかの少年漫画のようにらみ合つ一人。

もうこの一人には明久を殺す罪悪感なんて微塵も無いに違いない。

吉井、雄一は渡さない

「吉井君……やっぱり坂本君と……」

真に受けて明久にライバル心全開の霧島さんと、どこかにトリップ

「優子さん！？」何を想像しているの？」「

「おひ！」

「優子、気がついた？」

元々今アタシ

「優子、いっかし？」優子が呼んでしまった。薄い本の中の「」となんでも現実ではまず起きないから、すぐこぞうの世界に憑じ立つのをやめ

よつて、優子さん？ わたくしめの肘関節はそちらの方向には曲

卷之三

しまった。優子の趣味を知つたことを本人に伝え忘れていた。

「…………この前の清涼祭の打ち上げのあと、優子を家まで送つてこつたときだ……」

「違うんだ優子！ 僕は見ようと思つてみたわけじゃなくて、床に散乱してたからどうしても目に入つてしまつただけなんだ！」

力文夫よ

そういうて微笑む優子の目は全く笑っていない。

「その記憶を書き換えてあげるから」

次に僕が目を覚ましたとき、部屋には鉄人の怒声が響き渡っていた。

第四十五問 あなたが今欲しいものはなんですか？ 平穏な日常です。（後書き）

次回予告。

再び覗きに挑戦する僕たち。

しかし戦いの中で誰も予測できないことが起こった。

次回 第四十六問『パンドラの箱は開けたら本当に大変なことになる』

それは、悲劇の始まり。

と、初めて次回予告を入れてみました。

次回から、バカテスにあるまじきシリアルスマードに入ります。

次話は珍しく既に出来ているので、明日更新できると思います。

それでは。

ps・改善点、酷評など、内容は問いません。

感想がいただけると、作者は小躍りして喜びますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452x/>

バカと白黒と召喚獣

2011年12月20日20時50分発行